

# 京都府遺跡調査概報

## 第 88 冊

1. 通り谷城跡
2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡
  - (1) 桑原口遺跡第 4 次
  - (2) 桑原口遺跡(C 地区)試掘
  - (3) 今福古墳群
3. 今林遺跡第 2 次
4. 余部遺跡第 5 次
5. 木津川河床遺跡
6. 長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2)

1 9 9 9

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成10年度に実施した発掘調査のうち、京都府丹後土地改良事務所・京都府道路公社・京都府企業局・京都府亀岡土木事務所・京都府土木建築部・近畿財務局の依頼を受けて行った通り谷城跡、桑原口遺跡・今福古墳群、今林遺跡、余部遺跡、木津川河床遺跡、長岡京跡右京第620次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、峰山町教育委員会・宮津市教育委員会・園部町教育委員会・亀岡市教育委員会・八幡市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
  1. 通り谷城跡                      2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡
  3. 今林遺跡第2次                4. 余部遺跡第5次
  5. 木津川河床遺跡               6. 長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2)
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	通り谷城跡	中郡峰山町赤坂・ 矢田通り谷	平10.7.14～9.16	京都府丹後土地改良 事務所	増田 孝彦
2.	鳥取豊岡宮津 自動車道関係 遺跡	宮津市喜多桑原 口・今福梶谷	平10.5.11～11.27 平10.5.18～8.6	京都府道路公社	増田 孝彦 岡崎 研一
3.	今林遺跡第2 次	船井郡園部町内林 町今林	平10.8.11～10.15	京都府企業局	戸原 和人
4.	余部遺跡第5 次	亀岡市余部町大塚	平10.9.4～11.27	京都府亀岡土木事務 所	野々口陽子
5.	木津川河床遺 跡	八幡市八幡	平10.11.17～ 平11.1.14	京都府土木建築部	森下 衛
6.	長岡京跡右京 第620次	長岡京市長岡2丁 目233番の3	平10.10.22～ 平11.1.22	近畿財務局	戸原 和人

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

# 本文目次

1. 通り谷城跡発掘調査概要-----	1
2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡平成10年度発掘調査概要-----	11
(1) 桑原口遺跡第4次-----	11
(2) 桑原口遺跡(C地区)試掘-----	23
(3) 今福古墳群-----	28
3. 今林遺跡第2次発掘調査概要-----	39
4. 余部遺跡第5次発掘調査概要-----	49
5. 木津川河床遺跡平成10年度発掘調査概要-----	89
6. 長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2)発掘調査概要-----	99

# 挿図目次

1. 通り谷城跡	
第1図 調査地位置図-----	2
第2図 調査地および周辺遺跡分布図-----	3
第3図 A地区調査前地形図-----	5
第4図 A地区検出遺構および調査後地形図-----	6
第5図 A地区ホエケ谷7・8号墳主体部実測図-----	7
第6図 B地区調査前地形図-----	8
第7図 A地区土坑実測図-----	9
第8図 B地区土坑実測図-----	9
第9図 出土遺物実測図(1)-----	9
第10図 出土遺物実測図(2)-----	10
2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡	
(1) 桑原口遺跡第4次	
第11図 調査地および主要周辺遺跡分布図-----	12
第12図 桑原口遺跡・今福古墳群位置図-----	14
第13図 桑原口遺跡B地区遺構配置図-----	16
第14図 基本土層図-----	17

第15図	S H07実測図-----	17
第16図	S K31実測図-----	18
第17図	板杭検出状況-----	18
第18図	出土遺物実測図(1)-----	19
第19図	出土遺物実測図(2)-----	21
第20図	出土遺物実測図(3)-----	22
第21図	出土遺物実測図(4)-----	22
第22図	出土遺物(杭)実測図(5)-----	23
<b>(2) 桑原口遺跡(C地区)試掘</b>		
第23図	試掘トレンチ土層柱状図-----	24
第24図	C地区8トレンチ拡張部遺構実測図-----	25
第25図	出土遺物実測図(6)-----	26
第26図	出土遺物実測図(7)-----	27
<b>(3) 今福古墳群</b>		
第27図	試掘トレンチ配置図-----	30
第28図	今福11号墳墳丘測量図-----	31
第29図	出土遺物実測図(8)-----	32
<b>3. 今林遺跡第2次</b>		
第30図	調査地位置図-----	39
第31図	今林遺跡周辺部遺跡分布状況-----	40
第32図	調査トレンチ配置図-----	41
第33図	第1トレンチ平面図およびS H01平面・断面図-----	42
第34図	第2・3トレンチ平面図-----	43
第35図	S H02実測図-----	43
第36図	第4・5トレンチおよびS H06平面・断面図-----	44
第37図	第6トレンチ平面図-----	44
第38図	第7～10トレンチ平面図-----	45
第39図	S B07柱穴実測図-----	45
第40図	第11～13トレンチ平面図-----	46
第41図	S X(H)03実測図-----	46
第42図	S H05実測図-----	47
第43図	出土遺物実測図-----	47
<b>4. 余部遺跡第5次</b>		
第44図	調査地周辺遺跡分布図-----	49
第45図	調査地位置図-----	50

第46図	第5次調査区遺構配置図	51
第47図	第8トレンチ土層柱状図	52
第48図	溝513・514実測図	53
第49図	方形周溝墓506～508実測図	53
第50図	竪穴式住居跡512実測図	54
第51図	炉壁状遺物出土状況図	54
第52図	竪穴式住居跡501・502実測図	55
第53図	竪穴式住居跡503・504・522実測図	56
第54図	第1～7トレンチ主要遺構平面図	57
第55図	竪穴式住居跡216実測図	58
第56図	方形周溝墓101～103実測図	59
第57図	方形周溝墓309・310・314実測図	59
第58図	方形周溝墓312・313実測図	60
第59図	方形周溝墓504・505実測図	60
第60図	溝702実測図	61
第61図	溝125(古墳周溝)実測図	62
第62図	主体部104・105実測図	62
第63図	主要竪穴式住居跡実測図	63
第64図	竪穴式住居跡115実測図	64
第65図	掘立柱建物跡114実測図	64
第66図	主要掘立柱建物跡実測図	65
第67図	溝217実測図	65
第68図	出土遺物実測図(1)	67
第69図	出土遺物実測図(2)	68
第70図	出土遺物実測図(3)	69
第71図	出土遺物実測図(4)	70
第72図	出土遺物実測図(5)	71
第73図	出土遺物実測図(6)	72
第74図	出土石製品実測図(1)	74
第75図	出土石製品実測図(2)	75
第76図	出土石製品実測図(3)	76
第77図	出土石製品実測図(4)	77
第78図	出土石製品実測図(5)	78
第79図	出土石製品実測図(6)	79
第80図	出土石製品実測図(7)	80

第81図	出土石製品実測図(8)	81
第82図	余部遺跡(北部)集落域推定図	84
第83図	主要遺構変遷図	85
第84図	碧玉製管玉製作工程復原図	87

#### 5. 木津川河床遺跡

第85図	調査地位置図	90
第86図	調査区配置図	91
第87図	調査区土層断面図	92
第88図	第1遺構面遺構配置図	93
第89図	第2遺構面遺構配置図	94
第90図	第3遺構面遺構配置図	95
第91図	S H01実測図	95
第92図	S H02実測図	95
第93図	出土遺物実測図(1)	96
第94図	出土遺物実測図(2)	97

#### 6. 長岡京跡右京第620次

第95図	調査地位置図(1)	99
第96図	調査地位置図(2)	100
第97図	調査トレンチ平面図	102
第98図	調査トレンチ断面図	103
第99図	総柱建物跡S B62002平面図・断面図	104
第100図	出土遺物実測図(1)	106
第101図	出土遺物実測図(2)	107

## 付 表 目 次

#### 4. 余部遺跡第5次

付表1	余部遺跡出土土器観察表	73
付表2	余部1号墳出土鉄製品観察表	73
付表3	余部遺跡出土石製品観察表	82

# 図 版 目 次

## 1. 通り谷城跡

- 図版第 1 (1) A 地区調査前全景(北東から) (2) A 地区調査前全景(南西から)
- 図版第 2 (1) A 地区ホエケ谷 7 号墳主体部全景(南から)  
(2) A 地区ホエケ谷 8 号墳主体部全景(東から)
- 図版第 3 (1) A 地区土坑(南東から) (2) A 地区調査後全景(北東から)
- 図版第 4 (1) B 地区調査前全景(北から)  
(2) B 地区下方平坦部調査後全景(南から)
- 図版第 5 (1) B 地区土坑(南西から) (2) A 地区焼土坑 3 検出状況(北東から)
- 図版第 6 (1) B 地区焼土坑検出状況(北から) (2) 出土遺物

## 2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡

- 図版第 7 桑原口遺跡・今福古墳群遠景(南から)
- 図版第 8 (1) 桑原口遺跡調査地近景(北から) (2) 桑原口遺跡調査地近景(北から)
- 図版第 9 (1) 調査地全景(南から) (2) S H07・S K33近景(南東から)
- 図版第10 (1) S H07近景(西から) (2) S K33近景(西から)
- 図版第11 (1) S K31近景(北東から) (2) 板杭検出状況(東から)  
(3) 柱検出状況(東から)
- 図版第12 (1) C 地区全景(西から) (2) 8 トレンチ拡張部検出遺構全景(南東から)
- 図版第13 (1) 5 トレンチ北西壁断面(南東から)  
(2) 8 トレンチ拡張部下層遺構断面(南東から)  
(3) 6 トレンチ南東壁断面(北西から)
- 図版第14 (1) 柱検出状況(南西から) (2) 柱掘形断面(南西から)  
(3) 柱掘形断面(南西から)
- 図版第15 (1) 今福古墳群遠景(北西から) (2) 今福11号墳近景(北東から)
- 図版第16 (1) 今福古墳群近景(東から) (2) 今福11号墳近景(南西から)
- 図版第17 (1) 試掘状況(東から) (2) 試掘状況(西から)
- 図版第18 桑原口遺跡出土遺物(1)
- 図版第19 桑原口遺跡出土遺物(2)
- 図版第20 桑原口遺跡出土遺物(3)
- 図版第21 (1) 桑原口遺跡出土遺物(4)  
(2) 今福古墳群出土遺物(1)
- 図版第22 今福古墳群出土遺物(2)

### 3. 今林遺跡第2次

- 図版第23 (1)第1トレンチSH01(北から) (2)第2トレンチSH02(東から)  
(3)第3トレンチ(南から)
- 図版第24 (1)第4トレンチSH06(東から) (2)SH06(北東から)  
(3)第5トレンチ(南から)
- 図版第25 (1)第6トレンチ(東から) (2)第7トレンチ(北東から)  
(3)第7トレンチSB07柱穴(南東から)
- 図版第26 (1)第8トレンチ(東から) (2)第9トレンチSD08(南東から)  
(3)第10トレンチ掘削状況(東から)
- 図版第27 (1)第11トレンチ調査状況(北西から) (2)第12トレンチSH05(北東から)  
(3)SH05検出状況(北東から)
- 図版第28 (1)第13トレンチ(南西から) (2)第13トレンチSX(H)03(東から)  
(3)SX(H)03遺物出土状況(北西から)

### 4. 余部遺跡第5次

- 図版第29 (1)余部遺跡遠景(北西から) (2)調査地遠景(南東から)  
(3)第8トレンチ調査前近景(南東から)
- 図版第30 (1)第8トレンチ西側全景(東から) (2)溝513・514完掘状況(南東から)  
(3)方形周溝墓506～508完掘状況(西から)
- 図版第31 (1)調査地西側炉壁状遺物出土状況(西から)  
(2)炉壁状遺物中央部分出土状況(西から) (3)竪穴式住居跡512検出状況(南から)
- 図版第32 (1)竪穴式住居跡502検出状況(南から)  
(2)竪穴式住居跡502遺物8出土状況(西から)  
(3)竪穴式住居跡502貼り床土層断面
- 図版第33 (1)竪穴式住居跡504検出状況(南から)  
(2)竪穴式住居跡503検出状況(南から)  
(3)トレンチ南壁西側低地土層断面(北から)
- 図版第34 (1)第8トレンチ全景  
(2)第1～7トレンチ調査前近景(北西から)  
(3)第1トレンチ拡張前全景
- 図版第35 (1)第2トレンチ拡張前全景 (2)第3トレンチ全景  
(3)第4トレンチ全景
- 図版第36 (1)第5トレンチ全景 (2)第6トレンチ全景(北から)  
(3)第1トレンチ東側拡張区溝125完掘状況(南から)
- 図版第37 (1)第2トレンチ竪穴式住居跡216検出状況(西から)  
(2)第2トレンチ竪穴式住居跡216東側床面(西から)

- (3) 第2トレンチ竪穴式住居跡216遺物出土状況(南から)
- 図版第38 (1) 第1トレンチ方形周溝墓102遺物出土状況(西から)  
 (2) 第1トレンチ主体部105検出状況(西から)  
 (3) 第1トレンチ主体部105遺物出土状況(南から)
- 図版第39 (1) 第6トレンチ竪穴式住居跡601検出状況(南西から)  
 (2) 第1トレンチ掘立柱建物跡114検出状況(南西から)  
 (3) 第1～5トレンチ全景(南西から)
- 図版第40 出土遺物(1) 土器・土製品
- 図版第41 出土遺物(2) 土器
- 図版第42 出土遺物(3) 土器
- 図版第43 出土遺物(4) 鉄器類
- 図版第44 (1) 出土遺物(5) 碧玉・緑色凝灰岩剥片・玉未製品  
 (2) 出土遺物(6) 砥石・叩き石
- 図版第45 (1) 出土遺物(7) 玉髓製剥片・石針  
 (2) 出土遺物(8) 使用痕のある玉髓製石針
- 図版第46 出土遺物(9) 顕微鏡写真
- 図版第47 (1) 出土遺物(10) サヌカイト・チャート製剥片、紅簾片岩製石鋸  
 (2) 出土遺物(11) サヌカイト・チャート製石器類
- 図版第48 (1) 出土遺物(12) 石斧 (2) 出土遺物(13) 石庖丁・刃器

#### 5. 木津川河床遺跡

- 図版第49 (1) 調査地調査前全景(南東から) (2) 調査地調査後全景(西から)
- 図版第50 (1) 第1遺構面トレンチ部西半部(西から)  
 (2) 第1遺構面トレンチ部東半部(東から)  
 (3) 第2遺構面トレンチ部東半部(東から)
- 図版第51 (1) 第3遺構面調査区西半部(西から) (2) 第3遺構面S H01全景(南から)  
 (3) 第3遺構面S H02全景(北から)
- 図版第52 (1) トレンチ部東壁断面噴砂(西から)  
 (2) 拡張区東壁断面曲隆および噴砂(南西から)  
 (3) 拡張区東壁断面曲隆(南西から) (4) 拡張区東壁断面噴砂(西から)

#### 6. 長岡京跡右京第620次

- 図版第53 (1) 調査地全景(右が北) (2) 第1トレンチ全景(上が北)  
 (3) 第2トレンチ全景(上が北)
- 図版第54 (1) 第1トレンチ溝S D62003(西から)  
 (2) 第1トレンチ溝S D62010・62011(西から)  
 (3) 第1トレンチ溝S D62010断面(西から)

- 図版第55 (1)第2トレンチ総柱建物跡 S B 62002検出状況(北から)  
(2)第2トレンチ総柱建物跡 S B 62002柱穴(上が北)
- 図版第56 (1)第2トレンチ雨落ち溝 S D62013検出状況(北から)  
(2)第2トレンチ雨落ち溝 S D62014検出状況(西から)  
(3)第2トレンチ拡張区雨落ち溝 S D62046(西から)
- 図版第57 (1)第2トレンチ溝 S D62001(西から)  
(2)第2トレンチ溝 S D62020(北から)  
(3)第2トレンチ溝 S D62030(上が南西)
- 図版第58 出土遺物

# 1. 通り谷城跡発掘調査概要

## 1. はじめに

この調査は、ふるさと農道整備事業に伴い、京都府丹後土地改良事務所の依頼を受け実施した。この道路整備事業は丹後の交通網の整備と、府道網野峰山線と広域農道を繋ぐ延長850mの道路として計画されている。京都府教育委員会・峰山町教育委員会の事前の踏査により、路線内で新たに通り谷城跡が発見され、その一部がかかることになった。

調査地は、A・B地区からなり、いずれも通り谷城跡とされている。調査の結果、城跡に関する顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、A地区ではほとんど墳丘を有さない古墳が2基検出された。古墳名称については、関係諸機関協議の結果、谷入り口部分に存在する古墳と同丘陵にあるため、ホエケ谷古墳群<sup>(注1)</sup>とすることとなった。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦が担当し、本概要報告は増田が執筆した。

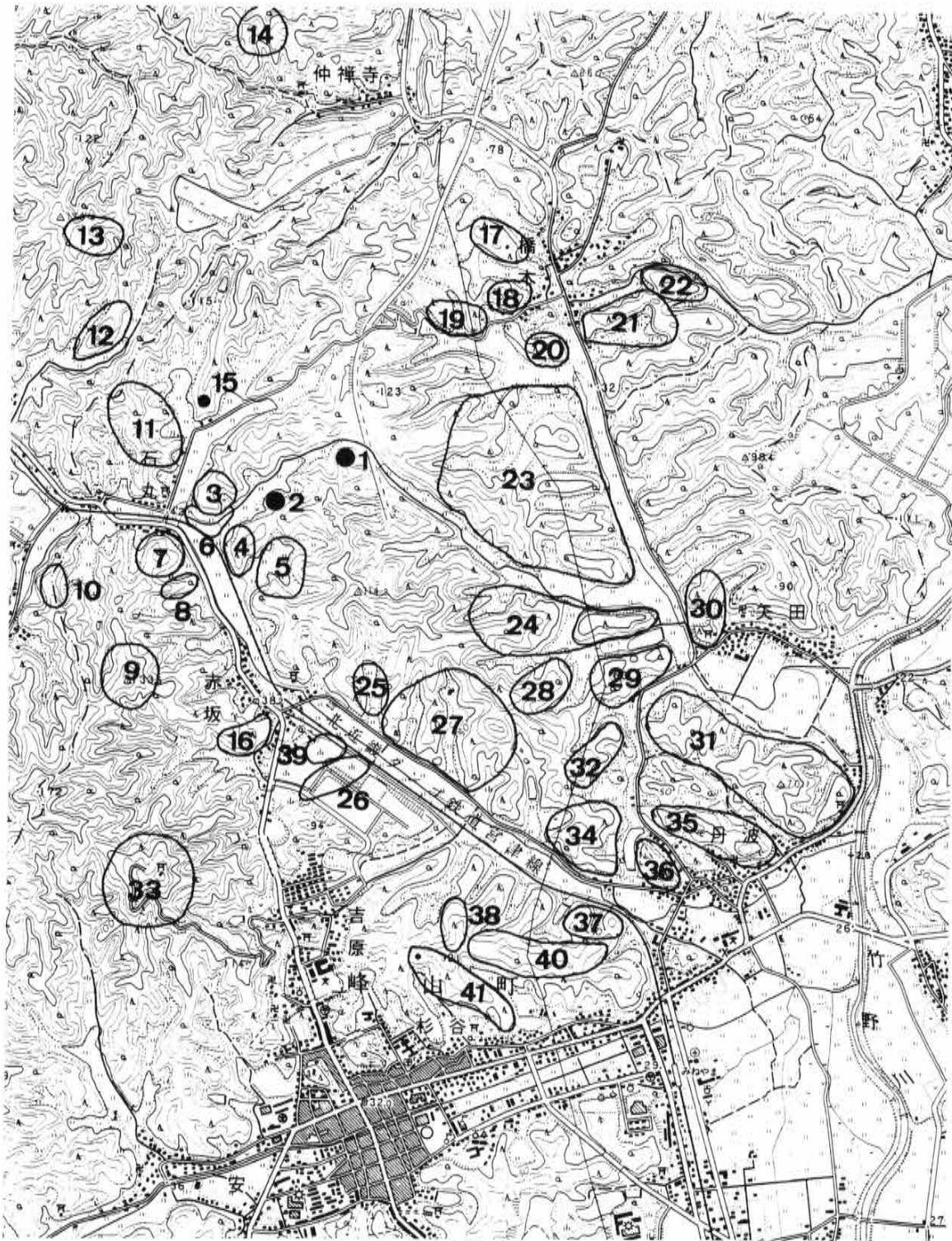
調査期間中は、猛暑の中で、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員・補助員・整理員として作業に従事していただいた<sup>(注2)</sup>。また調査にあたっては、京都府教育委員会・峰山町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得られ、現地でも多くの方々の御協力と御指導を賜わった。改めて感謝の意を表したい。

なお、発掘調査に要した経費は、全額京都府丹後土地改良事務所が負担した。

## 2. 位置と環境

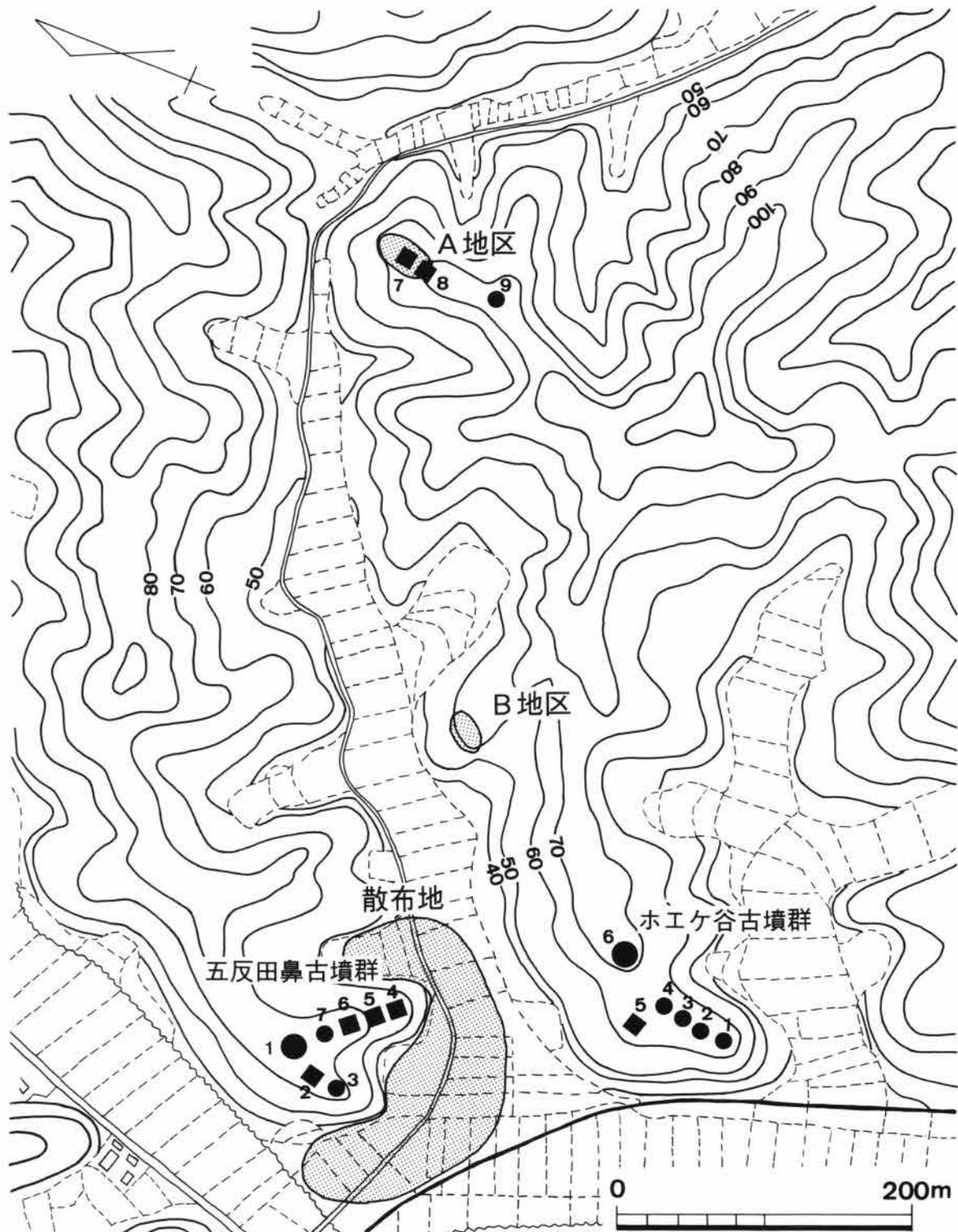
調査地は、中郡峰山町大字赤坂・矢田小字通り谷に所在する(第1図)。竹野川支流である大糸川の源流付近に位置し、網野町境で日本海に直接注ぐ福田川との分水嶺付近でもある。大糸川により形成された沖積地は、幹線道路である府道網野峰山線、北近畿タンゴ鉄道があり、通り谷城跡はこれより西に開けた谷部に位置している。現在の峰山町赤坂・石丸集落と矢田集落とを谷を通じて最短距離で結び、古くは幹線道路沿いと言えるような所でもある。

通り谷周辺の歴史環境を見てみると、通り谷赤坂側入り口付近には、五反田鼻古墳群(7基)、ホエケ谷古墳群(6基)、千束古墳群(6基)、松ヶ谷古墳群(2基)、ケビ古墳、千速谷古墳、今井古墳がある。矢田側の谷入り口付近でも、十三塚古墳群(76基)、妙ヶ谷古墳群(13基)、小砂古墳群(9基)、石生古墳群(8基)など多くの古墳が分布している。このほか、赤坂地内には発掘調査が行われ角杯形土器が出土し、若狭地域との関係が注目された大耳尾古墳群<sup>(注3)</sup>がある。多くの古墳が築かれているにもかかわらず、古墳時代の集落遺跡は確認されず、通り谷入り口部分の五反田鼻古墳群南側丘陵裾部分に散布地が存在する程度で、調査例が少なく未解明な部分が多い。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

- |             |             |            |             |             |
|-------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 調査地(A地区) | 2. 調査地(B地区) | 3. 五反田鼻古墳群 | 4. ホエケ谷古墳群  | 5. ホエケ谷遺跡   |
| 6. 散布地      | 7. 千束古墳群    | 8. 今井城跡    | 9. 赤坂山城跡    | 10. 生野内C城跡  |
| 11. 石丸城跡    | 12. 生野内B城跡  | 13. 目切古墳群  | 14. 目細城跡    | 15. 中之谷古墳   |
| 16. 後谷古墳群   | 17. 高尾坂古墳群  | 18. 松田岡古墳群 | 19. 石釜古墳群   | 20. 烏ヶ巣古墳群  |
| 21. 蔵古墳群    | 22. 橋木城跡    | 23. 十三塚古墳群 | 24. 妙ヶ谷古墳群  | 25. 赤坂木炭散布地 |
| 26. 大耳尾古墳群  | 27. 麦ヶ谷古墳群  | 28. 石生古墳群  | 29. 浅尾田山古墳群 | 30. 小砂古墳群   |
| 31. 湧田山古墳群  | 32. 平ヶ岡古墳群  | 33. 吉原山城跡  | 34. 丸山古墳群   | 35. 丹波城跡    |
| 36. 鶴ヶ尾城跡   | 37. 小骨古墳群   | 38. 大谷山古墳群 | 39. 小耳尾古墳群  | 40. 杉谷山古墳群  |
| 41. 西谷山古墳群  |             |            |             |             |



第2図 調査地および周辺遺跡分布図

奈良時代以降の集落遺跡は古墳時代同様確認されていないが、製鉄・製鉄関連遺跡が見られるようになる。大耳尾古墳群調査中には、北側下方の山裾部分で小耳尾遺跡が発見され、鉄滓が多量に出土したが、調査は行われず地下保存された。その対岸の谷部では、多量に木炭が散布する赤坂地区木炭散布地<sup>(注4)</sup>が確認されている。今回の調査対象地であるB地区南側の谷は、鉄滓の散布するホエケ谷遺跡がある。

中世になると、今井城跡・石丸城跡・赤坂山城跡が築城されるようになり、古代から交通の要地となっている。

### 3. 調査経過

調査地はA地区とB地区の2か所(第2図)からなり、工事の関係上、A地区から調査を実施することとなった。調査地の伐採後、基準杭を設置し、1/100地形測量図を作成して、平成10年7月14日より掘削を開始した。A地区では、尾根稜線の平坦部に沿った幅約20m・長さ約33mが調査対象地であり、400㎡の掘削を行ったが遺構・遺物とも出土せず、表土直下が地山面となっており、城跡は認められなかった。かわって古墳2基が新たに検出されるとともに、土坑1基・焼土坑3基・柱穴状の穴が検出された。平成10年9月16日に調査を終了した。

B地区は、丘陵先端部の平坦部であり、南東側30mのところには掘り切りが認められる。調査対象となったのは平坦部先端の一部と急崖部分、北側の丘陵稜線がやや緩い傾斜をなす平坦部である。調査は、平成10年8月5日から開始した。表土直下より土坑・柱穴・焼土坑が検出されたが、城跡に関連する遺構は確認されなかった。地形的な特徴や、調査地が平坦部先端付近であったことから城跡の可能性も残るが、周辺には類似するような地形は存在していない。9月16日には関係者説明会を行い、A・B地区の全ての調査を終了した。A・B地区の総調査面積は600㎡である。

### 4. 調査概要

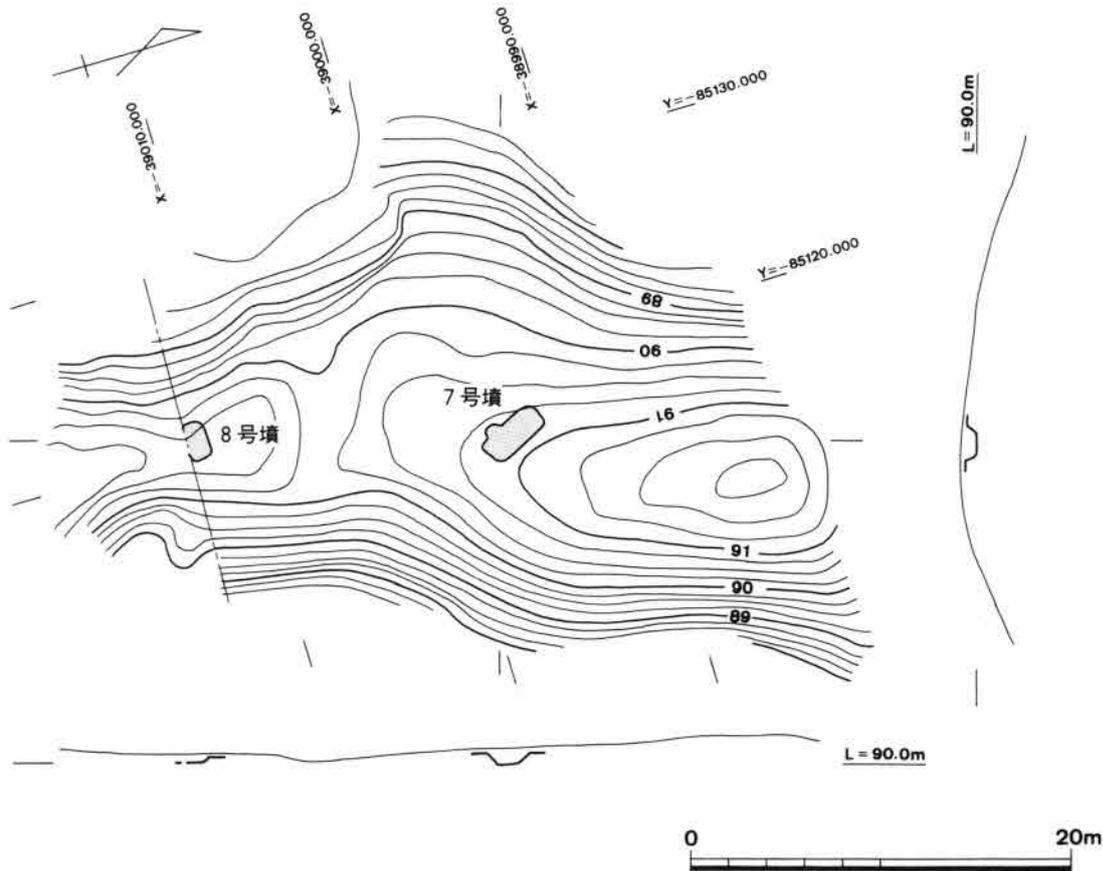
調査地はA地区とB地区の2地区からなり、いずれも通り谷城跡とされている。地区別にその概要を記す。

#### (1) A地区(第3～5図、図版第1～3)

通り谷の分水嶺付近の標高91m付近の丘陵上に位置する。丘陵上の平坦部全域にトレンチを設定し、掘削を行った結果、城跡に関する遺構・遺物は検出されなかったが、古墳2基・土坑1基・焼土坑3基・柱穴状の穴11個が検出された。

ホエケ谷7号墳(第4・5図、図版第2) 調査地中央部に位置し、明確な墳丘は認められなかったが、西側に傾いた南北方向に主軸を持つ素掘りの墓壇1基を検出した。墓壇は隅丸長方形をなし、長辺約3.5m×短辺約1.5m・深さ約0.7mの規模を有する。木棺痕跡は確認できなかった。墓壇検出面上で土師器片が少量出土したのみで、内部からは副葬品等の遺物は出土していない。墓壇底面は、南東方向が広く、北西方向が狭くなっていることから、遺体の頭位は南東であったと考えられる。

ホエケ谷8号墳(第4・5図、図版第2) 7号墳の南側に位置し、墳丘は丘陵を削り出して方形に整えている。墳丘の北側には尾根と区画する幅3m・深さ0.75mの溝が設けられる。墳丘の1/2は造成地外となるが、長辺11m・短辺8m、北側の区画溝からの高さ1mを測る。溝内中央部から刀片・鎌と考えられる鉄製品が出土した。埋葬施設は、南側の造成界付近で、尾根に直交



第3図 A地区調査前地形図

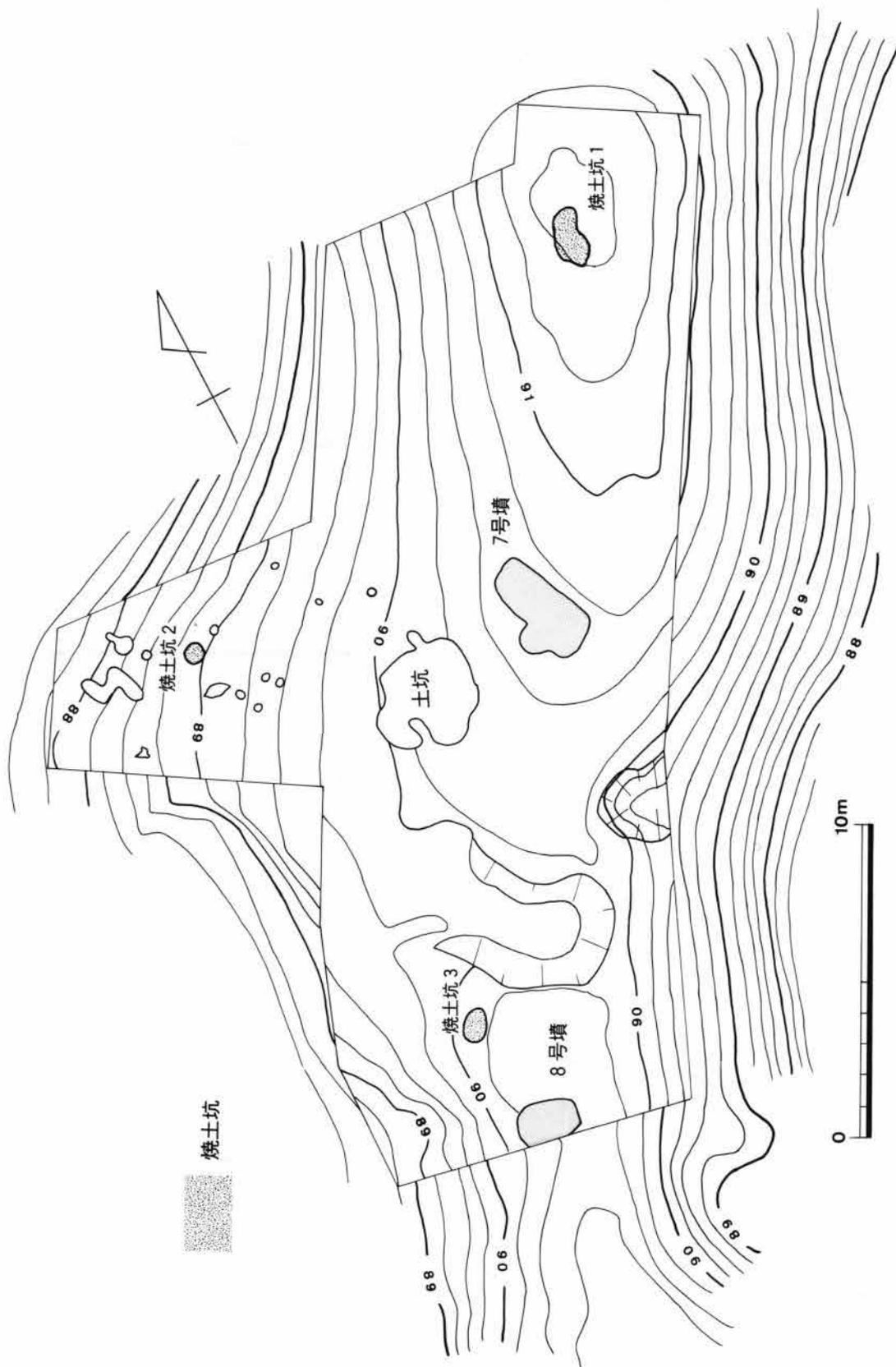
した東西方向に主軸をもつ素堀りの墓壇1基を検出した。墓壇は、隅丸長方形を呈し、長辺2m×短辺約1m・深さ0.15mを測り、西側が広がっている。内部からは遺物は出土しなかった。表土直下で検出されたことや、墓壇の深さが0.15mしかないことから、墳丘頂部は後世に削平を受けたと思われる。

築造時期については、8号墳の北側区画溝を設ける際に7号墳の土器を壊したようで、溝北側肩部付近より小型丸底壺・土師器片が出土した。これにより7号墳の築造時期は、5世紀前半頃と考える。8号墳については、墳丘西側斜面より須恵器高杯脚部が出土しており、6世紀後半頃と考えられる。

土坑(第4・7図、図版第3) 7号墳墓壇西側に近接して検出されたもので、不整形な平面形をなし、長辺3.2m・短辺2.2m・深さ0.6を測る。中央部底面は長さ1m・幅0.6m・深さ0.2mほど窪んでいる。内部から土師器小片が出土した。時期・性格などは不明である。

焼土坑(第4図、図版第5-2) 焼土坑1は、7号墳北東側の稜線上で検出し、長辺2m・短辺1m・深さ0.15mを測る。8号墳西側斜面で検出した焼土坑3は、直径1m・深さ10cmを測る。土坑西側の斜面で検出した焼土坑2は、直径0.5m・深さ0.1mを測る。いずれも内部埋め土は、木炭片・焼土粒が混じる。焼土坑3では底面全面が赤色に酸化している。炭窯の底部付近と考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

柱穴状の穴については、直径約0.2~0.3m・深さ約0.25mほどのものである。遺物が出土して



第4図 A地区検出遺構および調査後地形図

いないので時期は不明である。焼土坑が炭窯とするならば、簡単な覆いのための施設、炭材となる原木の置き場の施設が考えられよう。

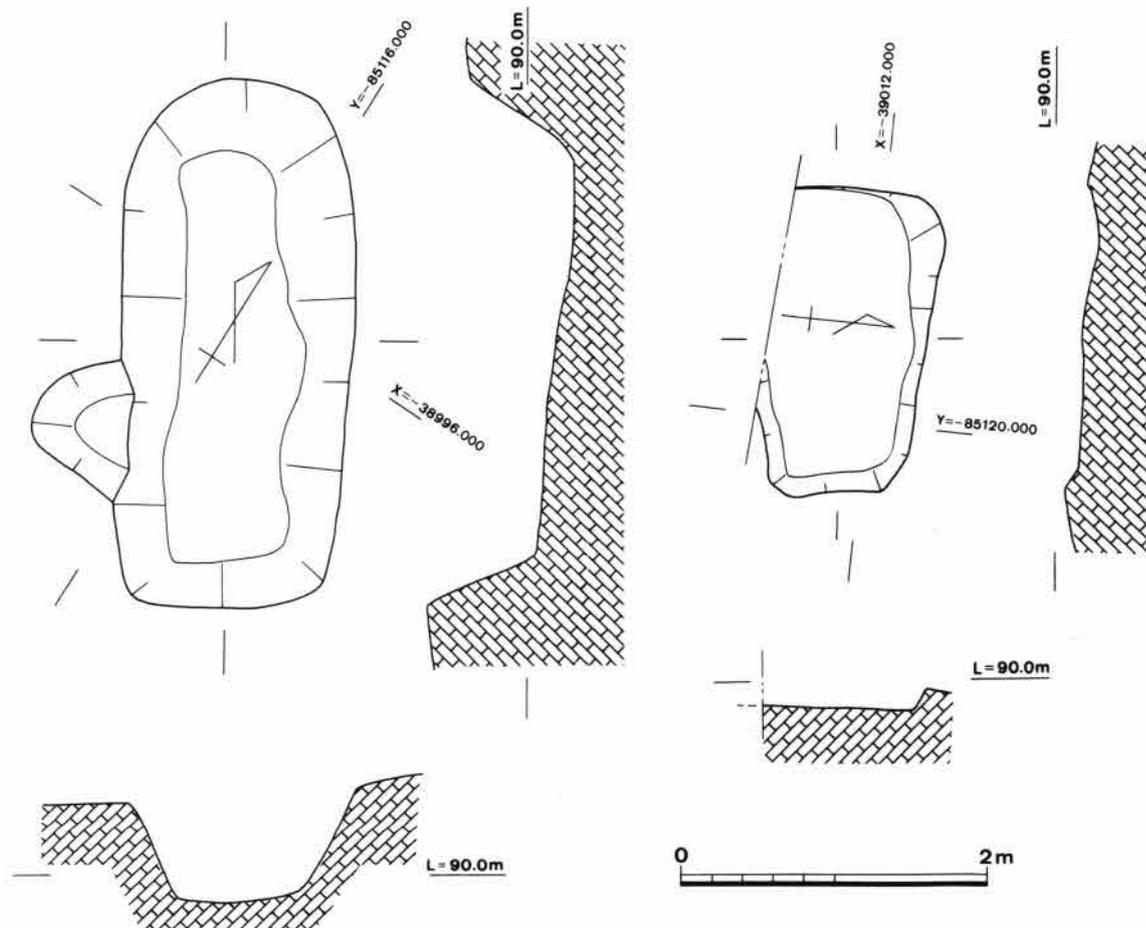
(2) B地区(第6図、図版第4)

通り谷入り口とA地区との中間部分の標高66m付近の丘陵上に位置する。長さ約26m・幅7～12mの平坦部があり、南端は幅7m・長さ15m・深さ2mにわたる堀切状の施設が設けられている。調査対象地は、この平坦部の北西端約5mにわたる部分と、北側下方のテラス状部分である。トレンチは平坦部分、テラス状部分のそれぞれ全域に設定して、掘削を行った。その結果、上方の平坦部からは、城跡に関する遺構・遺物は検出されなかったが、土坑1基・焼土坑1基が検出された。下方の平坦部は、表土下に約0.5mの土砂の堆積が認められた。上方の平坦部を削平した際の土砂が堆積しているものと考えられる。遺構・遺物とも検出されなかった。

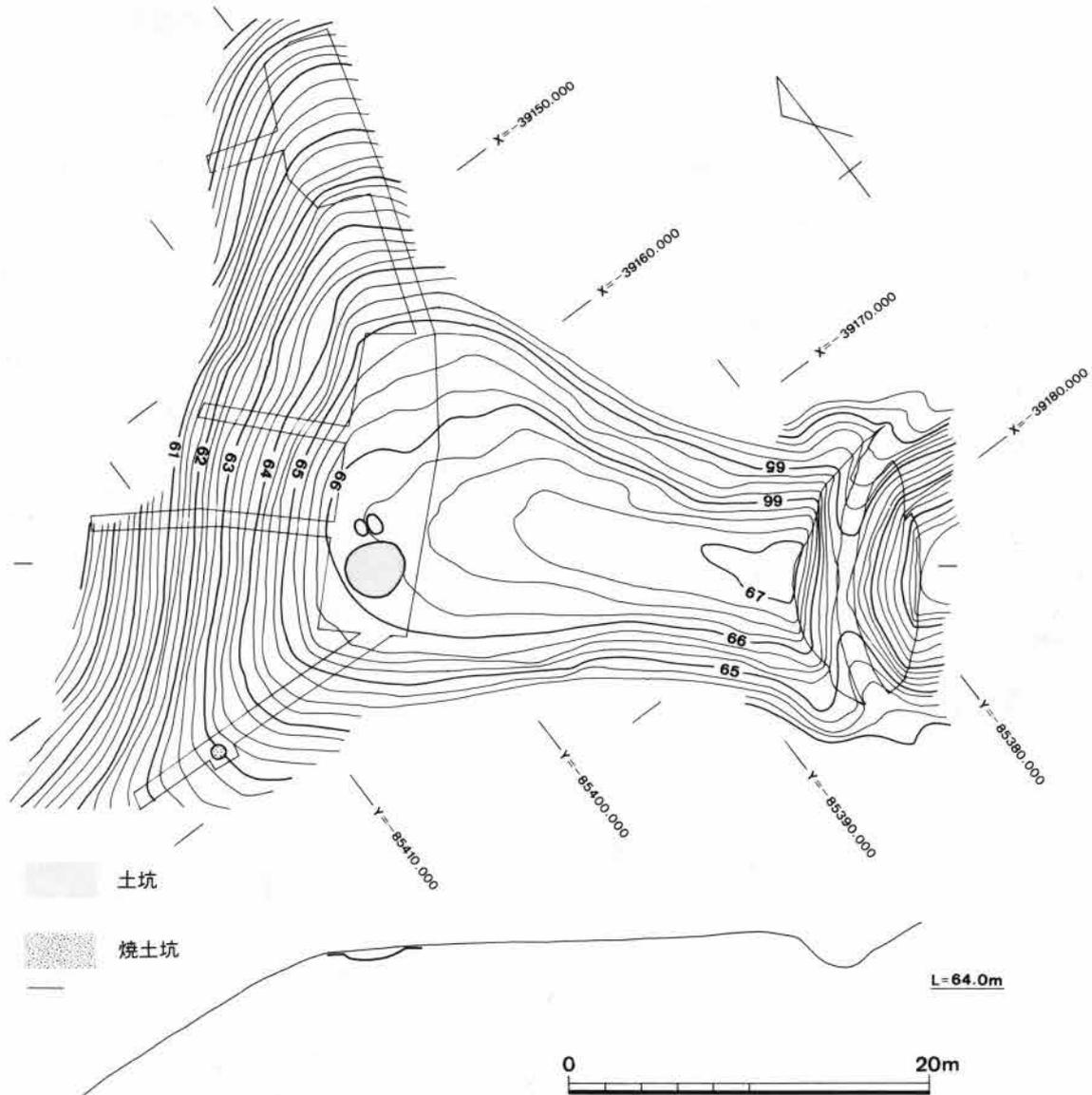
土坑(第8図、図版第5-1) ややいびつな円形をなし、直径3m・深さ0.5mを測る。内部埋土は少量の木炭片・焼土粒が混じる。内部から須恵器杯身が出土し、8世紀中頃と考えられる。

焼土坑(第6図、図版第6-1) 平坦部西側斜面で検出したもので、直径0.8m・深さ0.1mを測る。内部は木炭片・焼土粒が混じる。炭窯の底部付近と考えられる。遺物が出土していないために、詳細な時期は不明である。

その他、長径約1m・短径約0.5m・深さ約0.3mの穴2か所も土坑に近接して検出されたが、



第5図 A地区ホエケ谷7・8号墳主体部実測図(左図:7号墳、右図:8号墳)



第6図 B地区調査前地形図

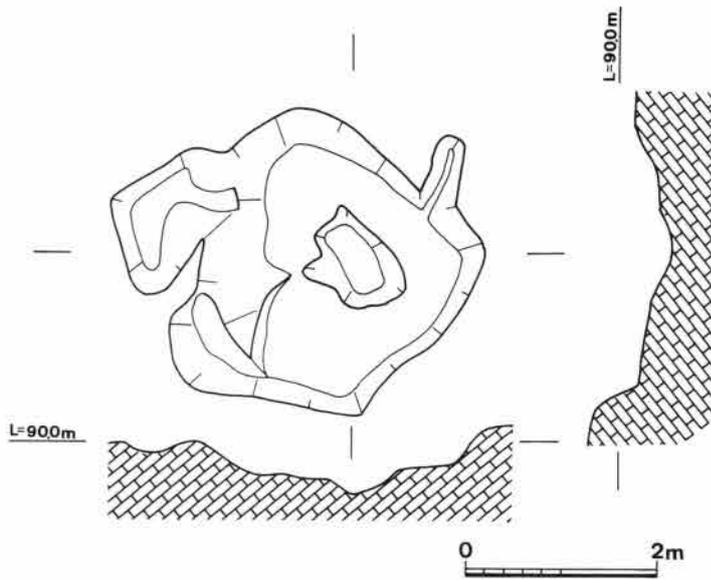
遺物が出土していないため、時期は不明である。

(3)出土遺物(第9・10図、図版第6)

通り谷城跡の発掘調査で出土した遺物は、いずれも小片であり、A地区出土遺物には、この城の時期を決定するものは認められなかった。以下に、それぞれの遺物について列挙したい。

**A地区の出土遺物(第9図1～5)** 7号墳に関連する遺物としては、溝の肩付近より出土した小型丸底壺1がある。これは、半球状の体部と逆「ハ」字状に大きく外上方に開く口縁部からなる。体部内面には指押さえの痕跡が見られる。体部外面は縦方向のハケ目が部分的に見られた。2は、8号墳西側墳丘裾部分より出土した長脚二段透かしの須恵器高杯脚片である。中央には2条の凹線を施し、上段・下段とも2方向に長方形の透かし孔をいれる。

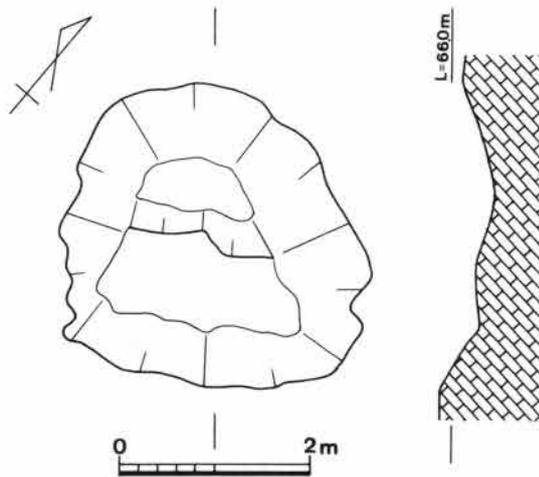
鉄製品3～5は、8号墳溝内より出土したものである。3・4は同一個体と思われるが、残存状況に差異が認められるので個別に図化した。いずれも風化が著しく、錆膨れにより原形をほと



第7図 A地区土坑実測図

んどとどめていない。刀片である可能性がある。5は、薄い鉄板状のもので先端と体部の一部を欠損する。明確な刃部は認められないが、形状から鎌と考えられる。

B地区の出土遺物(第10図、図版第6-2-7) 6は土坑内より出土した杯で、立ち上がりを欠損する底部のみの破片である。高台径8.7cm。7は、土坑周辺で出土した釘である。頭部先端を扁平に叩き、内側に折り曲げたもので、芯部断面は方形を呈する。先端を欠損するが、残存長4.2cmを測る。



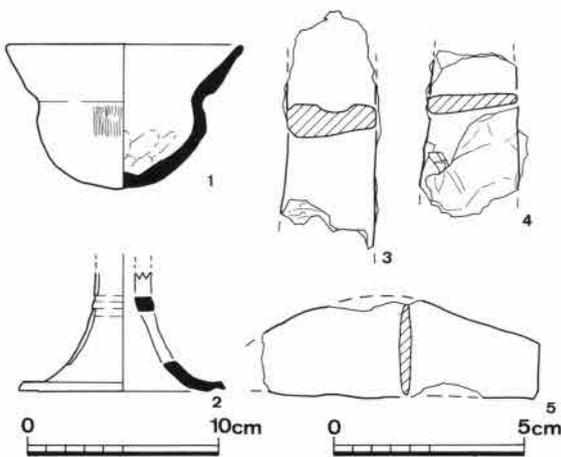
第8図 B地区土坑実測図

先述の通り、通り谷城跡の時期を決定するにはいたらないが、A地区の小型丸底壺の存在などから、付近に古墳時代の遺跡がかって存在し、城の造営によって破壊された可能性も考えられる。特に、丹後地域では、山城の下層に古墳が存在するケースが多く、今後の周辺の調査でも留意せねばならないだろう。

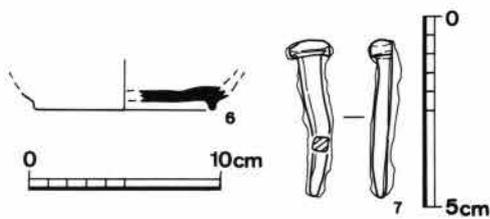
## 5. まとめ

通り谷城跡A・B地区の調査を実施したが、いずれの調査区でも城跡に関する遺構・遺物は検出されず、古墳2基・土坑2基・焼土坑4基が確認されるのみであった。

古墳は、隣接しているにもかかわらず、7号墳は古墳時代中期、8号墳は古墳時代後期と築造時期に差が認められた。谷の奥まった所に築かれているが、通り(道路)谷という小字名が示すように、ここは集落と集落を結ぶ幹線道路沿いであった可能性がある。谷入り口部分には多くの古墳が展開するが、本古墳が立地する周辺は古墳空白地帯であり、調査



第9図 出土遺物実測図(1)



第10図 出土遺物実測図(2)

で明らかになったように、ほとんど墳丘を有さない古墳が存在する可能性が高く、今後、詳細分布調査を行う必要がある。また、古墳群が丘陵先端に築かれなかった点については、分水嶺付近で谷が「く」字状に屈曲しており、この屈曲部に古墳の立地する丘陵がのびて、先端に築造すると古墳が隠れてしまうため、両側の谷部から古墳側面が見える位置に築造した

ものと考えられる。

また、焼土坑については、いずれも底部付近のみが残存していたものであるが、小型の円形ないし楕円形を呈する炭窯であったと考えられる。周辺には赤坂地区木炭散布地や、小耳尾遺跡・ホエケ谷遺跡などの製鉄・製鉄関連遺跡があることから、この通り谷の内部でも製鉄遺跡が存在する可能性がある。今後、周辺の開発を行う場合、注意を要する。

(増田孝彦)

注1 増田孝彦「平成10年度発掘調査略報-12. 通り谷城跡-」(『京都府埋蔵文化財情報』第70号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

なお、この略報掲載の古墳番号は、ホエケ谷6号墳をホエケ谷7号墳に、ホエケ谷7号墳をホエケ谷8号墳へと訂正した。

注2 調査参加者(順不同)

奥田栄吉・山崎 誠・市田英介・平林秀夫・石井 清・松村 仁・山下良介・江宮義一・山城金作・山副 茂・森野 務・久岡美昭・山河逸雄・梅田光夫・坪倉和行・平林直美・藤原多津子・石嶋文恵・森野美智代・村上五月・大江田洋子・山田フクヨ・坪倉初江・岡本ふみ枝・梅田栄子・山口奈美・牛田雅子・成毛美好

注3 峰山町教育委員会『大耳尾古墳群現地説明会資料』 1991

注4 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第3冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

## 2. 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡 平成10年度発掘調査概要

この調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(宮津野田川線)宮津豊岡道路建設事業に伴うものである。京都府道路公社の依頼を受けて、当調査研究センターが平成4年度から継続的に実施している。平成10年度は、宮津市桑原口遺跡・今福古墳群の発掘調査を実施した。調査面積の全体は、580㎡である。

桑原口遺跡は、昭和45年に宮福線敷設工事(現北近畿タンゴ鉄道)に伴い発掘調査が行われ(第1次調査)、竪穴式住居跡・溝などの遺構とともに、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての良好な土器資料が出土している<sup>(注1)</sup>。平成7年度調査では、線路の西側をA地区、東側をB地区と呼称し、両地区の試掘調査を実施した後、B地区から発掘調査を実施した(第2次調査)。B地区では、竪穴式住居跡・溝等が検出され、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての土器が大量に出土した<sup>(注2)</sup>。平成8年度は、A地区の発掘調査を実施し(第3次調査)、溝・土坑が検出され、弥生時代後期を中心とする多量の土器とともに、ガラス製勾玉・銅鏃などが出土している<sup>(注3)</sup>。この3次にわたる調査の結果、桑原口遺跡は、宮津谷における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての拠点集落であったことが推測される。今年度の調査対象地は、第2次調査地の南側隣接地と、さらにその南側の東西方向に延びる谷部で、後者では、遺跡の範囲確認のための試掘調査を実施することとなった。

今福古墳群は、総数13基からなる古墳群で、調査対象となった10～13号墳の4基は京都府教育委員会・宮津市教育委員会の分布調査により新たに確認されたものである。

平成10年度調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦、同主査調査員岡崎研一が担当した。本概要報告は増田・岡崎が討議のうえ執筆した。

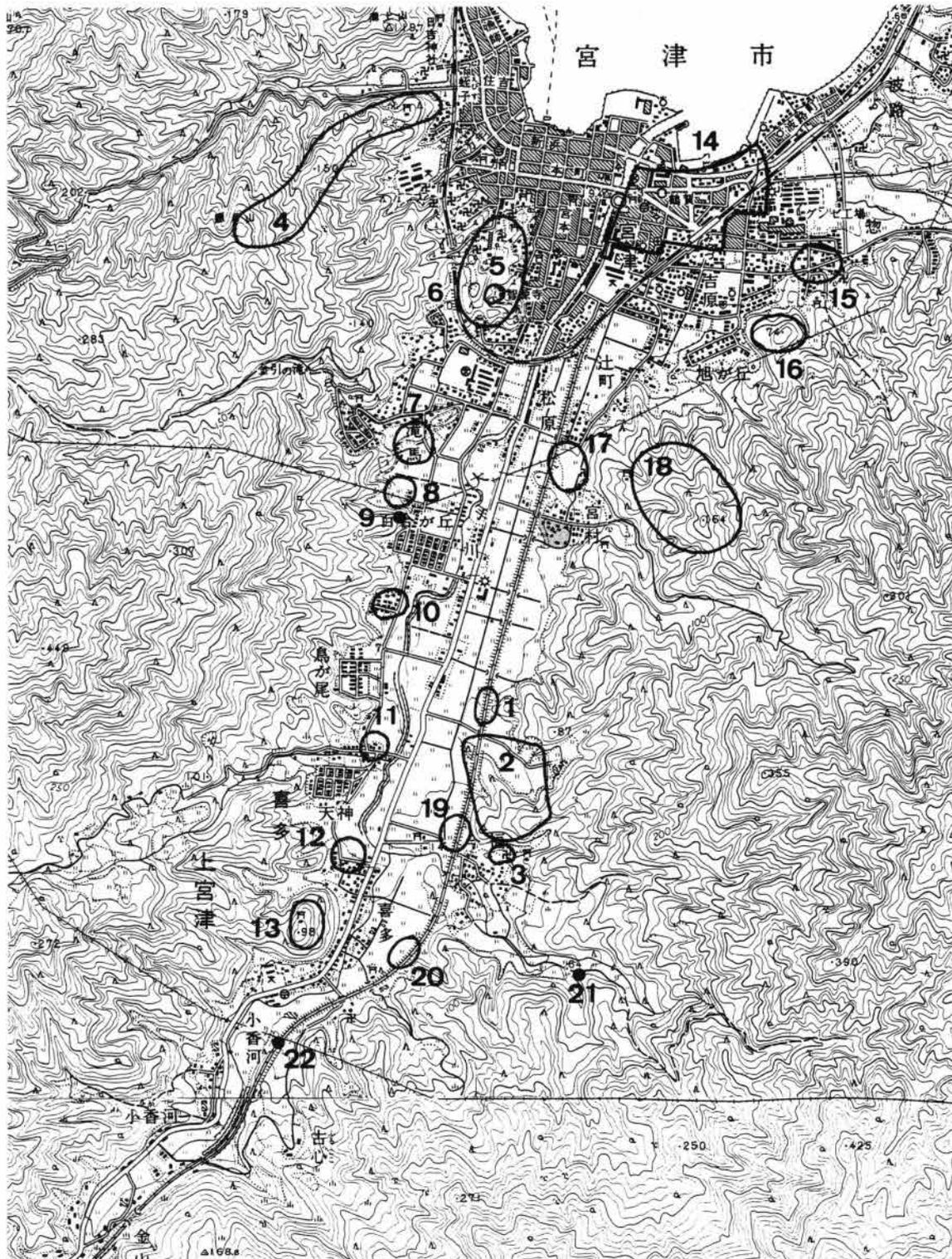
調査期間中、猛暑の中で地元有志の方々や学生諸氏には、作業員・補助員・整理員として作業に従事していただいた<sup>(注4)</sup>。調査を行うにあたっては、京都府教育委員会・宮津市教育委員会から指導・助言を得たほか、京都府道路公社建設事務所には種々便宜をはかっていただいた。現地でも多くの方々から協力と指導を賜った。改めて感謝の意を表したい。

なお、発掘調査に要した経費は、全額京都府道路公社が負担した。

### (1) 桑原口遺跡第4次

#### 1. 位置と環境

桑原口遺跡は、京都府宮津市大字喜多小字桑原口に所在する(第11図)。



第11図 調査地および主要周辺遺跡分布図(1/25,000)

- |           |               |           |           |           |
|-----------|---------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 桑原口遺跡  | 2. 今福古墳群(調査地) | 3. 今福城跡   | 4. 宮津山城   | 5. 智源寺裏遺跡 |
| 6. 大久保山城跡 | 7. 滝馬A遺跡      | 8. 滝馬B遺跡  | 9. 滝馬古墳   | 10. 福田遺跡  |
| 11. 葉師遺跡  | 12. 喜多遺跡      | 13. 上宮津城跡 | 14. 宮津城跡  | 15. 惣遺跡   |
| 16. 惣村城跡  | 17. 宮村遺跡      | 18. 八幡山城跡 | 19. 荒木野遺跡 | 20. 杉本遺跡  |
| 21. 水根古墳  | 22. 丸山古墓      |           |           |           |

遺跡は、大手川により形成された宮津谷と呼ばれる沖積地の段丘上から丘陵斜面にかけて立地し、宮津谷の中央部の大手川右岸にあたる。

宮津谷における最古の遺跡としては、宮村遺跡(弥生時代中期～後期)がある。弥生時代後期になると、薬師遺跡・桑原口遺跡がある。桑原口遺跡は、過去3回の調査が実施され、弥生時代後期を中心とした竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝などが検出されており、弥生時代後期～古墳時代中期の宮津谷における拠点集落遺跡であることが明らかになっている。

古墳時代の遺跡としては、前述した桑原口遺跡のほか惣遺跡等を見る程度で、古墳も城山古墳群・今福古墳群などがあるが、いずれも後期古墳で大きな古墳群を形成せず散在している。この中で、今福古墳群(13基)が最も大きな群を構成している。

奈良時代から平安時代にかけては、掘立柱建物跡が検出された荒木野遺跡がある。

中世になると今福城跡・上宮津城跡などの山城が築かれるようになる。宮津谷に所在する遺跡については、桑原口遺跡を除き、全体を通じて未解明な部分が多いのが現状である。

## 2. 調査経過

調査対象地全域および第2次調査地と重なるようにトレンチを設定し(第13図)、調査を実施した。第2次調査の成果を踏まえると遺構面がかなり深くなっており、重機による掘削を行うこととなった。遺物包含層検出後は、人力により包含層の除去、遺構の掘削を行った。調査は、平成10年5月11日より開始し、6月26日には関係者説明会を実施し、7月2日に全ての作業を終了した。調査面積は、約300m<sup>2</sup>である。

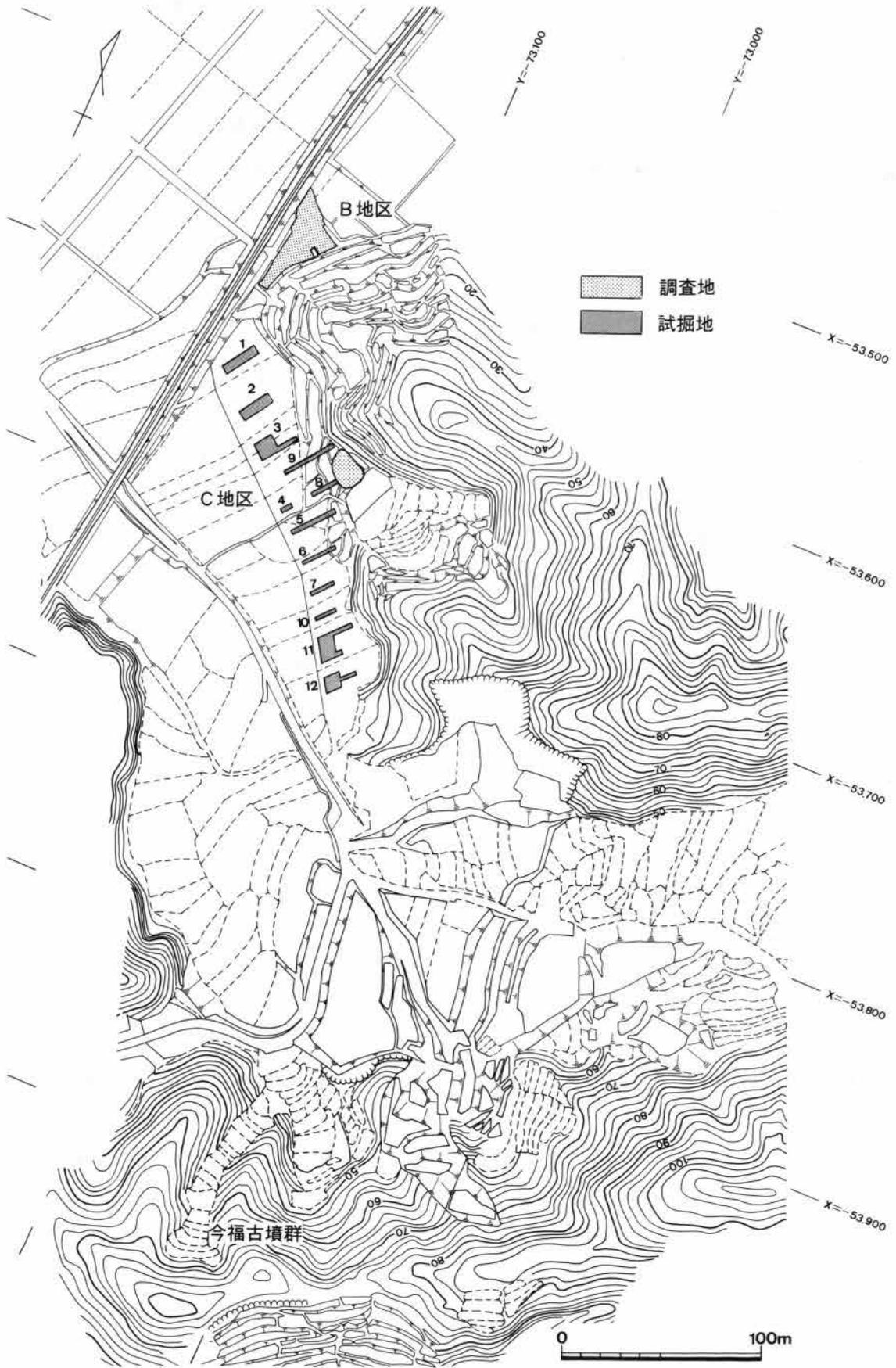
## 3. 調査概要

### a. 土層堆積状況(第14図)

調査地は、北東から南西へ延びる丘陵裾部分に位置し、第2次調査地方向に緩やかに傾斜している。トレンチ西壁の北端付近での基本的な土層堆積状況は、1.水田耕作土、2.水田床土、3.黄白色砂土、4.水田耕作土、5.黄灰色砂土・粘質土、6.水田耕作土、7.暗灰色土である。1～3層は近年に行われた土地整備に伴う整地層で、水平堆積をなす。4・5層は、それ以前の土地整備に伴うもので、水路の跡なども見られる。上層と同様、水平堆積をなす。遺物が出土していないため時期は不明である。6は、最も古い耕作面である。黒色土器皿が出土している(第18図39)。この6層までは約1mを測り、7層目の暗灰色土が弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層となる。包含層中には多量の弥生土器片とともに、有機物・炭片が混入している。包含層は平均約15cmの厚さをはかる。後述する古墳時代の遺構であるSX02はこの包含層より掘り込まれている。7層以下は、遺構内埋土であり、今回検出した弥生時代後期の遺構は、地山面である灰青色砂土より掘り込まれる。山裾側ではこの層にかわって、淡黄褐色粘質土が認められた。

### b. 検出遺構

第7層(遺物包含層)の精査を行った結果、第2次調査で検出されたSX02の延長部分を検出し



第12図 桑原口遺跡・今福古墳群位置図

た。それ以外の遺構は検出されず、包含層を除去した段階で竪穴式住居跡3基・溝1基・土坑2基・板杭列1基・柱穴150基などの遺構を検出した。前者を上層遺構、後者を下層遺構とした。遺構の名称は遺構名、調査順に番号を付した。第2次調査で検出されていた遺構の延長部分を確認したものについては、第2次調査時の遺構名そのものを付している。

#### c. 上層遺構(第13図)

S X 02 トレンチ北西隅で検出したもので、弥生時代後期の遺物包含層から掘り込まれる。検出長3m・検出幅1.5mで第2次調査で検出したS X 02の延長部分である。内部埋め土は黒色土を中心とした有機物・炭を含む上下2層からなり、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土し、下層からは少量の自然木、板材、種子(クルミ・椎)が出土した。下層中位付近より、直径0.25m・深さ0.4mの掘形内に、直径0.15m・残存長0.4mの杉材の柱が認められた。上層から掘り込まれていないことから、この遺構が埋まる過程で設けられた掘立柱建物跡と考えられる(S B 93)。

#### d. 下層遺構(第13図)

下層遺構としては竪穴式住居跡3基・掘立柱建物跡1基・土坑2基・板杭列・柱穴約150基を検出した。いずれも弥生時代後期に比定されるものである。

S H 07(第13・15図) トレンチ北端で検出した円形竪穴式住居跡で、第2次調査の南側半分にあたる。直径約9mとされていたが、今回の調査では約8mの住居が復原できた。周壁溝は、幅6～10cm・深さ2～5cmを測る。支柱穴は4本柱で直径約0.2m・深さ0.2m前後を測る。内部埋め土中からは、甕・台付鉢・壺・高杯・器台片が出土した。弥生時代後期末に比定される。また、住居西半分は整地層からなっており、整地層を除去した段階で土坑状遺構を検出した。

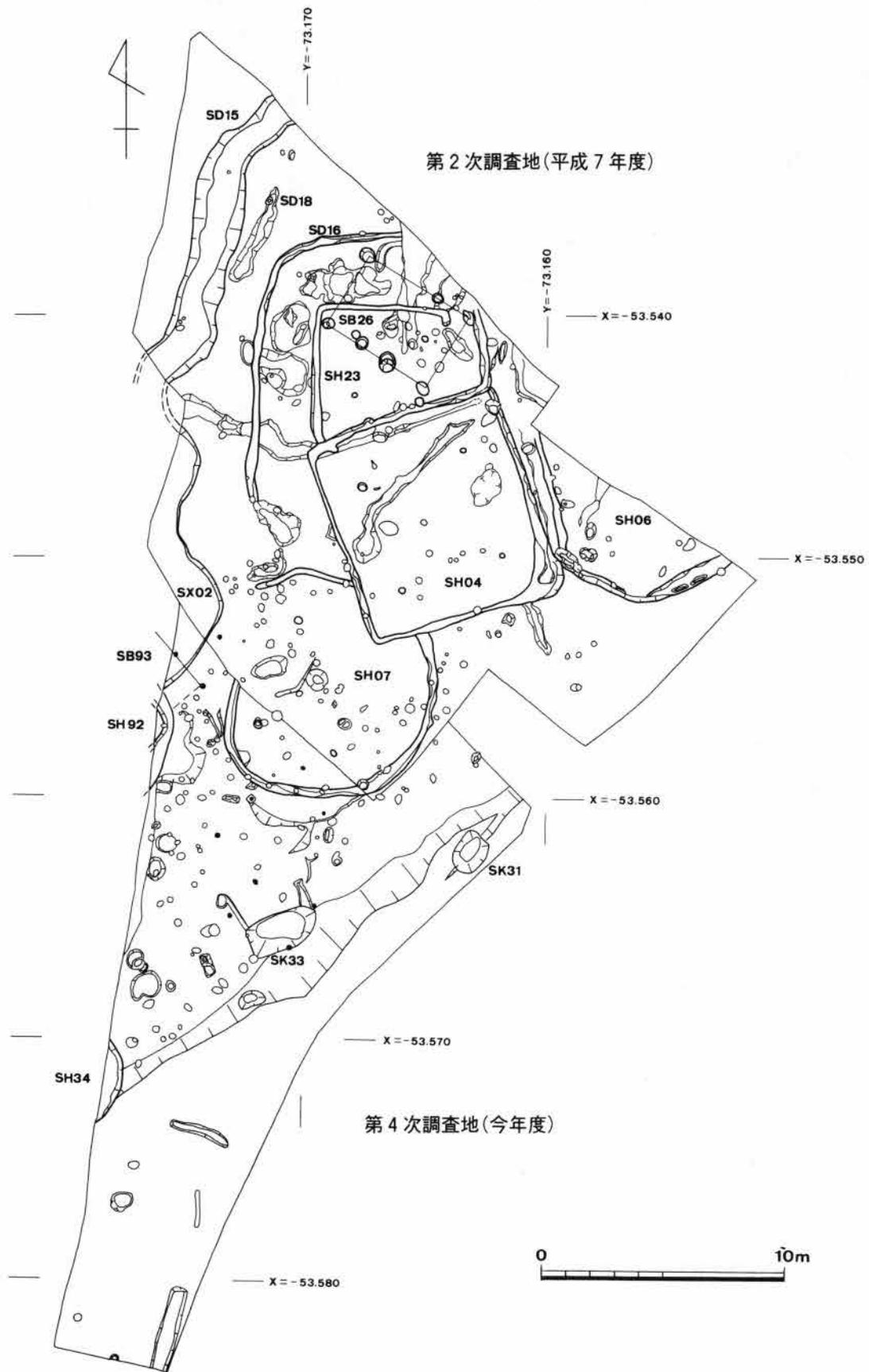
S H 34(第13図) トレンチ西壁中央付近の山裾部分で検出したもので、円形竪穴式住居跡東側の一部を確認したにすぎない。規模は不明であるが、約25cm掘り込まれている。周壁溝は確認できなかった。内部より弥生土器甕・壺・器台片が出土した。弥生時代後期末に比定される。

S H 92(第13図) トレンチ西壁北側で検出したもので、S H 07同様、円形竪穴式住居跡の一部を確認した。北側の一部は上層以降のS X 02に切られている。規模は不明であるが、約25cm掘り込まれており、内部に幅15cm・深さ20cmの周壁溝が設けられている。内部より弥生土器甕・壺・器台片が出土した。弥生時代後期末に比定される。

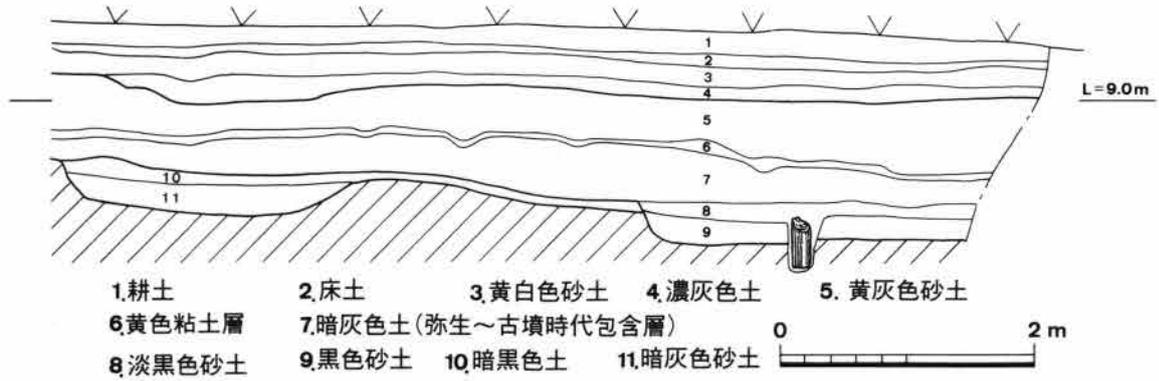
S B 93(第13図) トレンチ西壁北端で検出したもので、直径0.25m・深さ0.4mの掘形内に、直径0.15m前後・残存長0.4mほどの杉材を柱にしている。柱は2本分確認し、柱間隔は1.7mを測る。規模は不明であるが、第2次調査地でも同様のものが検出されており(1間×3間)、規模的にも近似したものが想定される。S X 02が埋まっていく過程で設けられたものであり、古墳時代前期のものと考えられる。

S K 31(第13・16図) トレンチ東側の山裾部分より検出したもので、長径1.6m・短径1.25m・深さ0.4mを測る。内部より少量の弥生土器甕・壺・高杯片・叩き石が出土した。弥生時代後期末に比定される。

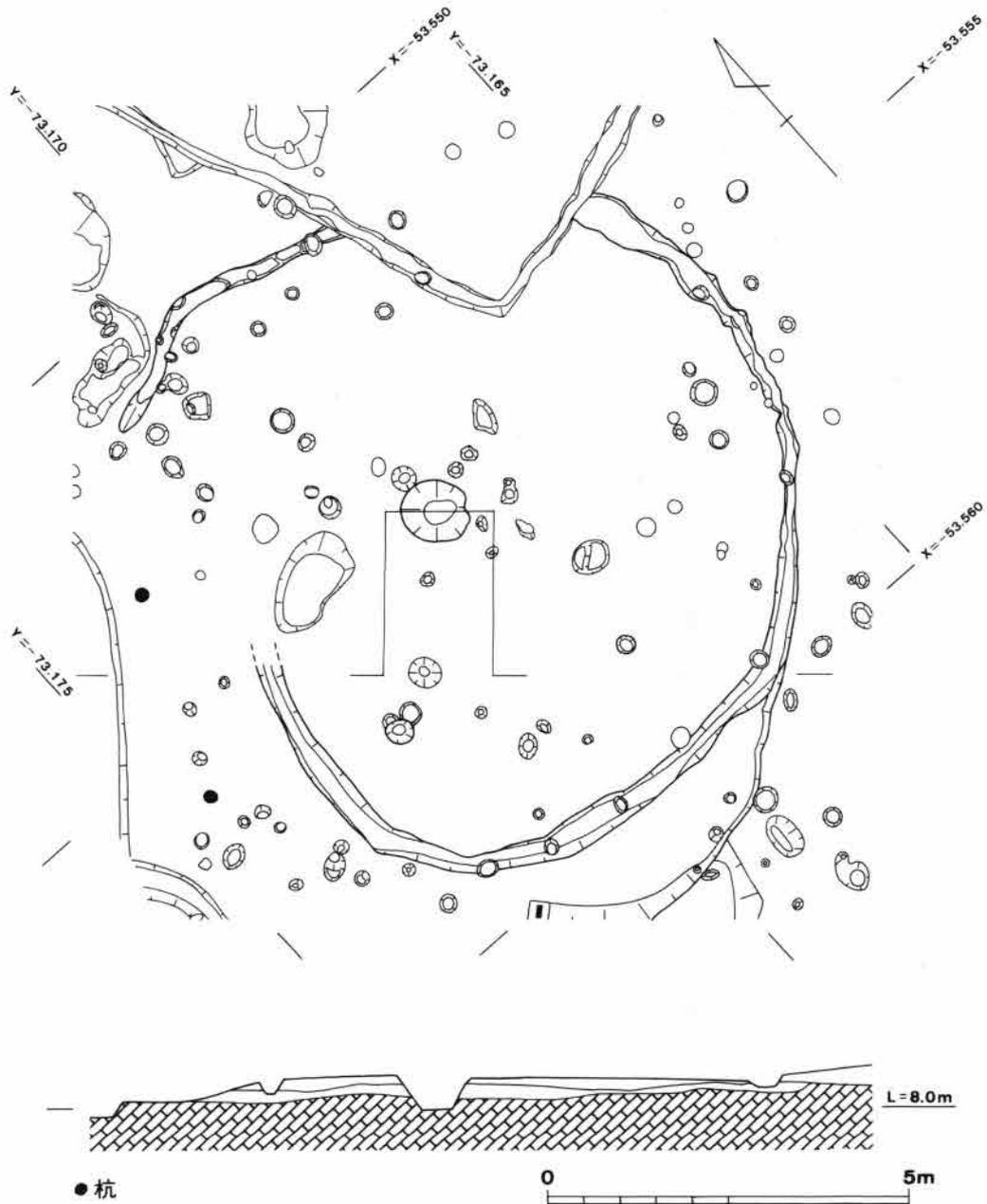
S K 33(第13図) トレンチ中央部分の山裾部分より検出したもので、長辺3.2m・短辺1.5m・



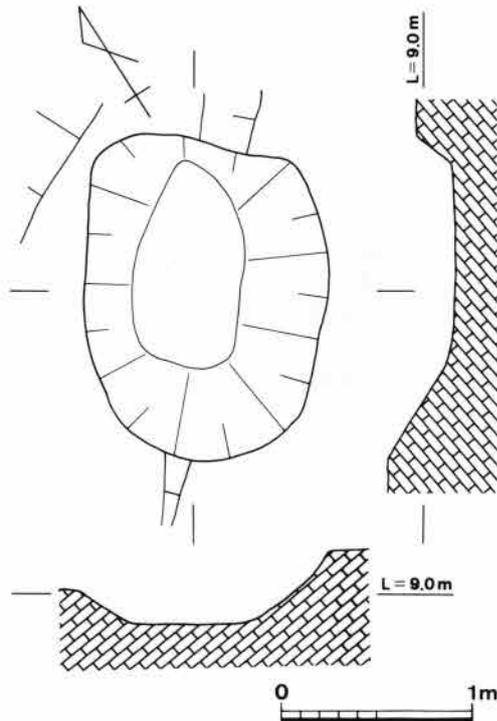
第13図 桑原口遺跡B地区遺構配置図



第14図 基本土層図



第15図 S H07実測図



第16図 S K31実測図

深さ0.3mを測り、北西側の長辺側には短辺に沿って幅0.2m・深さ0.1mの溝が付いている。内部より、弥生土器甕・壺・高杯・器台・土鍾が出土した。弥生時代後期末に比定される。

**板杭**(第13・17図) 調査地中央部で検出したもので、板材を転用し、直接打ち込むものと、掘形内に埋め込むものがある。打ち込むものについては、角材に近いものが利用され、埋め込むものについては薄い板材が用いられている。規則性は認められないが、住居周辺の山裾側に認められることや、地山が砂層であることから板杭列に板をわたし、山側からの土砂の流入を防止するための簡単な土止め柵の可能性はある。

(増田孝彦)

#### 4. 出土遺物

土器については、平成8年度に出土遺物の分類案が提示されており、今回出土した土器についてもこの分類案に沿って報告する。<sup>(注5)</sup>

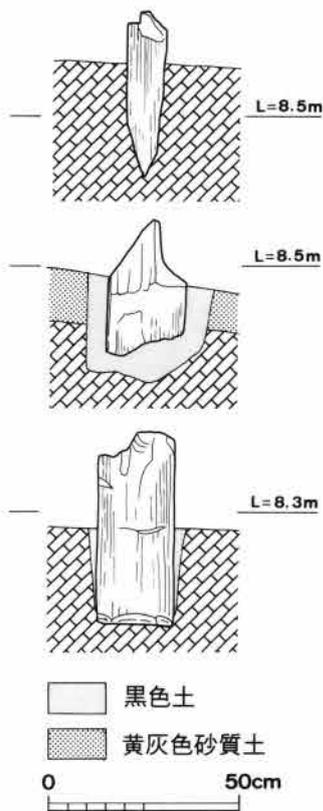
##### a. 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物の大半は、暗灰色土からのもので、細片が多く、形の判るもののみを図示した(第18図)。39は、黄白粘土層から出土したものである。

**甕A 2(6)** 平成8年度分類案では甕Aとして記載されているが、今回は口縁端部の外面に擬凹線が巡るものを甕A 1、巡らないものを甕A 2とした。わずかに内湾しながら立ち上がる体部と、「く」字形に屈曲して外上方に短く立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は面をなす。体部外面はハケ調整、内面はヘラ削りを施す。

**甕B 1(2・3)** 頸部が「く」字形に屈曲し、口縁部は短く上方に立ち上がる。口縁部外面に擬凹線文を施す。擬凹線は3条から5条巡らす。

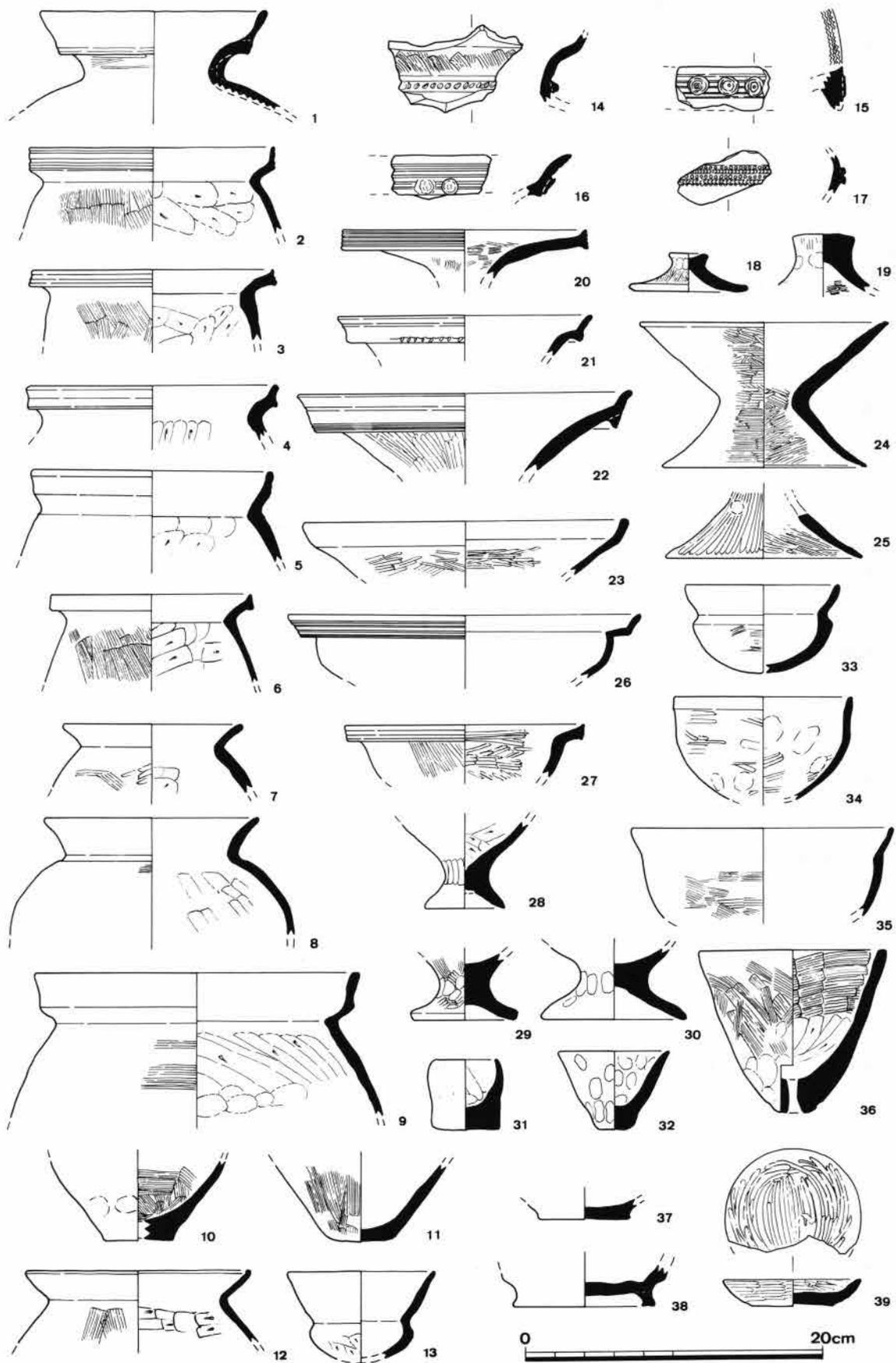
**甕B 2(4・5・9、図版第20)** 頸部が「く」字形に屈曲し、口縁部は短く上方に立ち上がる。体部外面はハケ調整、内面はヘラ削りを施し、部分的に指押さえが認められる。



第17図 板杭検出状況

**甕E(7・8)** 口縁部が「く」字形にゆるやかに外反する甕である。口縁端部は丸い。外面には部分的にはけ目残り、体部内面はヘラ削りを施す。

**甕F(12)** 布留式の甕である。体部より「く」字形に屈曲して、外上方に立ち上がり、口縁部



第18図 出土遺物実測図(1)

に至る。口縁端部内面は肥厚する。体部外面はハケ調整、内面は削りを施す。

底部(10・11) 甕の底部である。底径の小さな平坦な底部から内湾しながら、外上方に立ち上がる。内外面ハケ調整を施す。

壺B(1、図版第20) 丸みを帯びた体部から大きく屈曲する頸部に至る。口縁部は二重口縁である。頸部外面にヘラ磨きの痕跡がわずかに残る。

壺I(13) 小型丸底壺である。平成8年度概報時には、分類されていないことから、今回この器形を壺Iとした。底部外面はヘラ削りを施す。

蓋(18・19、図版第20) 18は、器高が低く「ハ」字形に大きく開く蓋である。外面にはハケ目と指押さえの痕跡が残る。19は、器高の高い蓋であるが、先端部が欠損しているため不明である。ハケ目と指押さえの痕跡が部分的に残る。

器台A(20) 大きく横方向に開く。端部は上下方に短く尖る。内外面にはハケ目が部分的に残り、端部は擬凹線が巡る。

器台B(21・22) 外上方に立ち上がり、端部は斜め上下方に大きく尖る。22の外面にはヘラミガキが施される。

器台E(24・25、図版第20) 24は鼓形器台で、山陰系のものに類似する。内外面ヘラ磨きを施す。布留式併行期のものである。

高杯A(23) 非常に残りが悪く、口縁部のみである。内外面に横方向のヘラ磨きが残る。

加飾壺破片(14~17) 14は、頸部に圧痕文突帯を巡らすもので、15・16は口縁端部外面に円形付文が施され、17は壺の体部に径約2.5mmの竹管文と半截竹管文が交互に5重巡るものである。

有孔鉢(36、図版第20) 尖り気味の底部から外上方に立ち上がり、端部は平坦である。底部に径約1cmの孔を持つ。

#### b. 遺構出土遺物

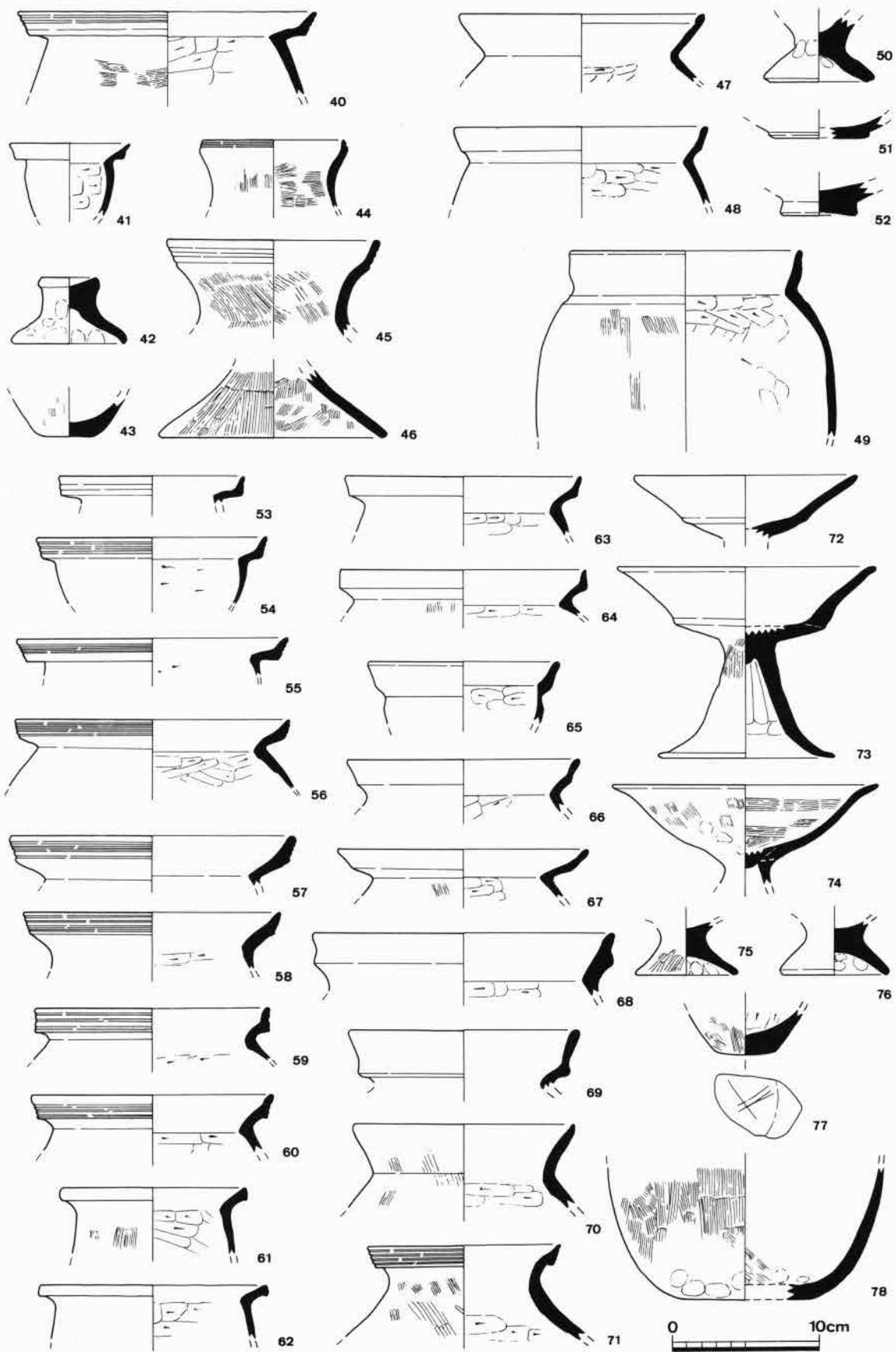
土器の大半は、流路跡(S D15・S X02)から出土しており、竪穴式住居跡(S H07)や柱穴からは少量であった。また細片が多く、土器の形状を知ることでできるものを図示した(第19図)。40~46は竪穴式住居跡(S H07)出土のもので、47~50・52は柱穴出土、51は土坑(S K31)出土、53~78は流路跡(S D15・S X02)出土のものである。

甕B1(40・53~60) 頸部が「く」字形に屈曲し、口縁部は短く上方に立ち上がる。口縁部外面に擬凹線文を施す。擬凹線は3条から5条巡らす。43・77のようなわずかな平坦面をもつ底部に続くと思われる。

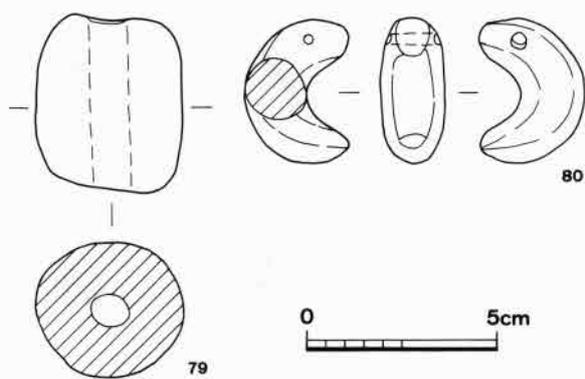
甕B2(48・49・63~68) 頸部が「く」字形に屈曲し、口縁部は短く上方に立ち上がる。口縁部外面はナデ調整する。

甕D(69) 山陰系の土器である。頸部で大きく屈曲し、二重口縁に至る。口縁部は大きく外上方に立ち上がる。口縁部下端には稜がめぐる。口縁内外面にナデ痕跡が残る。

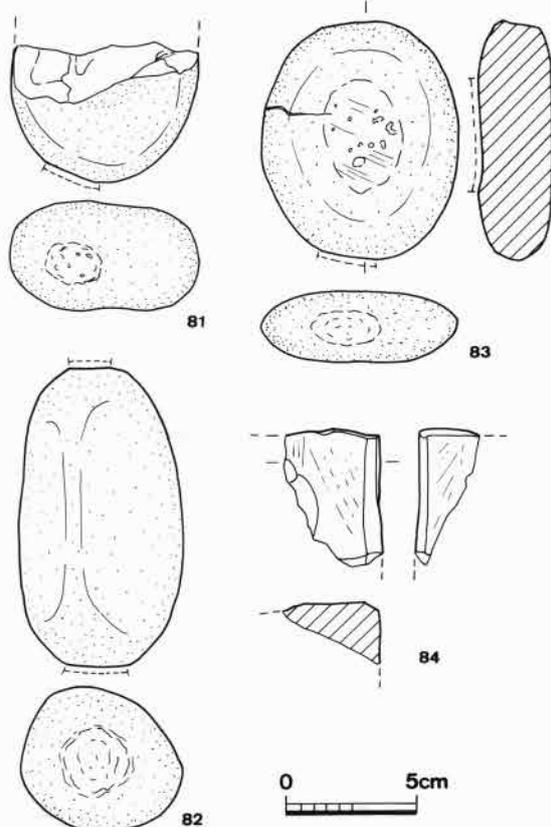
甕E(70) 口縁部が「く」字形にゆるやかに外反する甕である。外面には部分的にハケ目が残り、体部内面はヘラ削りを施す。



第19図 出土遺物実測図(2)



第20図 出土遺物実測図(3)



第21図 出土遺物実測図(4)

甕F(47) 布留式の甕である。体部より「く」字形に屈曲して、外上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部内面は肥厚する。

ミニチュア土器(41) 形態は甕B2と同じである。

壺D(44・45) 頸部は「S」字状にゆるやかに屈曲して、口縁端部は外上方ないし内上方に立ち上がる。口縁端部外面には3条の擬凹線が巡る。

壺A3(71) 頸部は「S」字状に大きく屈曲して、口縁部に至る。口縁端部は面をなし、4条の擬凹線が巡る。

高杯E(72~74、図版第20) 平成8年度の調査時には古墳時代前期の高杯が出土しておらず、今回の出土をもって高杯Eとした。72・73は布留式併行期の高杯である。杯底部縁から外反して立ち上がる。屈曲部外面には1条の稜が巡る。74は杯底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外反する。庄内式併行期のものである。

脚部(50・75・76、図版第20) 上部が欠損しているため器種については不明である。大きく「ハ」字形に広がる。短脚である。指押さえの痕跡が内外面に見られるが、部分的に外面にヘラミガキが施される。

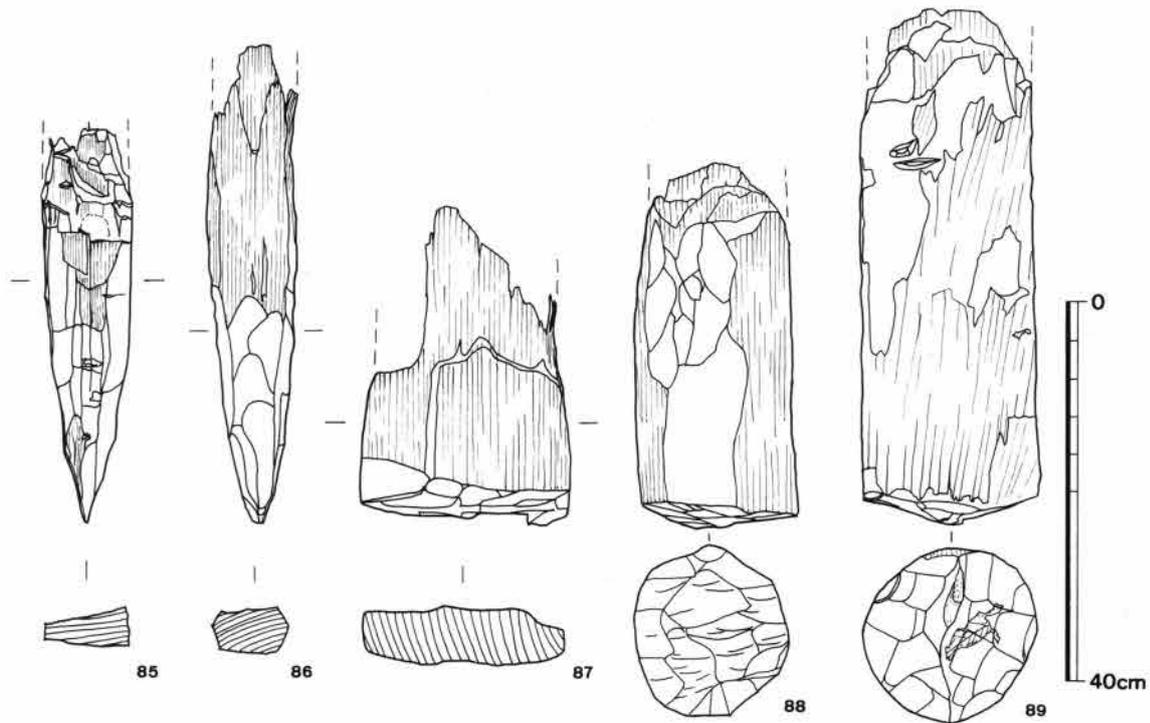
底部(43・51・52・77) 43・77は、甕の底部と思われる。外面はハケ目が残し、内面にはヘラ削り痕が残る。77の底部外面にはヘラ状工具による線刻が見られる。51は、黒色土器である。底部外面には糸切りの痕跡が残る。

蓋(42、図版第20) ほぼ完形品で、「S」字形に屈曲して端部に至る。内外面に指頭圧痕が残る。

凹石(第21図83、図版第21) 表面中央部に敲打による凹みが残る。先端部にあばた状の敲打痕も見られた。このことから凹石や敲石として使用されたものと思われる。重量は810gである。

砥石(第21図84、図版第21) 割れて一部の出土であったため、大きさについては不明である。表面には複数の線状痕が認められた。

木製品 今回の調査地から出土した木製品は、板状のものと丸太状の2種である。前者は杭として、後者は柱として機能していたものと思われる。



第22図 出土遺物(杭)実測図(5)

板状木製品(85～87、図版第21) 幅8.0cmを測り、先端を鋭角に尖らせたものと、幅19cmを測り、先端は平坦なものがある。部分的に木皮が残る。

丸太状木製品(88・89、図版第21) 径約16cmを測るもので、側面は加工しておらず、木皮が付いた状態である。底面はノミ状工具で平坦に加工されていた。

(岡崎研一)

## (2) 桑原口遺跡(C地区)試掘

### 1. 調査経過

当初、試掘対象地は約2,000m<sup>2</sup>であったが、対象地が桑原口遺跡の谷の奥まった位置にあることや、距離的にも離れているために、新たにC地区を設定して掘削を行った。水田耕作が行われている部分が大半であり、稲刈りを待って行ったことや、東側の谷上流側にも遺物が散布する部分が広範囲に認められ、個別に5・6・10～12トレンチを設定して掘削を行ったために、調査期間は長期にわたった。

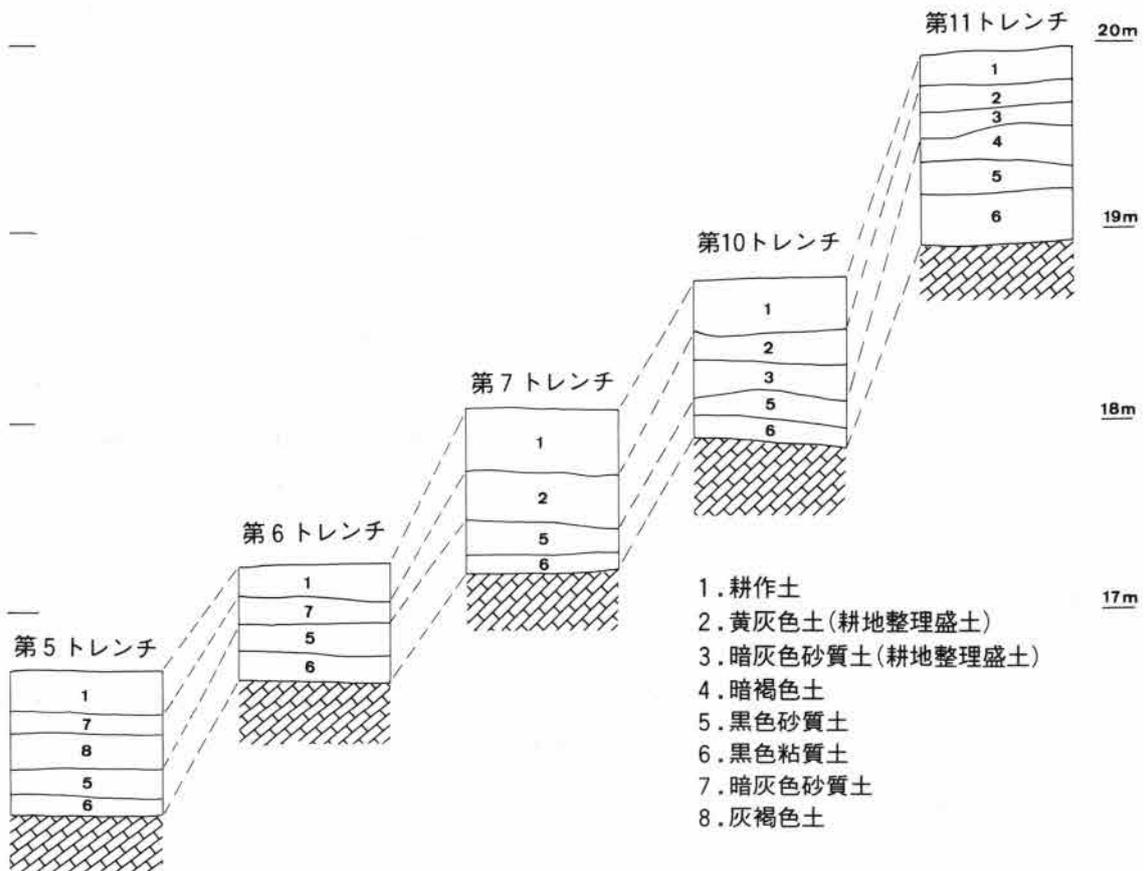
試掘調査は、平成10年7月14日～7月22日(1トレンチ)、平成10年10月13日～10月23日(2～4・8・9トレンチ)、平成10年11月9日～11月27日(5・6・8・9～12トレンチ)で実施した。重機掘削により遺構・遺物包含層の確認を行い、一部、包含層・遺構が良好な状況で検出された8トレンチは、部分的に拡張し調査を行った。調査面積は、約1,100m<sup>2</sup>である。11月27日には埋め戻し作業を完了し、全ての作業を終了した。

## 2. 調査概要

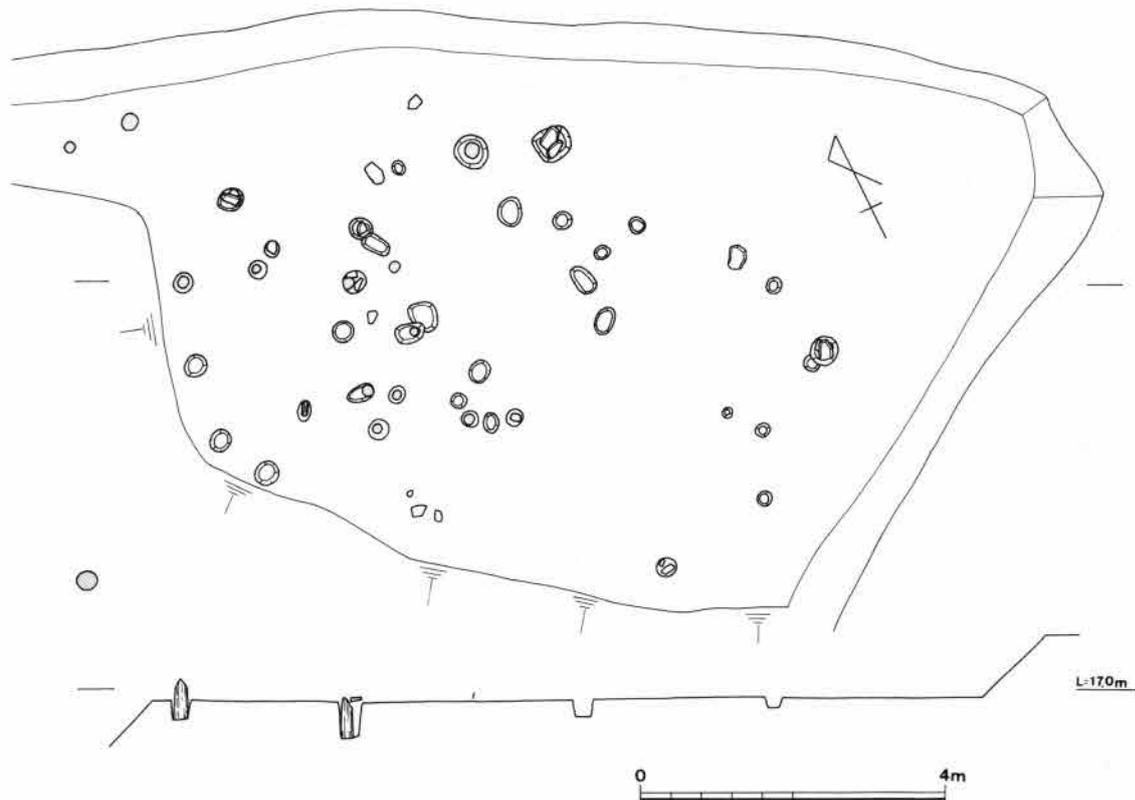
水田部に設定した1・2トレンチにおいては、宮福線敷設工事(北近畿タンゴ鉄道)に伴い耕地整理が行われたようで、表土下1.5~2m付近までは、その際に盛土された水平堆積土が確認された。表土下2m付近からは中世(13世紀)を中心とする土師皿・陶器・木製品が出土した。同2.5m付近では、上流からの流れ込みと考えられる多量の弥生時代後期の土器および木製品が出土した。流入方向から弥生土器については、谷上流部となる東側の遺物散布地の付近に弥生時代後期を中心とした遺構が存在するものと考えられる。

中世の遺物については、北東側に小さな谷地形が見られる山裾部分に8・9トレンチを設定し、掘削を行った。その結果、表土下0.8~1mにおいて中世(13世紀)を中心とする遺物とともに、溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、トレンチ南西側では厚さ約0.6mの中世遺物包含層も確認した。遺構はさらに北東側谷部にも延びており、その範囲の確認のため一部拡張を行った。

谷東側の上流部分に5~7・10~12トレンチを設けたが、5・6トレンチまでは耕地整理が行われた様子がなく、表土下0.6~0.8mで地山面である灰青色砂層となり、その間は上流からの流れ込みによる堆積層であり、弥生土器や須恵器・土師器・陶磁器・木製品が出土した。流れ込みによるため磨滅が認められる。5~7トレンチ中央部分は自然流路内であった可能性がある。11トレンチ南端部分では、自然地形の傾斜部分に打ち込まれていたと思われる杭列を検出した。その南東側においては柱穴2か所も検出されたが、造成界付近のため規模などは不明である。出土



第23図 試掘トレンチ土層柱状図



第24図 C地区8トレンチ拡張部遺構実測図

遺物から13世紀のものと考えられる。

調査地東端にあたる7・10～12トレンチでは、1・2トレンチ同様耕地整理が行われており、12トレンチでは盛土が約0.4m確認された。盛土の下層は旧表土、床土となっており、除去すると上流からの流れ込みによる堆積層が検出され、その下層が地山である灰青色砂土層となる。この流れ込みによる堆積層中からは、土師器・陶磁器片が出土した。

試掘調査によって、良好な包含層・遺構面が確認された8トレンチは、周辺部を拡張し、調査を行うことになった。遺構は、表土を除去すると水田造成時の盛土があり、その下に遺構面が広がる(上層遺構)。この遺構面の、下層は遺物包含層となっており、包含層を除去すると遺構面(下層遺構)が確認されたが、表土下約2mであることや湧水が著しく、重機掘削が困難なため、調査を一部しか行うことができなかった。上層遺構についても、湧水が著しいことや遺構面が軟弱な粘土層上にあるために重機掘削はできなかった。また、水田造成に伴い南側に広がる部分については、削平を受け遺構面の存在しない部分もある。検出された上層遺構を図示した(第24図)。

遺構として検出したのは、柱の残る柱穴11基・根石のある柱穴15基、柱の固定のため裏込めとして石材が認められる柱穴1基、何も存在しない柱穴22基である。柱は、直径15～20cmまでの自然木をそのまま利用したものと、表面を方形、多角形に削り使用されたものがある。いずれの柱穴とも建物跡を復元するには至らなかった。水田造成時に削平を受けた可能性がある。

### 3. 出土遺物

試掘調査によって出土した遺物は、弥生時代後期のものとして弥生土器・板状木製品があるが、

いずれも小片であったり遺存状況が悪いもので、図化できなかつた。中世(13世紀)を中心とする遺物には、土師器皿・黒色土器・陶器甕・石鍋・硯など木製品としては、箸・椀・円形または方形柱・板状または棒状の木製品等がある。特に木製品の遺存状況は良好である。

(1)土器(第25図、図版第18)

杯身(90、図版第18) 丸みを帯びた底部から内弯しながら立ち上がり、口縁部で屈曲し、端部は外反する。TK209型式併行期のものと思われる。

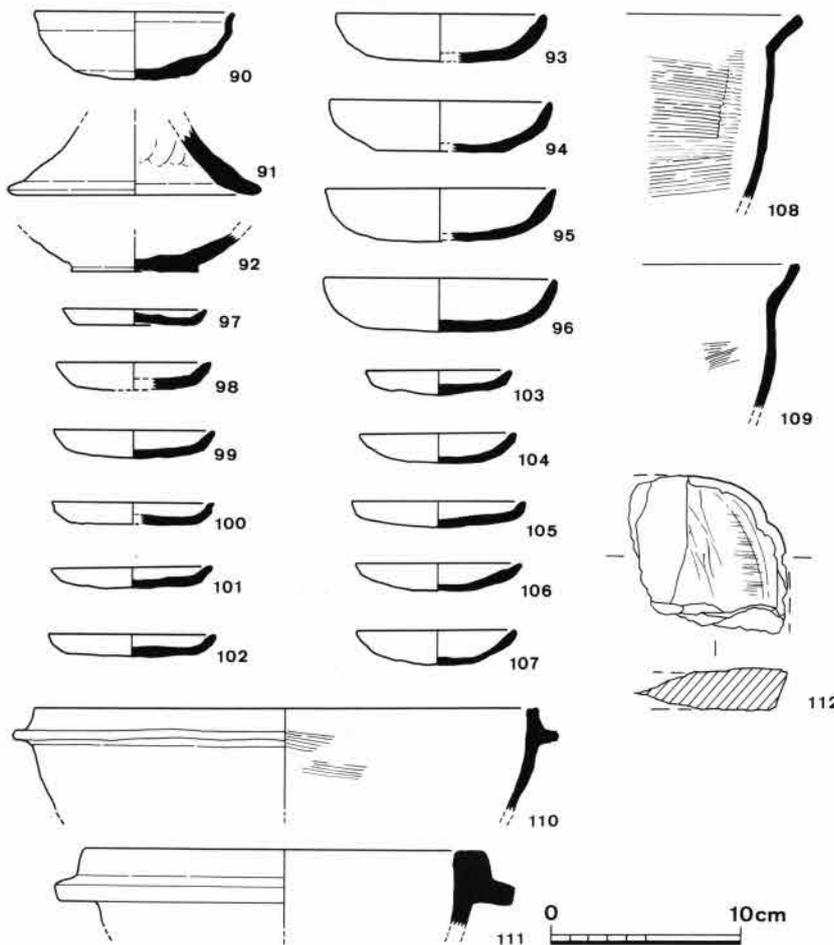
高杯(91) 土師器で磨滅していたため、手法は明確でない。端部は丸く、全体に肉厚である。

椀(92) 黒色土器で、底部外面に糸切り痕が残る。

土師器皿(93~107、図版第18) 口径の大きなもの(93~96)と、口径の小さいもの(97~107)に分けられる。口径の小さい皿は、底部が平坦で屈曲して短く立ち上がり口縁部となるもの(97~102)と、底部から口縁部にかけて丸みを帯びたもの(103~107)に分けることができた。形態から、13世紀のものと思われる。

羽釜(110・111) 肉厚のもの、薄手のものがある。鏝は横方向を向くものと、やや下方を向くものがある。64の内面にはハケ目がわずかに見られた。

硯(112、図版第18)



第25図 出土遺物実測図(6)

石製の硯である。非常に残りが悪く、全容は不明である。

(2)木製品(第26図)

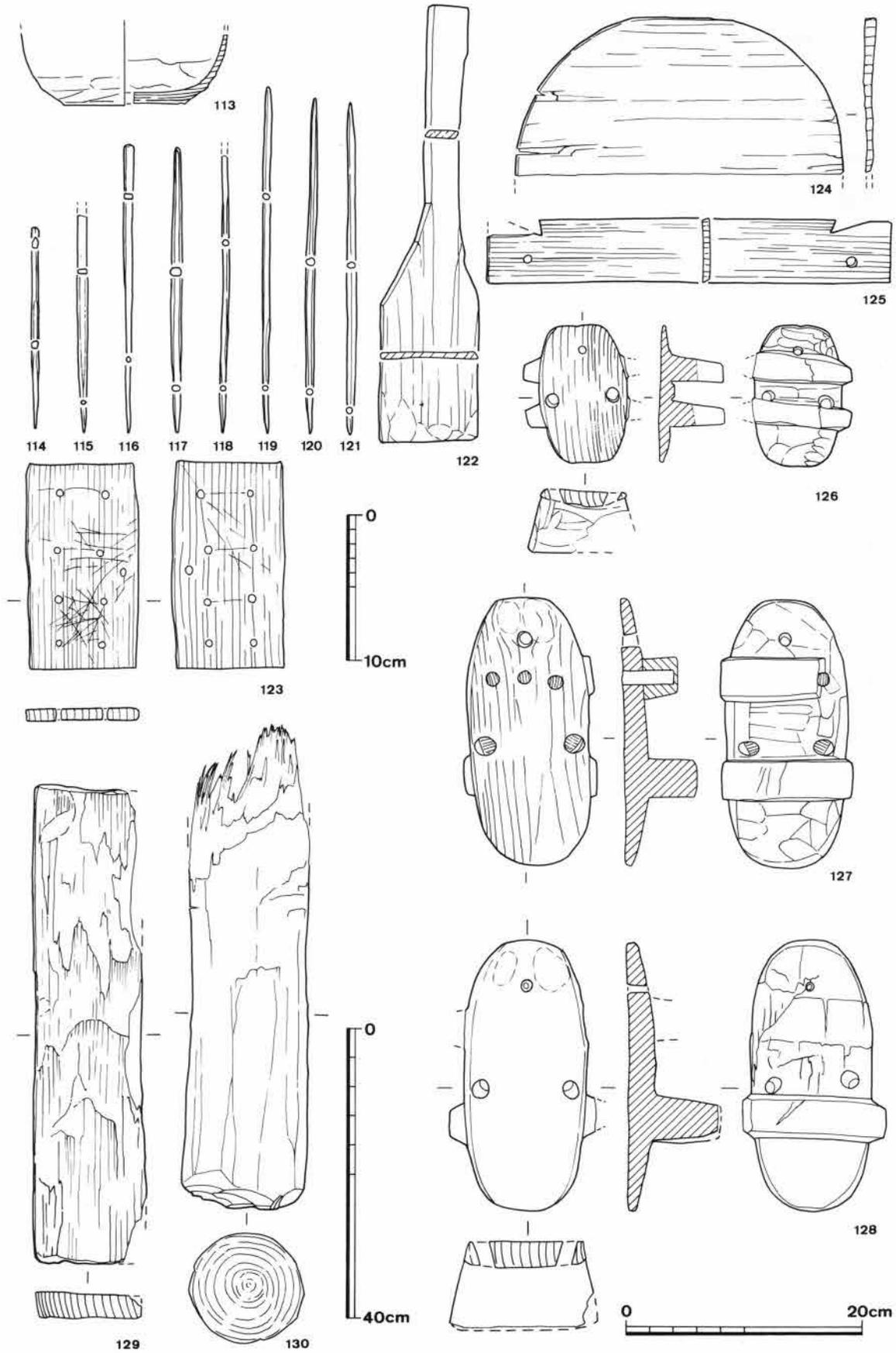
椀(113、図版第18)

漆塗りの椀である。平坦な底部から内弯しながら立ち上がる。口縁部は欠損している。内面に漆が良好に残り、外面には加工痕が残る。

棒状木製品(114~121)

いずれも箸である。片側を加工して尖らしたもの(114~117)と、両側を尖らしたもの(118~121)がある。前者は、断面が長方形をなし、後者は丸い。

杓文字状木製品(122、図版第18) 加工途中で



第26図 出土遺物実測図(7)

放棄され、未製品である。一枚の板材を加工して杓文字状にしている。

不明木製品(123・125、図版第18) 123は、一枚の板に径3～5mmの穴を設けたものである。穴は二列に配されていた。穴の周囲には細い傷が数多く見られた。125は、板材の上部二か所に切り込みを入れ、径約5mmの穴を2か所に設けたものである。いずれも、用途は不明である。

曲物(124、図版第18) 曲物の底板の部分で、底板の径から曲物の内径は27cmである。

下駄(126～128、図版第19) 下駄の台部は楕円形で、歯の形態は銀杏歯である。127の前歯のみ差歯しており、差歯のほぞが台部の表面に見られる。126・128は鼻緒を装置するための眼が三穴見られ、128においては使用された磨滅痕跡が前部の一穴である前壺両側に見られた。127は、前壺の一穴のみ開いていたが、残り二穴の眼は塞がれており、下駄の装着方法が他のものと異なると考えられる。

柱(129・130) 柱は多く出土したが、ここでは板状に加工したものと真っ直ぐな自然木を利用して柱とした2点を載せた。130は、樹皮が部分的に見られた。

#### 4. ま と め

桑原口遺跡は、大手川右岸の台地上に営まれた集落遺跡である。試掘調査の結果や周辺を踏査したところ、B地区東側丘陵斜面やC地区東側の谷奥方向からも遺物が流入していることから、これまでに考えられていた遺跡の広がりよりもかなり大きくなることが明らかとなった。C地区での集落が形成されていた場所としては、北側丘陵裾部および造成外となる谷中央部の微高地部分が考えられ、東側山裾部分も試掘の結果では、集落地として想定されるが、過去に土砂採集されているため、遺構が残存する可能性は薄いと思われる。集落が形成されていた時期は、弥生時代後期を中心に中世まで遺跡が存在することが判明した。

B地区では、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴式住居跡や溝を検出し、多くの遺物が出土した。また、弥生時代中期に遡る資料も細片であるが確認されることから、調査地周辺に遺構が存在するものと考えられる。

C地区においては中世の掘立柱建物跡や多くの木製品が出土した。

これらの資料は、過去3次にわたる調査成果と合わせ、この地域における集落の変遷、土器の編年を研究する上で重要な資料となった。

(増田孝彦・岡崎研一)

### (3) 今 福 古 墳 群

#### 1. 調 査 経 過

今福古墳群は、京都府宮津市字今福小字梶谷に所在し、大手川右岸の標高77～81mの丘陵上に位置する。<sup>(注6)</sup>今福古墳群は、当初9基からなる古墳群であったが、工事に先立つ京都府教育委員会および宮津市教育委員会の分布調査により、新たに4基確認されたもので、総数13基からなる古

墳群である。調査の対象となったのは、新たに確認された10～13号墳である。調査は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影、1/100地形測量図作成後、平成10年5月11日～同年7月30日の期間で実施した。調査面積は約430m<sup>2</sup>である。

調査地は、平成8年度に今福北城跡として調査が実施され、城跡として認められなかった丘陵と同丘陵に位置する。丘陵側面は裾部より稜線上まで段々畑として開墾された痕跡が残っており、近代まで畑作地として利用されていたことが確認されている。

## 2. 調査概要

樹木伐採・地形測量が終了した時点では、10・11号墳が最も古墳らしい形態をなしていたが、丘陵側面に段々畑が存在することから、まず尾根稜線上に認められる古墳状隆起が古墳であるかどうか確認するため、古墳状隆起中央部分を縦貫する尾根に並行したトレンチと、各古墳でそれに直交する十字トレンチを設け、主体部の検出につとめた。

掘削の結果、10・12・13号墳は、表土下約25cmで地山である花崗岩風化土を確認した。10・12・13号墳は地山面の精査を行ったが、遺構・遺物は検出されず古墳とは認識できなかった。ただ、10号墳については、平成8年度調査で、墳丘裾付近に設定された試掘トレンチから須恵器片が出土しており、古墳の可能性も残るが、明確な墳丘裾・盛土は認められない。

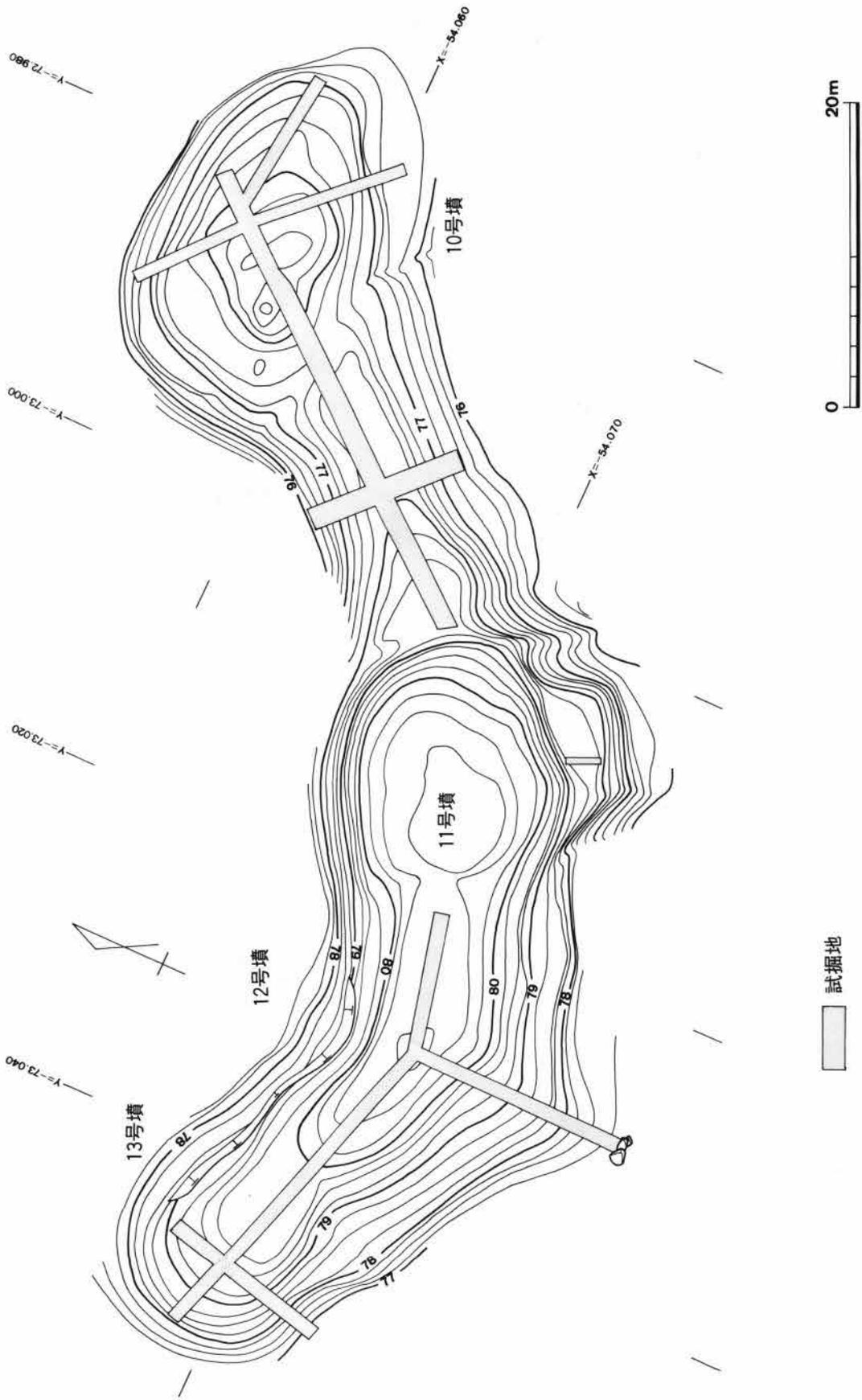
11号墳は、墳頂部の開墾土中より須恵器片が出土し、古墳であった可能性が10号墳同様高い。古墳築造後、開墾を受けるまでの間は、墳頂部は鍛冶生産が行われたようで、多くの遺物が出土した。生産された製品と考えられるものとして、刀子・釘・飾り金具・口金・針等が出土した。鍛冶炉は、開墾に伴い削平されたようで検出されなかったが、鍛冶生産が行われたことを裏付ける遺物が出土した。開墾された土中からは鍛冶滓が出土し、地山直上の土砂を水洗し、内容物を強力磁石により、磁着採集を行うと、鍛造剥片・粒状滓が認められた。これらの一連の鍛冶生産関連遺物の出土により、鍛冶生産が行われていた確証をつかむことができた。これらの遺物とともに、16～18世紀にかけての陶器・磁器が出土しているが、鍛冶生産が行われていた時期を明確にすることはできなかった。なお、出土鍛冶滓の金属学的調査は、(株)九州テクノロジーに委託し、付載として末尾に掲載した。

## 3. 出土遺物

遺物は、近世の陶器・磁器・土師器と鉄製品や鍛冶滓である。これら遺物の出土地別内訳は、10号墳頂部の平坦地から鍛冶滓が数点、11号墳北西側の尾根斜面から釘状の鉄製品が数点、11号墳の頂部平坦地からは第29図に示した陶器・磁器・土師器・鉄製品・鍛冶滓などが出土し、大半は11号墳ならびにその付近から出土した。

土師器(1・2、図版第21) 平坦な底部から外上方に立ち上がる皿。底部切り離しは、糸切りである。

皿(3・7、図版第21) 3は、平坦な底部から屈曲しながら口縁部となり、「へ」字形に大き



第27図 試掘トレンチ配置図

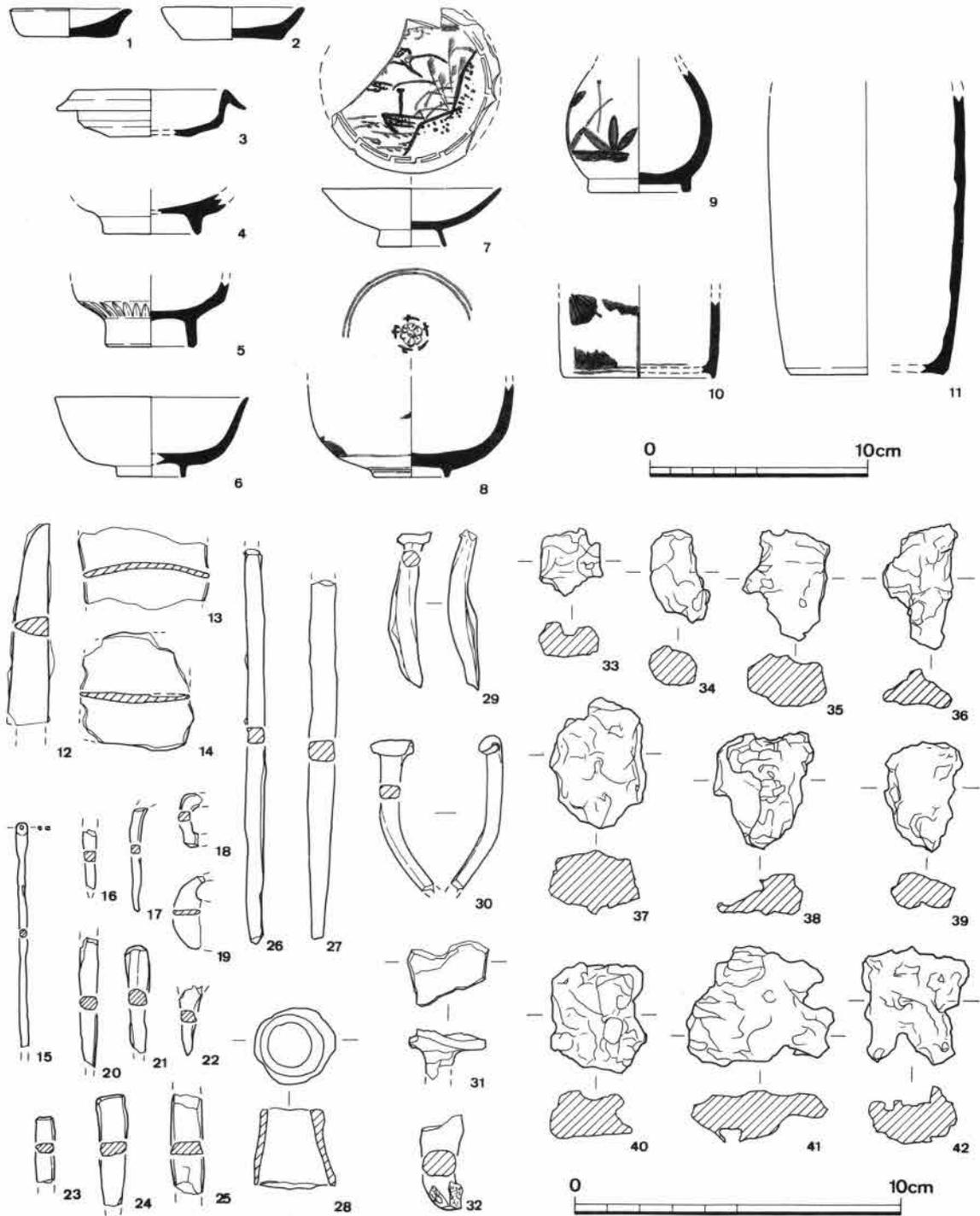


第28図 今福11号墳墳丘測量図

く屈曲して端部に至る。外面底部はヘラ削りの痕跡が明確に残る。内面は、白色の釉を施す。7は、外下方に広がる高台と、浅い皿からなる。白磁である。内面には、舟・鳥・ススキと思われる草などが青色を基調とする線で描かれている。19世紀代のものである。

椀(4～6・8、図版第21) 4・5については高台付近のみで全体の形態については不明である。4は、高台から内湾しながら立ち上がる陶器である。淡い茶色系統の釉を施す。16世紀代のものである。5は、高い高台から内湾しながら立ち上がる陶器である。外面高台付近に花卉状の文様が巡る。淡い緑色の釉を施す。18世紀代のものである。6は、高台から内湾しながら外上方に立ち上がり口縁部に至る。白磁である。8は、平坦な底部と底縁部で大きく屈曲して上方に立ち上がる体部と、径の小さな短く立ち上がる高台からなる。内外面に濃い青色を基調とした線で、文様が描かれている。

壺(9～11、図版第21) 9は、平坦な底部から内湾しながら立ち上がる白磁の壺である。体部外面に濃い緑色で木の葉状の絵付けが施されている。10は、平坦な底部と上方に真っ直ぐ立ち上がる体部からなる。白磁である。体部外面に青色を基調とした絵付けが施されている。一部割れ



第29図 出土遺物実測図(8)

1～11. 近世陶器 12～31. 鉄製品 32. ガラス製品 33～42. 鍛冶滓

た部分を直して使用したようで、焼き継ぎの痕跡が残る。11は、平坦な底部から上方に立ち上がる体部からなる陶器である。体部外面には淡黄色の釉が施されている。

刀子(12、図版第22) 刃渡り6.2cm、幅6cmを測る。

板状鉄製品(13・14、図版第22) 幅3.4～4.0cm・厚さ2mmを測る。

針状鉄製品(15、図版第22) 残存長7.0cm・径2mmで頭部には径1mmの孔を持つ。

棒状鉄製品(16・17・20～25、図版第22) 断面が円形や長方形を呈する。16は鉄鍍の一部か。

釘状鉄製品(26・27・29～31、図版第22) 11.1～12.3cmを測る長いものと、4.9cm程の短いものがある。29・30は頭部が大きく屈曲する。31の頭部は平坦で欠損し、全容は不明である。

筒形鉄製品(28、図版第22) 短径1.9cm・長径2.5cm・高さ2.5cmで、板状鉄板を曲げて作る。

ガラス製品(32、図版第22) 残存長3.0cm・断面1.0×1.8cmを測る。端部は、欠損しているが、若干外反することから、脚ではないかと考える。

鍛冶滓(33～42、図版第22) 2.0cm～4.0cm大で凹凸があり、空包が多い。炭が部分的に付着。

鍛造剥片・粒状滓 いずれも2mm前後を測る。小さいものでは1mm程の粒状滓も出土している。出土量はわずかである。

#### 4. ま と め

今福古墳群は、古墳群が位置する丘陵全体が開墾を受けており、古墳の痕跡を確認することはできなかったが、10・12号墳は立地・出土遺物から古墳であった可能性が高いと考えられる。鍛冶生産関連遺物・鉄製品は、出土遺物からすると、16～18世紀に比定されるもので、丹後地域での調査例中もっとも新しいものとなり、生産活動の移り変わりを考えていく上で重要な資料となった。また、この丘陵南側の今福集落内には、城山・カジヤ谷、個人の屋敷地を指す小字名が数多く存在することから、城との関連を想定したが裏付けられる資料は得られなかった。

(増田孝彦・岡崎研一)

注1 堤 圭三郎ほか「宮守線路線地域内遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1971)』 京都府教育委員会) 1971

注2 奥村清一郎ほか「京都縦貫自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要 (2)桑原口遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第75冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

注3 田代 弘「京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要 (1)桑原口遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

注4 調査参加者(順不同)

山崎 誠・奥田栄吉・板垣真寿美・今井賀南子・牛田雅子・丸谷はま子・山口奈美・長谷川直美・横谷正敏・成毛美好・藤田末子・土測麻紀・下山明利・新山三郎・稲垣岩蔵・戸田政男・梅本明義・岩崎忠男・田中憲治・加納 勝・佐々木治・小倉かつ子・伊藤千夏・直田正美・上杉京子・三上衛子・今井禮子・栗野敬子・松田富士子・細見妙子・佐々木孝美・丸谷はま子・松下道子・森川敦子

注5 注3に同じ

注6 田代 弘「京都縦貫自動車道関係遺跡平成8年度発掘調査概要 (2)今福北城跡」(『京都府遺跡調査概報』第82冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

## 今福古墳群出土鍛冶滓の金属学的調査

大澤 正己・鈴木 瑞穂

宮津市字今福に所在する11号墳の削平された墳丘から、鍛造剥片を伴って、小型鉄滓が約30点程度出土した。その内の3点を調査した。

### 1. 調査方法

- (1) 供試材 Table. 1 に試料の履歴と調査項目を示す。  
(2) 調査項目 ①肉眼観察、②顕微鏡組織、③ビッカース断面硬度、④化学組成分析

### 2. 調査結果

#### (1) IMF-1：含鉄椀形滓

- ①肉眼観察：平面が不整三角形を呈し、含鉄で鍛冶炉の炉底に堆積した椀形鍛冶滓の可能性を持つ。2側面が破面である。錆化により亀裂発生部分は赤黒色で周辺は黄褐色であった。
- ②顕微鏡組織：Photo. 1の①～⑨に示す。①は鉄滓部分の鉱物組成である。白色粒状結晶のヴスタイト(Wüstite:  $\text{FeO}$ )が錆化鉄ゲーサイト(Goethite:  $\alpha\text{-FeO}\cdot\text{OH}$ )に囲まれて晶出する。また、②・③は鉄滓外皮側に付着した鍛造剥片である。③に鍛造剥片の皮膜構成を示している。外層は微厚白色皮膜のヘマタイト(Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )その内側の淡灰色は中間層マグネタイト(Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、そして主膜を形成する内層ヴスタイトが凝集状態で認められる。鍛打作業の後半段階で派生する剥片である。その様な剥片が数多く群れているのが②である。この鍛造剥片が検出された事は、この含鉄鍛冶滓の近傍で鍛打作業の鍛冶操作があったことを間接的に証明する。④の4粒の茶褐色粒状遺物が鉄中の非金属介在物で硫化マンガン(MnS)系であろう。
- ⑤～⑨は金属鉄のナイトル腐食(5%硝酸アルコール液)で現われた組織を示す。⑤の左側は表層側で、白色針状結晶のフェライトと黒色地の炭化物を晶出した斑模様を呈する部分は、脱炭を受けつつ、保温に曝された過熱組織(Over heated structure)であり、その右側の白黒層状部分はパーライト部分の共析鋼である。全面パーライトが共析鋼で、⑤左側が、まさにそれである。また、0.77%以上の炭素含有量の鋼は初析セメンタイトを析出した過共析鋼であって、⑥・⑦が相当する組織である。椀形鍛冶滓中に落下した鍛冶鉄は0.77%以上の炭素含有量の鋼であって、高炭素鋼の硬鋼が使用されている。刃金の用途が考えられて鋭利な刃物の製作鍛冶が想定された。
- ③ビッカース断面硬度：Photo. 1の⑧に脱炭を受けたパーライトとフェライト(Pearlite and Ferrite)部分の硬度測定の際の圧痕を示す。白い部分はフェライト、黒または層状はパーライトである。硬度値は軟質の115Hvであった。⑨は全面パーライトが析出して、微細な白色初析セメンタイトが網目状に走る過共析鋼部分が313Hvである。組織に見合った値であった。
- ④化学組成分析：Table. 2に示す。含鉄滓であり、鉄分多く滓分は少ない成分系である。全鉄分(total Fe)は69.49%に対して金属鉄(Metallic Fe)が32.84%、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )13.91% 錆化鉄含みで酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )が多く36.94%の割合であった。滓としてのガラス質成分

( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )は少なく6.93%で、この内の塩基性成分( $\text{CaO} + \text{MgO}$ )も低減されて0.16%留まりである。また、砂鉄特有成分とも言える二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は0.07%、バナジウム(V)0.004%は低めで、かつ有害元素の硫黄(S)0.06%、五酸化燐( $\text{P}_2\text{O}_5$ )0.10%なども少ない。しかし、鉄中に多く固溶する銅(Cu)が異常に高く0.52%であった。

### (2) IMF-2：小型椀形鍛冶滓

- ①肉眼観察：平面が不整楕円形で、短軸が4 cm前後の小型扁平椀形鍛冶滓である。長軸片側面に僅かの破面をもつが、完形品に近い滓で、35 gを測る。色調は黒褐色を基調にして白色土や黄褐色酸化土砂に覆われる。表面は小さい凹凸を有するが滑らか肌であった。
- ②顕微鏡組織：Photo. 2の①～⑤に示す。該品も表層に3層分離型の鍛造剥片を付着していた。それを①・②に示す。鉱物組成は④・⑤に見られる白色粒状結晶のヴスタイトと淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト(Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。この晶癖は鉄素材の折り返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。
- ③ピッカース断面硬度：Photo. 2の③に白色粒状結晶の硬度測定<sup>(注1)</sup>の圧痕を示す。硬度値は455Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hv<sup>(注1)</sup>であって、この範囲内に収まるので、ヴスタイトと同定される。
- ④化学組成分析：Table. 2に示す。鍛冶滓としての鉄分の高めを保って、ガラス分の少ない滓である。全鉄分(total Fe)は58.96%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.41%、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )57.83%、酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )19.44%の割合である。ガラス質成分は、鍛冶滓としては少な目の18.82%で、このうちに塩基性成分( $\text{CaO} + \text{MgO}$ )0.95%を含む。これも少ない。砂鉄特有成分の二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )0.16%、バナジウム(V)0.005%は磁鉄鉱系の値としては過不足のない値である。酸化マンガン( $\text{MnO}$ )は0.06%と少なく、銅(Cu)は0.056%と高い。含銅磁鉄鉱由来鉄素材の鍛錬鍛冶滓に想定される。

### (3) IMF-3：小型椀形鍛冶滓

- ①肉眼観察：平面は不整形形状の小型扁平椀形鍛冶滓である。破面はなく完形品。表面は前述した2点に比べて荒れ肌で木炭痕が見られ、側面がより顕著である。重量は軽質で赤熱鉄素材の酸化防止の粘土汁塗布の影響が現われたのであろう。該品は27 gを測る。
- ②顕微鏡組織：Photo. 2の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトとその粒内微小析出物のヘーシナイト(Hercynite： $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ )、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。
- ③ピッカース断面硬度：Photo. 2の⑥に白色粒状結晶の硬度測定<sup>(注1)</sup>の圧痕を示す。硬度値は543Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の450～500Hv、マグネタイト(Magnetite： $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )の500～600Hvに収まっている。粒状結晶でもマグネタイトの存在もある。混在組成であろう。
- ④化学組成分析：Table. 2に示す。ガラス分が多く、鉄分が若干低め傾向の成分系となっている。粘土汁の影響をもつ滓であろう。全鉄分(total Fe)は48.01%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.20%、酸化第1鉄( $\text{FeO}$ )34.84%、酸化第2鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )29.64%の割合である。ガラス質成分は28.32%で、このうちに塩基性成分( $\text{CaO} + \text{MgO}$ )1.58%と幾分上昇する。二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )0.18%、バナジウム(V)0.006%は前述IMF-2鍛冶滓と大差なく、酸化マ

ンガン(MnO)も0.09%と僅かに高めとなるも同系成分である。また、銅(Cu)は0.022%とガラス質成分の増加分だけ減少したが、これも見かけ上の変化であって、同系鉄素材の排出滓と考えられる。鍛錬鍛冶滓に分類される。

### 3. ま と め

小型鉄滓は、Ⅰ)概観は直径4.5cm以下の扁平椀形鍛冶滓、Ⅱ)鉱物組成は、ヴスタイト(Wüstite:FeO)とファイヤライト(Fayalite:2FeO・SiO<sub>2</sub>)また鉄滓付着の鍛造剥片は3層分離型(内層ヴスタイト非晶質)で鍛打作業後半段階、Ⅲ)化学組成は鉄分(total Fe)が48~69%と多く、脈石成分(TiO<sub>2</sub>,V,MnO,CaO+MgO)が少なく、銅(Cu)が多い<sup>(注2)</sup>、などの結果を得た。この種の鉄滓は、純度の高い鉱石系鉄素材の折り返し曲げ鍛接で高温作業(1300°C前後)で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。以上の結果からみて、該品は古墳時代前半に属する含銅磁鉄鉱由来の鍛冶滓の可能性が考えられる。

注1 日刊工業新聞社『焼結鉄組織写真および識別法』1968

注2 大澤正己「西日本における初期鉄器製作・鉄生産に関する金相学的研究」『西日本から見た製鉄の歴史』(社会鉄鋼工学部会1998年度秋季シンポジウム論文集) 社団法人日本鉄鋼協会、1998.9.29 愛媛大学。Table. 6 参照 Cu高め傾向である。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

番号	遺物名称	計測値		調査項目							
		大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ピッカース断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	カロリー
IMF-1	含鉄椀形滓	34×27×16	28	L(●)		○	○			○	
IMF-2	小型椀形滓	36×30×18	35	—		○	○			○	
IMF-3	鍛冶滓	45×41×19	27	—		○	○			○	

Table. 2 供試材の化学組成

試料番号	種別	全鉄分	金属鉄	酸化第1鉄	酸化第2鉄	二酸化珪素	酸化アルミニウム	酸化カルシウム	酸化マグネシウム	酸化カリウム	酸化ナトリウム
		Total Fe	Metallic Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O
IMF-1	含鉄椀形滓	69.490	32.840	13.910	36.940	5.030	1.390	0.080	0.080	0.260	0.089
IMF-2	小型椀形滓	58.960	0.410	57.830	19.440	11.900	4.950	0.630	0.320	0.880	0.140
IMF-3	小型椀形滓	48.010	0.200	34.840	29.640	19.200	5.950	1.120	0.460	1.280	0.310

試料番号	酸化マンガ	二酸化チタン	酸化クロム	硫黄	五酸化燐	炭素	バナジウム	銅	造滓成分	造滓成分/ Total Fe	TiO <sub>2</sub> / Total Fe
	MnO	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	S	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	C	V	Cu			
IMF-1	0.040	0.070	0.060	0.060	0.100	1.100	0.004	0.520	6.929	0.100	0.001
IMF-2	0.060	0.160	0.030	0.040	0.140	0.260	0.005	0.056	18.820	0.319	0.003
IMF-3	0.090	0.180	0.030	0.060	0.190	0.520	0.006	0.022	28.320	0.590	0.004

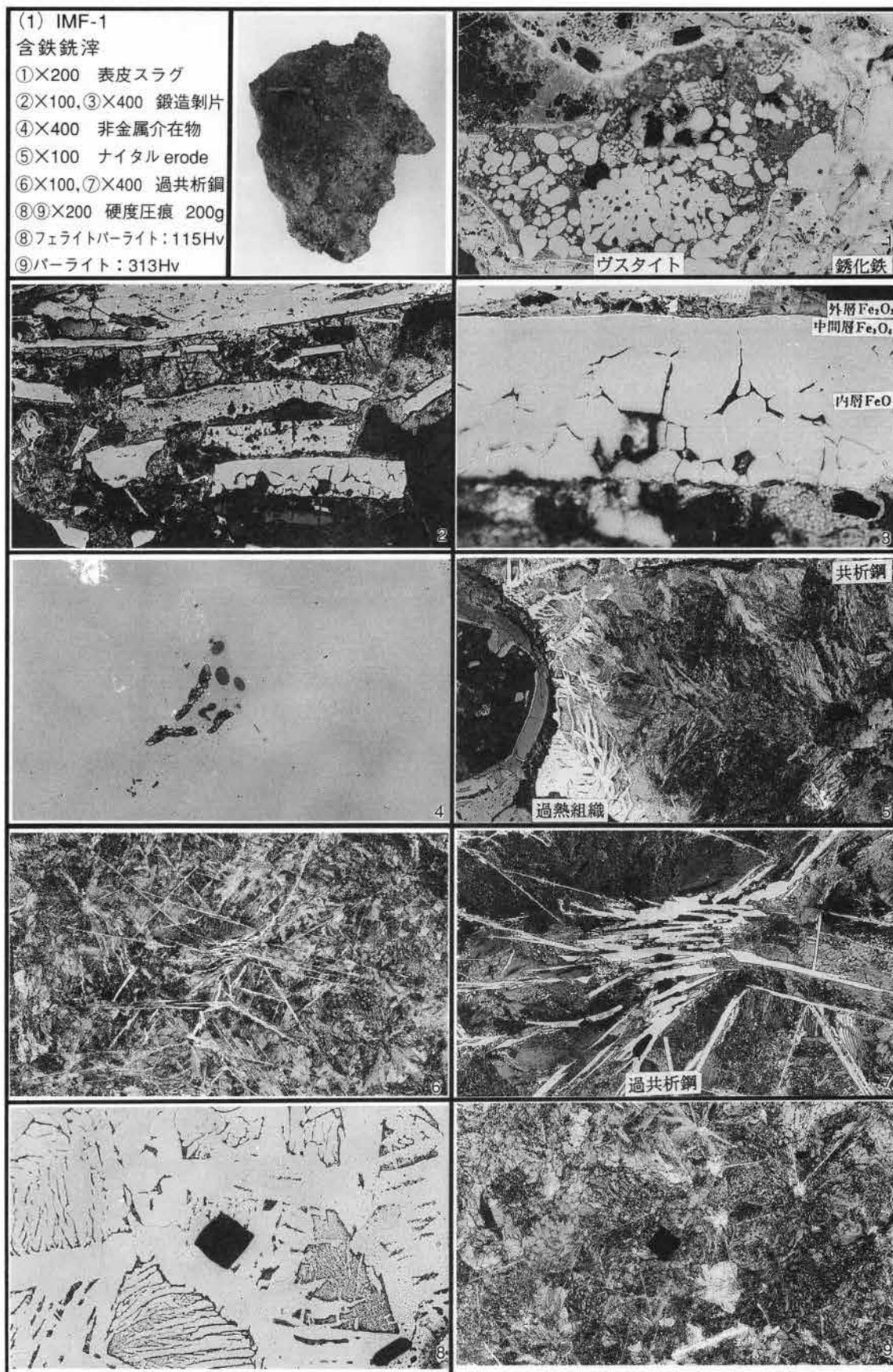


Photo. 1 含鉄銹滓の顕微鏡組織

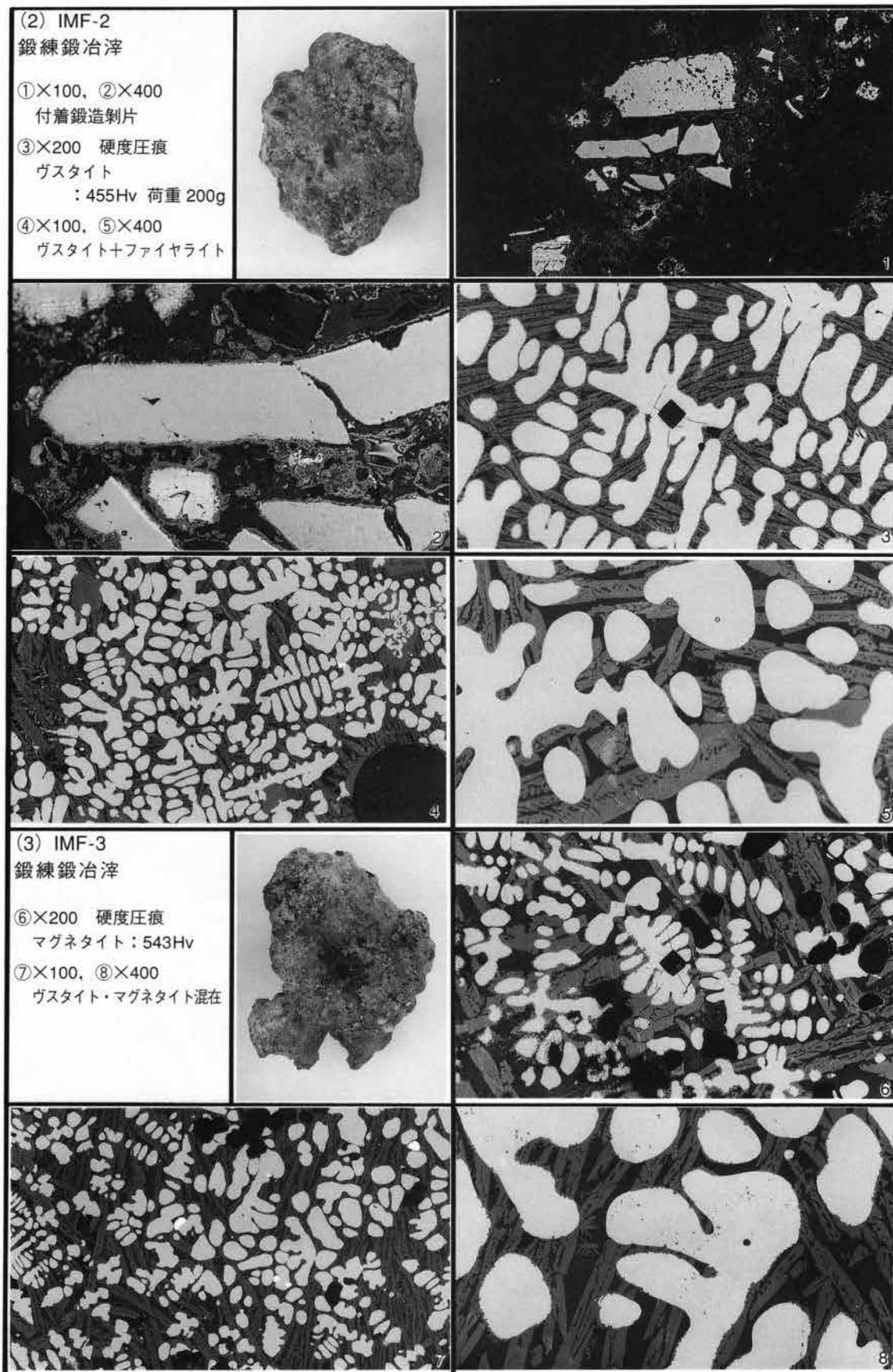
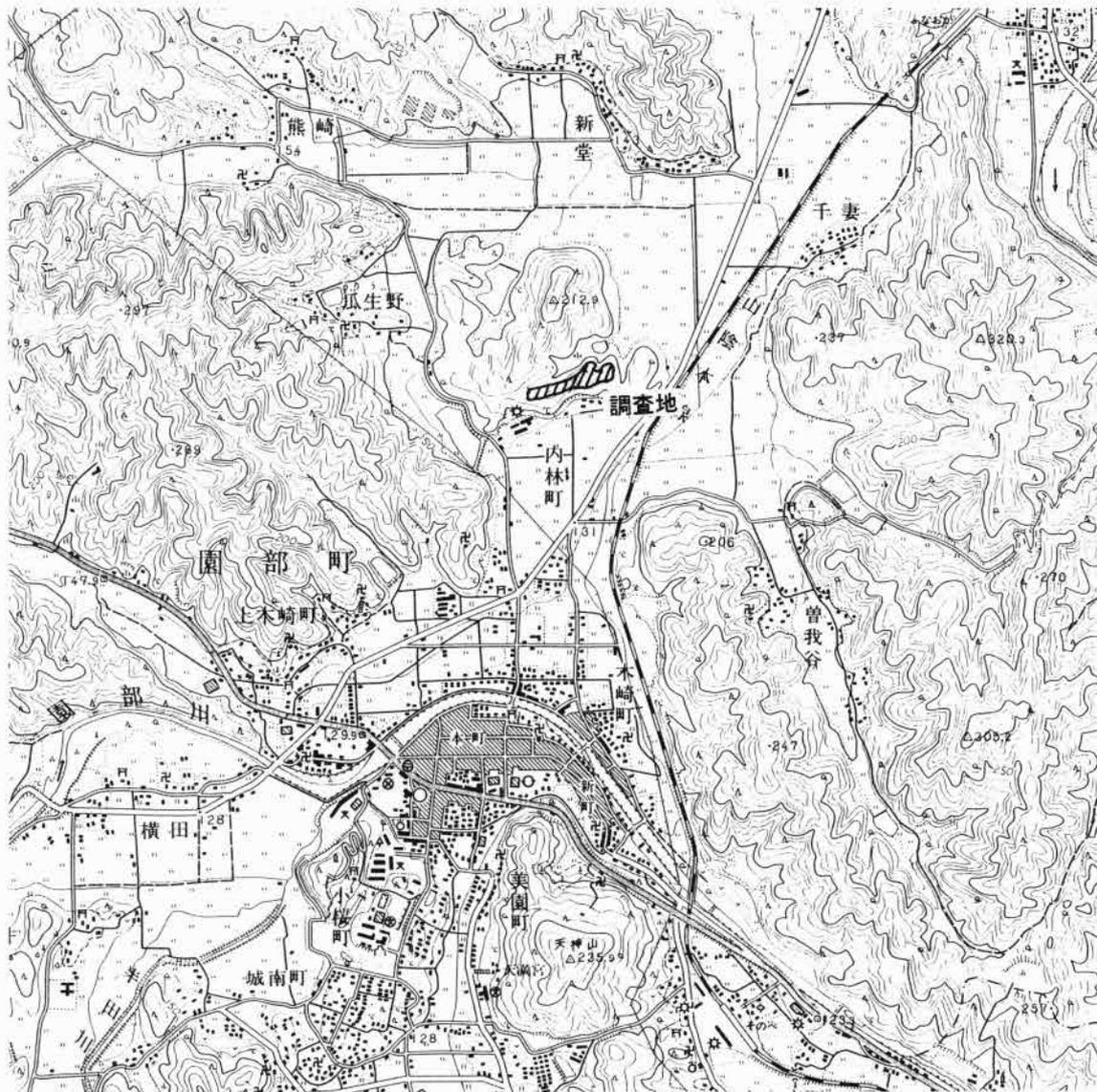


Photo. 2 含鉄鉄滓の顕微鏡組織

### 3. 今林遺跡第2次発掘調査概要

#### 1. はじめに

京都府企業局では、船井郡園部町内林町今林に開発面積23haに及ぶ新光悦村の開発を計画された。この事業対象地内には、今林古墳群・今林遺跡をはじめとして瓜生野古墳群・熊崎墓地内古墳群・八田遺跡など数多くの遺跡が包蔵されていることから、まず、京都府教育庁指導部文化財保護課によって遺跡の分布調査が行われた。新たに発見された遺跡を含め、これらの遺跡の取扱いについて、同局の開発事業課と文化財保護課が協議した結果、造成によって最も影響を受けると考えられる今林古墳群・今林遺跡のうち、遺跡の範囲が明確でない今林遺跡について、その範囲



第30図 調査地位置図(1/25,000)

を試掘調査によって確認することとなり、当調査研究センターに依頼された。

今林遺跡は、上記の標高150～170mの丘陵上に所在し、JR山陰線園部駅の北約2.2kmに位置している。同遺跡は、平成6年度に行われた今林2号墳の調査によって、古墳の周囲に集落遺跡のあることが明らかになり、「今林遺跡」と命名されたものである。

今回の調査は、当調査研究センター調査第2課第2係長辻本和美と同主任調査員戸原和人が担当し、調査の期間は、平成10年8月11日から同年10月15日までを要した。調査の面積は、今林遺跡の広がりが見込まれる約11,000㎡の範囲の中で、古墳群を外して約300㎡を試掘した。調査に係わる経費は、京都府企業局の負担による。

調査の実施にあたっては、京都府教育委員会、同企業局、同園部地方振興局、同南丹教育局、同園部土木事務所、園部町総務部、園部町教育委員会、地元自治会などの関係諸機関の協力を得た。また、調査及び報告書の作成にあたっては、地元有志の方々および学生諸氏に参加、協力していただいた。記して感謝の意としたい。



第31図 今林遺跡周辺部遺跡分布状況(1/5,000)

2. 調査の経過(第31・32図)

今林遺跡の所在する丘陵は、標高212.9mを頂部とする中央の南北に連なる主尾根と、その尾根の東西の谷を挟む2本の尾根からなる。京都府文化財保護課の踏査により、主尾根部では、山城の郭が6か所で想定されており、南には平山古墳状隆起、7基の古墳で構成されるカチ山古墳群が所在し、西尾根には、須恵器や瓦器が散布する八田遺跡・瓜生野古墳群が所在する。今林遺跡は、東の尾根に位置し、その東の先端部は京都縦貫自動車道の園部インターチェンジの建設によって2本の枝尾根が削平を受けている。今林遺跡の周辺部では、平成5年度と6年度の2回、発掘調査が行われた。

平成5年度には、今林1号墳の調査が行われた。古墳の規模は、調査によって東西約12m・南北約9mの長方形墳であることが明らかになり、墳丘の中央部では、主軸をほぼ東西に持つ、幅約1.1m・長さ約3.5mの木棺直葬の主体部を検出した。この方形墳は、主体部の墓壇上面や、墳丘裾部から庄内式期の土器が出土したことから、出現期の古墳であると判断された。また、下層から隅丸長方形の土壇墓3基や、甕棺墓1基も検出され、庄内式期の土器を出土している。

翌、平成6年度には、今林2号墳と今林遺跡の調査が行われた。同古墳は、南面する丘陵の尾根先端部に位置し、平野部との比高差約20mを測る。古墳の規模は、調査によって径約15mの円墳で、墳丘の中央部では、4基の木棺直葬の主体部を検出した。これらの主体部からは、副葬された多量の土器・鉄器・玉類が出土した。出土した遺物から、2号墳は、5世紀後半に築造され、



第32図 調査トレンチ配置図(1/2,000)

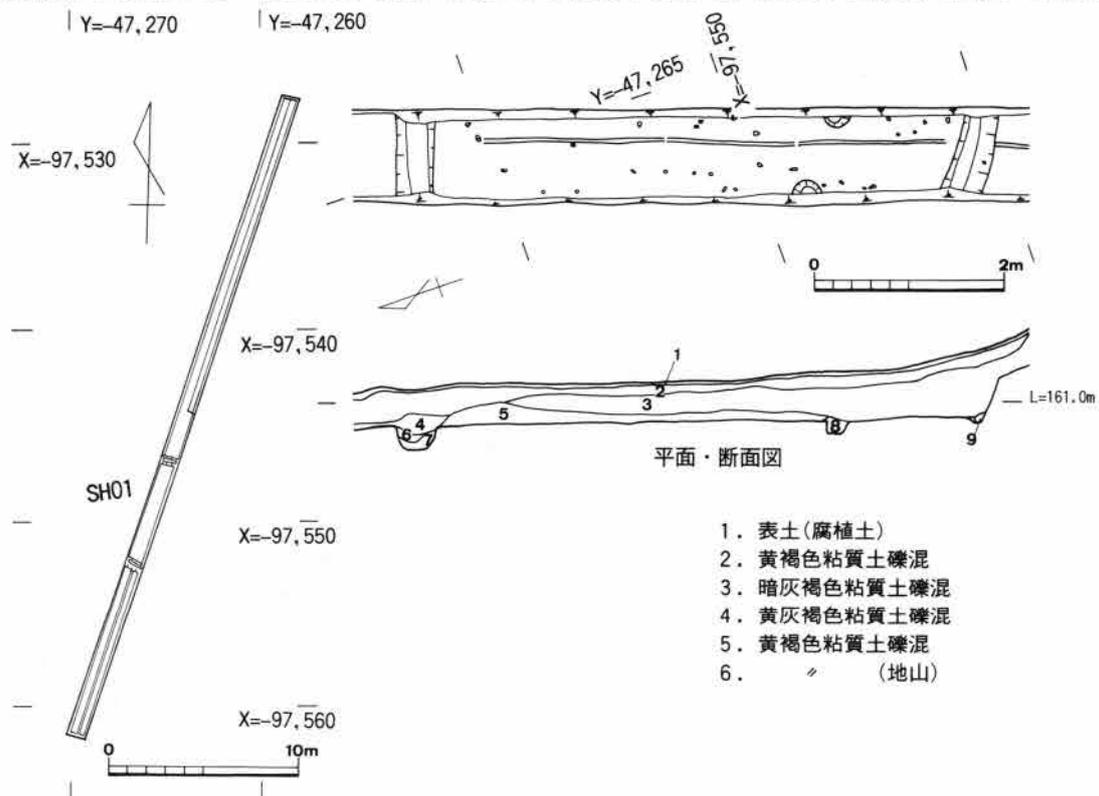
6世紀の中頃から後半にかけて追葬が行われたと考えられている。

今林遺跡の調査では、2号墳周辺の南面する斜面地で、弥生時代後期の竪穴式住居跡10基、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡1基、古墳時代中期の竪穴式住居跡1基の合計12基の住居跡や、住居などの施設のために地山を削り出してテラスを作り、山側に雨水対策のために掘られたと考えられる溝群、土坑などが多数検出されている。

この調査時の周辺部の踏査により、それまで未確認であった今林3～8号墳までの古墳が確認され、「今林古墳群」として周知された。その後の文化財保護課の遺跡分布調査によると、3号墳から5号墳までは円墳で、6号墳から8号墳は平面形が長方形を呈し、様相の違いを見せている。今林3号墳は、直径20m、墳丘の高さ2.5mで墳頂部径10mを測る中規模の円墳である。4号墳は、直径が20m、墳丘の高さ2.0mで、墳頂部径6mを測る。また5号墳は、長径25m・短径16mで、墳丘の高さ1.5mを測る楕円形を呈する古墳である。6号墳は、長方形墳で、長辺23m・短辺10mで墳丘の高さ1.5mを測る。7号墳は、6号墳より小規模な長方形墳で、長辺14m・短辺12mで墳丘の高さ1.0mを測る。8号墳は、6・7号墳が並立しているのに対し、両古墳の西方約80mに単独で築造されている。長辺16m・短辺10mで墳丘の高さ0.8mを測る長方形墳である。6～8号墳は、その墳形から1号墳に近い性格が考えられる。試掘調査は、古墳群を避けて今林遺跡の広がりが見込まれる約11,000m<sup>2</sup>の範囲の中で約300m<sup>2</sup>を調査した。

### 3. 調査の概要

調査地の標高は150～172mで、遺跡の広がりを確認するため、東尾根の主筋、主筋から北に延



第33図 第1トレンチ平面図およびSH01平面・断面図

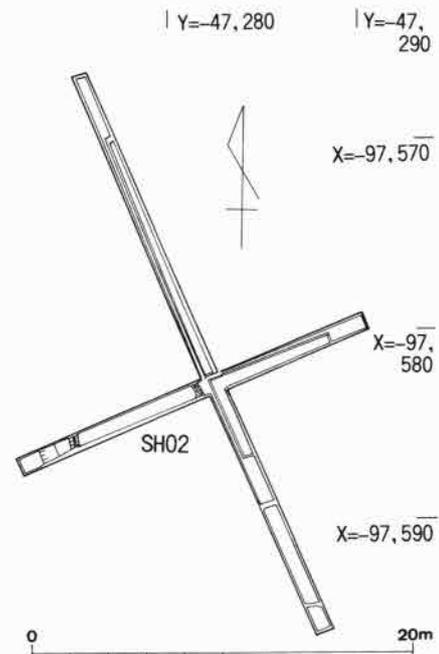
びる2本の枝尾根の各尾根筋の鞍部を中心に、幅1mのトレンチを13か所に設定した。各トレンチでは、地表下約0.5~1.5mまでの掘削を行い、遺構・遺物の有無と遺構の埋没状況、地層を確認した。試掘調査の成果は以下のとおりである。

第1トレンチ(第32・33図、図版第23-1) 丘陵の東端から3筋目の北に延びる枝尾根の鞍部に長さ36mのトレンチを設定した。

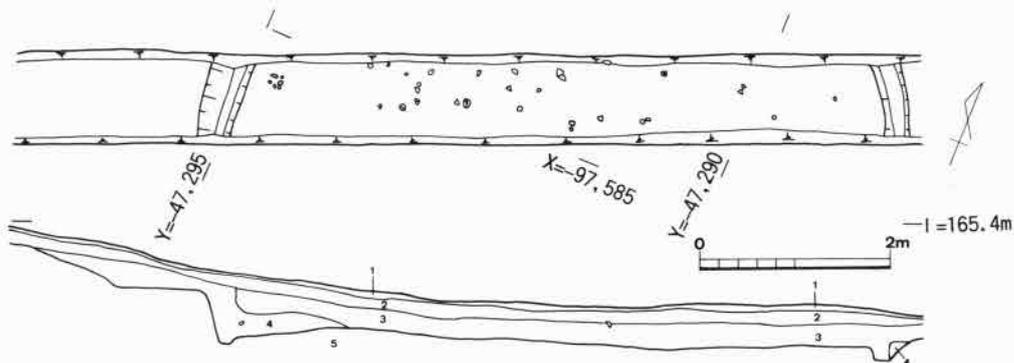
竪穴式住居跡SH01(第33図、図版第23-1) 調査地の中央付近で、地表面で観察できる円形の落ち込みがあり、この直下から検出した竪穴式住居跡である。トレンチ内での検出長は約6.4mを測り、地表面からの深さは、尾根寄りの深く掘り込まれているところで0.8mを測る。住居跡には、周壁溝が設けられており、尾根側で幅20cm・深さ6cmを測り、谷側では幅40cm・深さ20cmを測る。床面では、径約30cmの柱穴を2基検出した。住居内からは、弥生土器が床面・埋土中から出土している。このほか住居跡の南北でも、若干のテラス状の平坦面から土器の出土はあるものの、明確な遺構は検出し得なかった。

第2・3トレンチ(第34図、図版第23-2・3) 3号墳と4号墳の間に設定した十字のトレンチである。第2トレンチは、尾根筋の鞍部に並行する20m、第3トレンチは、尾根筋に直交する32mの調査区である。

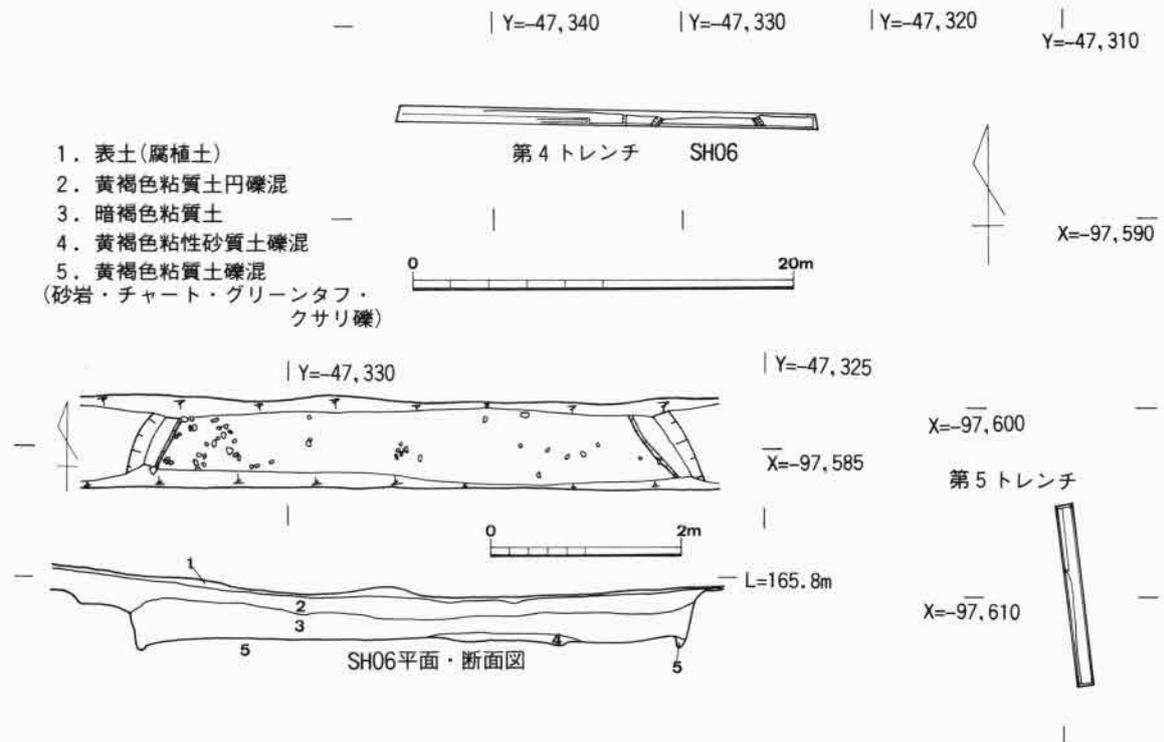
竪穴式住居跡SH02(第35図、図版第23-2) 第2トレンチの西半で検出した円形の竪穴式住居跡である。4号墳の裾部付近から二段に深く掘り込み、平坦面を確保している。トレンチ内での検出長は約7.5mを測り地表面からの深さは、4号墳寄りの深く掘り込まれているところで0.8mを測る。住居跡には、周壁溝が設けられており、尾根側で幅20cm・深さ8cmを測り、東側では幅40cm・深さ14cmを測る。住居内からは、埋土の上面で古墳時代の須恵器、中位から床面では弥生土器が出土した。第3トレンチでは、南半の南斜面でテラ



第34図 第2・3トレンチ平面図



第35図 SH02実測図



第36図 第4・5トレンチおよびSH06平面・断面図

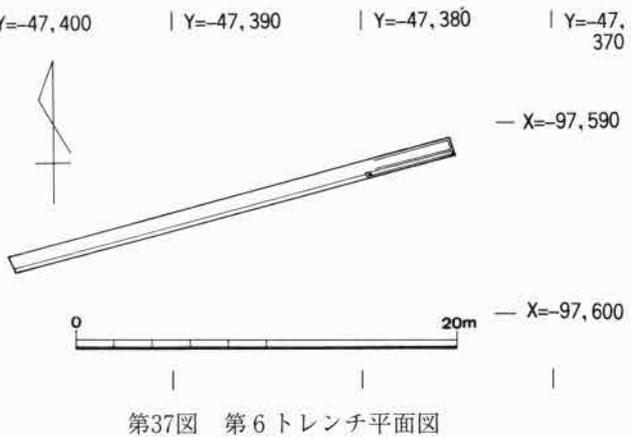
ス状の平坦面から土器が出土したものの、明確な遺構は検出し得なかった。北斜面では、遺構・遺物とも検出していない。

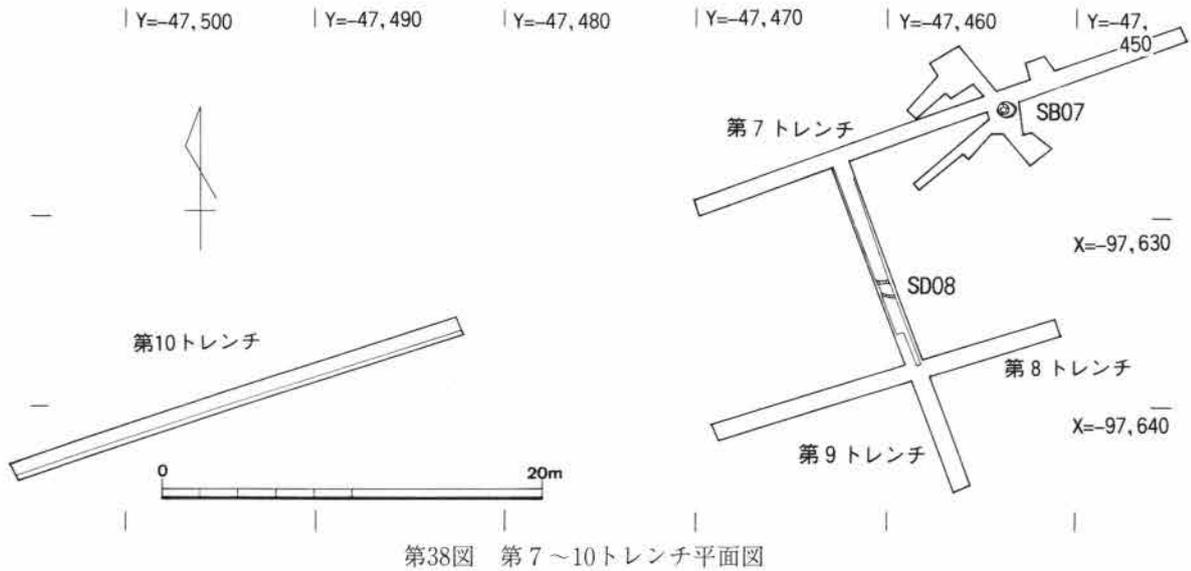
第4・5トレンチ(第32・36図、図版第24)

第4トレンチは、5号墳から4号墳に向けてなだらかに下がる斜面地に、東西方向に設定した長さ約22mを測る

調査区である。第5トレンチは、4号墳から南面してなだらかに広がる緩斜面に設けた長さ約9.8mの調査区である。

竪穴住居跡SH06(第36図、図版第24-1・2) 第4トレンチの東半で検出した円形の竪穴式住居跡である。住居跡の中心は、南面する斜面側にあり、地山を深く掘り込むことで平坦面を確保している。トレンチ内での検出長は約6.1mを測り、地表面からの深さは5号墳寄りの深く掘り込まれているところで約0.7mを測る。住居跡には、周壁溝が設けられており、幅20cm・深さ8cmを測る。住居内からは、埋土中から弥生土器が出土している。第5トレンチは、標高150~154mで、園部盆地に南面した緩斜面の広がり認められる地形に設定したもので、断ち割りによって、階段状のテラス状地形を検出した。この埋土中からは、弥生土器が出土している。また、第5トレンチと第3トレンチの間では、竪穴式住居跡SH02から南に1段下がったところで円形

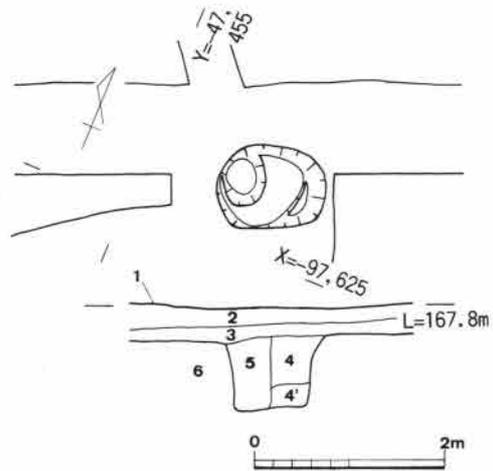




第38図 第7～10トレンチ平面図

の陥没が観察され、竪穴式住居跡の可能性がある。

**第6トレンチ**(第37図、図版第25-1) 第6トレンチは、5号墳から6号墳に向けてなだらかに下がる斜面地に、東西方向に設定した長さ約24mを測る調査区である。断ち割りによって階段状のテラス状地形を検出した。第6トレンチから、南に1段下がった標高170mのところでは、テラス状の地形が観察され、さらに南の標高162～164mでも2か所でテラス状に陥没した地形が認められ、竪穴式住居跡の可能性がある。



第39図 SB07柱穴実測図

- 1. 表土(腐植土) 2. 暗褐色粘質土
- 3. 黄褐色粘質土 4. 黄灰褐色粘質土
- 5. 黒褐色粘質土 6. 黄褐色粘質土(地山)

**第7・8・9トレンチ**(第32・38図、図版第25・26) 第7・8・9トレンチは、標高170～172mの本調査地中最も広い平面を有する地形に立地し、南面する。第7トレンチは、尾根筋の鞍部に並行する長さ約27m、第8トレンチは、南面する緩斜面上に尾根筋に並行する長さ約19m、第9トレンチは、尾根筋に直交する長さ約18.5mの調査区である。

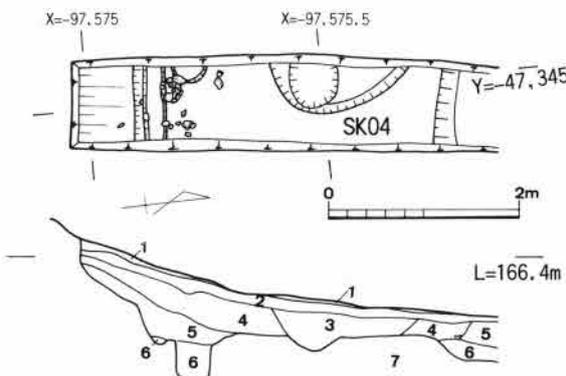
**掘立柱建物跡SB07**(第39図、図版第25-2・3) 第7トレンチの西半で検出した隅丸長方形の掘立柱建物の柱穴と考えられる。長辺1.1m・短辺0.9mで、検出面からの深さ0.7mを測る。柱の直径は0.4mを測る。柱穴内からは、弥生土器片が出土している。本試掘調査中、対になる柱穴の検出を目的にトレンチの拡張を行ったが果たせなかった。

**溝SD08**(第38図、図版第26-2) 第9トレンチの途中で検出した幅0.7m・深さ0.3mの溝である。溝の上面では古墳時代と考えられる土師器や弥生土器片が出土したが溝内からの出土遺物は無く、年代の決め手を欠く。

**第10トレンチ**(第32・38図、図版第26-3) 第7トレンチから8号墳に向けてなだらかに下がる斜面地に、東西方向に設定した長さ約24mを測る調査区である。断ち割りによって階段状のテ



第40図 第11～13トレンチ平面図



第41図 S X (H)03実測図

- 1. 表土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 黒色粘質土(炭混)
- 4. 灰褐色粘質土
- 5. 暗褐色粘質土
- 6. 黄褐色粘質土
- 7. 黄褐色粘質土(地山)

形を確認した。埋土中からは、弥生土器が出土したもの、明確な遺構は検出できなかった。

**第12トレンチ** 本調査トレンチ中で最も標高の低い地点に設けた調査地点である。

**竪穴式住居跡 S H05**(第42図、図版第27-2・3) 地表面から0.4mで地山を0.6m削り込んで平坦地を確保した住居跡を検出した。トレンチ内での検出長は約3.5mを測り、平面の形態は方形を呈すると考えられる。削り込まれた床面の両側には、溝が掘られており、幅10～15cm・深さ

ラス状地形を検出したが、明確な遺構や出土遺物は検出しなかった。

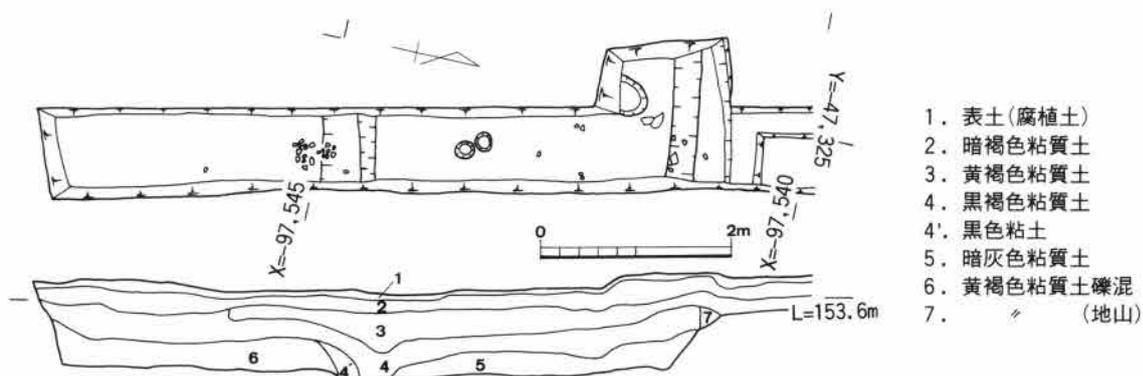
**第11・12・13トレンチ**(第40図、図版第27・28) 丘陵東端から4筋目の北に延びる枝尾根鞍部に長さ約41mの第13トレンチ、尾根東側の標高156mに長さ約16mの第11トレンチ、標高154mに長さ約15mの第12トレンチを設定した。

**竪穴式住居状遺構 S X (H)03**(第41図、図版第28-2・3) 第13トレンチの南端で検出した竪穴式住居状の遺構である。北面する斜面側に立地し、丘陵側の地山を深く掘り込むことで平坦面を確保しているが、谷側は流失していると考えられる。トレンチ内での検出長は約3.0mを測り、地表面からの深さは、深く掘り込まれているところで0.7mを測る。丘陵側には、溝が掘られており、幅20cm・深さ8cmを測る。床面では、径約36cmの柱穴を1基検出した。出土遺物は、弥生土器の壺や砥石が床面および埋土中から出土している。

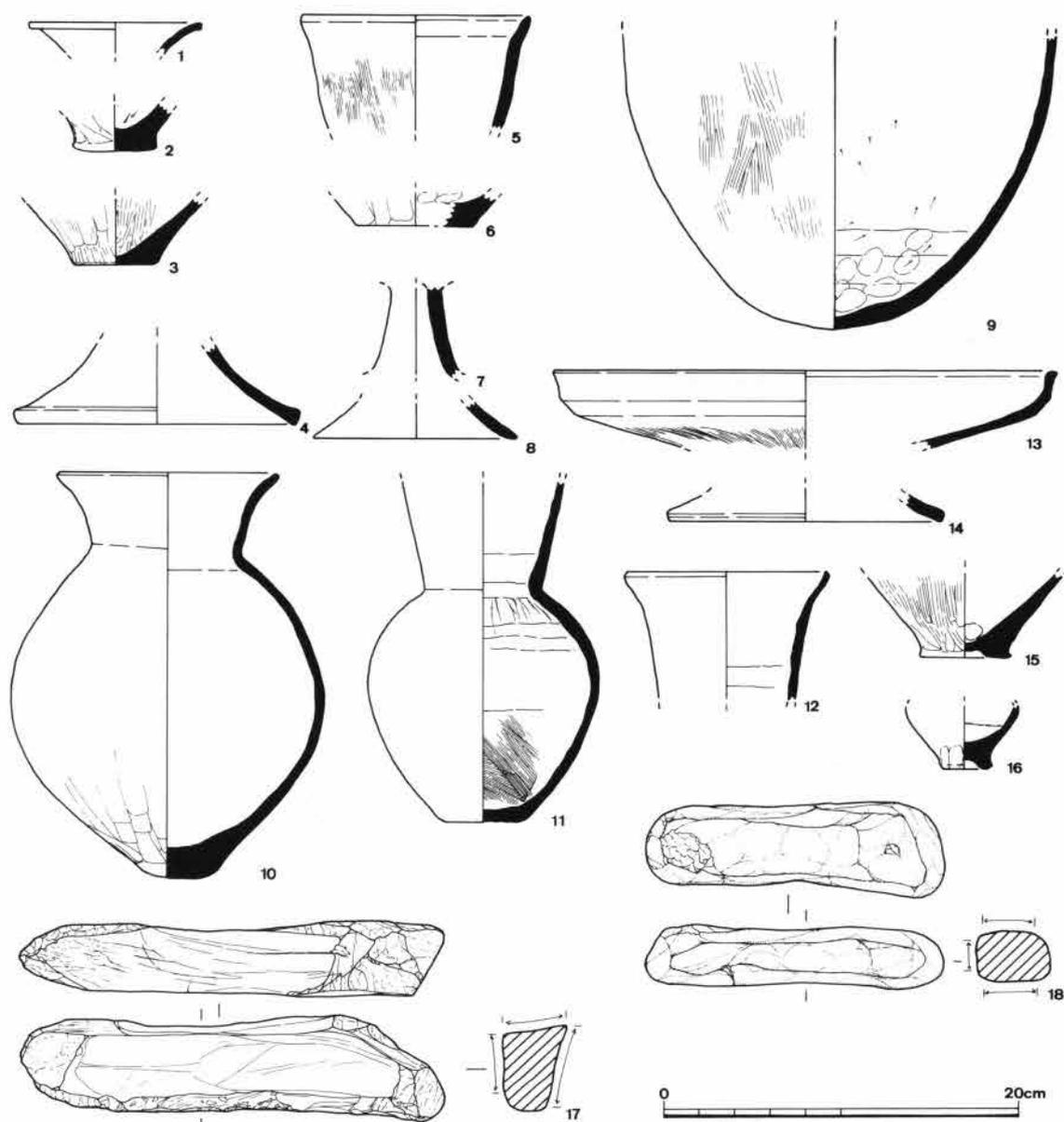
住居跡の北の斜面地では、若干のテラス状の平坦面やトレンチ北端の平面地から弥生土器、古墳時代の須恵器などの出土はあるものの、明確な遺構は検出し得なかった。

**土坑 S K 04**(第41図、図版第28-2) S X (H)03のほぼ中央部で検出した多量の炭が入った土坑である。この土坑はS X (H)03の埋土上面から掘り込まれているが、出土遺物が無いため時期は不明である。

**第11トレンチ**(第40図、図版第27-1) 深さ1m以上の堆積土によって埋まったテラス状地形を確認した。



第42図 SH05実測図



第43図 出土遺物実測図

1. 第1トレンチ北半 2~4. 第2トレンチSH02 5~8. 第4トレンチSH06  
 9. 第12トレンチSH05 10~18. 第13トレンチSH04

5 cmを測る。床面では、径約30cmの柱穴を1基検出した。出土遺物は、土師器の甕が床面から、埋土中からは弥生土器・須恵器が出土している。

#### 4. 出土遺物(第43図)

第1トレンチでは、SH01の上層で土師器6点、下層の埋土および床面から弥生土器36点が出土した。1は、SH01の北側のテラス状平坦地から出土した。第2トレンチでは、SH02内から弥生土器35点が出土している。2～4は、SH02から出土の壺・甕の底部および高杯の脚部である。第4トレンチSH06からは、埋土および床面から弥生土器46点が出土した。5～8は、SH06から出土した甕および高杯の脚部である。第12トレンチSH05からは、上面で、須恵器3点、埋土及び床面から弥生土器・土師器46点が出土した。9は、SH05床面から出土した土師器の甕である。第13トレンチSX(H)04からは、上層で須恵器2点、土師器1点が出土し、埋土および床面から弥生土器12点が出土した。10～18は、SX(H)03で出土した。10は広口壺、11・12は長頸壺、13・14は高杯、17・18は砥石である

#### 5. ま と め

調査の結果、検出遺構では、弥生時代の掘立柱建物跡、竪穴式住居跡もしくは住居跡と考えられるもの5基、古墳時代の竪穴式住居跡1基を、出土遺物では、第6・10トレンチを除く各地区で、弥生時代・古墳時代の遺物が数多く出土した。その成果を、以下に箇条書きで列挙したい。

(1)丘陵の北側では、第1トレンチと第13トレンチの間の谷部と第13トレンチの西側の、標高150～160mの間で住居状のテラスを確認した。

(2)丘陵南側では、3号墳から6号墳までの間の標高約160～170mで住居状のテラスを確認した。

(3)第9トレンチから第10トレンチの間の斜面部では、明確な住居状のテラスは確認できないが、標高約165～170mで住居を構築するのに適当な、なだらかな地形が広がっている。

以上から、当初想定された遺跡の範囲のほぼ全域で、遺構が埋蔵されているであろうという結果を得た。

(戸原和人)

#### 調査参加者

太田政孝・庄司友明・東古昌樹・石田若菜・殿井 恵・足助和一・天池邦彦・天池佐栄子・梅井平吾・金城竜成・栃下 緑・中川君代・中江しげの・西山佳助・西山幸藏・人羅幸子・人羅義雄(順不同・敬称略)

#### 参考文献

柴 暁彦「国道478号バイパス関係遺跡平成5年度発掘調査概要(1)今林古墳」(『京都府遺跡調査概報』第62冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

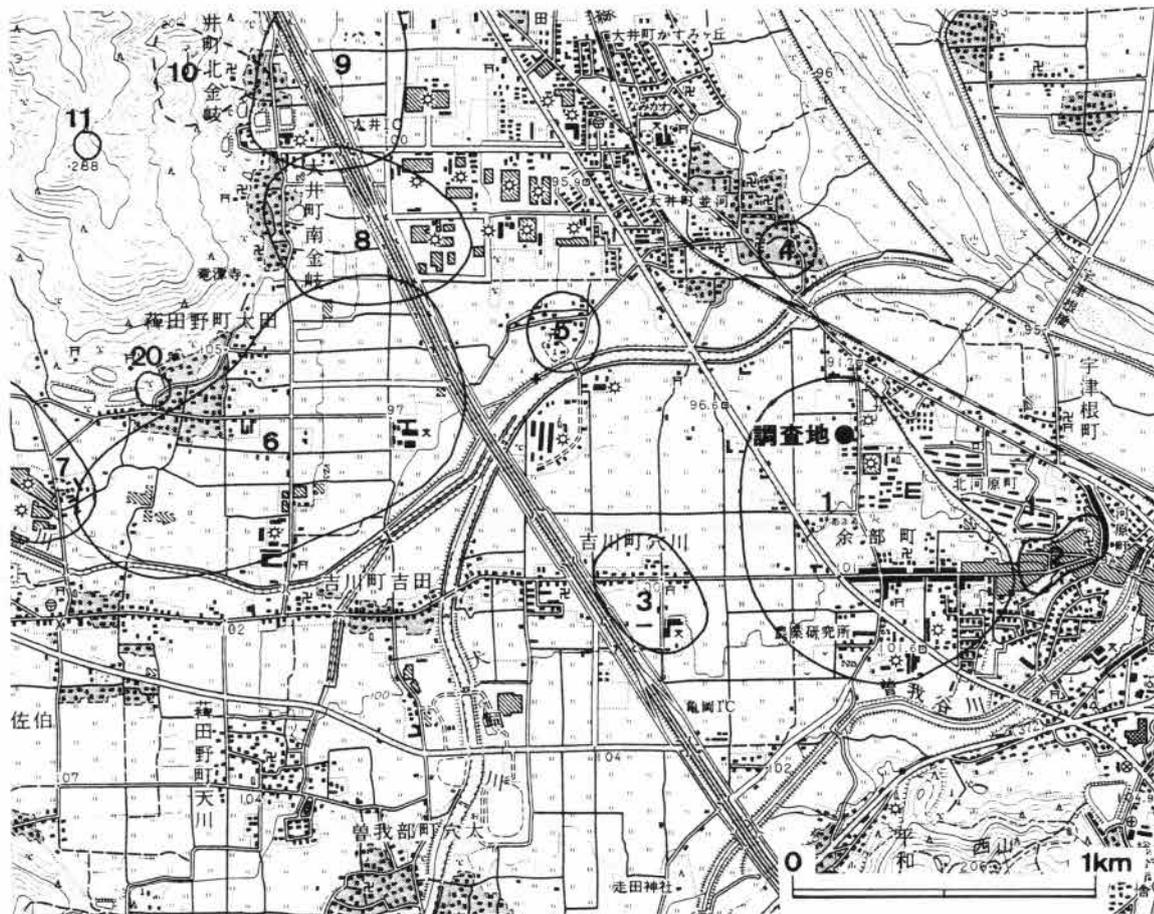
野々口陽子「今林2号墳・今林遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

## 4. 余部遺跡第5次発掘調査概要

### 1. はじめに

余部遺跡は、亀岡盆地のほぼ中央部に位置する弥生時代～江戸時代に至る大規模な複合集落遺跡である。この遺跡は、亀岡盆地の中央部を貫流する大堰川西岸の河岸段丘上に広がり、東西約900m・南北約1,000mにわたる広大な規模を持つ。今回の発掘調査は、宇津根新国道線広域幹線アクセス街路の建設に伴い、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、余部遺跡の北部にあたる京都府亀岡市余部町大塚に所在する(第1図)。

余部遺跡は、昭和40年に本調査地に隣接する工場用地内で立会調査(第1次調査)で、弥生時代中期の遺物が出土し、以来弥生時代の集落遺跡として広く知られてきた。本格的な調査は、昨年度から、第2～4次にわたって行われ、本調査は第5次を数える。当調査研究センターによる第2次調査では、遺跡の北部で、弥生時代中期後半の方形周溝墓群と古墳時代中期～後期の竪穴式



第44図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

1. 余部遺跡 2. 余部城跡 3. 吉川遺跡 4. 並河城跡 5. 野寺廃寺 6. 太田遺跡  
7. 鹿谷遺跡 8. 南金岐遺跡 9. 北金岐遺跡 10. 小金岐遺跡 11. 東山遺跡

住居跡群を確認し、第3次調査では南部で弥生中期前半の方形周溝墓群を検出した。また、遺跡中央部を対象とした亀岡市教育委員会による第4次調査では、弥生時代中期の竪穴式住居跡群11棟と環濠とみられる溝状遺構が確認され、弥生時代の拠点集落の一面が明らかになった(第45図)。

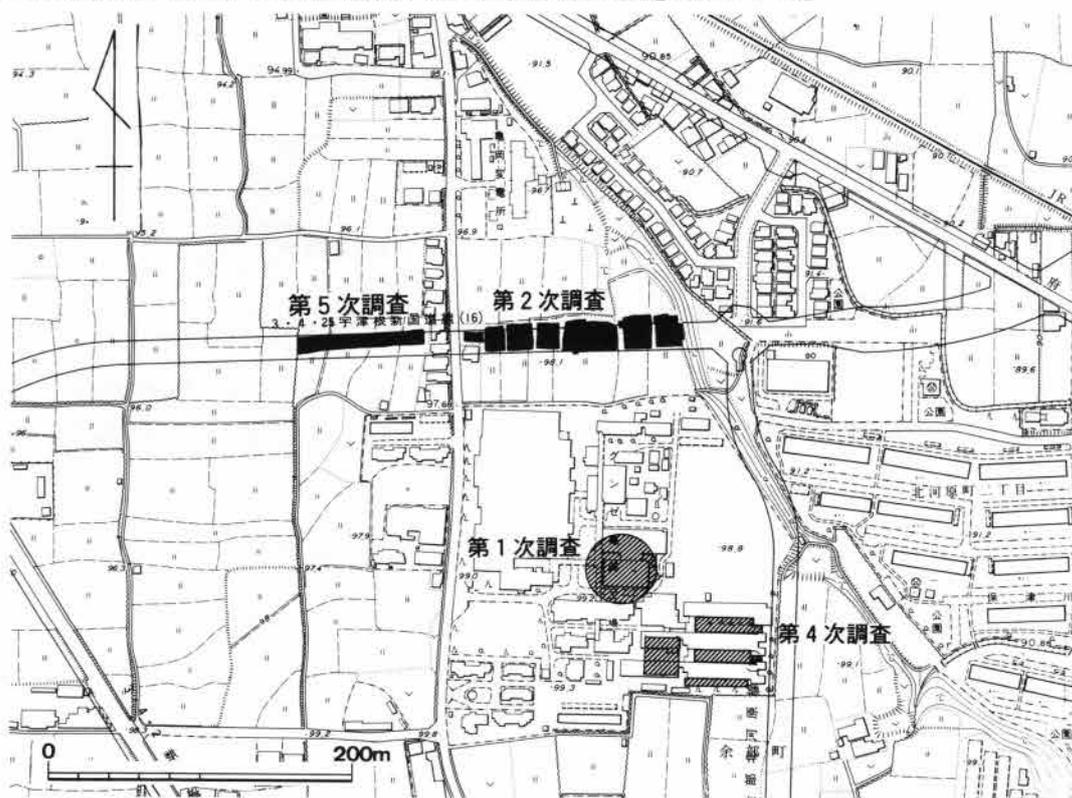
今回の調査は、第2次調査地の西側の地点を調査し、弥生時代の方形周溝墓群、古墳時代の竪穴式住居跡群を検出した。調査面積は、約750㎡であり、現地調査の期間は、平成10年9月4日から平成10年11月27日までをあたえた。本調査に係る経費は、京都府亀岡土木事務所が負担した。

現地調査は、調査第2課調査第2係長辻本和美、調査員野々口陽子・中川和哉が担当した。本書の執筆は、野々口陽子が行い、写真撮影は、遺物写真を調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影し、遺構写真および顕微鏡写真を野々口が撮影した。

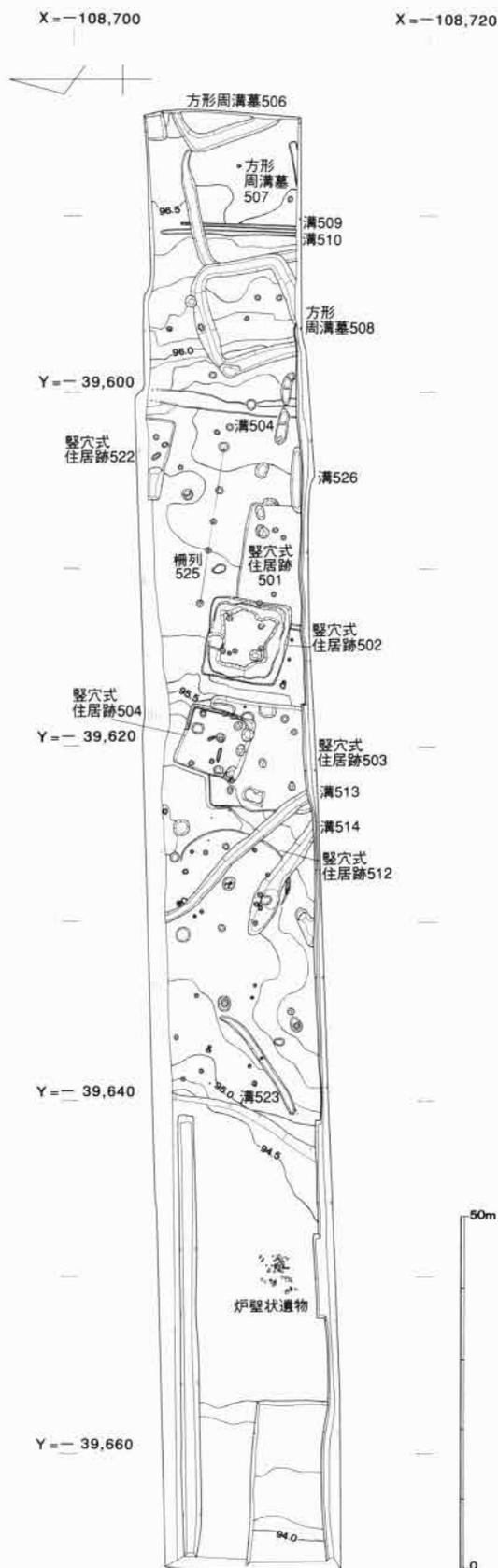
調査の実施にあたり、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会などの関係諸機関の協力を得た。また、地元有志の方々および学生諸氏には、現地調査および整理報告作業に参加協力していただいた。<sup>(注1)</sup>感謝の意を表したい。

## 2. 調 査 概 要

亀岡盆地では、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡分布は、主に盆地周辺の丘陵裾部に集中している。盆地西部の行者山山麓には、弥生時代前期の環濠集落と推定される太田遺跡があり、その北側には後期の北金岐遺跡、西側には古墳時代中期から後期の鹿谷遺跡などの大規模な集落遺跡が位置する。また盆地の北西には、縄文時代から歴史時代の複合遺跡の千代川遺跡があるが、この遺跡は亀岡盆地北半の弥生時代中期の拠点集落と推定されている。



第45図 調査地位置図



第46図 第5次調査区遺構配置図

一方、盆地の中央部は、大堰川の氾濫原が広がるため遺跡の分布は少ないが、余部遺跡は段丘上にあるため、洪水の被害が及びにくく、早くから土地利用がなされ、大規模な複合集落遺跡が展開している。また、戦国時代には、遺跡の南東に余部城が築かれるが、これも眺望の良い高台となっている好立地をうまく生かしたものといえる。

今回の調査地点は、余部遺跡の北部にあたり、主に弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構を検出した。調査対象地には、約83m×9mの一本のトレンチを設定し調査を進めた。トレンチ名は、昨年度の調査トレンチに合わせて、続き番号とし、第8トレンチとする。以下、第5次調査区(第8トレンチ)の調査の概要について述べる。

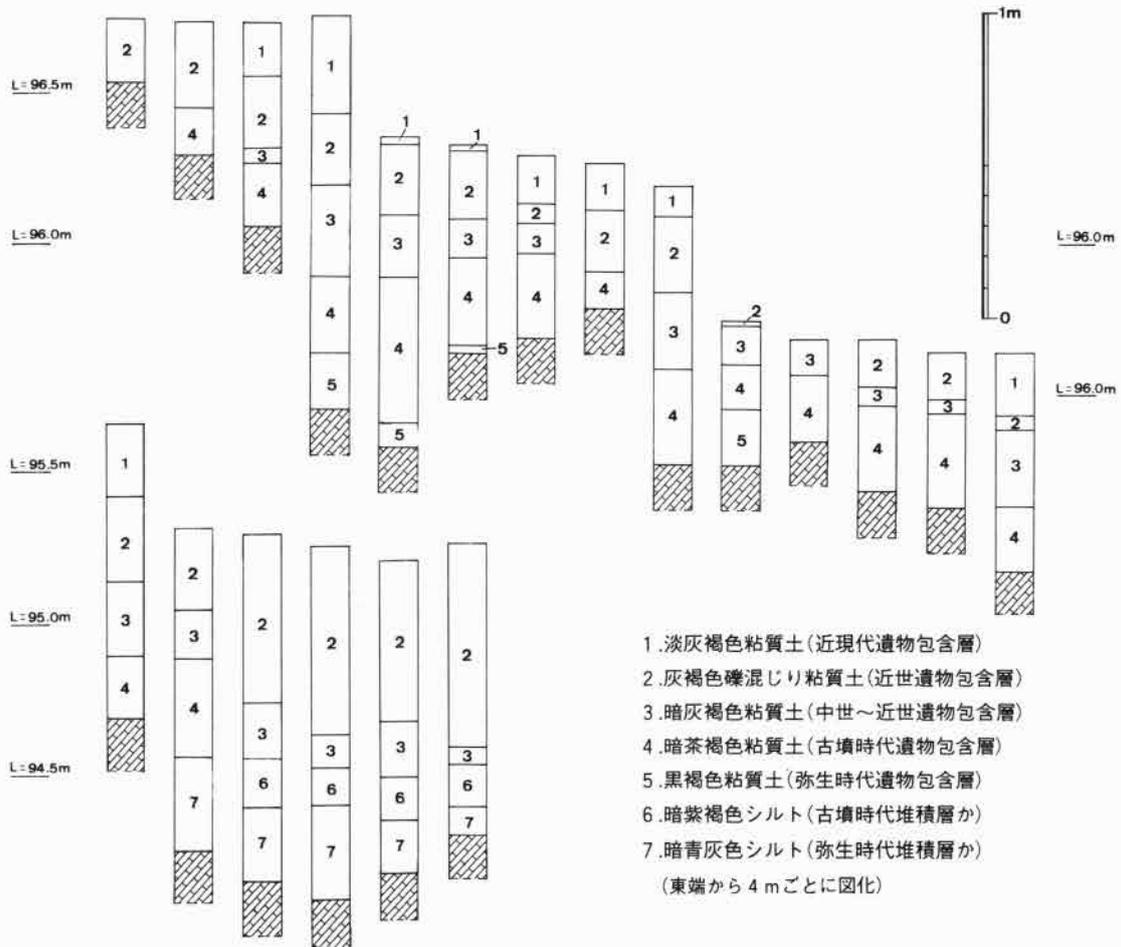
(1) 第5次調査区の調査概要

基準層位は、上層から、淡灰褐色粘質土(近・現代堆積層)、灰褐色粘質土(主に近世遺物包含層)、暗灰褐色粘質土(主に中世遺物包含層)、暗茶褐色粘質土(古墳時代遺物包含層)、黒褐色粘質土(弥生時代遺物包含層)、暗紫灰褐色シルト(古墳時代堆積層か)、暗青灰色シルト(弥生時代遺物包含層)である。

今回の調査では、主にトレンチ東側から、弥生時代の溝3条・竪穴式住居跡1棟・方形周溝墓4基、古墳時代の竪穴式住居跡5棟、さらに中世以降の素掘り溝等を検出した。またトレンチ西側では、段丘の西端のラインを確認しており、遺構は段丘上に密に分布していることが明らかになった。

① 弥生時代の遺構(第48～51図)

溝513 トレンチ西側で検出した溝513は、南東から北西に流れる流路で、約11mにわたって検出した。検出面での幅は約0.6～0.7m、深さは0.5～0.7mを測る。溝床面は平坦面をなし、断面は整美な逆台形を呈する。遺物は、流路中央南寄りの中層から、異形土製品(第69図27)が出土した。流路内からの出土遺物は、ほかに弥生土器片がわずかに出土したにと



第47図 第8トレンチ土層柱状図

どまり、時期を特定する資料に欠く。但し、溝の上層が弥生時代後期の竪穴式住居跡によって削平されていることや、埋土の色調から、おおよそ弥生時代中期と推定される。溝513は、検出面での幅が小さいことから、環濠とみることは難しいが、集落の北東隅にあたることから、環濠などから外へ、排水の機能を持つ溝の可能性がある。集落と外界との境界の溝とすれば、赤彩された異形土製品は、外界からの邪気の進入を防ぐ辟邪の意味をもつ祭祀具とみることもできよう。

**溝514** 溝513の南側で検出したもので、長さ約7.5m・幅約0.8m・深さ約0.5～0.7mを測る。断面は、不整形なU字形を呈する。弥生土器片が出土しているが、時期を細かく特定できない。

**方形周溝墓507** トレンチ東端で検出したもので、一辺約8.6m×7.0mを測る。検出面での周溝の幅は約0.7m、深さは約0.2～0.4mを測る。主体部は、後世の削平を受けたとみられる。周溝内から遺物はほとんど出土していないが、埋土の状況などにより、時期は1～6トレンチで検出した方形周溝墓群と同様、弥生時代中期と推定される。

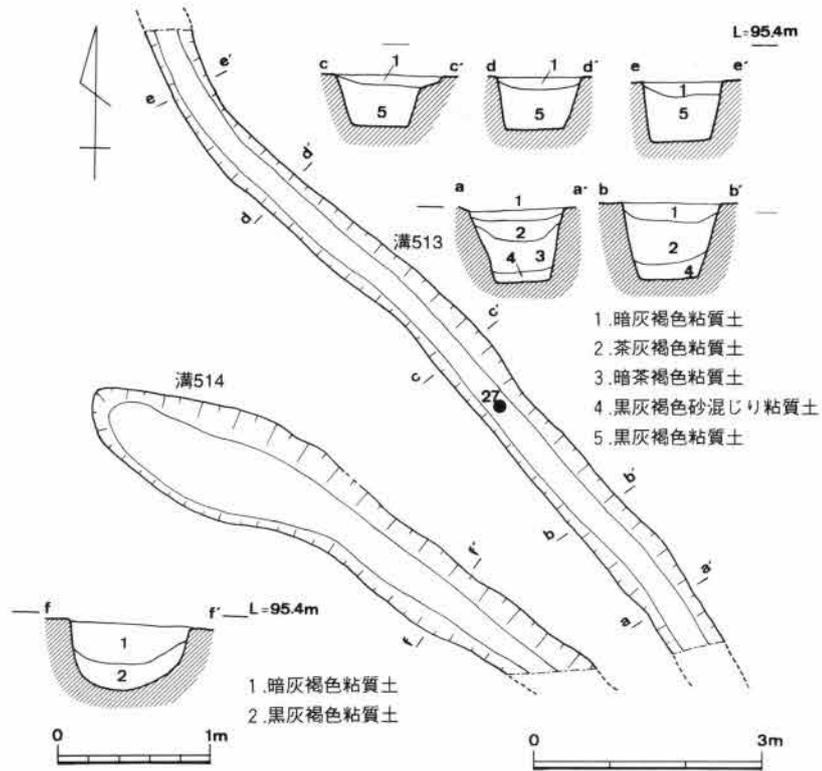
**方形周溝墓508** 方形周溝墓507の西側で検出したもので、一辺約6mを測る。遺物は出土していないが、方形周溝墓507の西周溝を再掘削して築造しており、ほぼ同時期の築造と考えられる。

**竪穴式住居跡512** 遺構の残存状況が悪く、住居床面の東側半分を検出した。直径約6.4mの円

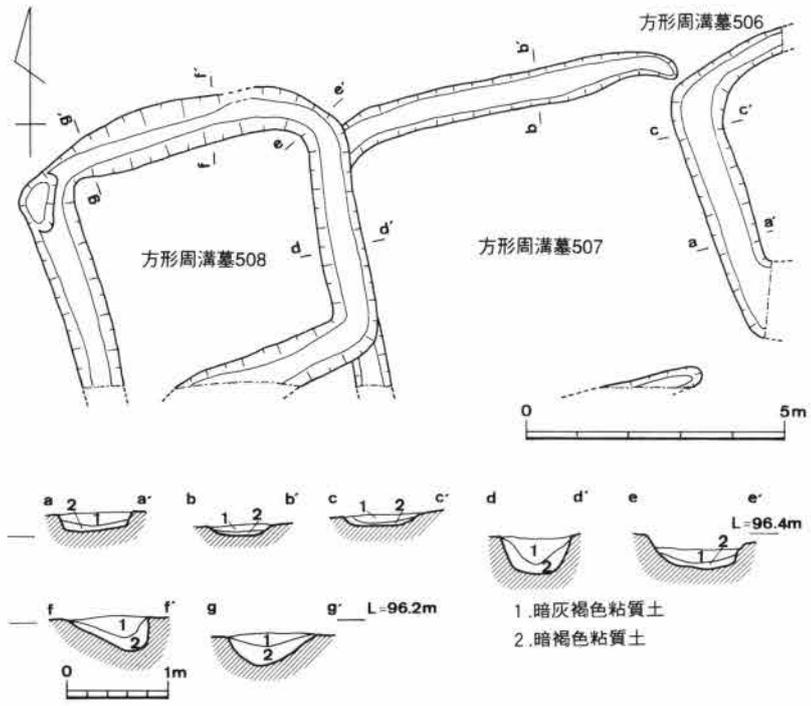
形住居である。主柱穴は周壁に沿って、8～9本あり、床面中央に土坑をもつ。土坑内から炭化物などは検出していない。また床面南側では朱とみられる赤色顔料の付着した叩き石と高杯脚部が出土した。時期は、出土土器から弥生時代後期後半と推定される。このトレンチ内では、包含層中にもわずかながら同時期の土器が含まれており、周辺に後期後半期の集落が広がる可能性が高い。余部遺跡では、これまで確認されていた弥生時代の遺構は、いずれも中期前半～後半頃のもので、後期の遺構・遺物の出土は初例である。

**低地の調査** 今回の調査地では、トレンチ西側で、明瞭な傾斜変換点を検出し、段丘上と低地との間に1m以上の段差があることを確認した。低地下層の層位はグライ化しており、湿地帯であったことが明らかである。傾斜変換点のすぐ西側で

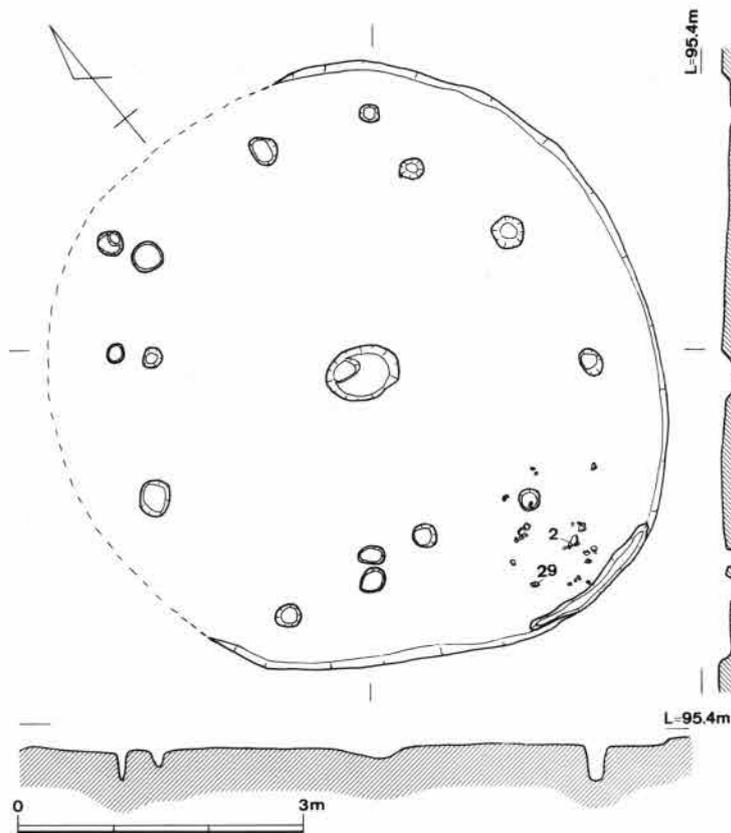
は、最下層の青灰色粘質土層から、炉壁状の遺物(第51図)が出土した。その取り上げ時にタタキ痕のある土器片が出土したことから、最下層の層位および炉壁状の遺物の時期は弥生時代中期後半に帰属すると推定される。この低湿地帯では畦畔や溝等を検出していないが、グライ化が著し



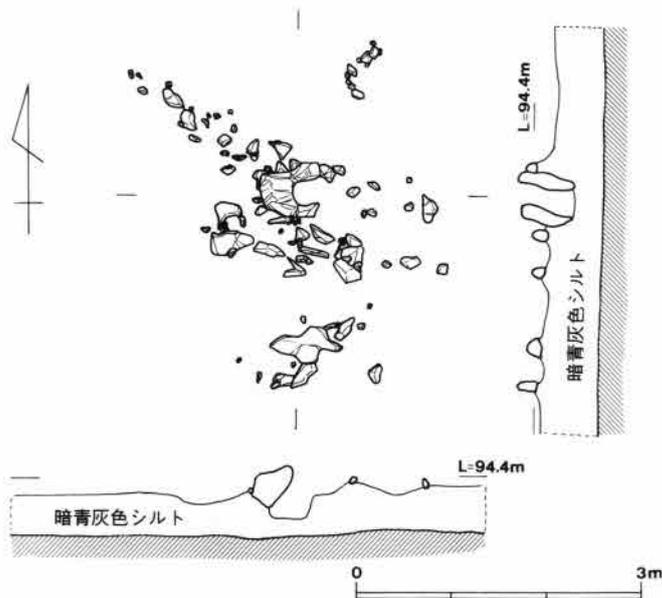
第48図 溝513・514実測図



第49図 方形周溝墓506～508実測図



第50図 竪穴式住居跡512実測図



第51図 炉壁状遺物出土状況図

住居東壁に接して長さ約0.4m・幅0.3m・深さ約0.2mの方形土坑を検出し、西壁に接して石材を支脚に用いた竈を検出した。出土土器から5世紀後半と推定される。

**竪穴式住居跡504** 竪穴式住居跡503の廃絶後、その北側に構築された住居で、床面は住居跡503と一部切り合う。一辺約3.5mの方形住居で、壁高は幅約0.15mを測る。支柱穴は、東西の周壁寄りに4か所認められた。南側の床面には、連続する不整形の土坑を検出した。また、竈は検

いことから弥生時代には水田域であった可能性が高い。

②古墳時代以降の遺構(第46・52・53図)

**竪穴式住居跡502** 一辺約4.6mの竈付きの住居跡で、壁高は約0.35mを測る。支柱穴は4本で、床面には、黄灰褐色砂層と黒褐色土の互層からなる厚さ約0.2mの貼り床が認められた。貼り床下層の地山は、幅約0.2~0.4mの溝状に掘り込まれている。この貼り床上で、布留系の土師器甕や、高杯・滑石製の勾玉が出土しており、時期は5世紀中葉前半頃と推定される。

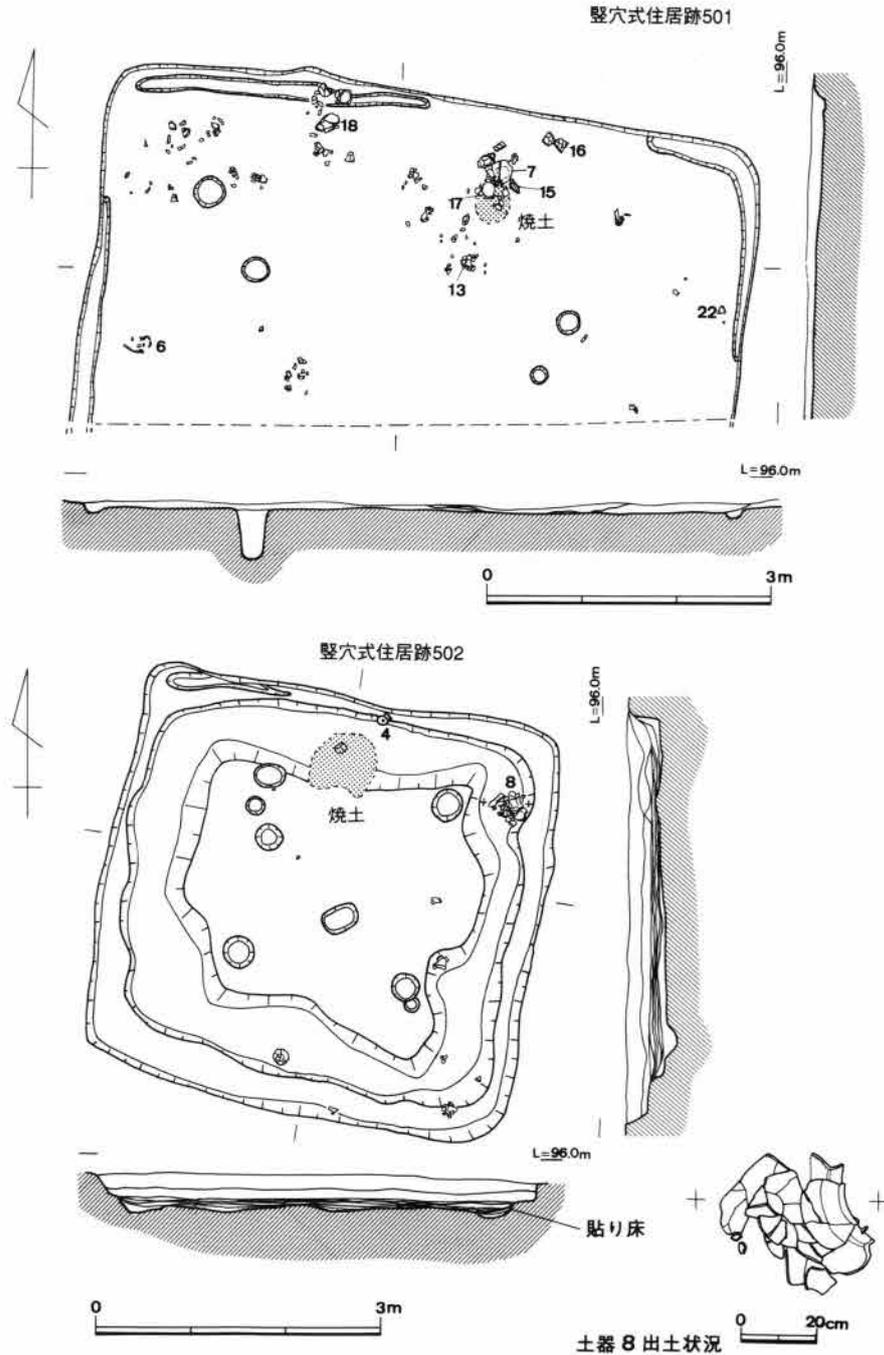
**竪穴式住居跡501** 住居跡502廃絶後に建てられたもので、床面北側の一部を検出した。一辺約6.9mの規模の大きな住居と推定される。北側に石材を支脚とした竈を構築しており、周壁に沿って、幅約0.1mの壁溝を検出した。床面からは布留系甕が出土しており、5世紀中葉の住居跡と推定される。

**竪穴式住居跡503** 東西約5.9m×南北残存長約5.7mの方形住居である。壁高は約0.2mを測り、支柱穴は4本からなる。

出していないが、北側周壁よりに、焼土が認められた。南側床面で白玉2点が出土した。

**竪穴式住居跡522**  
トレンチ東側で床面の一部を検出した住居跡である。一辺約4.5mを測る。床面の南西隅で、約1.6m×0.35m・深さ0.6mの方形土坑を検出した。土坑内上層で、土器が出土しており、時期は5世紀後半と推定される。

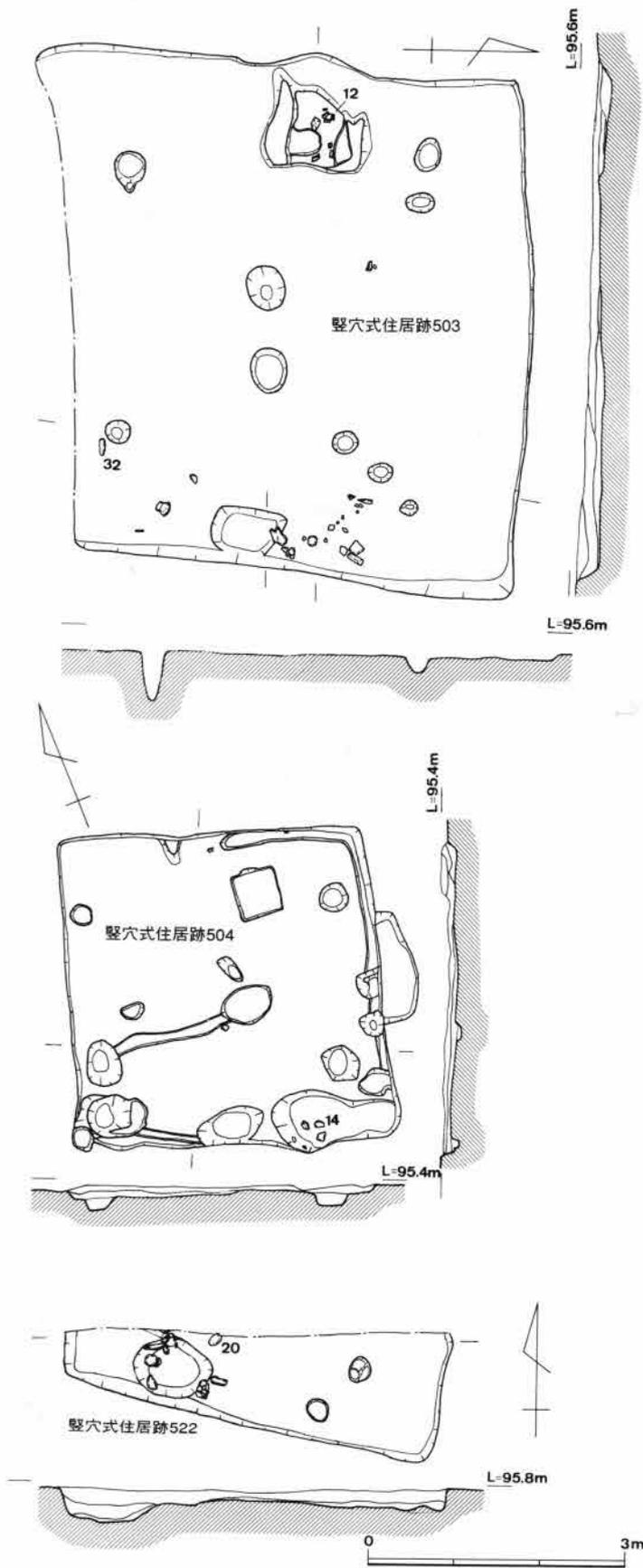
**柵列525 住居跡501北側**で検出した長さ9m・柱間約1.8mの柱列である。住居跡501と平行していることや、埋土の色調から、竪穴式住居跡群とほぼ同時期の古墳時代中期と推定される。



第52図 竪穴式住居跡501・502実測図

③小結

以上、第5次調査区では、弥生時代中期と推定される溝2条・方形周溝墓3基、弥生時代後期後半頃の竪穴式住居跡1棟、古墳時代中期後半頃の竪穴式住居跡5棟・柵1列、鎌倉時代以降の溝3条を検出した。また、調査区西側では、段丘の西端となる傾斜変換点を確認しており、弥生時代から古墳時代にかけての居住区がおもに段丘上に立地し、その西側には低湿地帯が広がることが判明した。



第53図 竪穴式住居跡503・504・522実測図

(2)第1～7トレンチの調査成果

第1～7トレンチの調査では、弥生時代の竪穴式住居跡1基・方形周溝墓16基と古墳時代の埋葬施設2基・竪穴式住居跡10基・掘立柱建物跡22基以上、および鎌倉時代以降の溝を検出した。

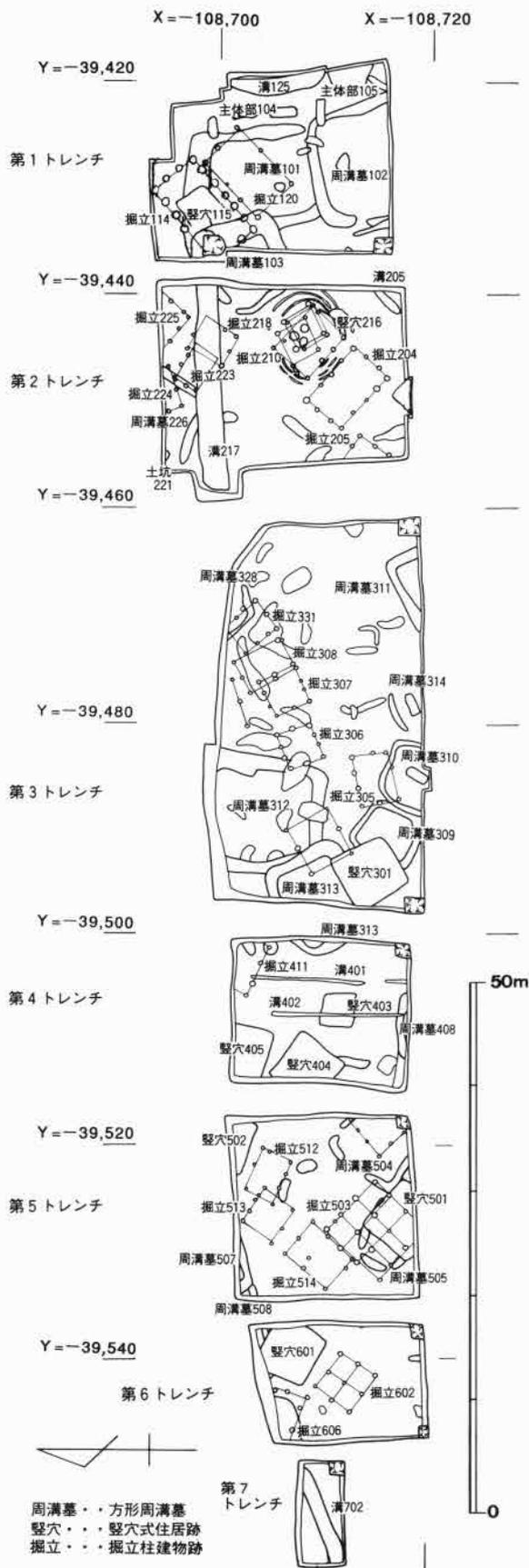
①弥生時代玉作り工房跡(第55図)

竪穴式住居跡216は、第2トレンチ東側で検出した長径約8.0m・短径約6.0mの平面形が楕円形の住居跡である。床面中央には3つの土坑があり、床面の周囲には、幅約0.1mの周壁溝が3～4重にめぐることから、3回以上の建て替えが行われたと推定される。この住居跡では、上層の掘削中に碧玉剥片が出土したため、最終床面直上の厚さ約0.3mに相当する埋土を、地区別(第55図)に採取し、土納袋約500袋相当の土砂を水洗した。その結果、碧玉製管玉未製品や碧玉剥片、玉髓製の打製石針(細い針状をなすもので玉類の穿孔具と推定される)が約60本以上出土し、碧玉製管玉の玉作りを行った工房跡であることが確実にされた。洗浄した土砂の中からは、チャートおよびサヌカイト製の微細な石器類や剥片、サヌカイト製の石鏃未製品なども出土しており、小形の石器については、玉作りの工房内で同時に製作が行われていたことが判明した。出土した碧玉の剥片とサヌ

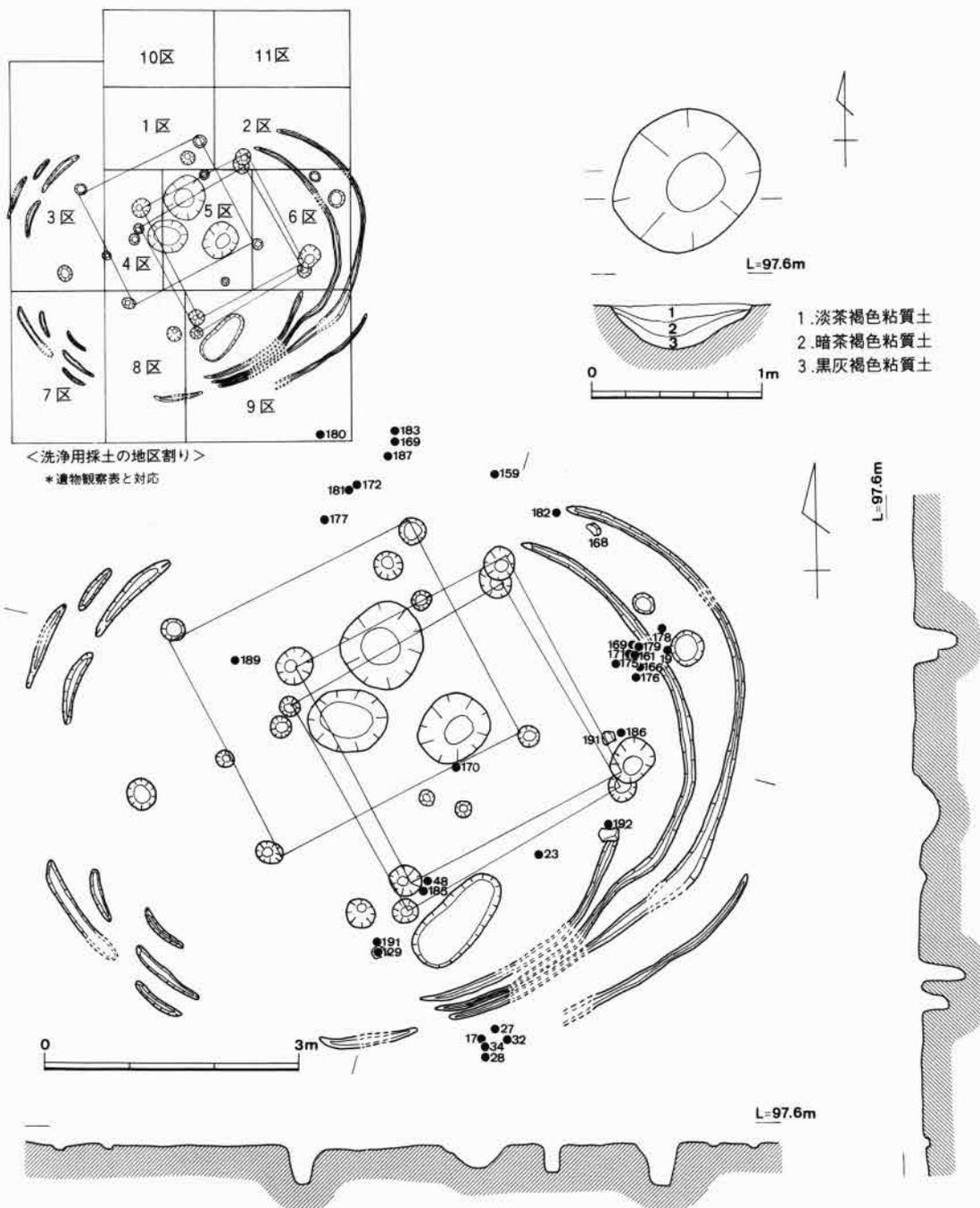
カイト剥片の総量は、それぞれ0.5kgに満たず、製作規模はいずれにしても大きいものではない。一方、床面中央には径約0.8~1.0m・深さ約0.3mの3基の円形土坑が検出されたが、各土坑から玉髓剥片や碧玉剥片、玉髓製石針などが出土している。土坑内の埋土には炭化物等がふくまれていないことから、これらは玉製作および小形の石器製作に伴う作業用の土坑と推定される。遺物は住居外の北側(第55図1・2区)の区域にも広がっており、敲石として転用されたとみられる石斧類などがまとまって出土していることから、住居北側が作業空間として使われていたと考えられる。床面から出土した壺形土器片や玉髓製石針に磨製石針を含まないことから、住居跡の時期は弥生時代中期前半に帰属するものと推定される。

②弥生時代中期方形周溝墓(第57~59図)

方形周溝墓は第1~6トレンチの各調査区で検出し、部分的なものを加えると合計18基を数える。いずれも時期は畿内第Ⅲ~Ⅳ様式併行の弥生時代中期中葉~後半と推定される。方形周溝墓101は、第1トレンチ中央部で検出したもので、東西約9.7m・南北約13.5m・深さ0.4mを測る。検出した周溝墓のうち、最も規模が大きく、周溝内から広口壺・水差し・甕などの土器類や、石包丁未製品・石斧などが出土した。方形周溝墓102は、方形周溝墓101と北周溝を共有するもので、北周溝は長さ10.5m・幅1.2m・深さ1.4mの規模を持つ。周溝墓101の東西周溝の南端部が徐々に浅くなり、終息し

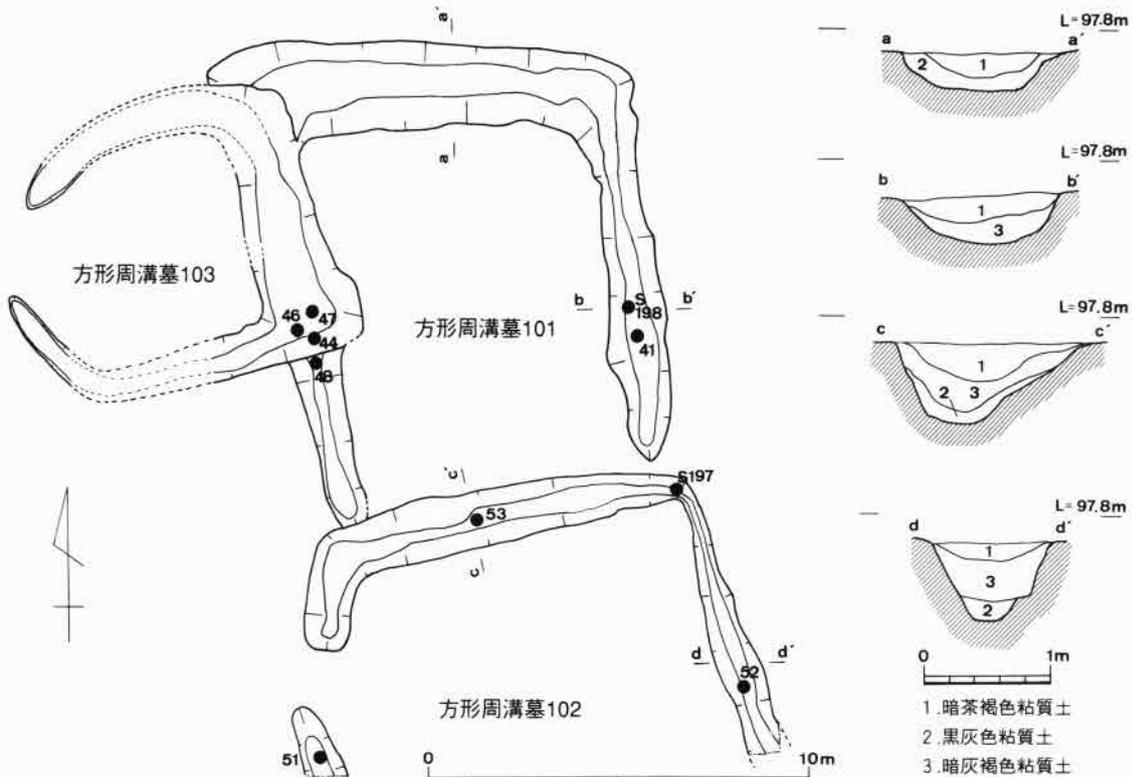


第54図 第1~7トレンチ主要遺構平面図



第55図 竪穴式住居跡216実測図

ていくことから、北周溝は、周溝墓101の南周溝を新たに再掘削したとみるよりも、当初から周溝を共有することを前提に、連続して築造された可能性が高い。周溝内から、広口壺壺・細頸壺・石斧などが出土した。方形周溝墓309・310・314は、第3トレンチ中央南側で検出したもので、いずれも一辺約6m前後の小規模な方形周溝墓である。周溝墓314、周溝墓310は主体部とみられる土坑を検出したが、棺痕跡が認められず、遺物は出土していない。方形周溝墓311は、第3トレンチ南東隅で確認したもので、一辺約8m以上の周溝墓である(第54図)。この第3トレンチの東側は、原地形では微高地となっていたようで、上層が大きく削平されて遺構の残存状況は極めて悪い。こうしたことから、部分的に検出した溝状遺構は、本来は方形周溝墓であった可能



第56図 方形周溝墓101～103実測図



第57図 方形周溝墓309・310・314実測図

性が高い。第3トレンチ西側で検出した方形周溝墓312は、東西約11m、南北現存長約11mを測り、南周溝から石包丁が出土した。またその西周溝を再掘削して築造された方形周溝墓313は、第4トレンチに一部かかるもので、一辺約9.5mを測る。方形周溝墓504・505は、第5トレンチ南側で検出した周溝墓で、周溝墓504は約5m×4mの長方形をなす。周溝は検出面での深さ約0.5mを測り、周溝内から石包丁が出土した。以上が主な方形周溝墓の概要である。出土遺物は、最大規模の周溝墓101・102からのものがほとんどであり、多くの土器を出土したが、その他の周溝墓からは図化できるだけの資料は得られなかった。また、石器も、周溝墓101・102から、磨製石斧が出土した。しかし、石包丁は比較的規模の小さい周溝墓505からも出土しており、注意さ

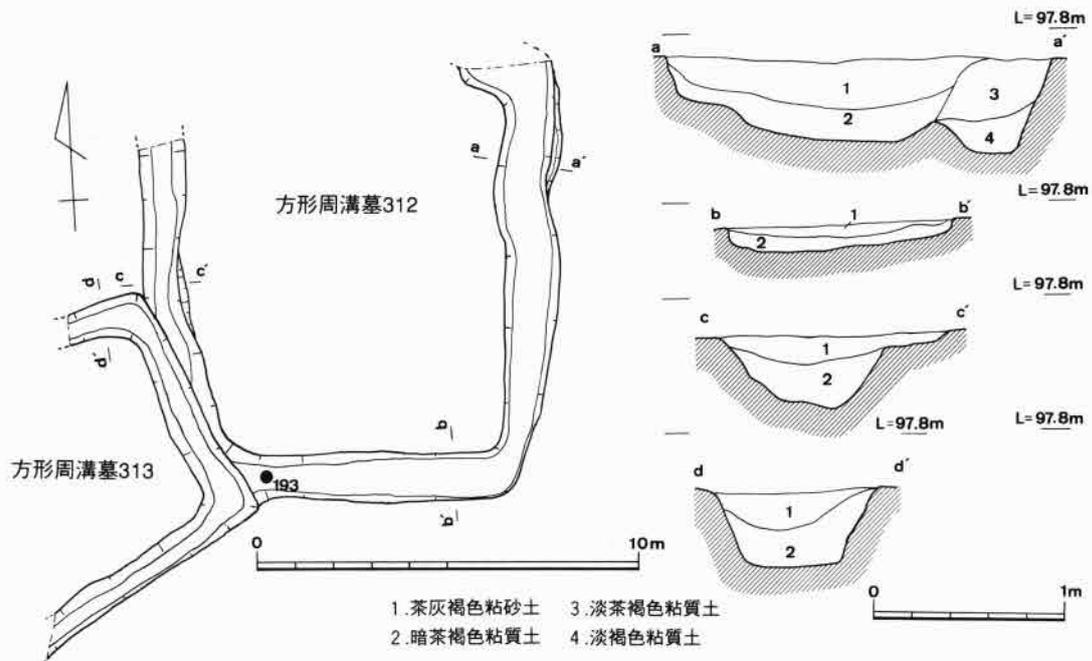
れるべきであろう。

③弥生時代の流路(第60図)

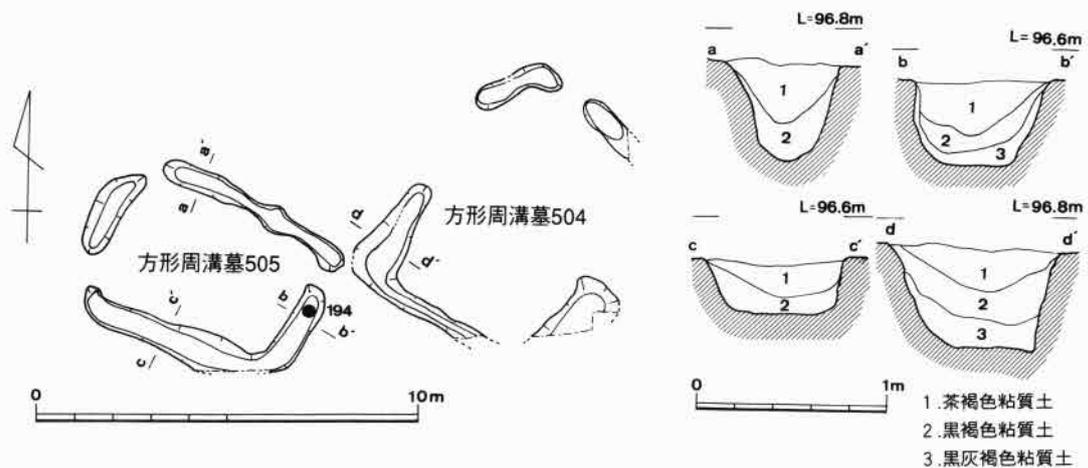
第7トレンチで検出した溝702は、南西から北西に向かって流れる流路の一部とみられる。溝内から出土した遺物には弥生土器片があり、埋土の状況から弥生時代の溝と考えられる。

④余部1号墳と周辺主体部(第61・62図)

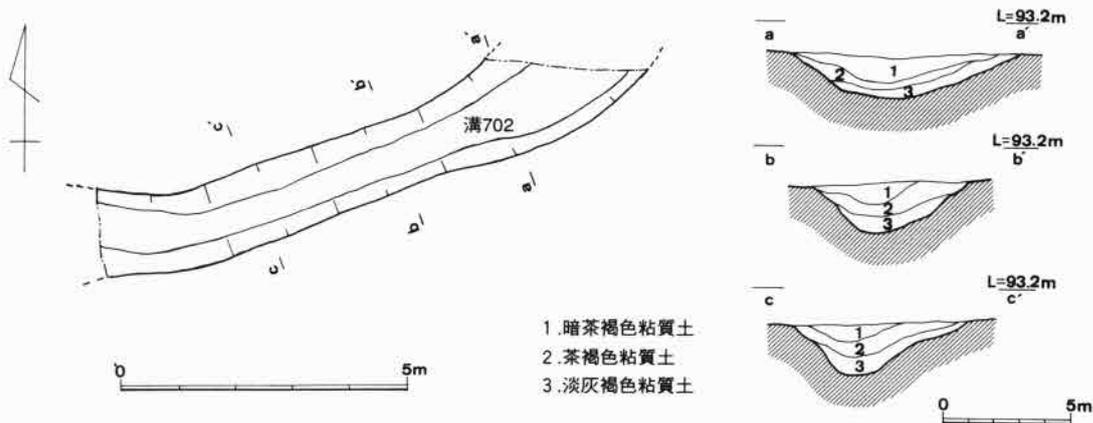
第1トレンチ東端では、鉄器を多量に副葬した古墳時代中期の主体部105を検出した。この主体部は、主軸はN91°Eを測り、規模は約2.4m×0.7m・深さ約0.2mを測る。底面は緩やかに「U」字形に落ち込むことから、棺には舟形木棺を用いたものと推定される。主体部東側の小口部には、縄掛け突起状の落ち込みを確認した。出土遺物は、北側肩部から、鉄鋌2・鉄斧2・鉄鎌1・鉄剣1が出土した。また、棺内のほぼ中央部から、鉄刀子1・滑石製勾玉1・白玉10が



第58図 方形周溝墓312・313実測図



第59図 方形周溝墓504・505実測図

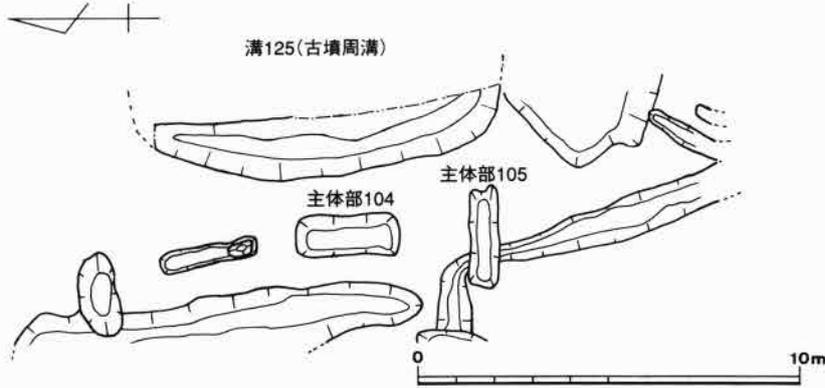


第60図 溝702実測図

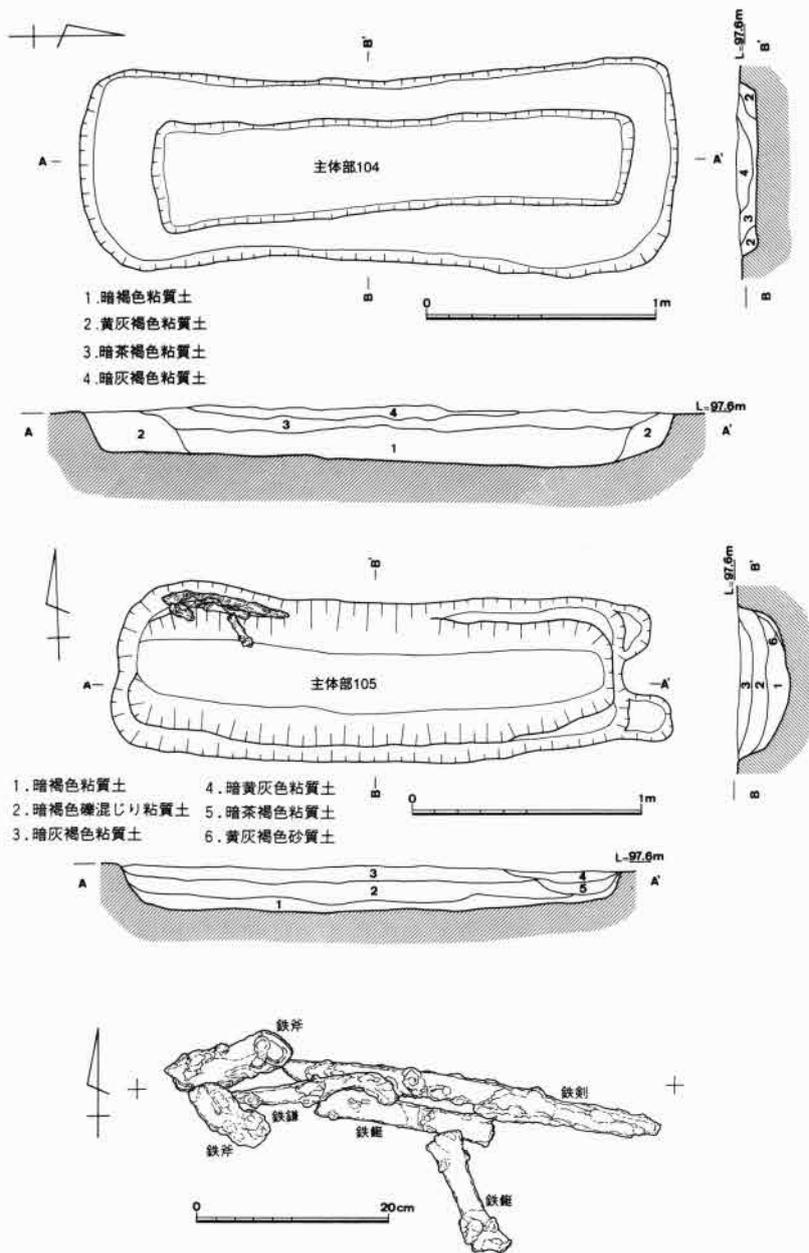
土している。主体部105の北側では、105と同様、N1°Eの南北方向の主軸をもつ主体部104を検出した。規模は約2.6m×0.8m、深さは約0.25mを測る。木棺痕跡は、約2.1m×0.4mの規模の長方形を呈することから、箱形木棺が用いられたとみられる。遺物は出土していないが、主体部105と近接し、主軸がほぼ直交していることから、同時期に構築されたものである可能性が高い。これらはいずれも、墳丘をもたず、周辺主体部に近い在り方を示すため、主墳の検出にむけて、トレンチを東に拡張した結果、古墳の周溝の一部とみられる溝125を検出した。溝は、中央部北寄りで幅約1.5m・深さ0.7mを測る。また、その中央部下層からは、鉄矛が出土したが、溝内における埋葬施設は認められなかった。トレンチの東側は、段丘面の比高差が約3～4mあり、崖状の地形を示すことから、墳丘の大半はすでに地滑りにより失われたものとみられる。溝125は、北端と南端に近い部分で、それぞれ東側に屈曲するとみられることから、古墳の墳丘規模は、一辺約10～15mほどの規模であったと推定される。今回、墳丘の復原を試みた古墳は、これまで周知の遺跡として知られていなかった墳墓であり、これを余部1号墳とする。

#### ⑤古墳時代の竪穴式住居跡(第63・64図)

古墳時代の竪穴式住居跡は、第1～7トレンチのなかで、部分的に検出したものを含めて、合計10棟を数える。構築時期は、出土した土器から、ほぼ5世紀中葉～6世紀中葉頃と推定される。竪穴式住居跡301は、一辺約5.6mの方形竪穴式住居跡である。造り付けの竈は認められないが、中央部床面の一部がやや被熱しており、炉跡があったとみられる。埋土から、布留系甕口縁が須恵器片とともに出土しており、構築時期は5世紀中葉前後とみられる。竪穴式住居跡404は一辺約5.3mを測り、周壁溝を持つ。床面の北側に焼土があり、炉跡と推定される。また竪穴式住居跡501は、一辺約5.8mの住居跡で、床面に被熱した黄褐色粘土の広がりがみられた。いずれも、出土土器から、5世紀後半に構築されたものと推定される。竪穴式住居跡601は、一辺約5.4mを測り、北東壁で造り付けの竈を検出した。埋土上層からは、口縁部を細かく打ち欠いた須恵器提瓶1と、瑪瑙製勾玉が出土しており、住居廃絶に伴い、何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。竪穴式住居跡115は、一辺約4.2mの住居跡で、北東に石製支脚を用いた造り付けの竈をもつ。竈内から長胴の甕が出土しており、構築時期はおおよそ6世紀前半～中頃と推定される。竪穴式



第61図 溝125(古墳周溝)実測図

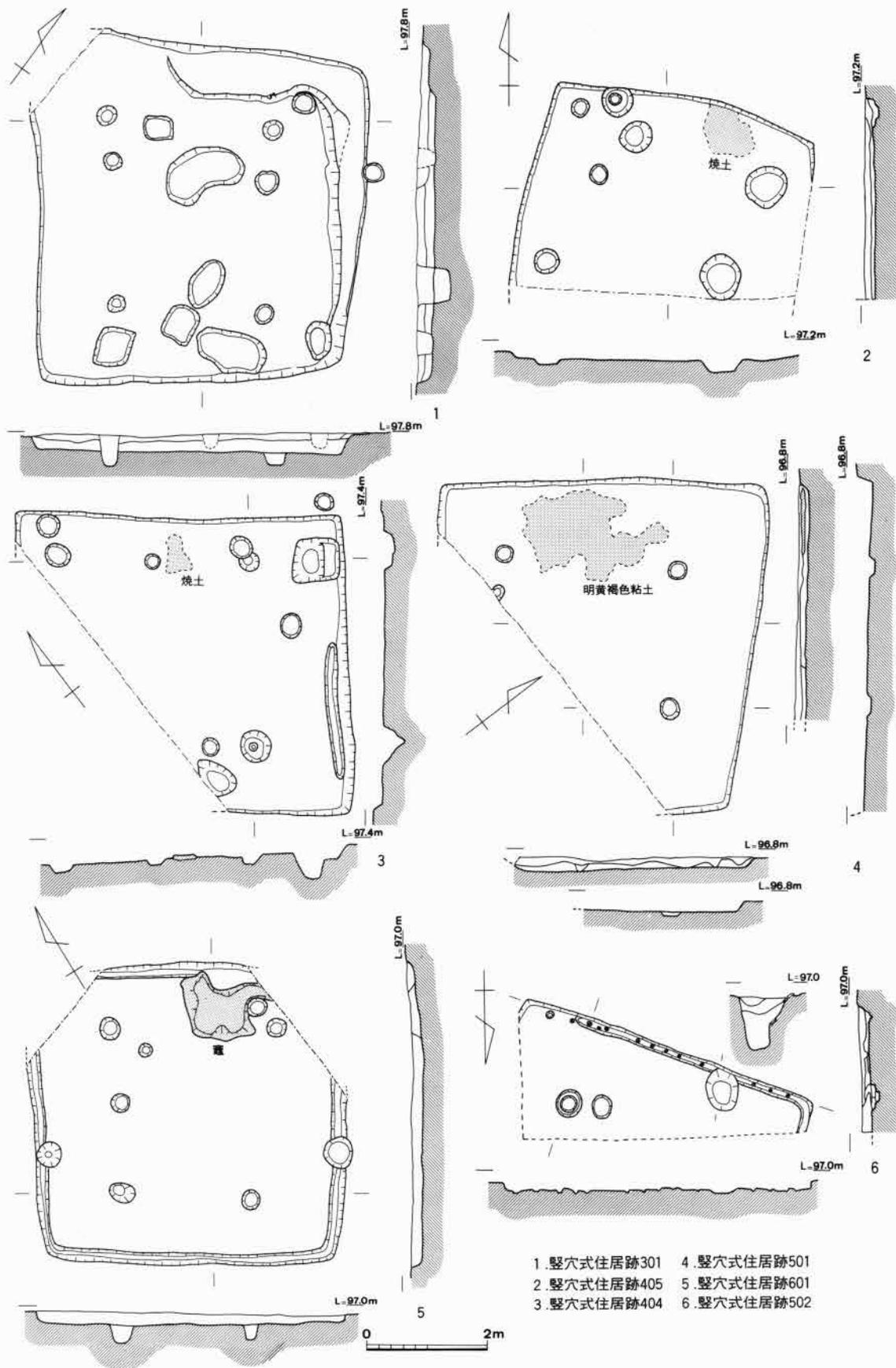


第62図 主体部104・105実測図

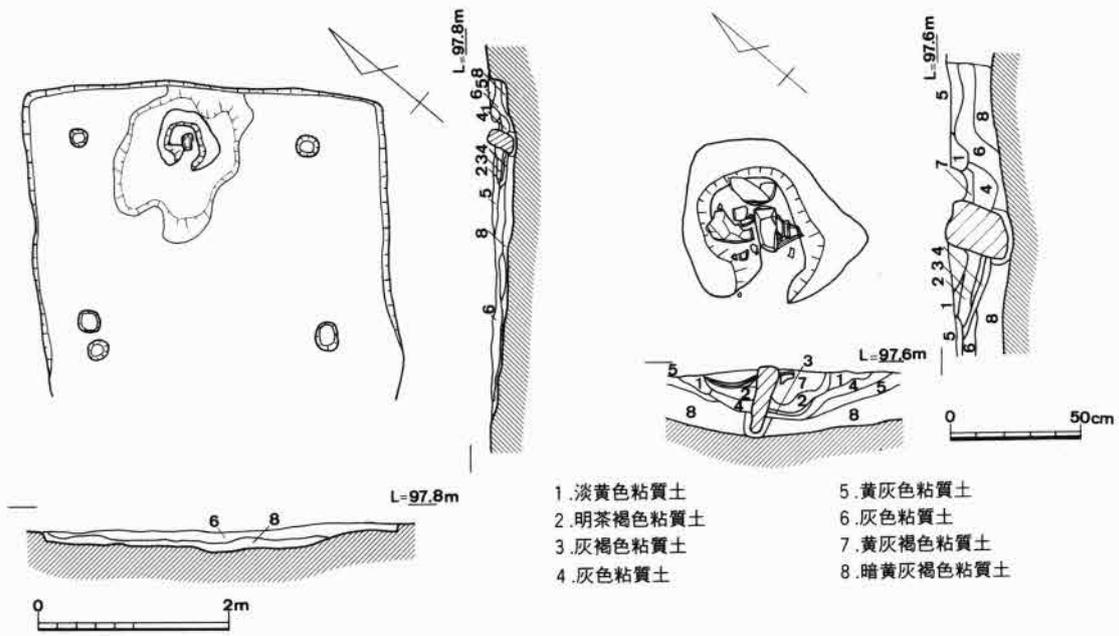
住居跡502は、床面の一部を検出したもので、一辺約4.9mの6世紀中頃の方形住居跡である。周壁溝内には杭列と見られる柱列を検出しており、構造上注目される。以上、主な住居跡について述べたが、出土した遺物から、竪穴式住居跡群の時期は、おおよそ5世紀中葉から6世紀前半頃と推定される。

⑥掘立柱建物跡群

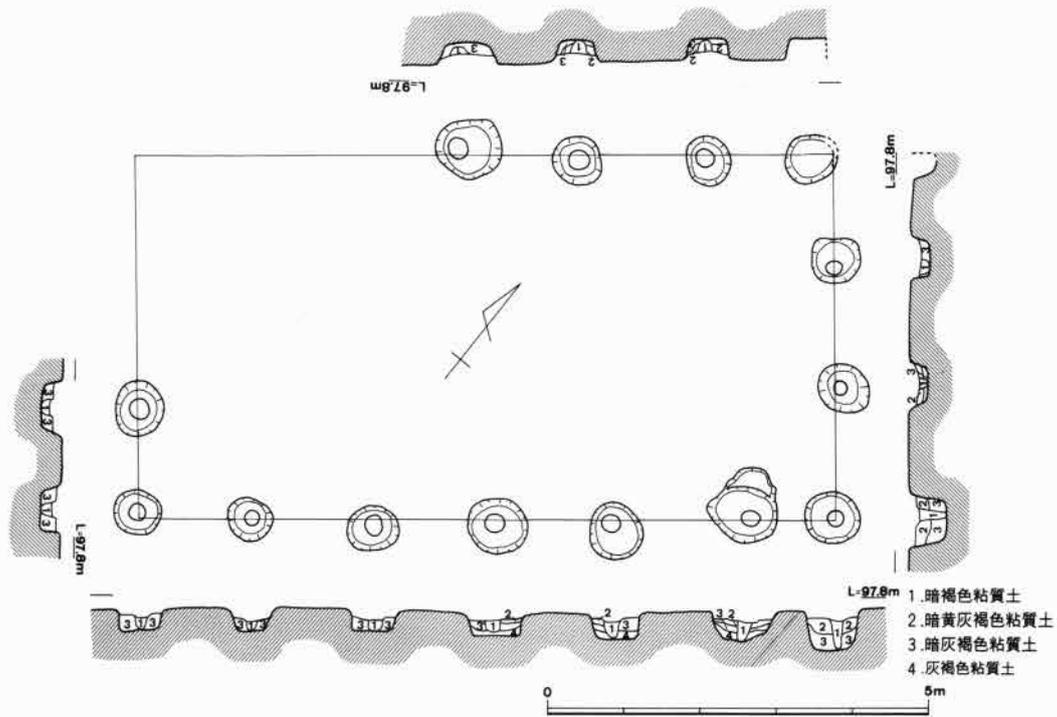
第1～7トレンチからは、合計22棟の掘立柱建物跡を検出した。総柱の掘立柱建物跡503が、出土した土師器高杯から、5世紀中葉後半と推定されるほかは、時期の判明した建物跡は少ない。建物跡503は、3間×3間で柱間約2.2mの総柱の建物跡である。掘立柱建物跡114は、3間×6間の建物跡で、柱間は約1.8～2.0mを測る調査区内で最も規模の大きい建物跡である。柱穴の埋土は暗褐色粘質土であり、基本的に建物跡503と色調が同じであることや、柱穴から須恵器片が出土していること、6世紀前



第63図 主要竪穴式住居跡実測図

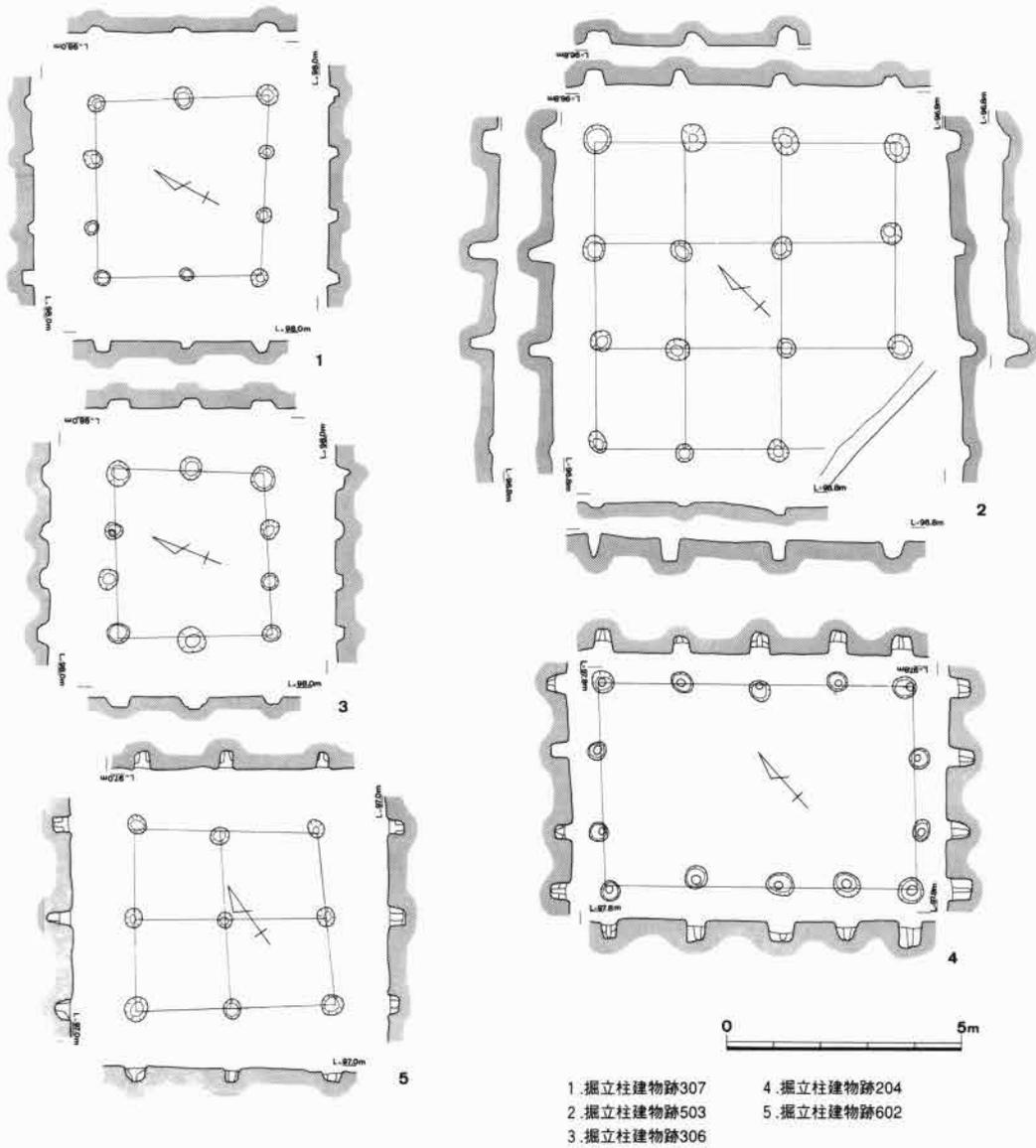


第64図 竪穴式住居跡115実測図

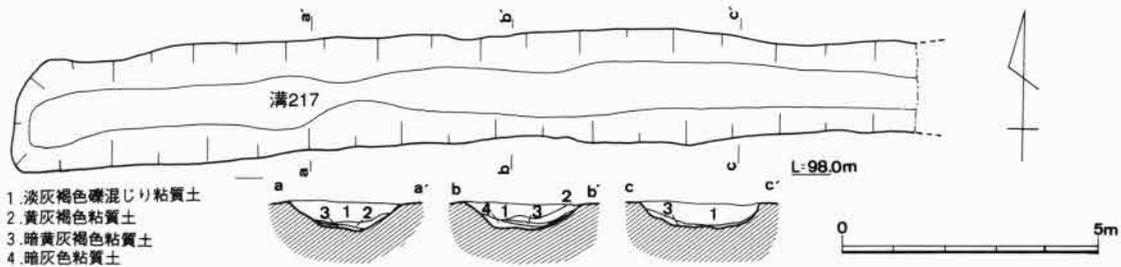


第65図 掘立柱建物跡114実測図

半～中葉には、竪穴式住居跡115が構築されることなどから判断して、5世紀中葉～後半前後の建物跡とみられる。3間×4間の掘立柱建物跡204、2間×3間の建物跡210も、柱穴には須恵器片が含まれ、主軸の方向や埋土の状況が建物跡114と類似することから、同様な時期と考えておきたい。一方、掘立柱建物跡306・307・308などの各トレンチで検出している2間×3間、柱間1.2m前後の建物跡群は、古墳時代後期の須恵器片を出土し、多くは6世紀中葉以降、竪穴式住



第66図 主要掘立柱建物跡実測図



第67図 溝217実測図

居跡の立て替えに伴い構築されたとみられる。しかし、特に第3トレンチでは、建物跡として復元した柱穴以外から10世紀前半頃の須恵器杯が出土したことや、包含層中に若干の奈良時代の須恵器がみられ、古墳時代以降の掘立柱建物が含まれる可能性がある。

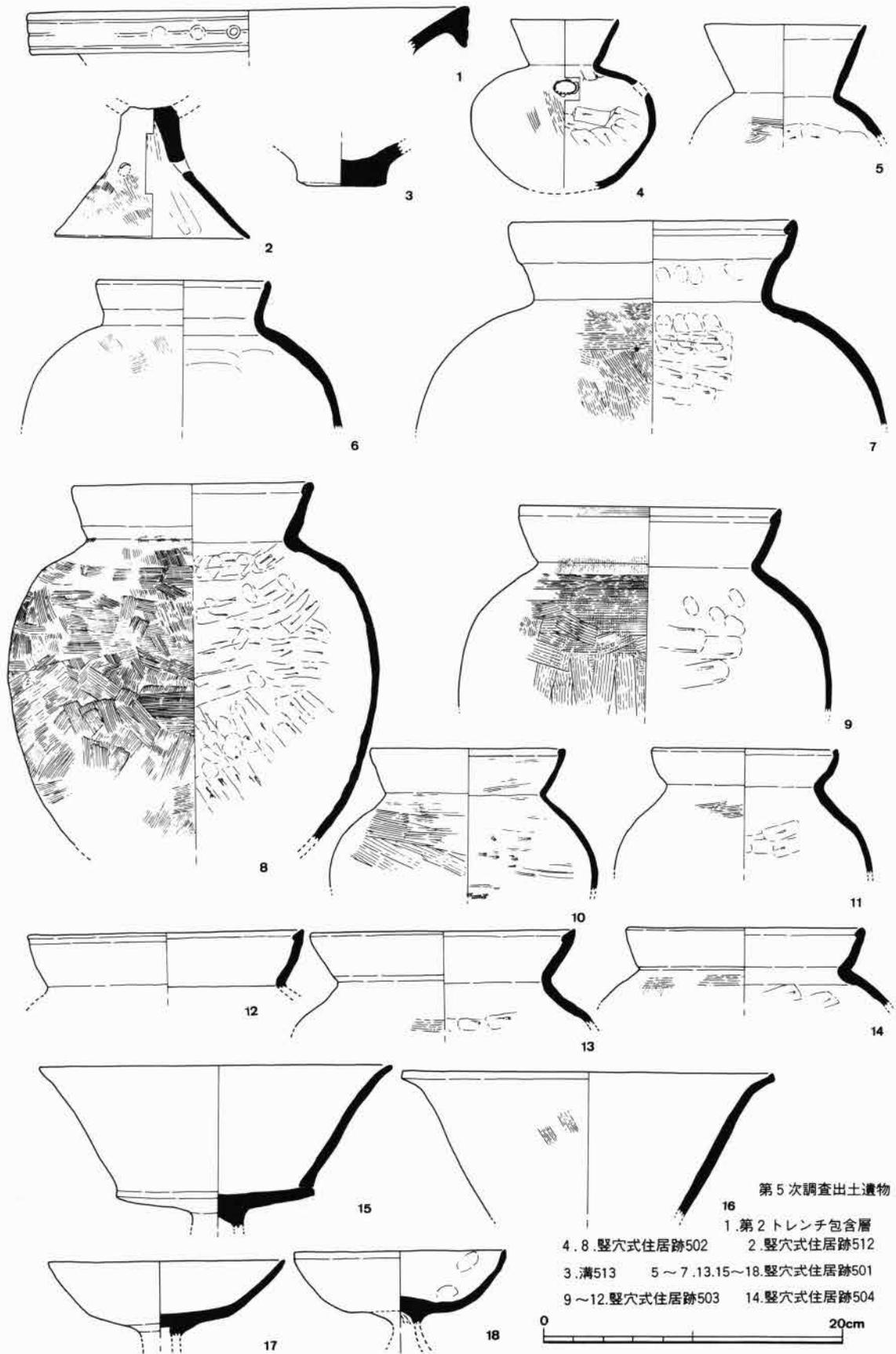
⑦溝(第67図)

溝217は、第2トレンチ北側の拡張区で検出した長さ約24.3m・幅約2.4mの溝である。東側は、

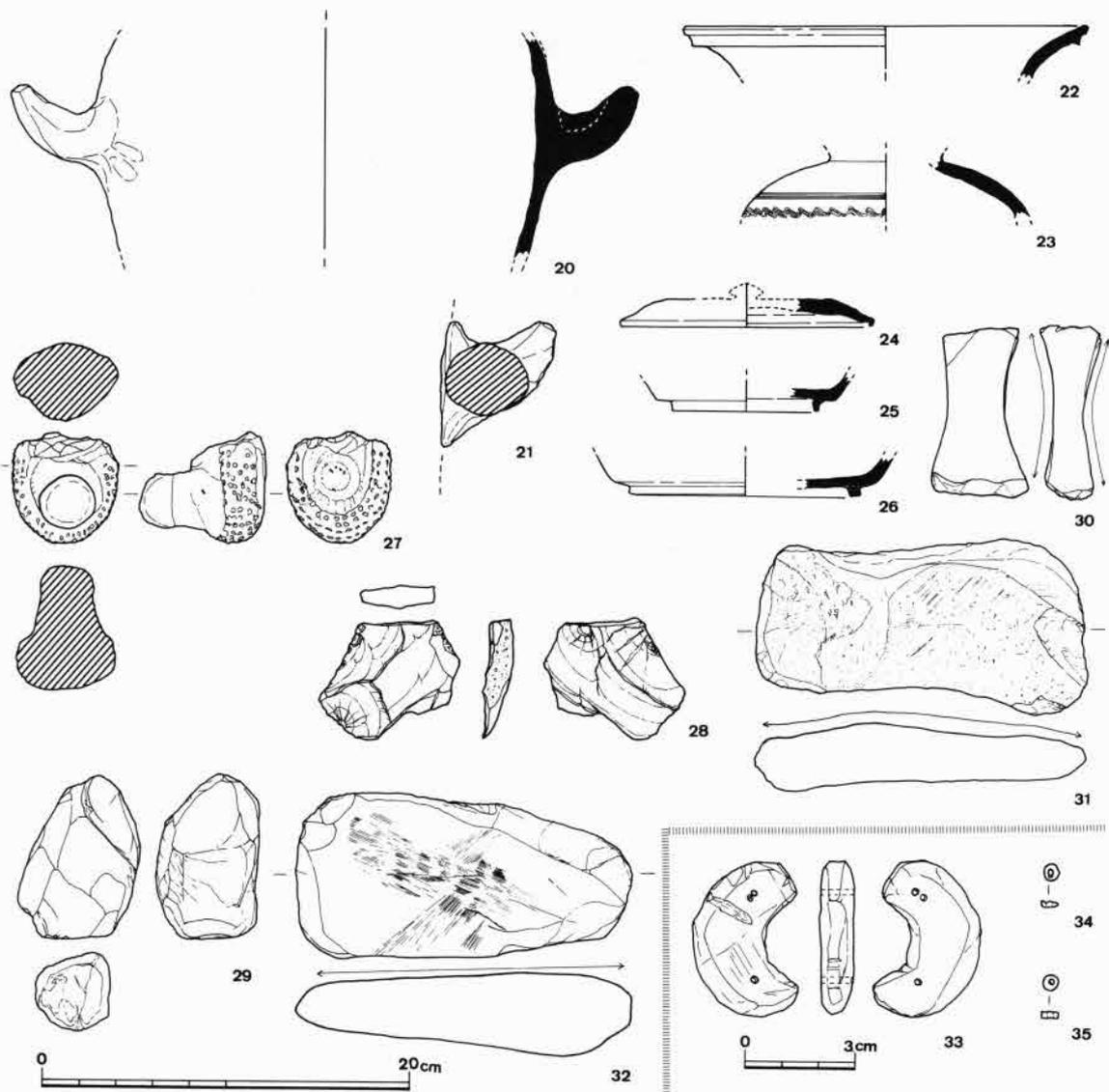
一部、第1トレンチにかかる。深さ約0.7mを測り、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。溝内から、瓦器片が出土しており、鎌倉～室町時代にかけての溝と推定される。

### 3. 出土遺物

1は、口縁部に擬凹線と竹管文を施す壺あるいは器台の口縁部である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土に角閃石を含んでいることから、生駒山西麓産の土器の搬入品とみられる。2は、高杯の脚部である。外面はハケ調整により、円形透かしを三方向に穿つ。1は包含層中から、2は竪穴式住居跡512から出土しており、時期はいずれも弥生後期後半頃と推定される。4・8・10は、竪穴式住居跡502から出土した。4は土師器壺で、体部は肩部が張る。口径7.0cm・器高11.2cmを測り、色調は、淡黄褐色土を呈する。体部外面はハケ、内面はヘラケズリを施し、体部に内面穿孔がみられる。8は布留系の甕で、やや肩部が張る。外面を細かい不整方向のハケ、内面にヘラケズリを施す。口径16.0cm・残存高24.0cmである。10は、同じく布留系の甕で、口径13.2cmを測る。口縁部内面は肥厚するが、やや丸みを持つ。外面は横方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。5～7・13・15～18・21・22は竪穴式住居跡501から出土した。5は、口径10.7cmを測る直口壺で、口縁内面に沈線を施す。6は、単口縁の壺である。口径は、11.4cmを測り、外面はハケ、内面にヘラケズリを施す。色調は淡黄褐色を呈する。7は、布留系の口縁を持つ壺である。口縁の上半部で、やや内湾気味に立ち上がる。口径18.6cm、外面は、横方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。色調は暗橙褐色土を呈する。13は、口径17.7cmの布留系甕の口縁部である。15・16は、大形高杯の口縁部である。それぞれ口径23.8cm、24.7cmを測り、深い杯部を持つ。16は、外面をハケ調整し、口縁端部を跳ね上げる。17は、口径14.7cmの高杯で、口縁部は、斜め上方に延びる。18は、同じく口径14.0cmの高杯で、口縁部は、やや内湾気味に立ち上がる。22は須恵器壺口縁部で、口径21.8cmを測る。9・11～12は、竪穴式住居跡503から出土した。9は布留系の甕で、口径17.2cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚する。口縁部の端部外面には、横方向のハケが認められる。14は、竪穴式住居跡504から出土した布留系甕の口縁部である。口径15.5cmを測る。27は、溝513から出土した異形土製品である。楕円形の体部に突起状の突出部がみられるもので、上部は欠損している。突出部先端は磨耗しており、突出部側を表面とすると、背面には剝離痕跡が認められる。側面全体に刺突が施されている。また、わずかに赤色顔料が付着していることから、本来は、赤彩されていたとみられる。28は、包含層中から出土したサヌカイト剥片である。29は、頁岩製の敲石で、叩き面に朱とみられる赤色顔料の付着が認められる。30は竪穴式住居跡502出土の砂岩製砥石で、33は、同じ住居跡から出土した滑石製勾玉である。頭部と尾部の両方に穿孔がみられる。34・35の白玉は、竪穴式住居跡504から出土した。31は、砂岩製砥石で、竪穴式住居跡525から出土し、32の頁岩製砥石は、竪穴式住居跡503から出土した。いずれも片面のみを使用している。その他の出土遺物は観察表を参照。

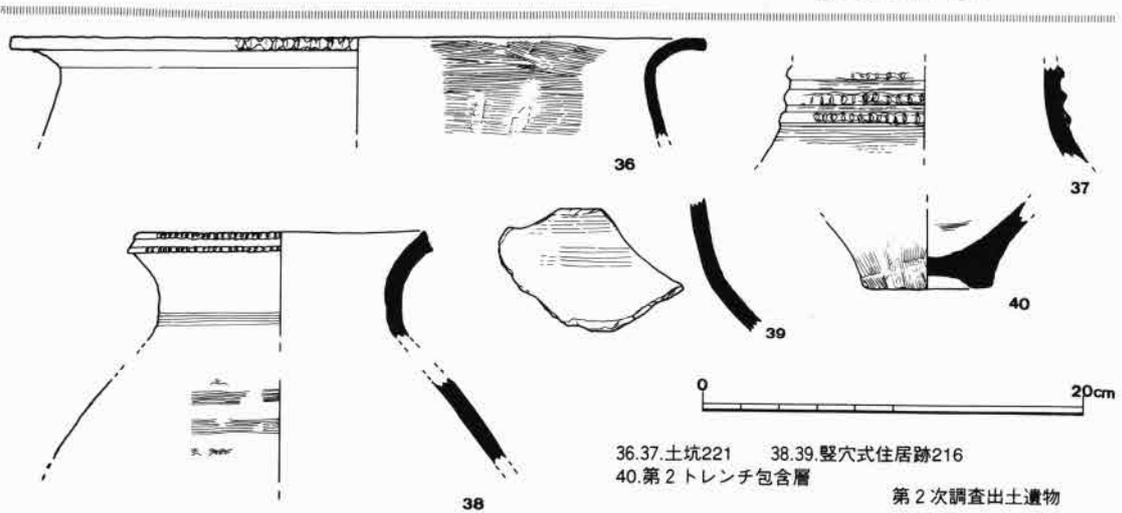


第68図 出土遺物実測図(1)



20.31. 竪穴式住居跡522 21.22. 竪穴式住居跡501 23~26.28. 包含層 27. 溝513 29. 竪穴式住居跡512  
 30.33. 竪穴式住居跡502 32. 竪穴式住居跡503 34.35. 竪穴式住居跡504

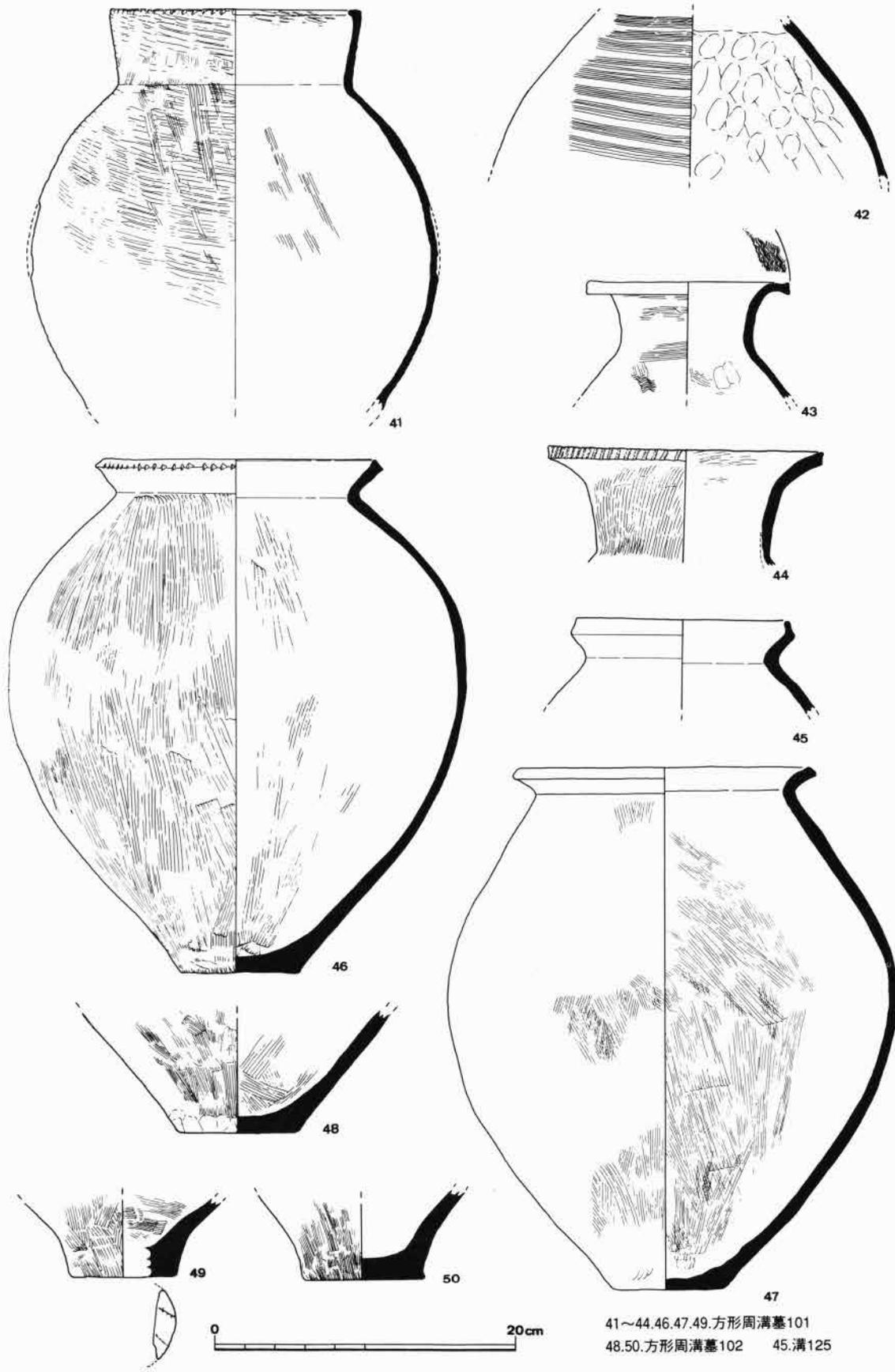
第5次調査出土遺物



36.37. 土坑221 38.39. 竪穴式住居跡216  
 40. 第2 トレンチ 包含層

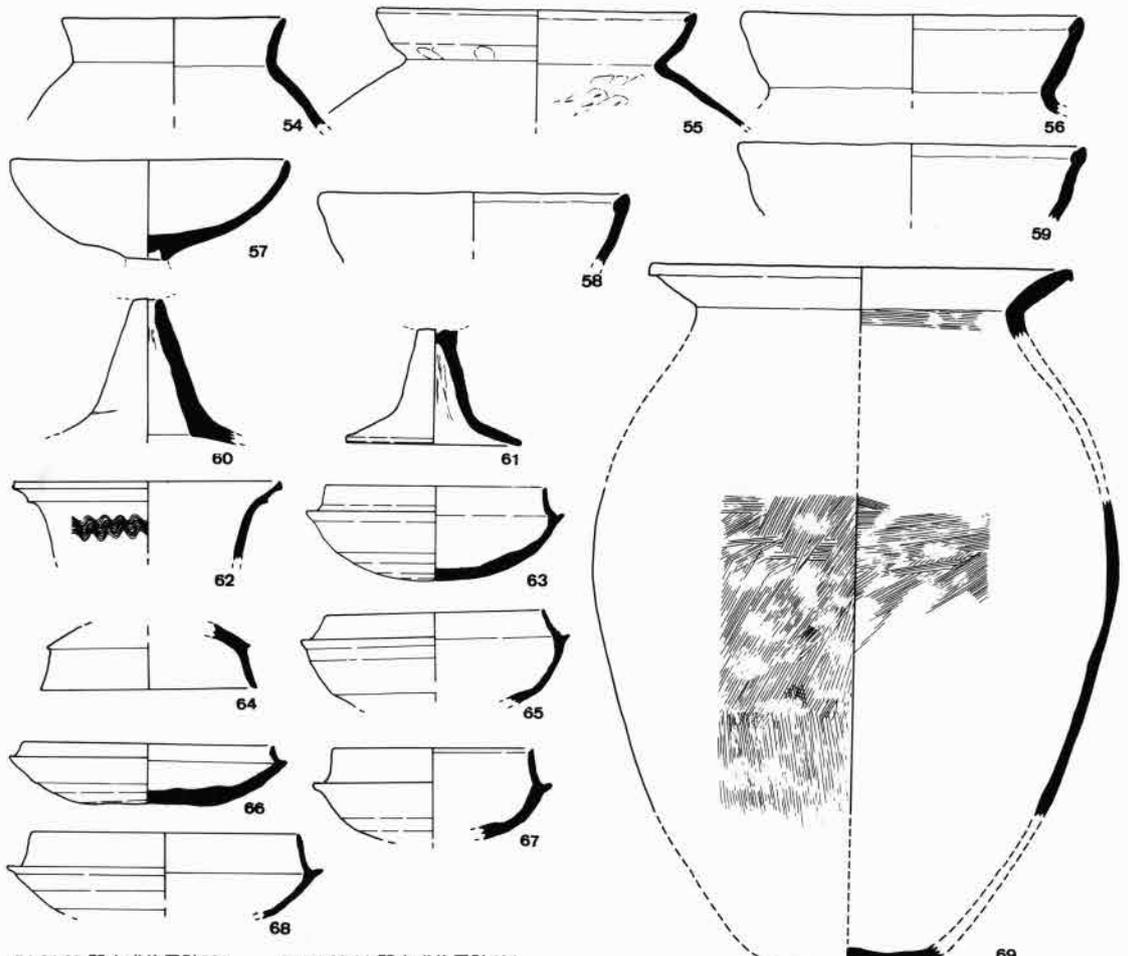
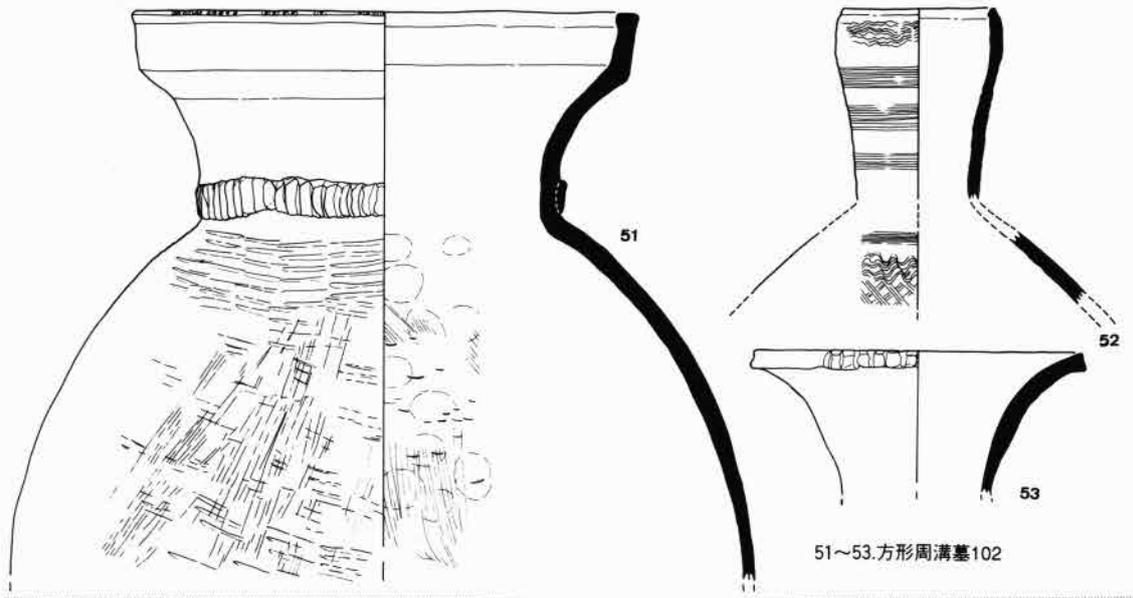
第2次調査出土遺物

第69図 出土遺物実測図(2)



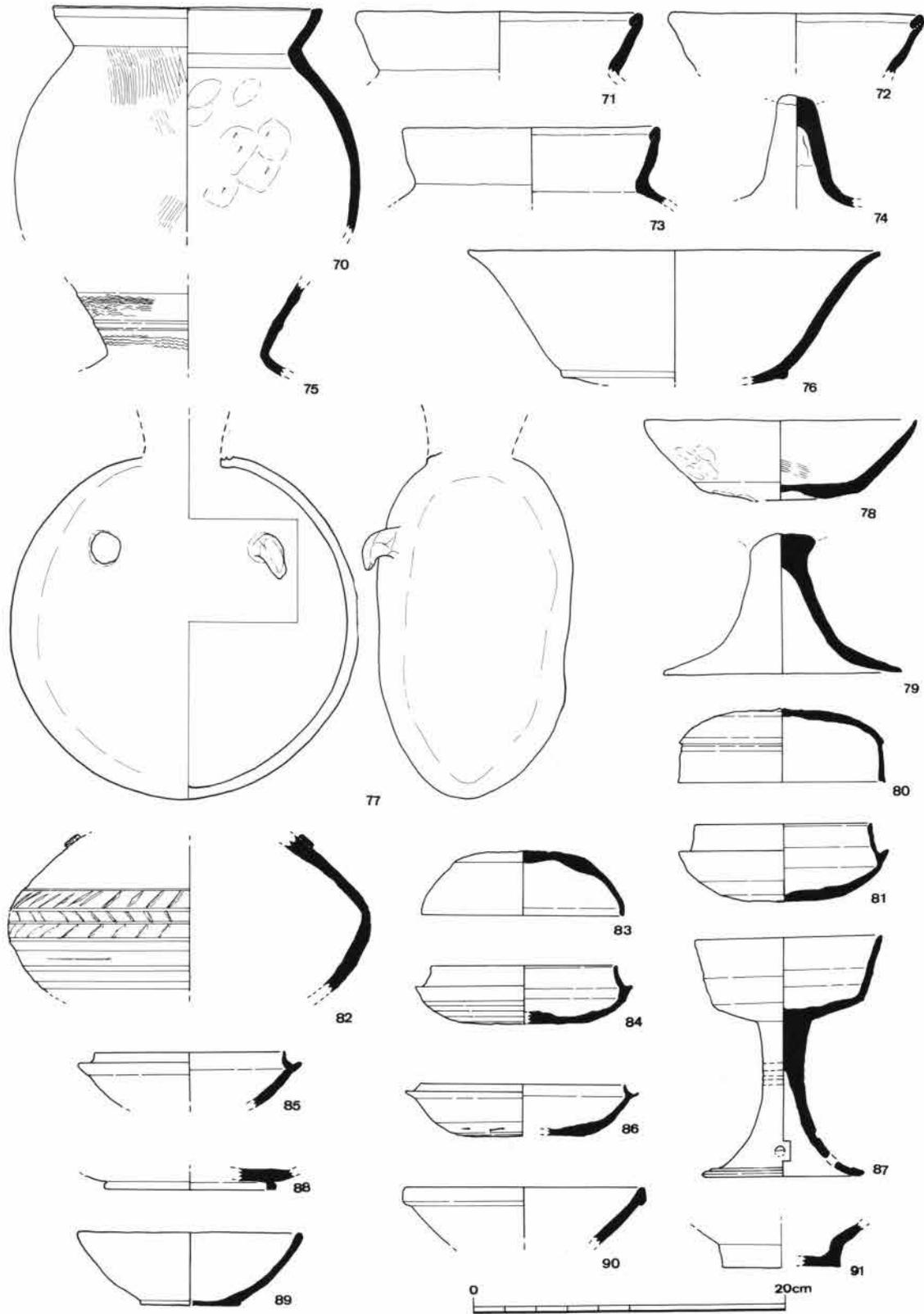
41~44.46.47.49.方形周溝墓101  
 48.50.方形周溝墓102 45.溝125

第70図 出土遺物実測図(3)



54.64.65. 竪穴式住居跡501    55.57.60.62. 竪穴式住居跡404  
 56. 竪穴式住居跡301    58. 竪穴式住居跡303    59. 竪穴式住居跡402  
 61. 掘立柱建物跡503    63.66~68. 竪穴式住居跡502    69. 竪穴式住居跡115

第71図 出土遺物実測図(4)

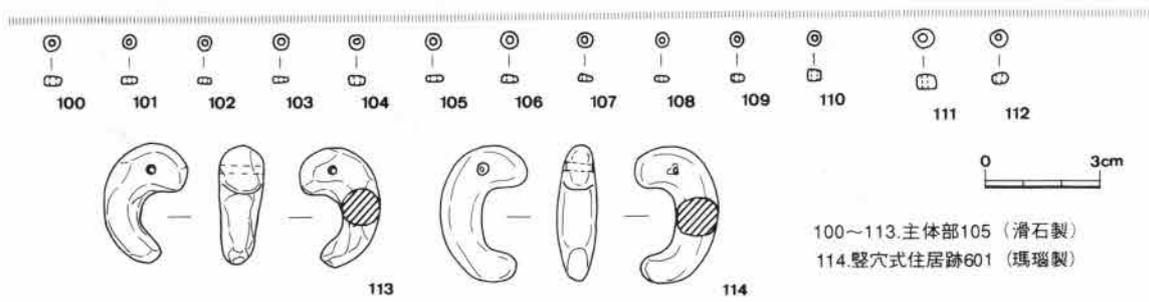
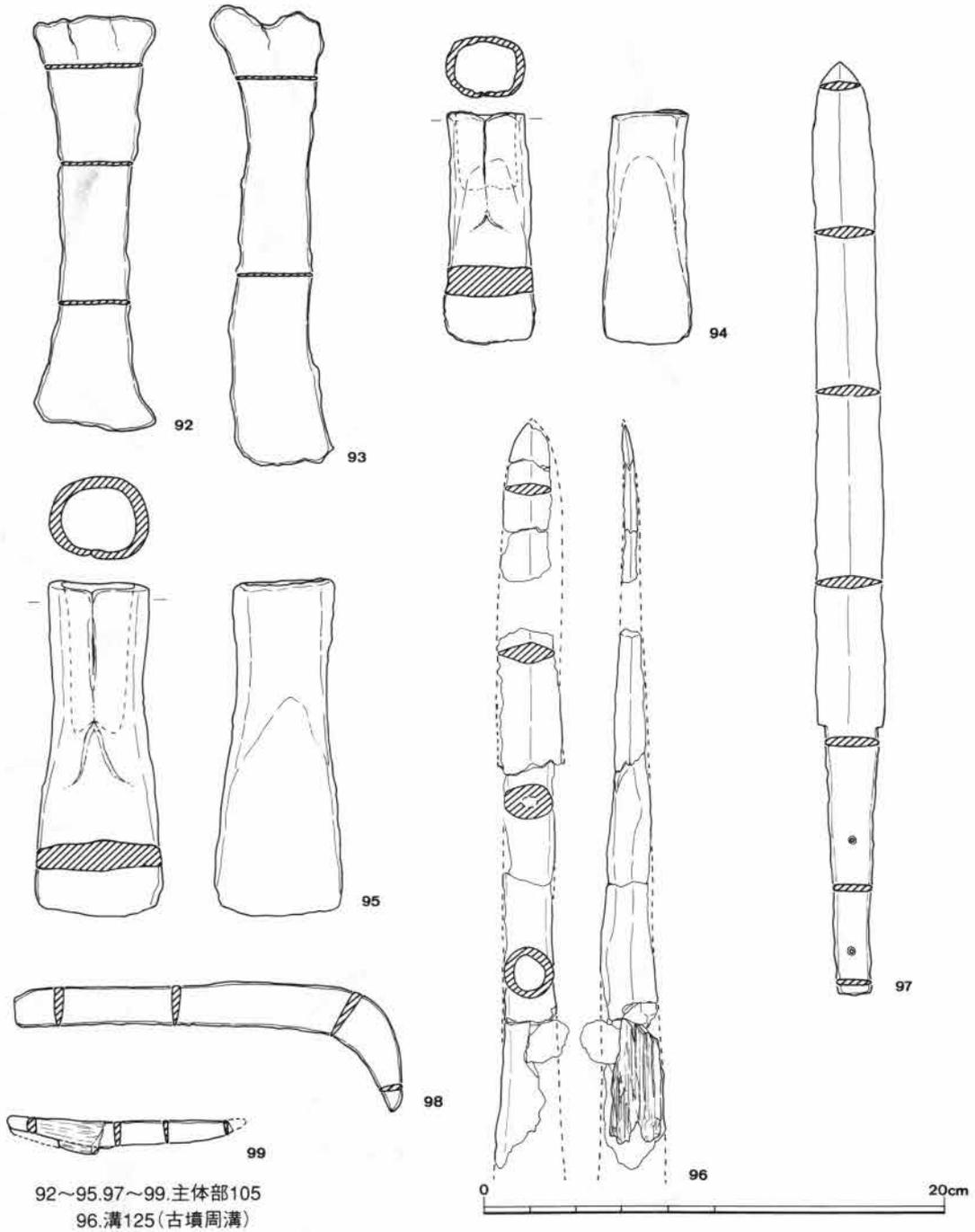


70~76. 竪穴式住居跡601  
79~88.90.91.包含層

77. 竪穴式住居跡602  
89. 第2 トレンチビット1

78. 竪穴式住居跡227

第72図 出土遺物実測図(5)



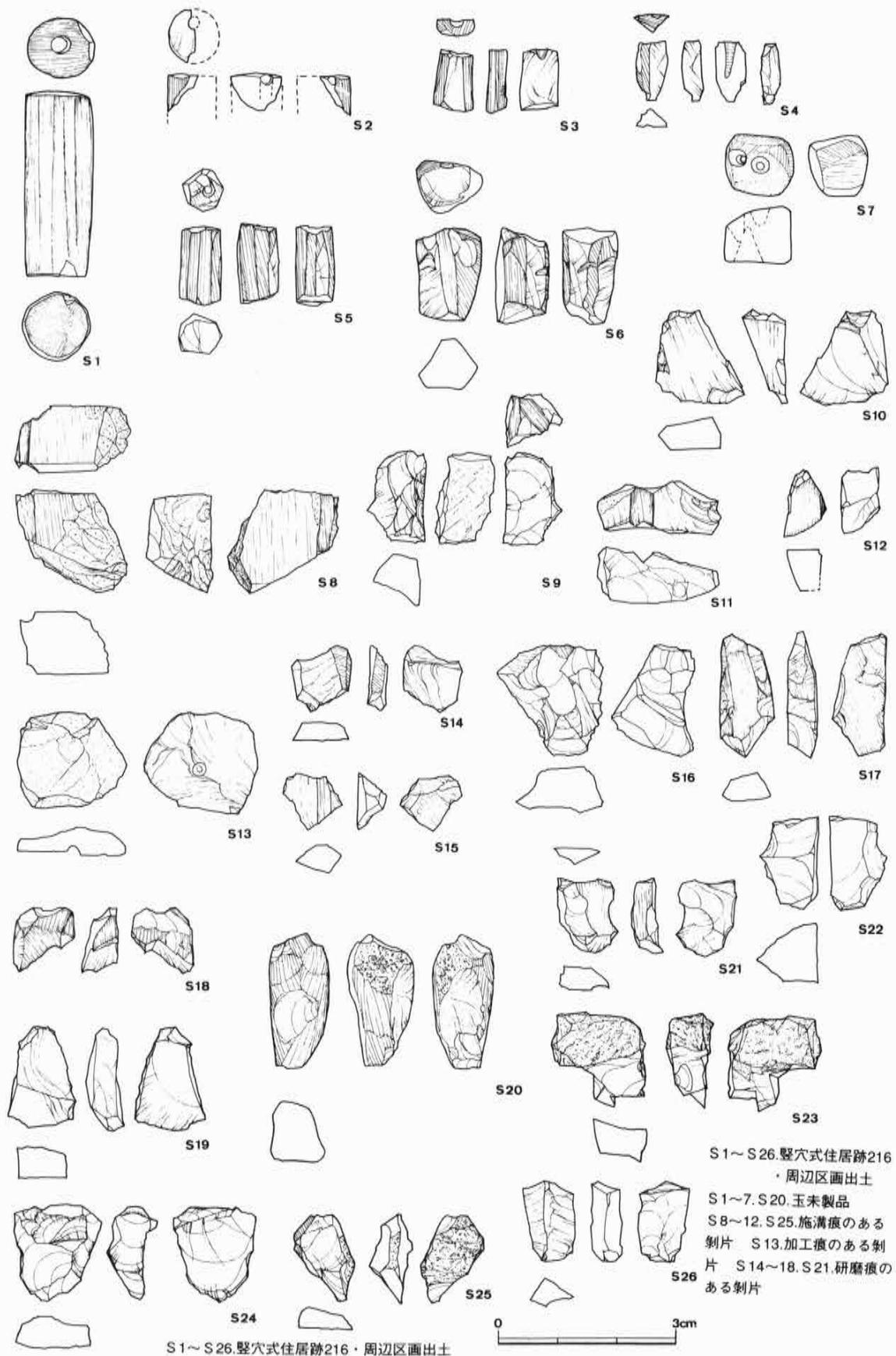
第73図 出土遺物実測図(6)

付表1 余部遺跡出土土器観察表

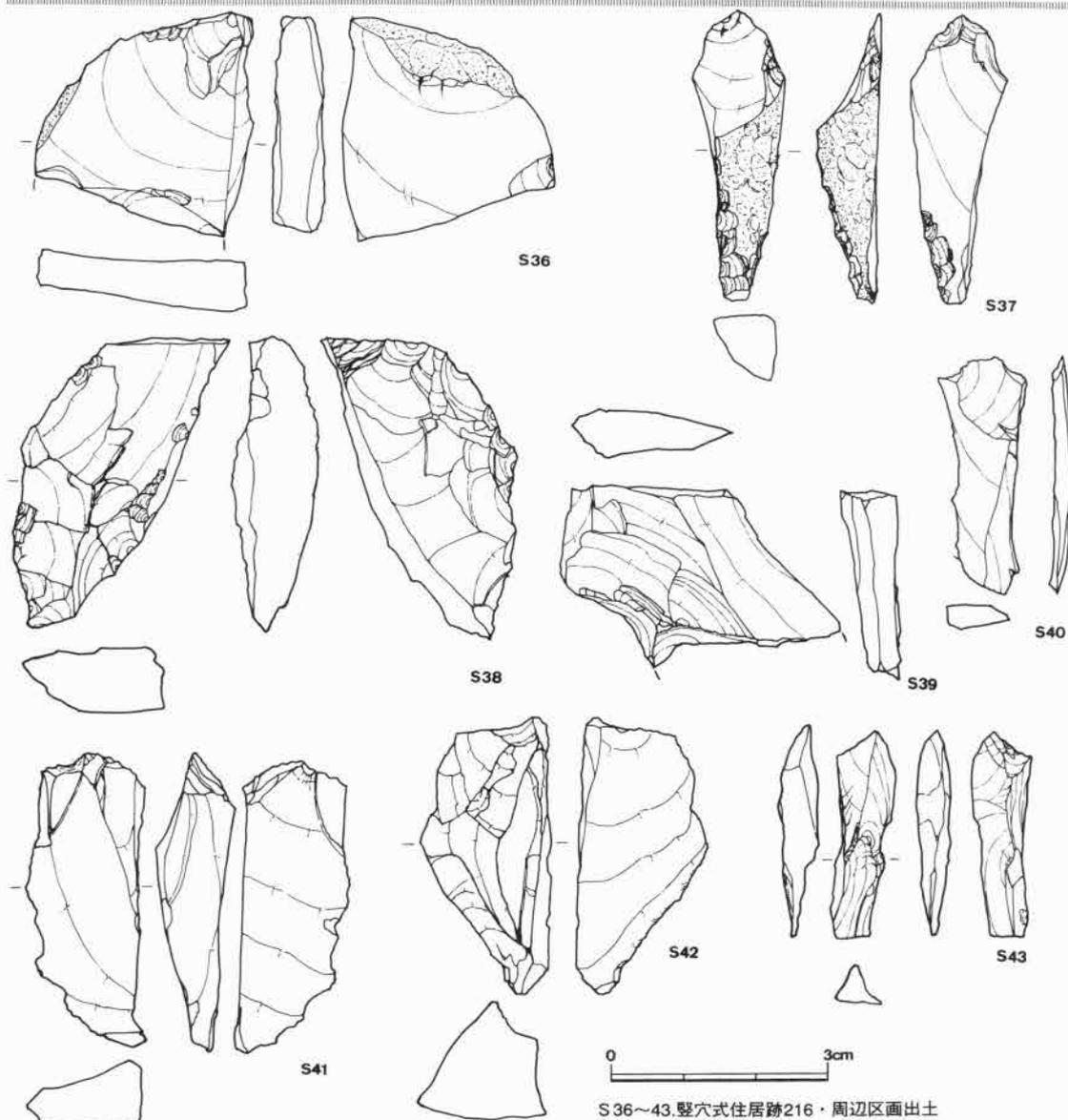
番号	種類	器形	口径	器高	色調	出土地点	調整等
36	弥生土器	甕	36.2	—	暗茶褐色	2トレ 土坑221	口縁部刻み目、口縁内面ハケ
37	弥生土器	壺	—	—	淡褐色	2トレ 土坑221	貼り付け突帯後刻み
38	弥生土器	壺	15	—	橙褐色	2トレ 竪穴式住居216	口縁部刻み目、外面波状文+直線文
39	弥生土器	壺体部	—	—	暗黄褐色	2トレ 竪穴式住居216	体部外面直線文
40	弥生土器	壺底部	4.8	—	暗橙褐色	2トレ 竪穴式住居216	内外面ハケ
41	弥生土器	壺	16.6	26.4	淡褐色	1トレ 方形周溝墓101	口縁部刻み目、内外面ハケ
42	弥生土器	壺	12.8	10.3	—	1トレ 方形周溝墓101	—
43	弥生土器	壺	13.2	7.6	—	1トレ 方形周溝墓101	—
44	弥生土器	壺	18.2	—	淡黄褐色	1トレ 方形周溝墓101	口縁部櫛描刺突文、内外面ハケ
45	弥生土器	壺	14.1	—	淡黄褐色	1トレ 包含層	—
46	弥生土器	甕	17.2	9.8	—	1トレ 方形周溝墓101	口縁部刻み目
47	弥生土器	甕	19.4	40	—	1トレ 方形周溝墓101	—
48	弥生土器	甕	—	—	—	1トレ 方形周溝墓102	—
49	弥生土器	甕	—	—	—	1トレ 方形周溝墓101	—
50	弥生土器	甕	—	—	—	1トレ 方形周溝墓101	—
51	弥生土器	壺	26.6	30	乳褐色	1トレ 方形周溝墓102	口縁端部刻み目、頸部突帯、タタキ後ハケ
52	弥生土器	壺	7.9	—	橙褐色	1トレ 方形周溝墓102	波状文+直線文+斜格子文
53	弥生土器	壺	17.2	—	淡褐色	1トレ 方形周溝墓102	口縁部に刻み目
54	土師器	壺	11.6	—	黄褐色	5トレ 竪穴式住居501	外面ナデ、内面磨耗ため調整不明
55	土師器	甕	15.8	—	淡黄褐色	4トレ 竪穴式住居404	外面磨耗のため調整不明、内面ヘラケズリ
56	土師器	甕	17.6	—	橙褐色	3トレ 竪穴式住居301	内外面とも磨耗のため調整不明
57	土師器	高杯	14.6	—	暗橙褐色	4トレ、竪穴式住居404	内外面とも磨耗のため調整不明
58	土師器	甕	16	—	橙褐色	3トレ、竪穴式住居303	内外面とも磨耗のため調整不明
59	土師器	甕	18	—	—	4トレ、竪穴式住居402	—
60	土師器	高杯	—	—	橙褐色	4トレ、竪穴式住居404	内面に絞り痕
61	土師器	高杯	—	—	淡黄褐色	5トレ、掘立柱建物503	外面ミガキカ、内面に絞り痕
62	須恵器	甕	13.9	—	青灰色	4トレ、竪穴式住居404	頸部外面に波状文
63	須恵器	杯身	14.6	5.4	灰色	5トレ、竪穴式住居502	底部外面ヘラミガキ
64	須恵器	杯蓋	11.4	3.3	青灰色	5トレ、竪穴式住居501	天井部カキ目
65	須恵器	杯身	11.4	4.8	灰色	5トレ、竪穴式住居501	底部外面ヘラケズリ
66	須恵器	杯身	14.6	5.4	灰色	5トレ、竪穴式住居502	—
67	須恵器	高杯	10.5	—	淡青灰色	5トレ、竪穴式住居502	—
68	須恵器	杯身	14	—	灰色	5トレ、竪穴式住居502	底部外面ヘラケズリ
69	土師器	甕	21.8	33 (推定)	淡褐色	1トレ、竪穴式住居115	—
70	土師器	甕	21.8	—	淡黄色	6トレ、竪穴式住居601	—
71	土師器	甕	17.8	—	黄褐色	6トレ、竪穴式住居601	—
72	土師器	甕	15.8	—	橙褐色	6トレ、竪穴式住居601	—
73	土師器	甕	16.2	—	橙滑色	6トレ、竪穴式住居601	—
74	土師器	高杯	—	—	橙褐色	6トレ、竪穴式住居601	内面に絞り痕
75	須恵器	壺か	—	—	青灰色	6トレ、竪穴式住居601	頸部外面に波状文
76	土師器	高杯	26.2	—	黄褐色	6トレ、竪穴式住居601	—
77	須恵器	提瓶	22.3	—	淡青灰色	6トレ、竪穴式住居601	—
78	土師器	高杯	17.4	—	橙褐色	6トレ 包含層	—
79	土師器	高杯	—	—	橙褐色	2トレ 包含層	—
80	須恵器	杯蓋	13.3	4.8	灰色	2トレ 包含層	—
81	須恵器	杯身	11.3	5	灰色	2トレ 包含層	—
82	須恵器	壺	—	—	淡青灰色	2トレ 包含層	肩部にヘラによる綾杉文
83	須恵器	杯蓋	12.8	4.2	淡灰色	2トレ 包含層	底部外面ヘラケズリ
85	須恵器	杯身	12	—	淡灰色	2トレ 包含層	—
86	須恵器	杯身	13.2	3.5	淡青灰色	2トレ 包含層	—
87	須恵器	高杯	12	15.3	青灰色	2トレ 包含層	脚部円形透かし4個
89	須恵器	杯	14.1	4.8	淡灰色	3トレ ビット1	底部糸切り、内外面ともナデ
90	白磁	椀	15.3	—	灰白色	1トレ 包含層	内外面とも施釉

付表2 余部1号墳出土鉄製品観察表

番号	種類	出土地点	長さ	幅	厚さ	備考
92	鉄鋌	1トレ 主体部105	18.1cm	5.5cm	1.8cm	重量40g (処理後)
93	鉄鋌	1トレ 主体部105	20.1cm	4.7cm	1.5cm	重量40g (処理後)
94	鉄斧	1トレ 主体部105	10.0cm	5.0cm	0.9cm	鍛造有袋鉄斧 袋部外径2.6cm、内径2.1cm
95	鉄斧	1トレ 主体部105	14.5cm	6.0cm	1.2cm	鍛造有袋鉄斧 袋部外径4.3cm、内径3.1cm
97	鉄剣	1トレ 主体部105	40.9cm	3.3cm	0.4cm	刃部長28.4cm、茎部長12.5cm、目釘孔あり
98	鉄鎌	1トレ 主体部105	17.0cm	2.0cm	0.35cm	折返し無く、戟として使用されたものか
99	鉄刀子	1トレ 主体部105	9.8cm	1.3cm	0.2cm	柄部厚さ0.4cm、木質一部残存
96	鉄鉾	1トレ 溝125 (古墳周溝)	32.4cm	2.8cm	0.3cm	袋部長17.2cm、袋部径3.0cm、袋部木質残存



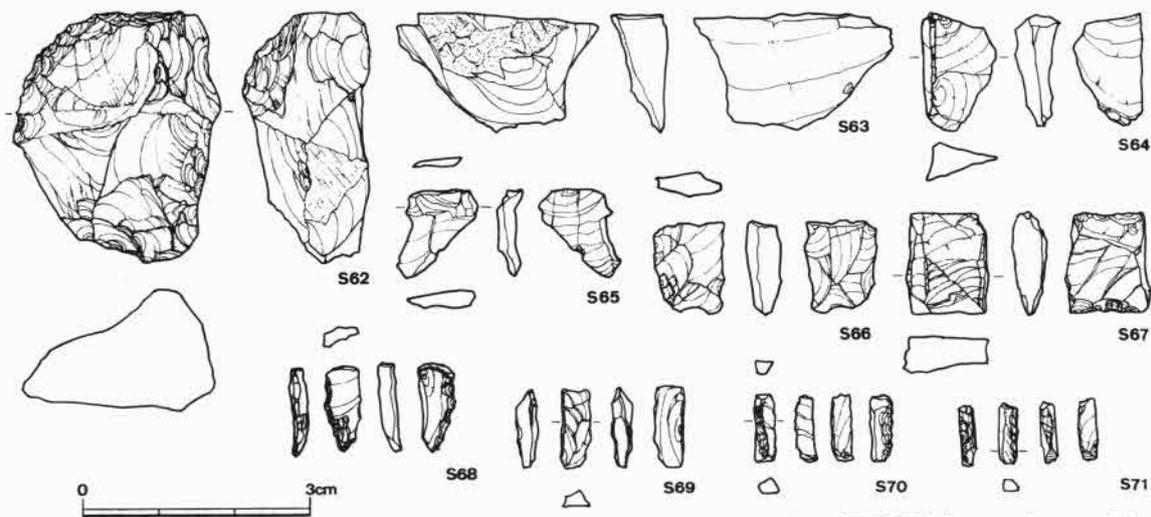
第74図 出土石製品実測図(1)



第75図 出土石製品実測図(2)



S44~S61.竪穴式住居跡216・周辺区画出土 (サヌカイト製)



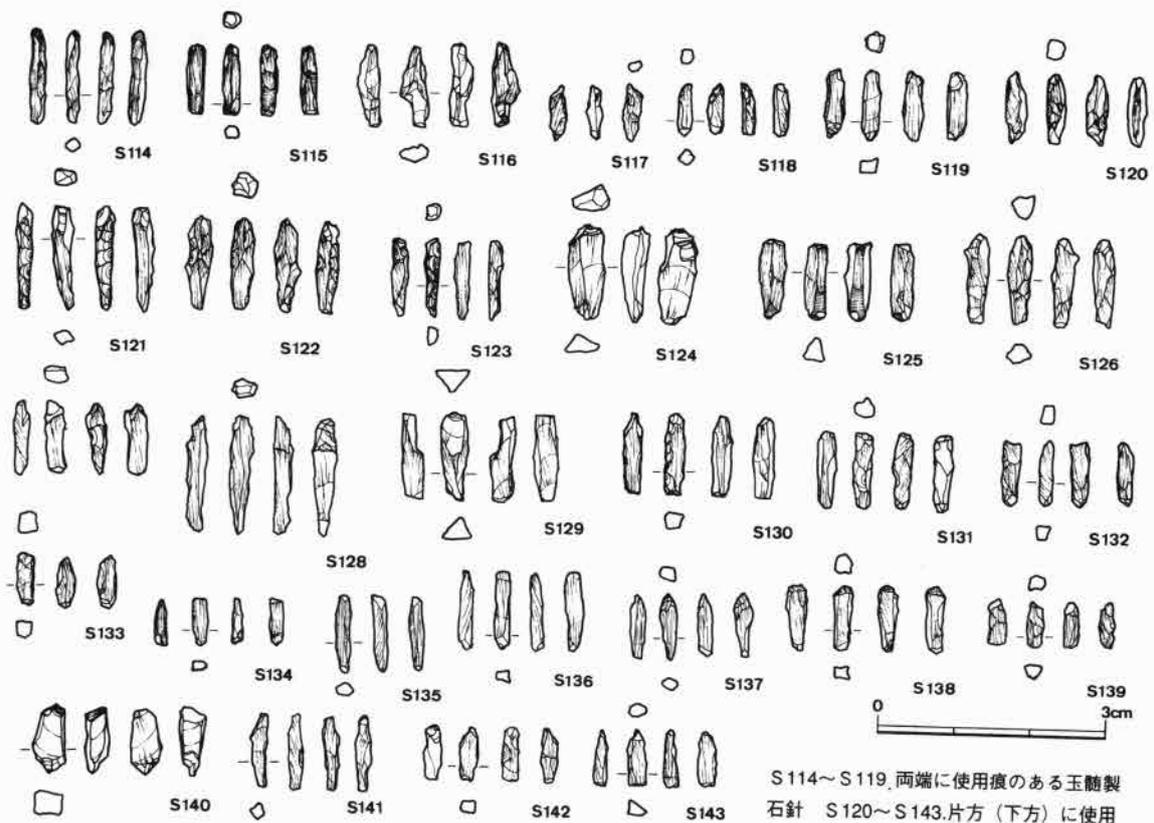
S62~S71.竪穴式住居跡216・周辺区画出土 (チャート製)

第76図 出土石製品実測図(3)



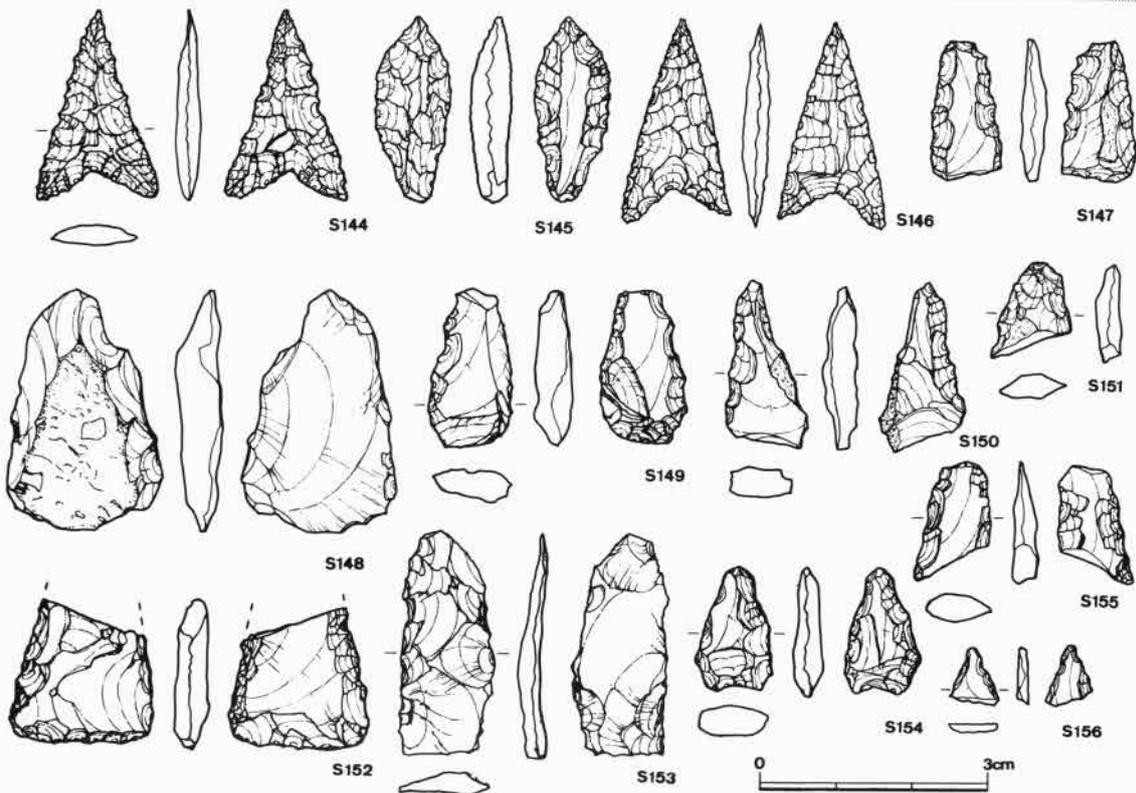
S72～S113. 竪穴式住居跡216・周辺区画出土  
 S98. S109～S111. S113. 調整剝離のある玉髓製石針  
 S83 側面に擦り切り痕跡ある剝片

第77図 出土石製品実測図(4)



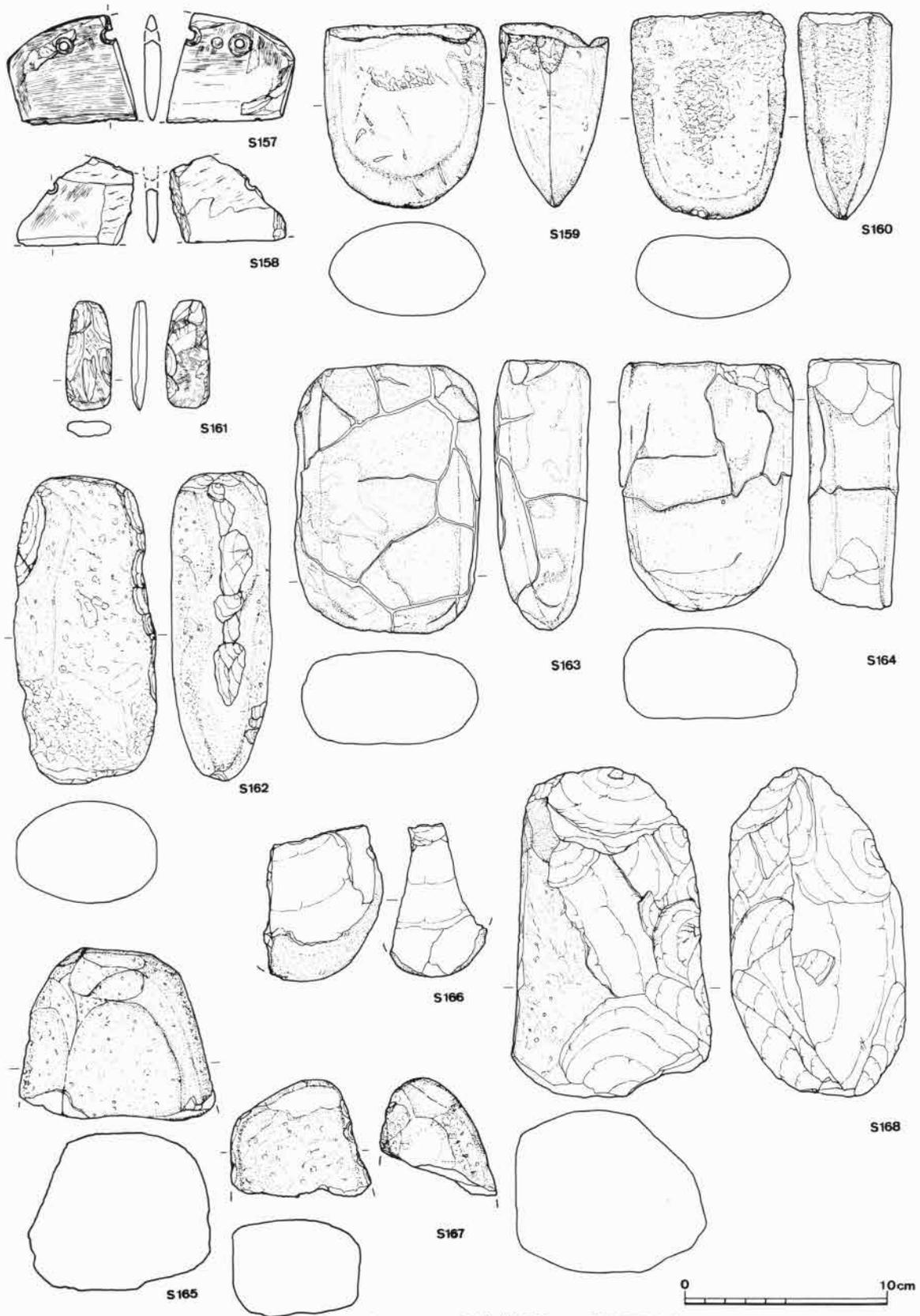
S114~S143. 竪穴式住居跡216・周辺区画出土

S114~S119. 両端に使用痕のある玉髓製石針 S120~S143. 片方(下方)に使用痕のある製玉髓石針 S140. 施溝痕のある玉髓製石針



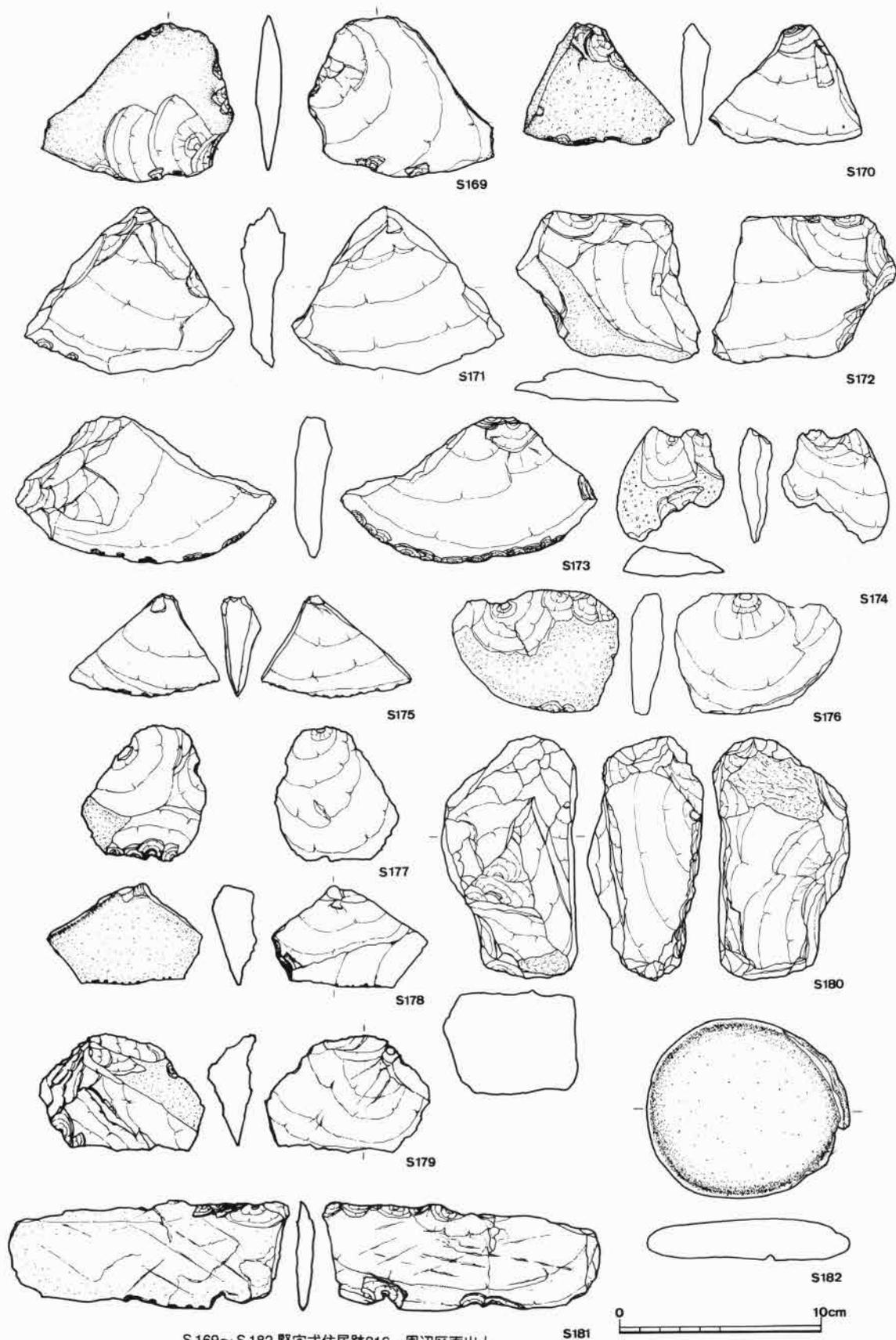
S144. 第2 トレンチ包含層(上層) S145~S156. 竪穴式住居跡216・周辺区画出土

第78図 出土石製品実測図(5)



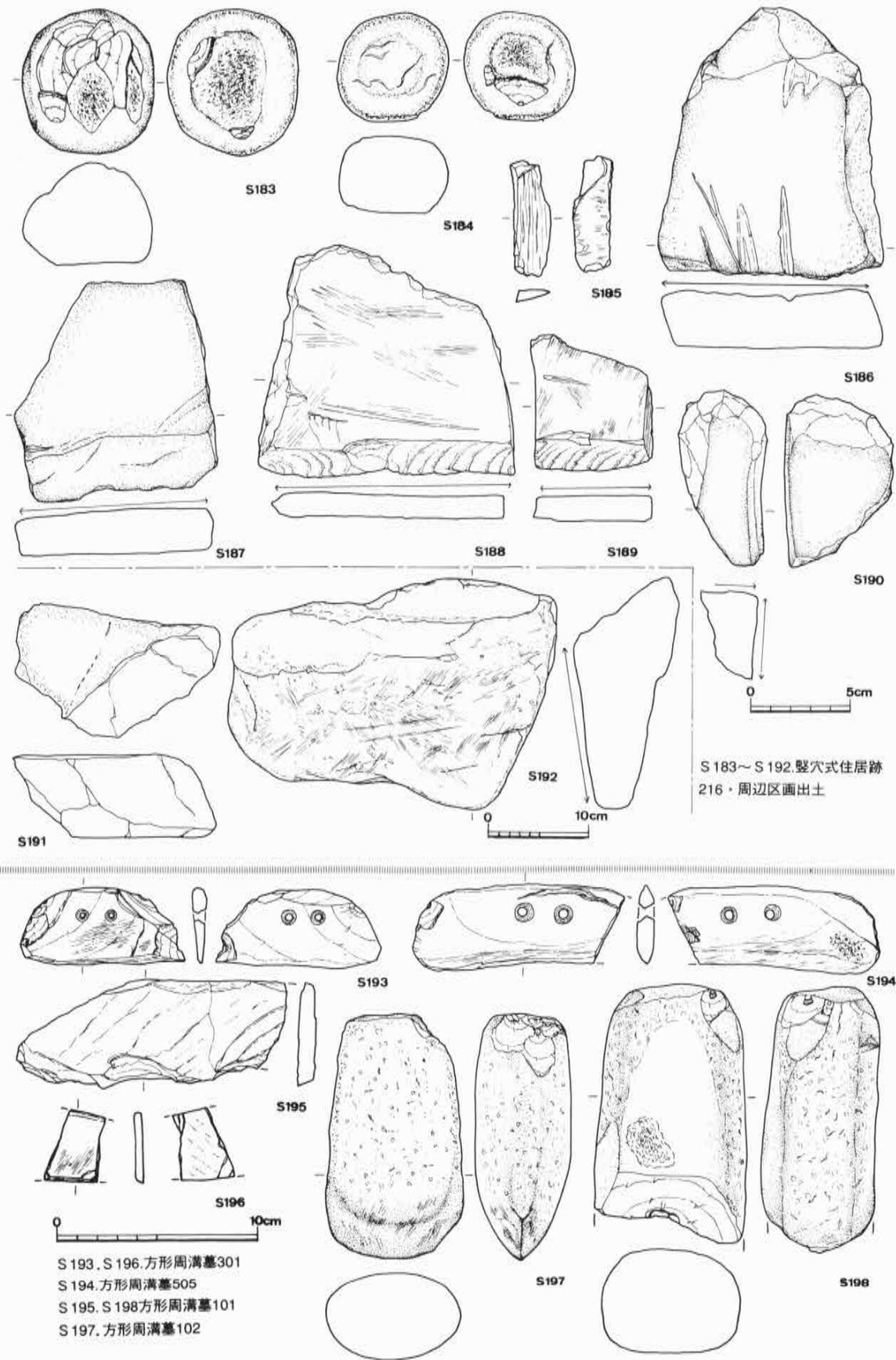
S157~S168. 竪穴式住居跡216・周辺区画出土

第79図 出土石製品実測図(6)



S 169~ S 182 竪穴式住居跡216・周辺区画出土

第80図 出土石製品実測図(7)



第81図 出土石製品実測図(8)

付表3 余部遺跡出土石製品観察表

	種類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	材質	出土地	備考		種類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	材質	出土地	備考
1	玉未成品	3.1	1.15	—	碧玉	5区	研磨・穿孔	64	剥片	1.55	0.85	0.5	チャ	4~6区	
2	〃	0.8	—	—	〃	6区	〃	65	〃	1.15	0.95	0.2	〃	土坑202	
3	〃	1.05	0.65	—	〃	土坑201	〃	66	楔状石器	1.2	0.9	0.45	メノ	6区	
4	〃	1.0	0.55	—	〃	6区	〃	67	〃	1.35	1.05	0.95	〃	土坑202	
5	〃	1.3	1.15	—	〃	4区・P15	〃	68	石針か	1.25	0.43	0.23	〃	6区	調整剥離有
6	〃	1.55	1.15	0.9	〃	4~6区	研磨	69	〃	1.05	0.4	0.25	〃	11区	
7	〃	1.0	1.15	—	〃	5区	研磨・穿孔	70	石針	0.9	0.29	0.25	〃	土坑201	調整剥離有
8	剥片(角 柱体)	1.95	1.65	1.1	緑凝	5区	研磨・直交 する施溝	71	〃	0.85	0.25	0.2	〃	5区	下端研磨有
9	剥片	1.55	0.8	1.0	碧玉	4~6区	施溝	72	石核	2.4	1.75	0.9	玉髓	1区	
10	〃	1.1	1.5	0.7	〃	土坑201	施溝	73	剥片	1.55	1.3	0.7	メノ	4~6区	
11	〃	2.05	0.9	0.8	〃	〃	施溝	74	〃	2.1	1.1	0.75	玉髓	土坑202	
12	〃	1.1	0.7	0.8	〃	〃	研磨・施溝	75	〃	1.15	1.2	0.65	メノ	9区	
13	〃	1.65	9.9	1.95	〃	4~6区	穿孔	77	〃	1.2	1.2	0.4	玉髓	5区	
14	〃	1.1	1.0	0.3	〃	〃	研磨	78	〃	1.0	0.9	0.6	〃	1区	
15	〃	0.95	1.05	0.45	〃	〃	研磨	79	〃	0.95	0.65	0.3	〃	6区	
16	〃	1.85	1.85	0.7	〃	〃	研磨	80	〃	0.8	〃	0.75	〃	土坑201	
17	〃	2.1	0.9	0.5	〃	〃	研磨	81	〃	1.9	1.7	1.15	メノ	4~6区	
18	〃	1.05	1.05	0.55	〃	〃	研磨	82	〃	1.05	0.85	0.25	玉髓	5区	
19	〃	1.65	1.0	0.55	〃	6区	〃	83	〃	1.1	0.6	0.4	〃	4~6区	側面に擦り 切り痕有
20	玉未製品	2.2	1.2	1.1	〃	4~6区	研磨	84	〃	1.5	0.8	0.35	メノ	〃	
21	剥片	1.2	0.95	0.45	〃	土坑201	研磨	85	〃	1.0	0.85	0.3	玉髓	土坑201	
22	〃	1.6	1.05	0.95	〃	土坑203	〃	86	〃	1.1	0.8	0.4	〃	土坑202	
23	〃	1.6	1.4	0.8	〃	9区	〃	87	〃	1.15	0.55	0.6	〃	5区	
24	〃	1.6	1.5	0.6	〃	4~6	〃	88	〃	1.45	0.85	0.35	〃	4~6区	
25	〃	1.5	1.05	0.7	〃	〃	施溝	89	〃	1.3	0.85	0.3	〃	土坑202	
26	〃	1.35	0.9	0.5	〃	〃	〃	90	〃	0.8	0.6	0.25	〃	4~6区	
27	筋砥石	8.1	5.65	5.8	砂岩	9区	二面に溝有	91	〃	0.8	0.4	0.3	〃	11区	
28	〃	8.1	4.65	5.6	〃	〃	三面に溝有	92	〃	1.65	0.8	0.45	〃	土坑201	
29	石鋸	7.3	8.1	1.1	紅片	2トレ	包含層	93	〃	1.55	0.95	0.4	〃	4~6区	
30	石鋸	5.8	2.4	0.5	〃	土坑221	2トレ北東隅 (拡張区)	94	〃	1.4	1.35	0.5	〃	〃	頭部に施溝
31	〃	1.3	—	0.25	〃	4~6区	使用痕有	95	石針未製 品か	1.6	0.45	0.45	玉髓	〃	
32	〃	3.9	2.1	0.3	〃	6区	〃	96	石針	0.85	0.5	0.45	メノ	〃	
33	〃	3.4	1.95	0.35	〃	4~6区	〃	97	〃	0.8	0.4	0.25	玉髓	土坑202	
34	〃	7.4	3.55	0.5	〃	〃	〃	98	〃	0.9	0.4	0.25	〃	9区	
35	〃	2.9	1.5	0.25	〃	〃	〃	99	〃	0.95	0.3	0.25	〃	4区・ P215	
36	剥片	3.0	2.9	0.7	サヌ	2区	〃	100	〃	0.9	0.3	0.1	〃	6区	
37	〃	4.0	3.3	1.2	〃	4~6区	〃	101	〃	1.25	0.65	0.3	〃	4~6区	
38	〃	4.75	2.1	1.25	〃	2区	〃	102	〃	1.2	0.35	0.2	〃	土坑201	
39	〃	2.6	3.25	0.5	〃	4~6区	〃	103	〃	1.1	0.35	0.25	〃	6区	
40	〃	3.3	1.2	0.2	〃	〃	〃	104	〃	1.3	0.55	0.25	メノ	4区・ P215	
41	〃	4.1	1.6	1.0	〃	〃	〃	105	〃	1.25	0.2	0.2	玉髓	5区	剥片か
42	〃	3.8	1.8	1.8	〃	〃	〃	106	〃	1.0	0.15	0.1	〃	9区	〃
43	〃	2.9	0.8	0.5	〃	9区	〃	107	〃	0.85	0.25	0.3	〃	4~6区	
44	〃	3.25	5.2	1.3	〃	4~6区	〃	108	〃	0.9	0.3	0.3	〃	6区	
45	〃	3.15	2.65	0.55	〃	1区	〃	109	〃	1.6	0.35	0.3	メノ	4~6区	調整剥離有
46	〃	1.8	1.0	0.4	〃	9区	〃	110	〃	1.6	0.6	0.35	メノ	土坑203	〃
47	〃	1.9	0.9	0.4	〃	11区	〃	111	〃	1.1	0.45	0.55	玉髓	土坑201	〃
48	〃	2.8	1.75	0.55	〃	9区	〃	112	〃	1.2	0.4	0.3	〃	9区	
49	石核	1.9	1.4	0.75	〃	1区	〃	113	〃	0.75	0.4	0.2	メノ	11区	調整剥離有
50	〃	1.45	0.8	0.45	〃	土坑201	〃	114	〃	1.3	0.25	0.4	玉髓	土坑202	両端使用痕
51	石錘	2.2	0.7	0.6	〃	5区	〃	115	〃	0.9	0.25	0.2	〃	5区	〃
52	石錘か	1.4	0.8	0.45	〃	4~6区	調整剥離有	116	〃	1.15	0.35	0.25	〃	土坑201	〃
53	剥片	1.55	0.6	0.3	〃	9区	〃	117	〃	0.75	0.2	0.2	〃	4~6区	〃
54	剥片	1.05	0.35	0.15	〃	1区	〃	118	〃	0.65	0.2	0.15	〃	9区	〃
55	剥片	1.0	0.6	0.25	〃	土坑201	〃	119	〃	0.9	0.25	0.25	メノ	5区	〃
56	石錘	0.9	0.5	0.25	〃	4~6区	調整剥離有	120	〃	0.9	0.25	0.2	玉髓	1区	下端使用痕
57	石錘	1.1	0.9	0.4	〃	4~6区	錐部折損	121	〃	1.35	0.3	0.2	〃	土坑203	〃
58	不明石器	1.2	0.7	0.25	〃	9区	〃	122	〃	1.2	0.3	0.3	〃	4~6区	〃
59	〃	1.35	0.45	0.2	〃	9区	調整剥離有	123	〃	〃	1.0	0.2	〃	5区	〃
60	〃	1.9	0.5	0.25	〃	1区	〃	124	〃	1.25	0.5	0.35	〃	4~6区	〃
61	〃	1.7	0.25	0.25	〃	4~6区	〃	125	〃	1.05	0.3	0.35	〃	〃	〃
62	石核	3.35	2.8	1.75	チャ	8区	〃								
63	剥片	1.55	2.25	0.7	〃	4~6区	〃								

	種類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	材質	出土地	備考
126	石針	1.15	0.3	0.3	玉髓	4~6区	下端使用痕
127	〃	0.95	0.3	0.25	〃	4区・P215	〃
128	〃	1.5	0.3	0.25	〃	5区	〃
129	〃	1.15	0.3	0.3	〃	9区	〃
130	〃	1.05	0.25	0.25	〃	5区	〃
131	〃	1.0	0.25	0.2	〃	6区	〃
132	〃	0.85	0.2	0.25	〃	5区	〃
133	〃	0.7	0.23	0.2	〃	9区	〃
134	〃	0.6	0.18	0.12	〃	4~6区	〃
135	〃	1.05	0.2	0.2	〃	5区	〃
136	〃	1.05	0.2	0.15	〃	土坑202	〃
137	〃	1.05	0.2	0.2	〃	9区	〃
138	〃	0.85	0.25	0.25	〃	5区	〃
139	〃	0.6	0.2	0.2	〃	5区	〃
140	〃	0.85	0.5	0.35	〃	9区	〃
141	〃	1.0	0.2	1.05	〃	1区	〃
142	〃	0.8	0.2	0.2	〃	5区	〃
143	〃	0.75	0.2	0.15	〃	1区	〃
144	石鏃	2.57	1.65	0.3	チャ	2包含	
145	〃	2.5	1.05	0.6	サヌ	周溝101	
146	〃	1.75	1.45	0.35	〃	4~6区	
147	石鏃未製品	1.9	0.95	0.3	〃	〃	
148	〃	3.2	2.0	0.6	〃	〃	
149	〃	2.1	1.05	0.45	〃	〃	
150	〃	2.2	1.15	0.5	〃	〃	
151	〃	1.25	1.05	0.3	〃	〃	折損
152	石鏃未製品	1.95	1.9	0.45	〃	〃	
153	剝片	3.0	1.25	0.4	〃	1区・P214	
154	石鏃未製品	1.65	1.0	0.4	〃	4~6区	
155	〃	1.5	1.0	0.3	〃	1区	折損
156	〃	0.7	0.1	1.5	〃	4~6区	〃
157	石庖丁	5.5	6.45	0.9	粘板	1区	〃
158	〃	4.25	5.75	0.65	〃	9区	〃
159	石斧	9.15	8.0	5.45	砂岩	2区	叩き石転用
160	〃	10.1	7.75	4.15	閃緑	11区	〃
161	〃	5.45	2.15	0.75	頁岩	6区	〃
162	〃	15.15	7.05	4.9	閃緑	6区	叩き石転用

	種類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	材質	出土地	備考
163	石斧	13.4	9.35	4.75	砂岩	10区	
164	〃	12.3	4.5	8.2	〃	〃	
165	〃	8.65	9.05	8.0	〃	〃	折損
166	〃	7.5	6.45	4.85	〃	6区	〃
167	石斧	5.8	6.3	5.7	閃緑	2包含	〃
168	同未製品	16.5	9.8	砂岩	砂岩	2区	
169	刃器か	5.8	6.3	5.7	〃	6区	
170	〃	6.0	7.4	1.45	〃	〃	
171	〃	8.3	10.5	2.1	ホル	〃	
172	〃	7.6	9.05	0.95	砂岩	〃	
173	〃	8.4	12.4	1.35	ホル	〃	使用痕有
174	剝片	5.8	5.3	1.55	溶岩	土坑201	
175	刃器か	5.1	7.4	1.95	砂岩	2包含	
176	〃	6.0	8.2	1.6	〃	6区	
177	〃	6.25	6.8	1.5	〃	〃	調整剝離有
178	〃	5.05	7.7	2.25	〃	〃	
179	〃	7.45	6.55	2.4	〃	〃	
180	石核	12.05	6.75	5.7	チャ	1区	
181	剝片	5.1	13.4	0.9	粘板	6区	石包丁か
182	叩き石か	8.95	10.05	2.1	砂岩	2区	
183	叩き石	7.2	6.45	5.15	〃	1区	
184	〃	5.45	5.55	3.35	〃	6区	
185	砥石	5.7	1.9	0.6	変岩	9区	
186	〃	13.55	11.0	3.9	砂岩	6区	V字溝有
187	〃	10.6	10.1	2.6	〃	1区	
188	〃	11.5	11.5	1.3	粘板	10区	S189と接合
189	〃	6.65	5.8	1.3	〃	4区	S188と接合
190	〃	8.7	5.3	4.25	砂岩	2包含	
191	台石	12.6	20.4	8.5	〃	6区	
192	砥石	32.6	23.0	10.3	頁岩	〃	
193	石庖丁	3.85	8.2	0.7	粘板	周溝301	
194	〃	4.4	10.55	0.85	〃	周溝505	
195	同未製品	5.5	13.5	0.9	〃	周溝101	
196	石包丁	3.75	2.6	0.4	〃	周溝301	
197	石斧	12.1	6.85	4.7	〃	周溝102	
198	〃	12.85	7.55	5.6	砂岩	周溝101	折損

・略号:サヌ(サヌカイト)・メノ(メノウ)・チャ(チャー  
ト)・紅片(紅簾片岩)・閃緑(閃緑岩)・緑凝(緑色凝灰岩)。

#### 4. ま と め

**弥生中期拠点集落** 余部弥生中期拠点集落は、盆地中央部の段丘上に位置する。東側は3~4mの比高差をなす段丘面が北西から南東にむけて延び、防御性の高い地形を示す。第2・5次調査では、遺跡の北半を調査し、中期中葉~後半の方形周溝墓群を検出しており、北部が拠点集落の外縁部に形成された墓域であることが判明した。一方、この時期の住居跡は、遺跡中央部で行われた第4次調査で、11基以上の竪穴式住居跡が検出され、居住域の広がり確認された。現地形は遺跡外縁部から中央部に向かって徐々に上がっており、平坦面が大きく広がる標高99mの等高線を一つのラインとして、居住域を推定復原したものが、第82図である。第5次調査地の西寄りの地点では、比高差1m以上の明確な傾斜変換点を確認しており、これより西側では弥生時代の層位がグライ化していることから、水田域として利用された可能性が高い。

近年の調査では、弥生拠点集落の多くは、環濠集落となっていたことが判明しているが、余部遺跡もその可能性は十分考慮されねばならない。遺跡の東側は、段丘面の比高差が大きいため、環濠は部分的なものに留まる可能性があるが、平野部が広がる西側には、環濠の検出される可能



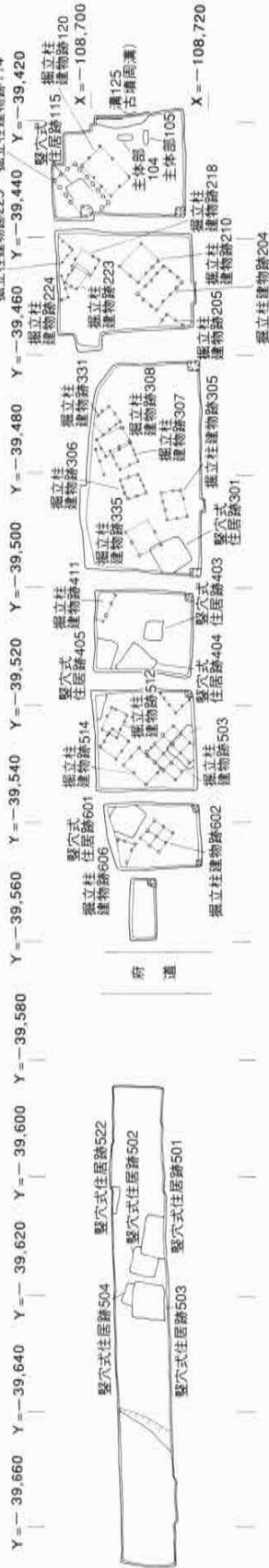
第82図 余部遺跡(北部)弥生時代中期集落域推定図

性は高いであろう。第2次調査地では、第7トレンチで、南西から北東へのびる幅1.2~1.6m・深さ0.3~0.5mの断面「U」字形の溝701を部分的に検出しているが、出土遺物が乏しく、時期を確定する資料は得られなかった。土層の堆積状況からは、弥生時代の流路となる可能性が高いものである。また第5次調査地の中央西寄りの地点では、南東から北西にのびる幅約0.7m・深さ0.5~0.7mの断面台形の溝を検出しており、ここから異形土製品(第69図27)が単独で出土している。この溝は、規模が小さいことから環濠そのものではなく、そこから集落外へ排水するなどの機能を持っていた溝と推定される。土製品は陽物を象ったと見ることも可能で、その場合、集落の北西隅にあたることから、大阪府池上曾根遺跡で出土した陽物形土製品と同様、集落への邪気の進入を阻むことを意図したと考えることもできる。この溝は、上層に弥生時代後期後半の竪穴式住居が構築されていることから、後期には完全に埋没していたことが明らかである。亀岡市内では、弥生時代前期環濠集落としては、太田遺跡がよく知られてきたが、中期の拠点集落は盆地北部の千代川遺跡周辺に想定されているものの、集落域など不明な点が多く、今回の余部遺跡の調査は、盆地内の中期拠点集落の実態を考えるうえで貴重な資料を得ることになった。

**古墳時代集落と中期古墳** 第2・5次調査では古墳時代中期の竪穴式住居跡15棟以上を確認し、中期の集落が遺跡北半に大きく広がっていることが推定される。この集落は、5世紀中葉前半から少なくとも6世紀後半頃まで続く集落であり、5世紀中葉前半における古墳の築造が集落開発の契機になったとみられる。余部1号墳としたこの古墳は、これまでその存在を知られていなかった中期古墳であり、2次調査の調査地東端で周溝の一部とみられる溝を確認し、その周辺埋葬とみられる主体部から、鉄鋌2枚のほか、鉄剣・鉄斧・鉄鎌などの鉄製品が出土した。これらは、古墳の周辺埋葬に、鉄器が多量副葬される稀有な例である。出土した鉄鎌や鉄鋌は、朝鮮半島系の初期馬具や帯金具を出土した兵庫県加古川市行者塚古墳と同型式のものであり、被葬者の出自や系譜を考えるうえで貴重な資料が得られた。朝鮮半島系の技術者集団と深い関わりをもつとみられるこの古墳造営集団は、古墳時代中期に新たに目が向けられた盆地中央部の集落開発を主体的に担ったものであり、新興の勢力として、その系譜が注目される。

**碧玉製玉作り工房** 余部遺跡の第2トレンチで検出された竪穴式住居跡216からは、碧玉製管玉作りの関連遺物が出土している。玉作り関連遺物は、住居跡216の北西約10mの同トレンチの北端で不整形の土坑から紅籐片岩製の石鋸を検出した他には、第1~8トレンチを通じて出土し

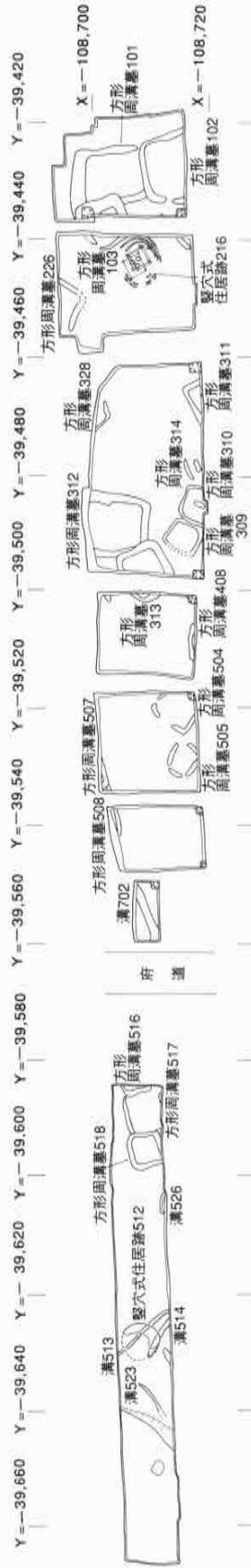
<古墳時代の主な遺構>



第5次調査地

第2次調査地

<弥生時代の主な遺構>

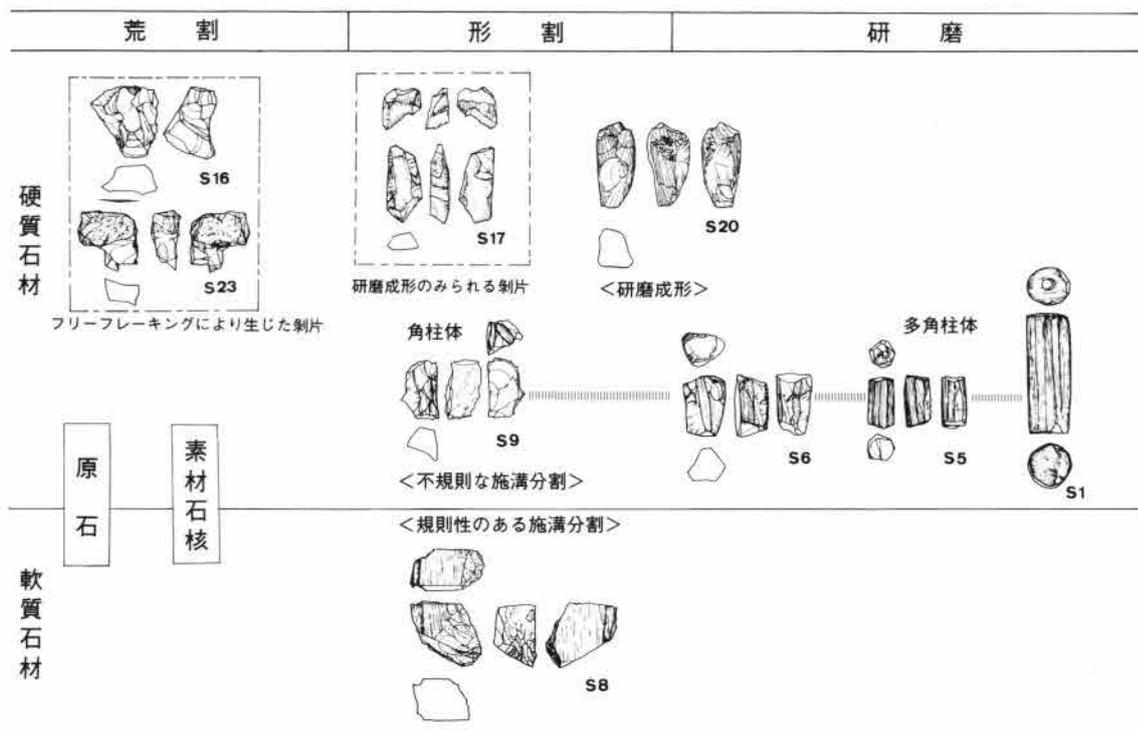


第83図 主要遺構変遷図

ていない。したがって玉作り関連の遺構は、第2トレンチの北側に範囲を拡張する可能性はあるが、基本的に小規模な生産形態のもとに製作が行われていたとみられる。また、住居内では石鎌などの小形の石器製作が同時に行われていることや、住居の建て替えが3回以上行われており、比較的長期にわたって継続的に玉製作が行われたことが判明している。

(1)玉材・工具類における石材の搬入 管玉製作に用いられた石材は、一部を蛍光X線分析にかけた結果、分析値は兵庫県日高町猪爪(玉谷)産の碧玉と同様の数値が得られることが判明した<sup>(注2)</sup>。石針の原石である玉髓・瑪瑙については、近隣の地域では、田代 弘が踏査により、丹後半島の沿岸部で転石として採集できることを明らかにしており、本遺跡の玉髓も、こうした地域から搬入された可能性が高い。一方、サヌカイトについては一部の蛍光X線分析を実施し、奈良県二上山のサヌカイトと同様の測定値を得ている。

(2)碧玉製管玉の製作工程 玉作り関連遺物は、量的には少ないものの、その製作工程を窺い得る資料が幾つかある。出土した碧玉製管玉未製品、同剝片、緑色凝灰岩製の角柱体から、製作技法を推定し、図化したものが、第84図である。特に形割の段階においては、資料に偏りがあり、細部の工程を完全に復原することは困難であるので、大きく段階別に資料を提示することにした。まず、素材石核は出土していないが、原礫面を残した碧玉剝片(第74図S23)や、フリー・フレーキングにより生じたとみられる剝片(S16)があることから、原石から素材石核を作出する荒割の段階が想定できる。次に素材石核に、石鋸で擦切施溝を行い、角柱状に打割する形割が行われるが、この工程の資料は少ないながら、2つの手法に分別される。第1は硬質石材(碧玉)にみられ、打面に鋭角で交わる複数の施溝痕が認められるものがある(S39)ことや、打割前に研磨が施されているもの(S16・17)がかなり認められることから類推される方法である。この手法は、施溝分割に一定の規則性を持たせず、素材石核の形状に合わせて、施溝分割を弾力的に取り入れ、研磨調整を繰り返しながら、角柱体に近づけてゆくものである。硬質石材の未製品のなかには、いびつな角柱体を荒く研磨したものがあり(S20)、器面成形のための研磨が行われたとみられる。またこうした資料があることから、施溝分割を行わず、素材石核をフリー・フレーキングによって打割し、その過程で研磨成形を繰り返し、角柱体状に徐々に近づけてゆく方法もあった可能性が高い。以上の手法は、擦切施溝分割が導入されながらも、成形のための研磨調整が多用されることに特徴がある。一方、もう一つの手法は、軟質石材(緑色凝灰岩)にみられ、形割段階において、直交する方向に規則性をもって施溝分割を行い(S8)、施溝ラインに沿って打割し、四角柱体を作成するものである。軟質石材の剝片は、全体の約5%以下とわずかであり、全体の工程を復原するには至らないが、四角柱体をさらに二分の一に施溝分割することによって、規格品の製作を可能にしたものであろう。この技法は、基本的に素材剝片を擦切施溝分割により打割し、四角柱状に整えるもので、形割段階における研磨成形は特に必要としないが、S8は施溝を施す前にすでに研磨が行われている点に注意される。第3段階は、前段階で得られた角柱状の未製品を、研磨調整し、多角柱体を作り出す(S6・S5)工程である。この段階における手法は、管玉1個体分に相当する長さの角柱体を、単体で多角柱に成形する手法(S6)と、管玉2個体分以上の長さ



第84図 碧玉製管玉製作工程復原図

の角柱体を研磨して、多角柱体に成形したのち、分割することが考えられる(長瀬高浜技法)が、小口を研磨していない未製品の数少なく、後者の方法をとる確実な資料は得られていない。第4段階は、貫孔・仕上げの段階であり、玉髓製の石針によって、多角柱体(S5)の一部穿孔が行われ、仕上げ研磨が施されたものとみられる。完成品の規格には、基本的には二つあり、長さ3cm・厚さ1.2cmの大形品と、長さ約1.3cm・厚さ約0.6cm前後の小形品がある。

以上、形割と研磨の段階に分けて、それぞれ二つの手法が確認できることを述べた。形割段階における、軟質素材にみられた直交する施溝による分割の手法は、規格品の作出に最適の方法であるが、こうした手法を伴う硬質素材は得られなかった。当遺跡の玉作りの特徴は、直交する施溝分割により正四角柱体を得るといふ、規格品を作出するための高度な手法を保持している一方で、研磨成形が多用されていることである。こうした手法は、基本的には搬入段階の原石が小さく、規格品の製作に対して素材石核の形状が整わないことや、その供給量が少なく、原材料の最大限の活用を重視したために行われた手法とみるべきであろう。余部遺跡における碧玉・凝灰岩製管玉製作技法は、押圧剝離を介在しない点で、いわゆる大中の湖技法に属すると考えられるが、成形方法に研磨を多用する特色を持っており、該期の技術系統を検討する上で問題となろう。

(3)玉髓製石針 竪穴式住居跡からは、60点以上の玉髓製の針状の製品およびその未製品が出土しており、それらのうち半数にあたる約30点には、先端部に回転研磨痕が認められることから、これを穿孔具としてのいわゆる石針とみなした。住居からは玉髓の剝片が多く出土しており、各工程の資料が含まれている。その製作工程は、素材石核から石針の石核となる扁平な縦長の角柱体を得る方法であり、この角柱体の頭部を打面とし、細かく縦長に打割することによって、石針の完成品を得ている。製作手法の特徴は、素材石核から縦長剝片を得ること、一部に擦切施溝分

割が認められること、さらに基本的に押圧剥離工程を介しないことである。これまで玉髓製石針の製作工程について詳細に検討した例は、わずかに新潟県柏崎市下谷地遺跡や京都府弥栄町奈具岡遺跡にあるのみであるが、両者の比較検討をした田代 弘は、管玉製作技術が大きく異なるにもかかわらず、石針の製作手法における縦長方向の剥離手法は基本的に同じであることに注目しており、当遺跡でも同様の手法が観察できる。一方、角柱体完成品とみなされる使用痕のある石針(S114～S143)の形状は、四角柱体と三角柱体のものがあり、一辺2mm前後のものが主体をなす。長さについては、おおよそ約1.3cm、1.0cm、0.6cm前後の3タイプある。使用痕は、玉未製品との接点となる角柱体の小口の全面、あるいは一部にのみ研磨痕のみられるものがほとんどで、角柱体の側面に回転研磨痕の認められる資料はわずかである。こうしたことから、穿孔は、石針の小口を玉未製品の頂部にあて、研磨材を用いるなどして、圧力をかけながら押し回し、両面穿孔により、貫孔した可能性が高い。また、石針には、チャート製で使用痕の認められるものがある(S71)ほか、錐状および微細な工具で、錐状および楔状の形態をなすチャート・サヌカイト製石器がある(S52・56～61)、こうした石器は施溝分割など打割の技法との関連で検討する必要がある。

余部遺跡の碧玉製管玉製作の時期は、出土土器や磨製石針を含まないことなどから、弥生時代中期前半に帰属する可能性が高い。奈具岡遺跡などの大規模な専門的生産体制のもとに玉作りが行われる中期中葉に先行する該期の玉作り工房の調査は、全国的にみても福井県福井市今市岩畑遺跡や、滋賀県野洲町三宅東遺跡、愛知県清洲町朝日遺跡など数少なく、技術の地域間交流の実態が不明な中で、今回の調査は、数多くの貴重な試料を提供することになった。

(野々口陽子)

付記 調査に際しては、森 浩一・上田正昭・藁科哲夫・富山正明・赤澤徳明・塚本敏夫・清水真一・門田誠一・中村潤子・菱田哲朗・大賀克彦・広瀬時習・森川 実・肥後弘幸・樋口隆久・土井孝行の各氏に、ご指導、ご教示を得た。記して謝意を表したい。

注1 平成10年度調査参加者(順不同、敬称略)

大田正孝・東古昌樹・庄司友明・殿井 恵・近藤奈央・青木礼子石堂博行・石田若菜・坂後 洋・鎌田安彦・平出高志・出野 宣・内田清之・大嶋一彰・森川 実・松本芳雄・湯浅彰朗・野々村礼子・松山晃子・村嶋みよ子・石田初美・人見幸代・黒田直弘・岡本志げ乃・中西貞子・永田和男・桂正・永田美代子・小林育子・中澤重夫・西田貞代・竹岡喜代子・竹岡美恵子・齊藤初美・竹岡和子・松下道子・関口睦美・井内美智子・高田真由美・柿谷悦子・松元順代・井上 聡

注2 蛍光X線分析の鑑定は、京都大学原子炉実験所の藁科哲夫氏に依頼した。

#### 参考文献

野々口陽子「余部遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998

田代 弘「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡(1)奈具岡遺跡」(『京都府遺跡調査概要』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

河野一隆ほか「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡(2)奈具岡遺跡(第7・8次)」(『京都府遺跡調査概報』第76冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

## 5. 木津川河床遺跡平成10年度発掘調査概要

### 1. はじめに

木津川河床遺跡は、京都府八幡市八幡に所在する。この遺跡は、木津川に面した平野部に立地する大規模かつ長期にわたる集落遺跡(弥生時代後期末～中世)で、これまでも、当調査研究センターや八幡市教育委員会が調査を実施し、多大な成果をみている。また、慶長大地震とされる中世末葉～近世初頭の大地震の痕跡(噴砂など)が良好に確認される点でも著名な遺跡である。

今回の調査は、京都府洛南浄化センター内における急速ろ化施設の増設に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。ただ、これまでの調査で遺構・遺物が数多く確認されるのは、同施設内でも南東部の一画に限られると考えられてきた(第86図斜線部)。これに対し、今回の調査対象地は、同施設内でも北西部の一画に相当しており(第86図黒塗り部)、調査着手段階には当該地における遺構・遺物の分布は比較的希薄ではないかと考えられた。このため当初は、遺構・遺物の有無を確認することを目的として、新施設建設予定地約1,500㎡のうち約250㎡を対象に試掘調査として着手した。ところが、下記のとおり、調査区内において古墳時代前期の竪穴式住居跡などが確認されたので、一部調査区の拡張を行い、最終的には約350㎡の調査を実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第3係長事務取扱平良泰久、同調査員森下衛が担当し、平成10年11月17日から平成11年1月14日までの間に行った。調査期間中は、八幡市教育委員会をはじめとする関係諸機関から様々な面で協力いただいた。また、本概要報告は、調査に参加された調査補助員・整理員各氏<sup>(注1)</sup>の協力を得て、森下と調査補助員上田真一郎・陣内高志が分担執筆した。なお、発掘調査に係る経費は、すべて京都府土木建築部が負担された。

(森下 衛)

### 2. 位置と環境

木津川河床遺跡は、京都府八幡市の北端部に位置し、桂川・宇治川・木津川の三川合流部の東側に所在している。南西には男山丘陵が連なり、北に宇治川、南に木津川が流れるといった環境にある。東に目を向けると、かつては淀川の遊水池として機能した巨椋池が存在したが、昭和8～16年にわたる干拓以来、広大な水田地帯の景観を見せている。古来より、周囲を河川や湖に囲まれ水害に悩まされつつも、一方では水上交通に恵まれた環境を有した土地であったといえるだろう。なお、当遺跡は、現在では木津川右岸からその流路内に広がりを見せている。これは明治初年の流路改変によるもので、かつては左岸地域に広大に広がる自然堤防上に立地していたことが確認される。今回の調査地は、その中でも北東部の一画に相当することとなる。

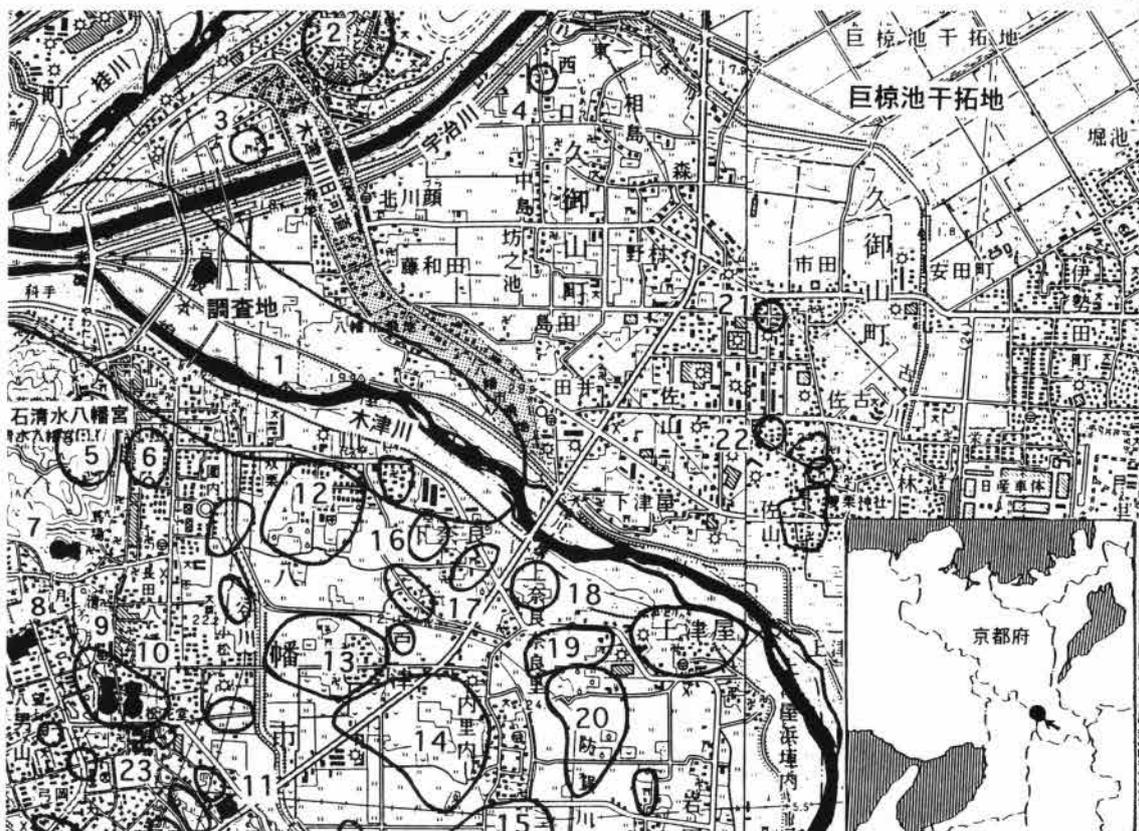
木津川河床遺跡周辺の主な遺跡<sup>(注2)</sup>としては、まず、男山丘陵の丘陵上およびその山麓部に点在す

る古墳があげられる。石不動古墳(全長約88mの前方後円墳)、茶白山古墳(全長約50mの前方後方墳)、西車塚古墳(全長約120mの前方後円墳)、東車塚古墳(全長約90mの前方後円墳)、ヒル塚古墳(一辺約52mの方墳)などの古墳時代前期後半～中期初頭頃に位置付けられる古墳が点在する。

一方、木津川によって形成された沖積平野(自然堤防部分)には、当遺跡をはじめ、弥生時代後期～中世にわたる時期の遺構・遺物が確認されている上奈良遺跡・下奈良遺跡・内里八丁遺跡をはじめとする数多くの集落遺跡が連なって所在している。なかでも、上記の3遺跡は旧山城国久世郡那羅郷に属したとされ、『延喜式』記載の奈良園との関連が指摘されている。これに対し、木津川河床遺跡は、同郡列栗郷に属したとされており、『弘福寺田数帳』に記載された弘福寺領内に相当したとされる。

古代末から中世にかけて当地の歴史を物語る上で忘れてならないのが、石清水八幡宮であろう。平安時代前期(9世紀後半)に当地に遷座したとされる当社は、現八幡市域の西部部を宮領とし、一帯にはその荘園が数多く分布していた。一方で、男山山麓に形成された門前町は長く栄え、それが現在の八幡市中心部へと発展してきた。

(上田真一郎)

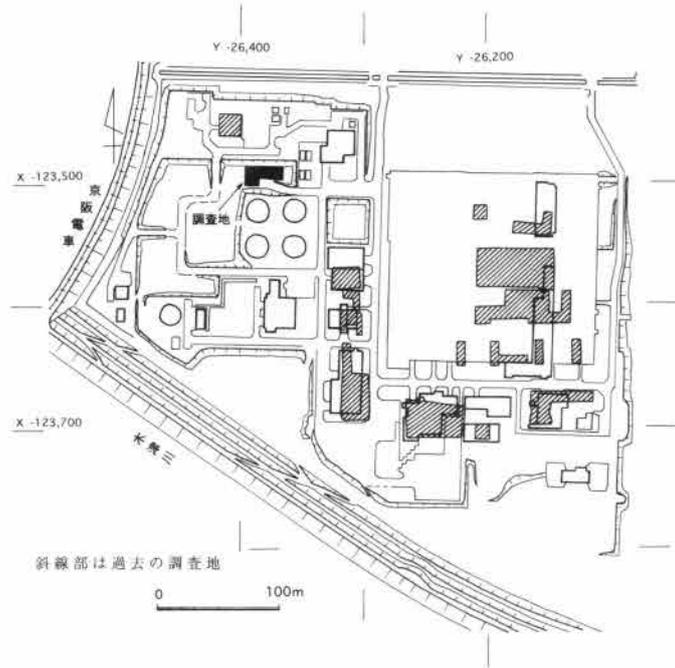


第85図 調査地位置図(1/50,000)

- |             |           |            |            |               |
|-------------|-----------|------------|------------|---------------|
| 1. 木津川河床遺跡  | 2. 淀城跡    | 3. 美豆城跡    | 4. 一口城跡    | 5. 石清水八幡宮周辺遺跡 |
| 6. 男山城跡     | 7. 石不動古墳  | 8. 茶白山古墳   | 9. 西車塚古墳   | 10. 東車塚古墳     |
| 11. ヒル塚古墳   | 12. 川口扇遺跡 | 13. 戸津遺跡   | 14. 内里五丁遺跡 | 15. 新田遺跡      |
| 16. 下奈良遺跡   | 17. 出垣内遺跡 | 18. 上奈良北遺跡 | 19. 上奈良遺跡  | 20. 内里八丁遺跡    |
| 21. 市田齋当坊遺跡 | 22. 佐山遺跡  | 23. 志水遺跡   |            |               |

### 3. 調査成果

現地調査は、平成10年11月17日から開始した。まず、東西約30m・南北約8.5mのトレンチ(約250m<sup>2</sup>)を設け、重機掘削を行った。重機掘削は、表土および近現代の水田・畑地耕作土の除去を目安として、現地表下約1.6mまでとした。そして、これ以下の土層において、人力による掘削並びに遺構精査を進めた。その結果、3面の遺構面を確認するとともに、第3遺構面においては古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出するにおよび、調査区を南側へ拡張した(約100m<sup>2</sup>)。最終的には、竪穴式住居跡を2基検出したため、



第86図 調査区配置図

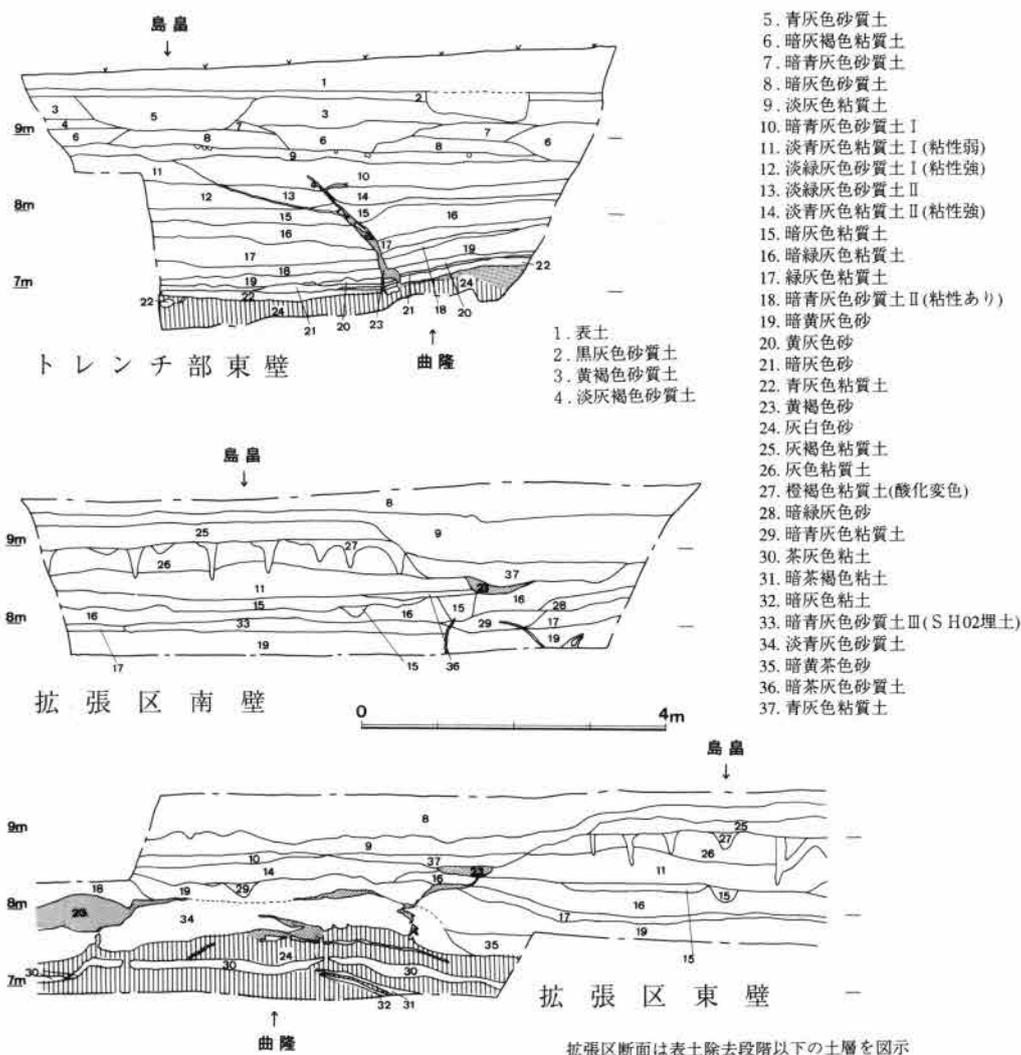
その記録を作成し、平成11年1月14日には全ての現地作業を終了した。なお、以下の記述は、調査当初の東西トレンチに関してはトレンチ部、最終的な拡張部分を拡張区と呼称する。

#### (1) 層序と遺構面

重機掘削終了とともに、人力による掘削作業として、まず調査区内の層序の確認を目的とする断ち割り溝をトレンチの北辺から東辺にわたって行った。その結果、確認された層序を第87図に示した。

**トレンチ部東壁断面にみる基本層序と各遺構面** まず、表土(浄化センター建設時の盛土)が0.2~0.6mあり、その下に旧耕作土が0.8m堆積している。旧耕作土下の9層は近世以降に比定され、その直上には洪水砂と思われる礫混じり灰白色粗砂が部分的に認められた。12・13層は中世後半~近世初頭頃(15~17世紀)のものと判断され、調査ではこの上面を第1遺構面としたが、この両土層は自然堆積層ではなく、後述する島島の造成並びに造営後の造り変えなどともなう盛土と判断している。14層は、島島縁辺の溝(S D01)の埋土およびその南側に広がる水田の耕作土で、11層は島島造成時の盛り土と考えている。この島島縁辺の段差は、10層の堆積により埋没した。なお、これらの時期については、島島の造成が、後述する第2遺構面との関係から15世紀以降と判断されるものの、その後の造り変えや削平の時期に関しては十分把握できていない。<sup>(注3)</sup>

第1遺構面の下層には、第2遺構面と判断した15・16層が約0.4m堆積している。うち、15層は、第2遺構面で検出した素掘溝の埋土であり、16層がそのベース土である。時期的には、13~14世紀頃のものと考えている。なお、ここでは、南北溝の南北断面が観察できる(15層)。これによると、斜め方向に上がる噴砂を境に、その南側では溝の底部が波打つ状態で0.2~0.3m持ち上げられているのが分かる。同様の波打ちは15層以下の各層においても明瞭に観察でき、これは、噴砂を発生させた地震(慶長大地震か)による下方の砂層の液状化によって形成された盛り上がり



第87図 調査区土層断面図

(曲隆現象)が原因と考えられる。なお、曲隆はトレンチ部の南辺を東西に走り、この部位の土層を大きく盛り上げている。

16層の下には、第3遺構面と判断している17層が、0.2~0.3m堆積している。この17層は、ここでは図示できなかったが、調査区の西端から東端へ向かってゆるやかに下がり(西端部と東端部では約0.4mのレベル差を有する)、この上面において、後述するように古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出した。17層の下には、18・19層が約0.3m堆積し、さらにその下層には22層の粘土層を挟んで20・24層(細砂層)が認められた。また、23層は地震によって液状化をおこして噴砂となった砂層である。ここでは、曲隆(下方の砂層が地震による液状化にともなって帯状に盛り上がったもの)によるひずみによって、22層が断ち切られている状況、さらにそこから噴砂が発生し、その両側では断層状に土層の食い違いが生じているといった状況が良好に観察できた。

**拡張区東壁・南壁にみる層序** 基本的な層序はトレンチ部東壁にほぼ対応する。ただし、それぞれ対応する土層のレベルは全体に0.2~0.3m高くなる。これは、先にふれたように曲隆現象による盛り上がりの影響と思われる。第1遺構面に相当する部位では、拡張区においても島島の痕

跡が確認された。拡張区の南東隅部である。11層がまず最初に造成された島島の盛り土であり、これによって島島が形成された段階で、噴砂を発生させた大地震が起こっている。なお、この段階に噴出した噴砂は、東壁においてほとんど削平されず良好に遺存していた(23層)。そして、26層が盛り土された後、10層が堆積。さらに25層が島島上に盛り土され、島島は存続する。第2遺構面に相当する16層上面では、東西・南北方向の素掘溝が多数断面で確認される(15層)。しかし、それも上記の島島の下部に限られた。これは、島島造成段階に15・16層が大幅に削平を受けたことによると考えられるが、その後、14層の堆積後には地震による曲隆現象にともない、土層全体が盛り上がった。第3遺構面をなす17層は約0.1m堆積している。なお、南壁断面には、後述する竪穴式住居跡(SH02)の断面が観察される(33層)。東壁北半部では、曲隆現象の断面が良好に観察できたことから最終的に大きく断ち割りを行った。その結果、ここでも曲隆に伴う粘土層の分断、灰白色砂層の液状化に伴う盛り上がりやその噴出などが極めて良好に観察された。

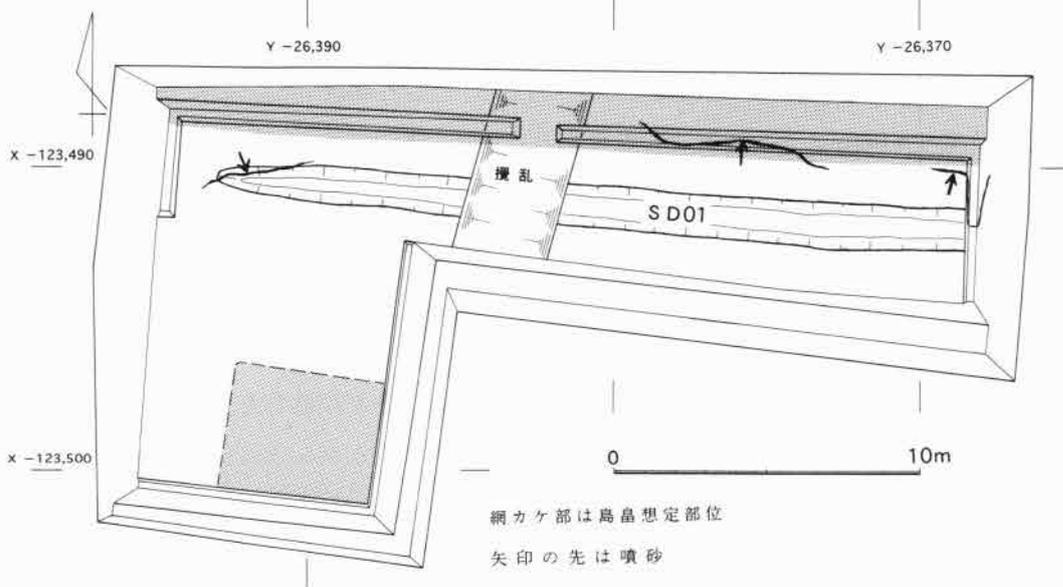
(上田真一郎)

## (2) 検出遺構

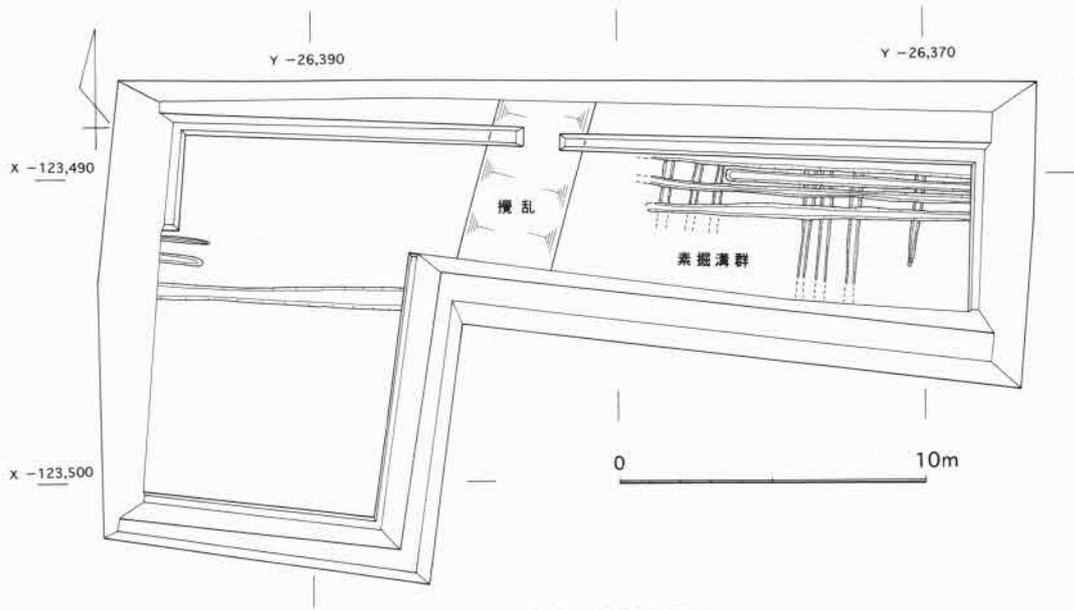
調査では、上記の各遺構面と想定した土層上面で、遺構の有無を確認するために精査を行った。その結果、第1遺構面では水田跡および島島の一部を、第2遺構面では畑地の痕跡を、そして第3遺構面では古墳時代前期の竪穴式住居跡などを検出した。以下、各遺構面毎に検出遺構の概略を報告する。

### ① 第1遺構面(第88図)

第1遺構面においては、水田跡および島島の一部と判断された高まりを2か所確認した。まず、トレンチ部では、中央付近を東西に20~30cmの段差がとおり、その北側が高く、南側が低くなるといった状況を認めた。高くなった北側を構成するのは人為的に盛り上げられた土と考えられた。これに対し、低くなった南側には、段差に沿って幅約1m・深さ約0.1mの溝(SD01)があり、溝の埋土を含めてその南側には水田耕作土として利用されたと思える淡青灰色粘質土の堆積が確



第88図 第1遺構面遺構配置図



第89図 第2遺構面遺構配置図

認められた。北側の高くなった部位は、トレンチの北壁に沿って東西に延び、調査区からその北側に存在した島島の南辺部と判断している(トレンチ北辺網カケ部)。一方、拡張区においても、南東隅付近に一段高く造成された島畑の一角が確認された(拡張区南辺網カケ部)。いずれの島島も本来の規模や、それが造成された細かな時期について確認できてはいない。ただ、その造成時期については、後述する第2遺構面の畑地としての土地利用が13~14世紀頃と判断されることからみて、15世紀以降のものと考えている。

②第2遺構面(第89図)

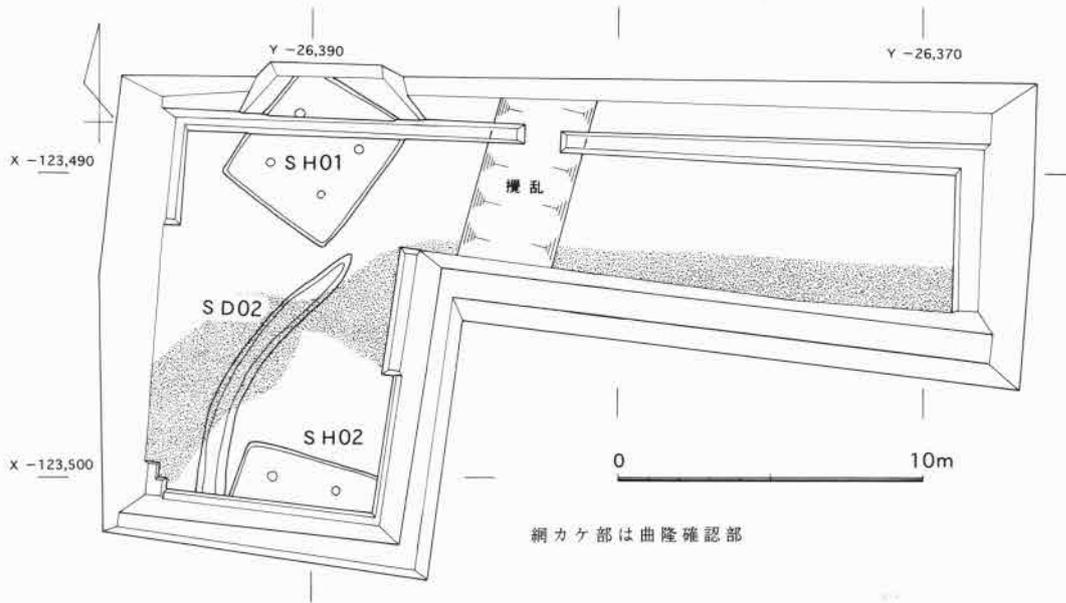
第2遺構面では、トレンチ部の北東部を中心に素掘溝群(幅20~30cm)を検出した。畑作にともなう畝溝と考えられ、一面が畑地として利用されていた痕跡と判断している。時期的には、出土遺物から13~14世紀頃のものと考えている。溝の方向には、東西方向にのびるもの、南北方向にのびるものの二者がある(東西溝が南北溝を切る)。うち、東西方向のものは北半部に限られ、南北方向のものは層序の項でもふれたようにトレンチ中央付近で底面の深さが大きく変化する(南端部では深さ約5cm、北端部では約15cmであった)。こうした状況は、曲隆にともなう遺構面の盛り上がりと後世の削平によっておこった現象と思われ、南半部の東西溝は削平され、南北溝の南半部は底面が隆起したのであろう。なお、拡張区においても多数の素掘り溝の存在を確認しているが、断面観察によるため、北端部の東西溝の一部を除き図示できなかった。

(森下 衛)

③第3遺構面(第90図)

第3遺構面では、古墳時代前期の竪穴式住居跡2基、溝1条を検出した。なお、本遺構面をなす17層上面は、トレンチの西端から東端へ向かってゆるやかに下がっていく状況を呈し、調査区の東方には沼ないしは沼状の地形が存在したものと考えられる。集落跡は住居跡検出部から西方ないしは南西方向に展開していたのであろう。

S H01(第91図) トレンチ部西端付近で検出した。4.2m×4.4mの方形をなすが、北隅は調査



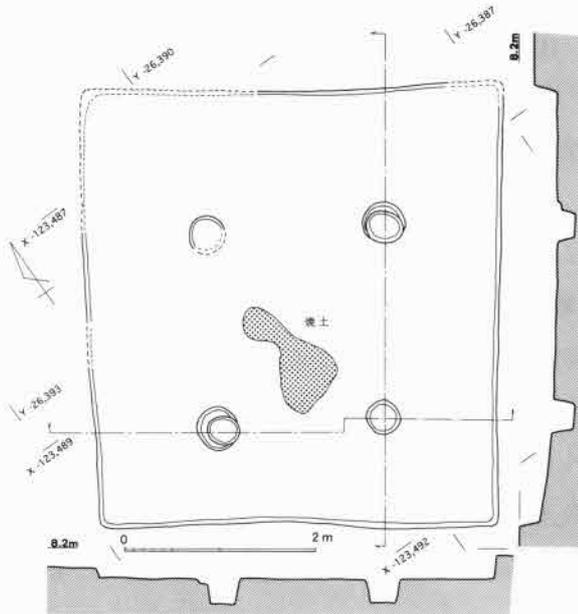
第90図 第3遺構面遺構配置図

区外へのびる。深さは約0.2m遺存していたが、南隅付近が約0.1m浅くなる。この南側にある曲隆によるベース土の盛り上がりによるものと考えられ、これは検出面のレベルも同様であった。床面では、支柱穴を4か所で検出するとともに、中央付近で炉跡とみられる焼土の広がりを確認した。遺物は後述する古式土師器の小型丸底壺・甕・高杯が床面から出土したが、住居跡の北半部に集中していた。

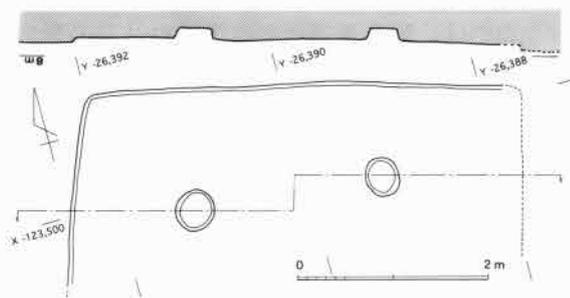
SH02(第92図) 拡張区南端で住居跡の北側約1/3程度を検出したものである。規模は北東隅が確認できなかったことから正確には分からないが、北辺でおよそ4.5m程度あったものと考えている。また、土層の識別が困難なため、検出面からは0.1m程度が遺存するにすぎないが、南壁の土層観察では0.2m程度が遺存していたものと考えられる。床面では支柱穴を2か所で確認した。遺物は、古式土師器の甕・高杯が床面付近で出土した。

(上田真一郎)

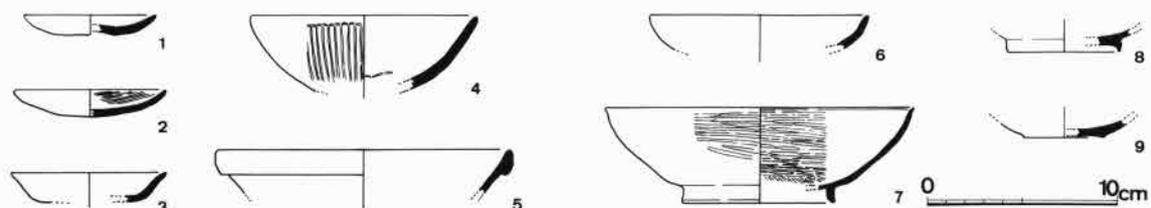
SD02 SH02の西から北側をめぐる溝で、拡張区北端付近で途切れる。幅約1m・深さ約0.2mを測る。埋土中から遺物の出土は確認でき



第91図 SH01実測図



第92図 SH02実測図



第93図 出土遺物実測図(1)

なかったが、検出面がこの第3遺構面であることから、この時期のものと判断している。

#### ④地震痕跡

地震の痕跡としてまず上げられるのは噴砂である。この噴砂については、調査区の各所でその痕跡を確認した(第88図矢印部)。ただ、ここで注目されたのは、こうした噴砂に加え、大規模な曲隆が認められたことである。この曲隆が認められた部位では、第2・3遺構面もやはり盛り上がっており、こうした部分で検出された各遺構は、その盛り上がりに沿って波打つようになっていた(曲隆の認められた範囲は第90図に網カケで表示、詳細については層序の項を参照)。

#### (3)出土遺物(第93・94図)

##### ①平安時代以降(第93図)

第1・2遺構面調査時に出土した遺物について、その主なものを平安時代以降のものとして一括して図示した。出土点数は少なく、また細片となったものが多い。

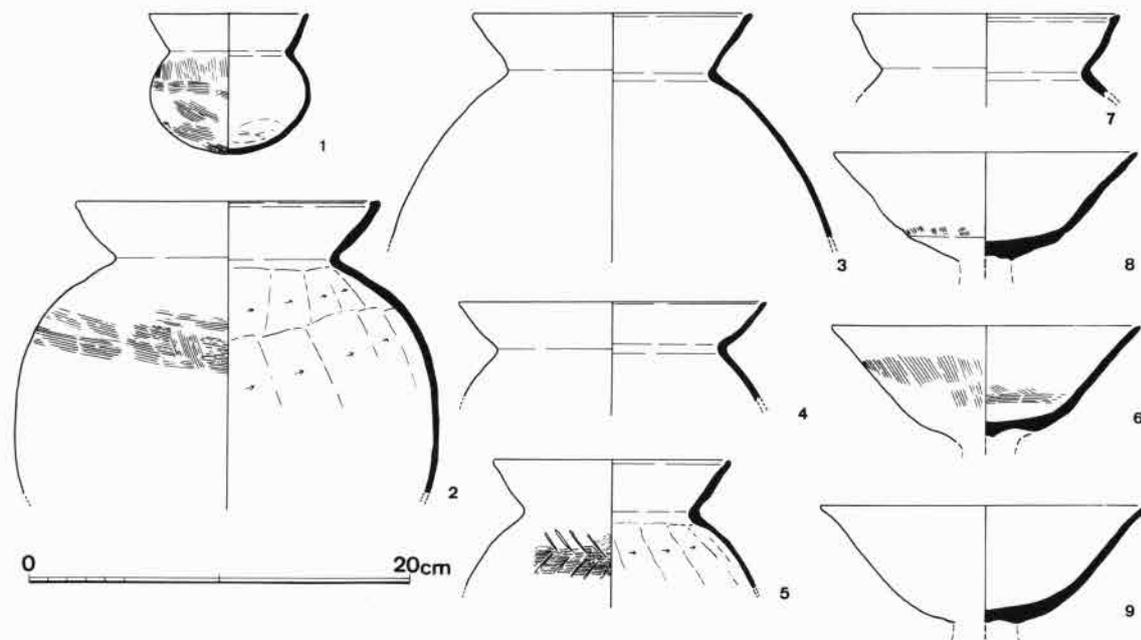
1～3・6は土師器皿である。1～3は口径7～8cmの小皿で、6は口径11cmの大皿である。2は、内面にハケ目が認められる。4は青磁碗。口径12cmに復元され、体部外面に幅の狭い連弁文を配す。5は白磁碗の口縁部片で、玉縁状の口縁部を有す。口径15cm前後に復元される。7は黒色土器碗である。口径16cm前後に復元され、直立気味の高い高台を付す。8は緑釉陶器碗の高台部片、9は灰釉陶器皿の底部片である。なお、ここでは細片のため図示できなかったが布目瓦片(凸面縦位の縄叩き、凹面布目が観察される)も1点出土している。今回報告した遺物では、黒色土器(7)や緑釉陶器(8)などがこれに関わるものと考えられるが、調査では、これに関する遺構は確認できなかった。周辺にこの時期の遺構が存在する可能性を示唆するものであろう。

(森下 衛)

##### ②古墳時代前期(第94図)

ここでは、第3遺構面で検出した2基の竪穴式住居跡(S H01・02)から出土した遺物を中心に報告する。

1～6は竪穴式住居跡S H01出土である。1は住居跡北側隅付近から出土した小型丸底壺であり、口径8.4cm・高さ7.5cmのほぼ完形で、底部を床に据えた状態で出土した。2～5は甕形土器であり、2・5は住居内のほぼ中央部から、3・4は小片であるが東側隅付近から出土したものである。これらは、いずれも胴部は球形と考えられ、内面はヘラケズリ、外面はハケを施し、口縁部はわずかに内傾しながら端部で内側に肥厚する。いわゆる布留式甕に相当する。うち、5は肩部に逆「く」の字状に2列の刺突文が巡る。6は高杯杯部片で、口径は16.1cmを測り、外面は縦位のハケの後に横ナデ、内面はナデ調整である。また外面は縦位のハケ目でできた段差で稜線



第94図 出土遺物実測図(2)

を形成しており、口縁部は稜線から外上方に向かってまっすぐに伸びる形態をとる。7の甕形土器片・8の高杯杯部片はともに竪穴式住居跡SH02から出土したものである。7は、口径13.9cmを測り、SH01出土品と同様に端部が内側に肥厚する布留式甕である。なお、外面調整は磨滅のため不明である。8は、口径15.8cmで、外面には6のような稜線を持たず、碗状に外方に伸びていく。調整は、内外面ともにナデで仕上げる。9は、拡張区内の包含層で出土した高杯杯部片であるが、全体的に磨滅が著しく調整等は明確に確認できない。口径17.1cm・残存高6.1cmでゆるやかに外反する口縁形態で、6に類似する。なお、高杯はいずれも脚部片を欠損するが、接合部の形態からみて中空の脚部が想定される。

(陣内高志)

#### 4. ま と め

今回の調査地は、先述のとおり、従前の調査成果からは木津川河床遺跡のなかでも比較的遺構の分布密度は低いと考えられる部位に相当していた。その理由は、東南方向に約200m離れた一画に弥生時代後期末～古墳時代初頭・古墳時代後期～飛鳥時代といった時期の集落跡が確認されているものの、当地までは及んでいないと考えられてきたからである。しかし、調査の結果はその予想に反し、調査区の西端近くではあったが、古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出するに及んだ。調査区内の土層堆積状況の観察によれば、東方向へゆるやかに下がっていく地形が確認され、この方向に沼状地形の存在が予想された。おそらく、当該地は上述の集落跡からはこの沼状地形によって隔てられており、今回確認した集落跡は、ここから西方もしくは南西方向へと広がる別の微高地上に展開するものと考えられる。

近年、南山城地域では、木津川沿いの低地部における発掘例が増加しつつある。これによれば、元来、木津川沿いの平野部は比較的起伏に富んだ地形を呈していたものと想像されている。そし

てそれが、今日のように平坦に近くなったのは、中世から近世にかけて行われた周辺丘陵部の樹木伐採によって多量の土砂が流出したことによると考えられている。逆にみれば、現在は平坦な地形をなす部位においても、実は、地下の状況は凹凸が激しい場合も多々認められるのである。広範囲な集落遺跡として認識されている木津川河床遺跡も、こうした地形の凹凸を数多くその中に含み込み、細かくみればいくつもの時期の異なる集落跡の複合体といえるのであろう。

一方、今回の発掘調査では、従来から言われてきた以上に、中世末～近世初頭の大地震の痕跡が明瞭に確認された点でも大きな成果があった。噴砂に関しては、噴出した砂の状況が良好に断面観察できたことが大きな成果といえ、さらに調査区を南西から北東へむかう曲隆が確認でき、ここでも液状化した砂の動きが良好に観察された。こうした成果は、近年提唱されている地震考古学といった面から、極めて貴重なデータを得たといえるものであった。

(森下 衛・上田真一郎)

注1 調査参加者は以下のとおり。

上田真一郎・陣内高志・西脇夏海・小川正志

注2 遺跡の位置と環境に関しては、以下の文献を参考とした。

「京都府の地名」(『日本歴史地名体系』26 平凡社) 1981

「正道官衙遺跡」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』24 城陽市教育委員会) 1993

注3 なお、土層断面図の検討から、現時点では、島島の造成並びに造り変え、さらに噴砂の噴出時期に関する前後関係は、以下のように考えている(各層名は第87図による)。

まず、第2遺構面と考えた16層上面の畑地が廃棄され、その直上に島島が造営された(12層を盛り上げることで)。その後、島島の拡張が行われたようで、この段階に13層が盛り土され、この段階で島島の南側にあった16層上半部は大きく削平を受けた。続いて14層が堆積し、11層を盛り土して島島を造り変えた。その後、10層が堆積し、島島上では11層上にさらに盛り土(25・26層)が行われた段階に、大規模な地震にみまわれた。断面観察によれば、その時の曲隆は島島外の低地へ向って起こっていると思われる。それと同時に中世後半から近世にわたって複雑に盛り土と削平が繰り返された痕跡を読みとることができる。そして、25・26層と10・11層の上面が一部削平された後、9層が堆積したものと考えられる。

注4 噴砂・曲隆をはじめとする地震痕跡に関しては、通商産業省大阪地域地質センター寒川 旭氏に大なる御教示を受けた。

## 6. 長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2地区) 発掘調査概要

### 1. はじめに

近畿財務局では、京都府長岡京市長岡2丁目223番の3に職員住宅の建設を計画された。当地は、長岡京跡の中に含まれるため、近畿財務局と京都府教育庁指導部文化財保護課が協議を行った結果、工事の実施に先立つ予定地内における発掘調査を当調査研究センターに依頼された。

調査地は長岡京跡では、旧条坊で右京五条三坊一町(新条坊では右京五条三坊三町)にあたり、調査対象地の北辺では、四条大路(同五条条間小路)の南側溝が想定される。また、調査地の南西約70mには、旧石器時代のナイフ形石器が出土した小池下遺跡、北東約100mには縄文時代の石鏃が出土した弓場街道遺跡、北西400mには府下最大級の石室をもつ今里大塚古墳、さらに西約900mの右京五条四坊十五町には、長岡京造営の際に営まれた、谷田瓦窯址群などの各遺跡が知られている。

現地の調査は、当調査研究センター調査第2課第2係長辻本和美と同主任調査員戸原和人が担当した。調査の面積は約420㎡で、平成10年10月22日から平成11年1月22日までの調査期間を要した。調査に係わる経費は、すべて近畿財務局の負担による。調査の実施にあたっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・地元自治会などの関係諸機関の協力を得た。また、現地調査および本概報の作成にあたっては、地元有志の方々および学生諸氏にご協力をいただいた。記して感謝の意としたい。



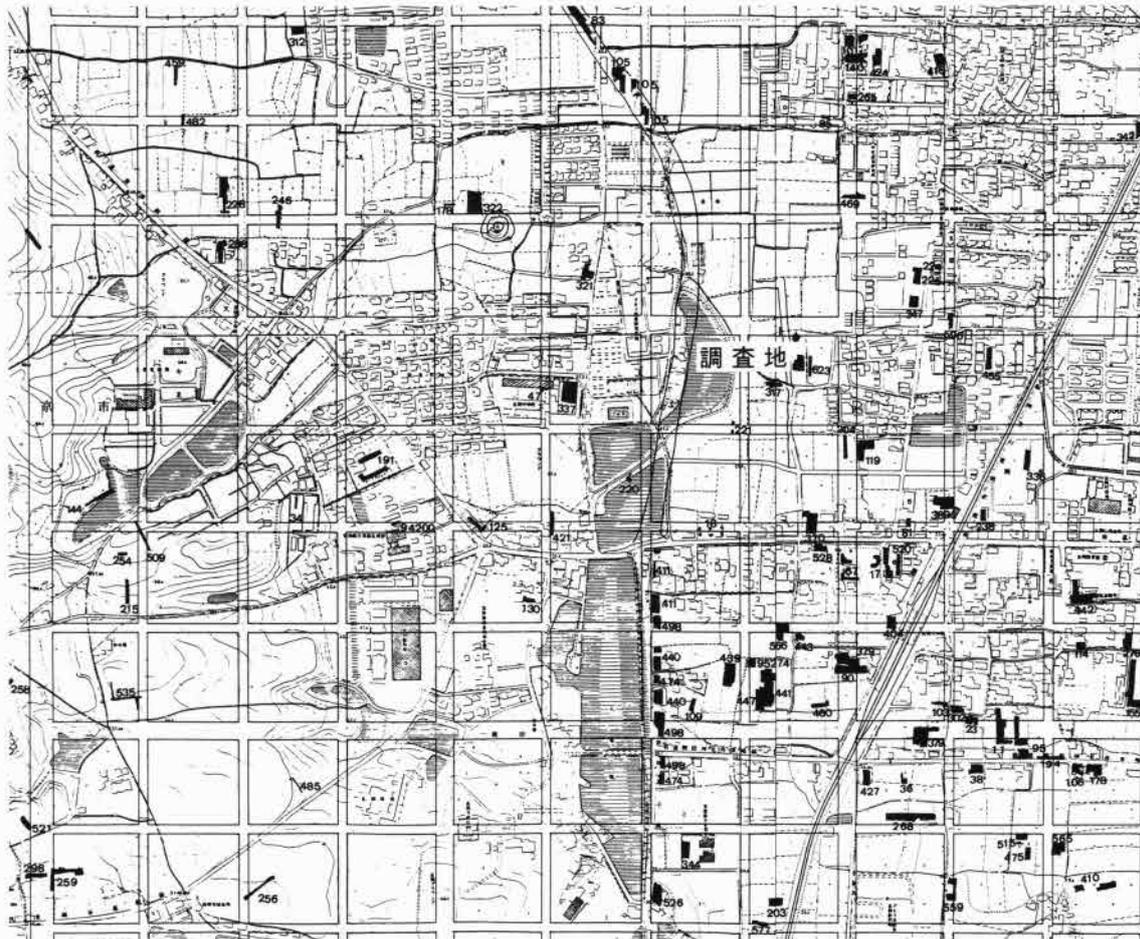
第95図 調査地位置図(1) (1/25,000)

2. 周 辺 の 調 査(第96図)

調査地である右京五条三坊一町の周辺では、府道の新設・拡幅工事に伴って、当調査研究センターによって継続的に調査が行われているが、この工事の隣接地点は元は池であり、早い時期に道路やグラウンドとして造成され、調査例が無い。また、調査地の北の四条三坊四町と五町、東の五条二坊一六町、南西の五条三坊七町でも、これまでに調査例が無い。周辺で行われた調査は、そのほとんどが民間の開発に伴う事前調査である。

今回の調査地である右京五条三坊一町では、これまでに右京第42・317次の2次の調査が行われている。右京第42次調査は、昭和55年度に長岡京跡発掘調査研究所によって調査された(未報告)。右京第317次調査では、長岡京期の土坑2基と、飛鳥時代の土坑1基が検出されている。また、時期は不明であるが2間×2間の倉庫棟と考えられる柱穴も検出している。

南側の二町では、右京第370次調査が行われ、弥生時代から鎌倉時代にかけての開田城ノ内遺跡に含まれることから、各時代の遺構が検出されている。長岡京期では、五条条間小路(五条大路)の北側溝と宅地内で掘立柱建物跡3棟・井戸1基・土坑1基などを検出している。奈良時代の遺構としては、総柱建物の倉庫跡2棟と土坑1基を検出している。倉庫跡はいずれも3間×3間で北で25°西に振れ、柱筋を揃えている。この倉庫跡は、出土遺物から8世紀の中頃と考えられている。古墳時代では、竪穴式住居跡1基・掘立柱建物跡3棟・土坑9基・溝2条などを検出



第96図 調査地位置図(2) (1/10,000)

している。弥生時代の遺構では、竪穴式住居跡1基と環濠と考えられる溝1条を検出した。

西側の八町では、町の東南隅、五条第一小路の想定地で右京第221次調査が行われた。小規模な調査であったため明確な遺構はないが、長岡京期の遺物を出土している。

北東の四条二坊十三町では、右京第224・225・347次の3次にわたる調査が行われている。224・225次調査は一連のもので、長岡京期の遺物を出土する土坑や、縄文時代と考えられる石鏃などを出土した。347次調査では、鎌倉時代の総柱建物跡1棟と溝群・土坑など、長岡京期では、南北3間×東西2間以上の掘立柱建物跡や土坑などを検出した。

南東の五条二坊十五町では、右京第81・119・204・389次の4次に及ぶ調査が行われている。81次調査では、中世の溝群・古墳時代の掘立柱建物跡・井戸などを検出している。

119次調査は、国庫補助の調査として実施され、奈良時代から中世にかけての4時期にわたる遺構を検出している。Ⅰ期は、長岡京遷都以前で、奈良時代後期に比定され、溝2条・掘立柱建物跡5棟・柵列1条を検出している。Ⅱ期は、長岡京期で、土坑1基・掘立柱建物跡1棟・柵列1条を検出している。Ⅲ期は、平安時代初期で、掘立柱建物跡2棟・柵列1条を検出している。Ⅳ期は、中世で、12世紀末～13世紀初頭に比定され、掘立柱建物跡1棟・柵列1条を検出している。第204次調査では、中世の溝群や掘立柱建物跡・土壙墓、古墳時代の溝・土坑・竪穴式住居跡などを検出している。第389次調査では、長岡京期の井戸1基・掘立柱建物跡2棟・埋納土坑2基、長岡京以前の溝4条などを検出している。

以上のように当調査地周辺では、旧石器時代から中世にかけての各時代の遺構・遺物が出土しており、古くから人々の生活の場であったことが明らかとなっている。

### 3. 検 出 遺 構(第97・99図、図版第53～57)

調査は、開発予定地内の内、建築工事で遺跡の破壊される2か所に調査地区を設定して行った。北側に設定した約60㎡の調査区を第1トレンチとし、南に設定した約360㎡の調査区を第2トレンチとした。第1トレンチは、四条大路南側溝(五条条間小路南側溝)が想定される調査区で、第2トレンチは、右京五条三坊一町(右京五条三坊三町)の宅地が想定される調査区である。発掘調査で検出した遺構は以下の通りである。

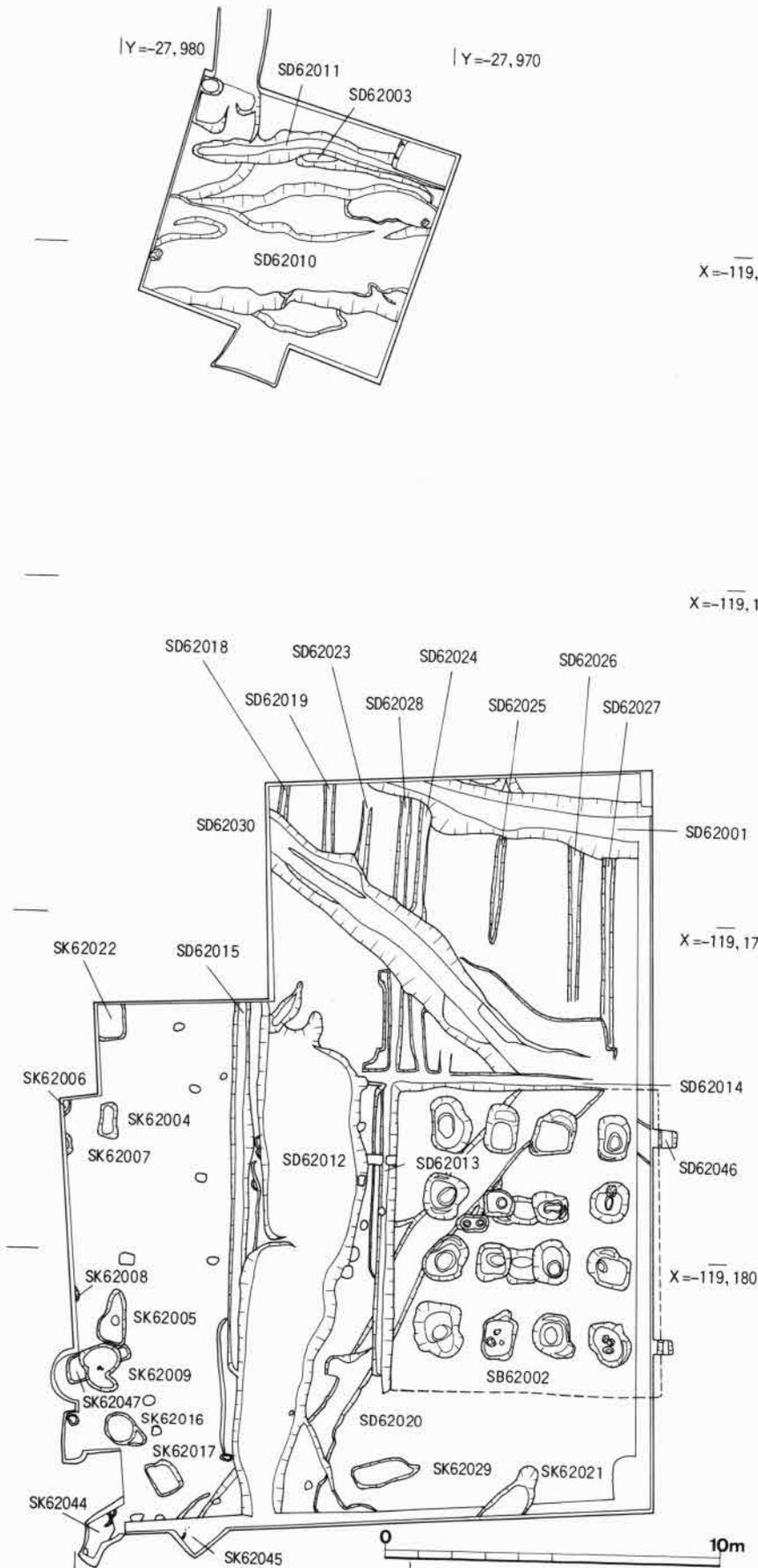
#### (1)第1トレンチ(第97・98図、図版第54)

第1トレンチでは、溝3条を検出した。

溝S D62003 東西方向の幅約1.5m・深さ0.3mの溝である。この溝は、黒灰色の砂礫で埋まっており、溝内からの出土遺物は無い。

溝S D62010 東西方向に流れる幅約4.0m・深さ0.7mを測る溝である。溝の中からは、下層から弥生土器や古墳時代の須恵器、上層の埋め土から長岡京期と考えられる瓦や土器などが出土した。この溝は、検出した位置関係から、旧条坊で四条大路南側溝、新条坊では五条条間小路の南側溝の可能性はある。

溝S D620011 調査地の北半で検出した溝S D62003の下層の溝である。溝の西側は、幅が広



第97図 調査トレンチ平面図

く、東側は細くなっている。溝内から古墳時代の土師器が出土した。

(2)第2トレンチ

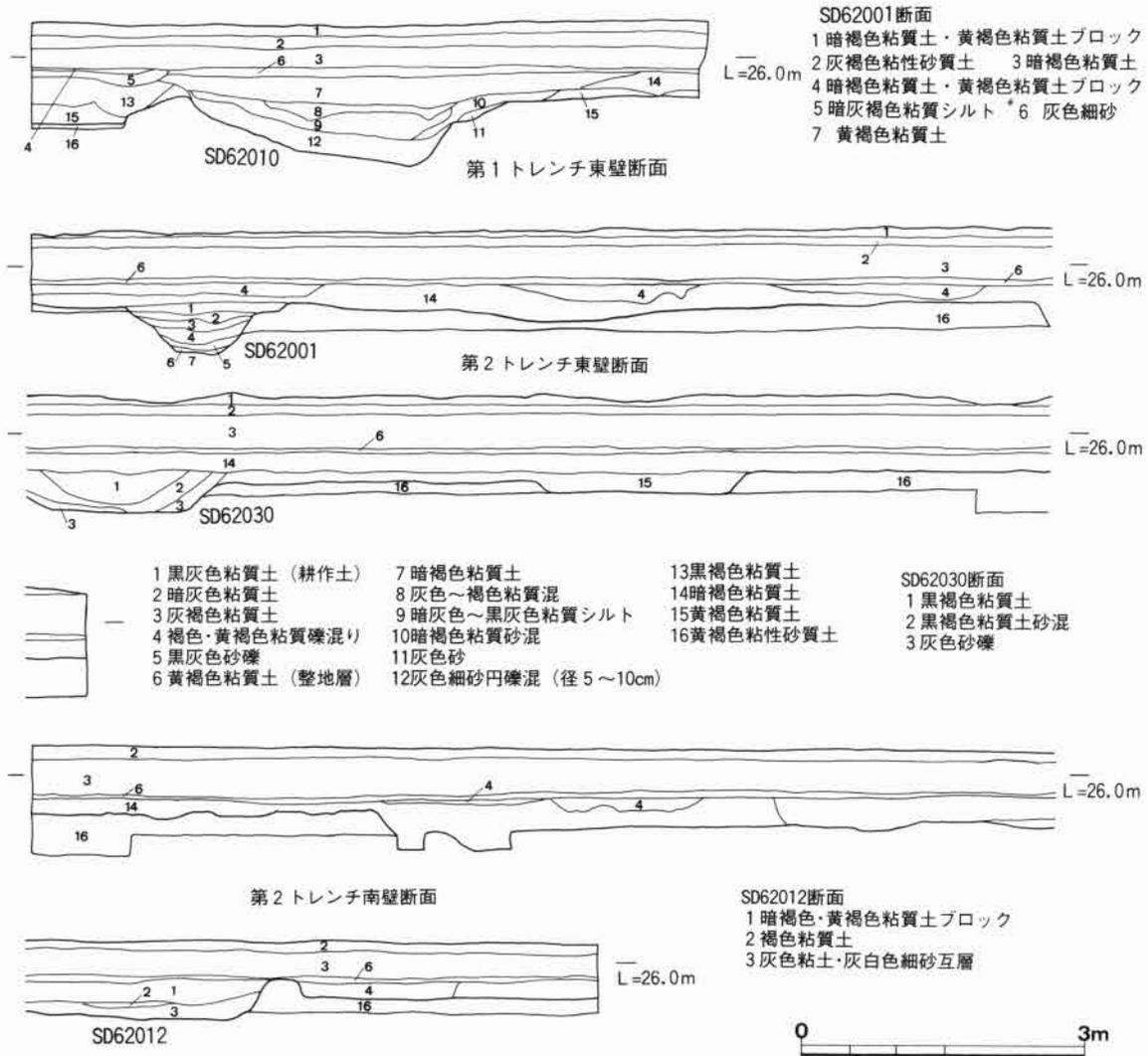
第2トレンチでは、  
X=-119,150 総柱建物跡1棟・溝11条・土坑13基・小ピットなどを検出した。

溝S D62001 調査地の北寄りで検出した幅約1.8m・深さ約0.6mの東西方向に弧を描いて流れる溝である。溝の中からは、須恵器の壺底部などが出土した。

溝S D62024~27 S D62001の南側で検出した南北溝で、幅0.3m・深さ10cmを測る。出土遺物が無いため時期は明らかでないが、切り合い関係からS D62001より古い。

溝S D62018・19・23・28 S B62002の北側で検出した南北溝で、幅0.3m・深さ10cmを測る。溝内からは、長岡京期の土師器皿などが出土しており、南の溝S D62012と接続していた可能性もある。

総柱建物跡S B62002 調査地の中央東よりで検出した南北3間×東



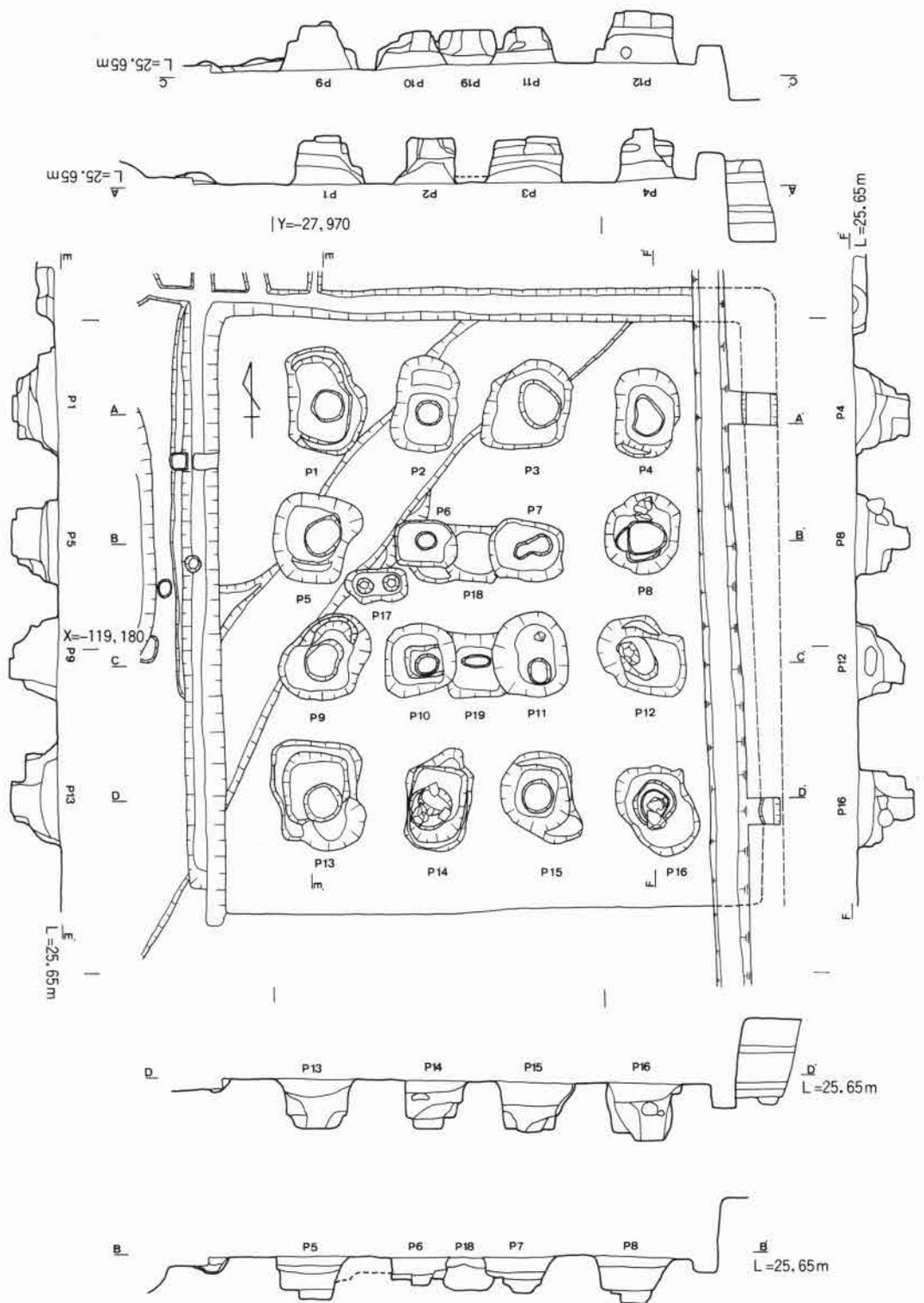
第98図 調査トレンチ断面図

西3間の掘立柱の建物跡である(第99図)。柱穴は18か所掘られている。外周の柱穴は、掘方の一辺が1m近くあり、深さも70～80cmを測る。内側の6基の柱穴は、深さ約50～70cmと浅く、東柱(建物の床を支える柱)と判断できる。また、内側の4基の柱穴では、東西に並ぶ2基の柱穴の間に先行する柱穴2基が掘られている。建物の柱は、抜き取られたため残っていないが、柱穴の底に残る柱の痕跡は30cm以上を測り、柱間は1.8mである。柱穴からは、須恵器の杯身蓋や布目瓦などや、柱を据え付けるときに根固めに使用したと考えられる大形の河原石が出土した。

雨落溝SD62013 SB62002の西側で検出した南北溝で、西端の柱列から1.8mに掘られている。この溝の東側の肩は、SB62002の検出面で確認していたが、西側の肩は約10cm掘り下げて検出した。東肩からの幅0.5m、下段での幅0.2m・深さ5cmを測る。建物SB62002の雨落ち溝と考えられる。溝は、SB02の南で途切れており、北はSB62002のさらに北へ延びている。

雨落溝SD62014 SB62002の北側で検出した東西溝で、幅0.5m・深さ10cmを測る。SB62002の雨落ち溝と考えられる。西側の大溝SD12に流れ込む。溝内より須恵器杯が出土した。

雨落溝SD62046 SB62002の東側で検出した南北溝で、幅0.5m・深さ10cmを測る。SB



第99図 総柱建物跡 S B 62002 平面図・断面図

62002の雨落ち溝と考えられる。

溝S D62012 S B62002の西側で検出した最大幅約4.0m・深さ約0.4mの南北方向の大溝である。溝内からは、土師器の椀・杯・皿・甕、須恵器の杯・杯蓋・壺・甕、丸瓦・平瓦などが出土した。

溝S D62015 S B62002の西側で検出した幅0.4m・深さ約0.3mの南北方向の溝である。S B62002の南辺のラインで溝S D62012に合流している。溝内からは、土師器の椀・杯・皿、須恵器の杯・壺・甕、丸・平瓦などが出土した。

土坑S K62008・09 北から約45°西に傾き、同一方向に並ぶ一辺約0.7mで、深さ約0.3mの土坑もしくは柱穴の列と考えられる。S K62009内からは、奈良時代の土師器の杯、須恵器杯A・Bなどが出土した。

土坑S K62047・16・17・45・44 北から約45°西に傾き一列もしくは直角に並ぶ、平面が一辺約0.7mの隅丸方形で、深さ約0.3mを測る。土坑もしくは柱穴の列と考えられる。

溝S D62020 調査内を南西から北東に流れの方向をもつ幅1.5m・深さ約0.3mの溝である。S B26002の下層で検出しているが時期の決め手を欠く。

溝S D62030 調査地の北半で検出した北西から南東に流れていた幅2.0m・深さ約0.3mを測る溝である。S B26002の下層で検出しているが、出土遺物は何れも細片で時期は明らかでない。

#### 4. 出土遺物(第100・101図、図版第58)

今回の調査で出土した遺物には、旧石器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、飛鳥・奈良時代の須恵器、長岡京期の土師器・須恵器・瓦、平安時代の陶器などがある。

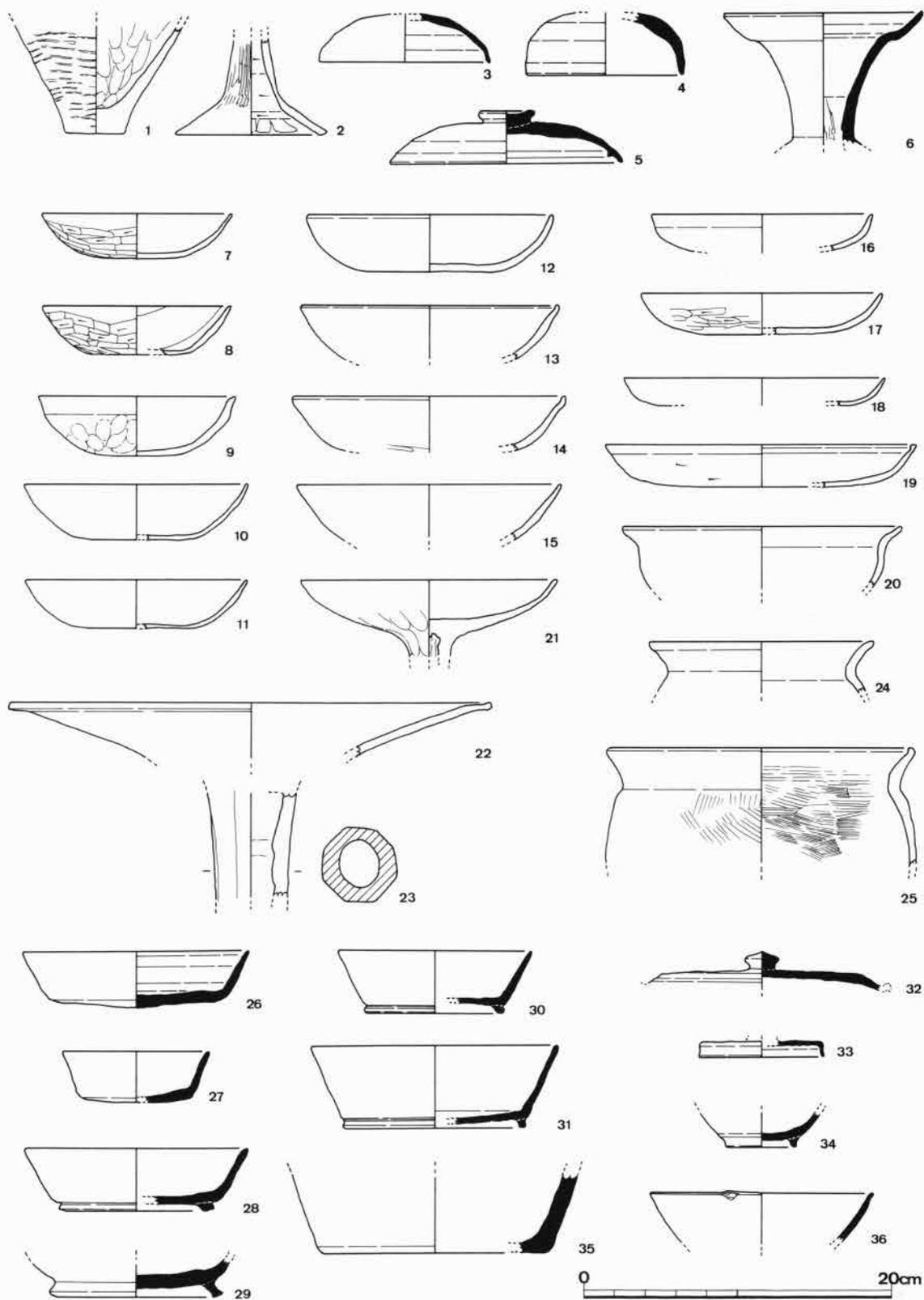
①旧石器時代 第2トレンチの第6層内からナイフ形石器が2点出土した。遺構に伴う出土でなく、周辺での開発によって第16層が削平を受けた結果、混入したと考えられる。

②弥生時代 第1トレンチのS D62010の第12層から外面にタタキ調整を施す甕の底部(1)や加飾の壺の口縁部片が出土した。調査地の上流域に集落の存在が想定される資料である。

③古墳時代 第1トレンチのS D62011から古式土師器の高杯脚部(2)が出土した。ラッパ状に開く脚部で、脚柱部の外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向の削り調整を施している。第2トレンチのS K62029からは、須恵器杯蓋(3)、包含層中より須恵器杯身・杯蓋、短頸壺の蓋(4)などが出土した。

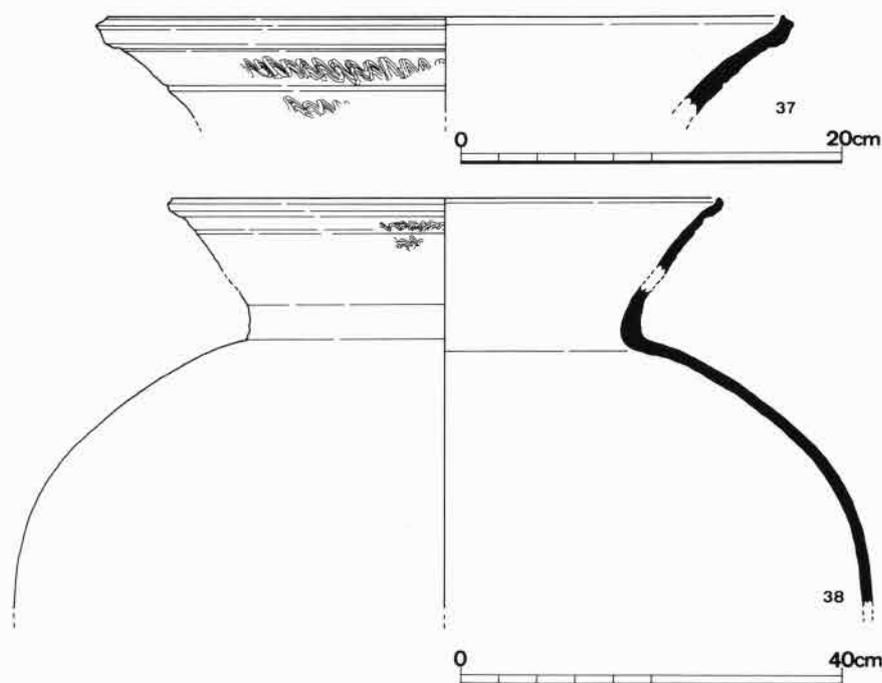
④飛鳥・奈良時代 包含層中や、S D62012より七世紀の須恵器の出土が多く認められる。(5)の須恵器杯蓋と甕(6)は、S D62012から出土した。S K62009からは須恵器杯A(26)、杯底部より内側より高台を貼り付ける杯B(28)が出土した。S K62045からは、土師器杯(12)、高杯(21)、須恵器杯A(27)などが出土した。(27)は底部がヘラ削り状を呈しており、あるいは短頸壺の蓋かも知れない。

⑤長岡京期 S D62012とS D62015からの出土遺物が最も多く、S D62010がこれに続く。土師器では、椀・杯・皿・高杯・甕があり、須恵器では、杯A・杯B・杯蓋・壺・平瓶・甕などが



第100図 出土遺物実測図(1)

1・13・25. S D62010    2. S D62011    3. S K62029    4. 第2トレンチ包含層    5・6・9～11・14・15・18・  
 20・22・23・26・31. S D62012    7・8・11・19. S D62015    12・21. S K62045    16. S D62018    17. S D62019  
 24・29・32・35. S B62002    27. S K62027    28. S K62009    30. S D62014    33・36 第1トレンチ包含層  
 34. S D62001



第101図 出土遺物実測図(2)

37. S D62010 38. S D62012

ある。この他の遺物には、S D62010・62012、S B 62002の柱穴・包含層中から出土した丸瓦・平瓦がある。

**土師器** 出土した土師器は、何れも保存状態が悪く表面の調整を窺えるものはほとんどない。碗は、S D 62015(7・8)とS D 62012(9)などから出土している。7・8は、外面の全体をヘラケズリするc手法の碗で、

9は、口縁部上半のみをヨコナデし、下半部は未調整のe手法による。杯Aは、S D62012(10・11・14・15)、S D62010(13)、S D62015(11)などから出土した。11は、S D62012とS D62015から出土した破片が接合したもので、両溝が同時期に埋まったことを示す資料である。調整の観察できた14は、底部外面のみにケズリを施す、b手法である。また、15は底部を接合していないが、他に出土している高台が付く杯Bの可能性もある。皿は、S D62018(16)、S D62019(17)、S D62012(18)、S D62015(19)などから出土した。17・19は、c手法の調整を施している。このほか、S D62012から鉢(20)、S B62002のP-14(24)とS D62010(25)から甕、S D62012から八角形に面取りした脚柱を持つ高杯(22・23)が出土した。同類の高杯は、S D62010からも出土している。

**須恵器** 完形で出土したものは1点も無く、全て破砕して投棄されていた。出土した須恵器には、杯A・杯B・杯蓋・壺・平瓶・甕・ミニチュア壺・同蓋などがある。杯Aは、26・27以外にも長岡京期の各遺構から出土しているが、細片が多い。杯Bは、S D62014(30)、S D62012(31)などから出土している。30・31は、底部の端に高台が張り付けられ、斜め外方にまっすぐのびる口縁をもつ。蓋は、扁平な天井部から屈曲して口縁部にいたるものが多いが、なだらかに丸みをもった天井部から垂直に折れ曲がる口縁部を持つものも認められる。32は、S B62002のP-14の出土である。33は、第1トレンチ包含層より出土した。口径8cmを測り、頂部が平らで口縁端部が直角に屈曲する。壺もしくは鉢と考えられる底部がS B62002(29・35)から、ミニチュア壺(34)はS D62001から、甕はS D62010(37)とSD62012(38)などから出土している。

**平安時代** 第1トレンチの包含層中より緑釉の碗(36)が出土した。小片であるが、口径14.3cmを測り口縁には輪花を施している。

## 5. ま と め

この調査では、長岡京期の遺構を中心に奈良時代の遺構も検出した。検出した遺構の内、総柱建物跡S B62002は、東西3間×南北3間の高床式の倉庫と考えられ、建物の南側では削平されていたものの、東・西と北に雨落ち溝が遺存していた。長岡京内での数少ない発見といえることができる。この建物の構造としては、溝や柱穴内から布目瓦が出土していることから、屋根は瓦葺きであったことが考えられ、使用された柱は柱穴の観察から直径30cm以上を測る。そしてこの建物の特徴としては、東柱の構造があげられる。柱の掘形の断面観察によると、中央の南北に柱がまず2本建てられた時期があり、その後4本の柱が立て直されたと考えられる。このことから、建物の機能が途中で変更されたか、あるいは収納するものの重量に対応した改築であった可能性も考えられる。建物の西側には、大溝が掘られており、水が溜まる構造になっていることから、『倉庫令』にみえる「凡そ倉は、(略)側に池渠開け(略)」にしたがった造営と言えよう。また、この調査実施期間中、東側の水田部分で、(財)長岡京市埋蔵文化財センターによる第623次調査が開始され(第96図)、この建物の東側に柵列が南北に並んでいた様子が明らかになりつつある。

第2トレンチの南西で検出した奈良時代の土坑もしくは柱穴の列は、調査地周辺の広い範囲で検出されている長岡京遷都以前の倉庫群との関係が指摘できるものであり、今後、郡や郷、あるいは有力豪族の所有する倉の検討が必要である。

(戸原和人)

調査参加者 佐藤直治・水内尚美・森川敦子

## 参考文献

- 岩崎 誠「長岡京跡右京第81次(7 ANKSN地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会) 1976
- 中尾秀正・續伸一郎・竹内英昭「長岡京跡右京第119次(7 ANKSN-2地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第13冊 長岡京市教育委員会) 1984
- 岩崎 誠「右京第204次(7 ANKSN-3地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1986
- 山本輝雄「右京第221次(7 ANKKS-2地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』 長岡京市埋蔵文化財センター) 1988
- 小田桐淳「右京第224次(7 ANKYR-1地区)右京第225次(7 ANKYR-2地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1986
- 原 秀樹「右京第317次(7 ANKKS-2地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1990
- 木村泰彦「右京第347次(7 ANKYR-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1991
- 木村泰彦・山本輝雄「右京第370次(7 ANKSN-5地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1993
- 原 秀樹「右京第389次(7 ANKSN-6地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1993
- 中島皆夫「右京第469次(7 ANKYR-4地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 長岡京市埋蔵文化財センター) 1996

圖 版

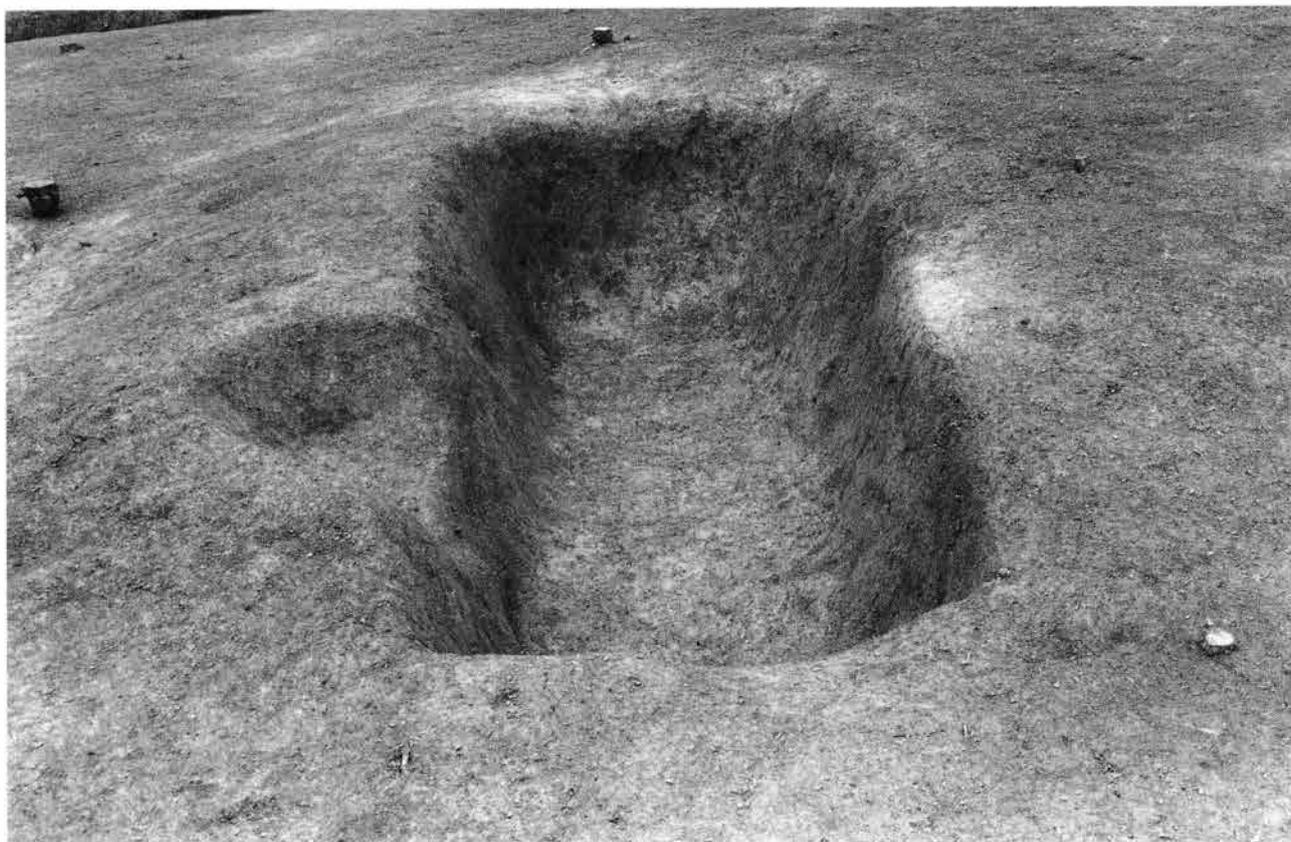
図版第1 通り谷城跡



(1)A地区調査前全景（北東から）



(2)A地区調査前全景（南西から）



(1)A地区7号墳主体部全景（南から）



(2)A地区8号墳主体部全景（東から）

図版第3 通り谷城跡



(1)A地区土坑 (南東から)



(2)A地区調査後全景 (北東から)

図版第4 通り谷城跡



(1)B地区調査前全景（北から）



(2)B地区下方平坦部調査後全景（南から）



(1)B地区土坑 (南西から)



(2)A地区焼土坑3 検出状況 (北東から)



(1) B地区焼土坑検出状況（北から）



(2) 出土遺物 1～5：A地区、6：B地区

図版第7 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡



桑原口遺跡・今福古墳群遠景（南から）



(1) 桑原口遺跡調査地近景 (北から)



(2) 桑原口遺跡調査地近景 (北から)



(1)調査地全景 (南から)

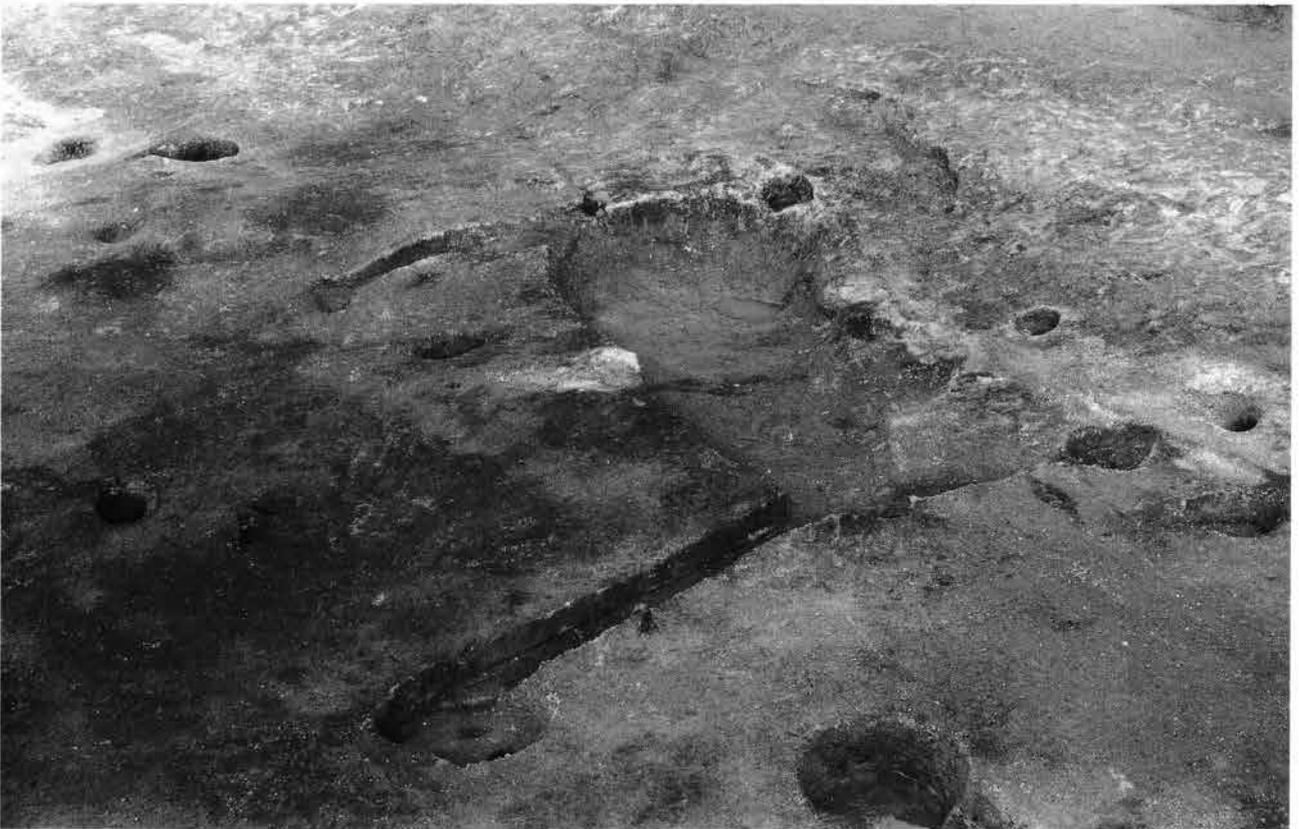


(2)S H07・S K33近景 (南東から)

図版第10 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡



(1)S H07近景 (西から)

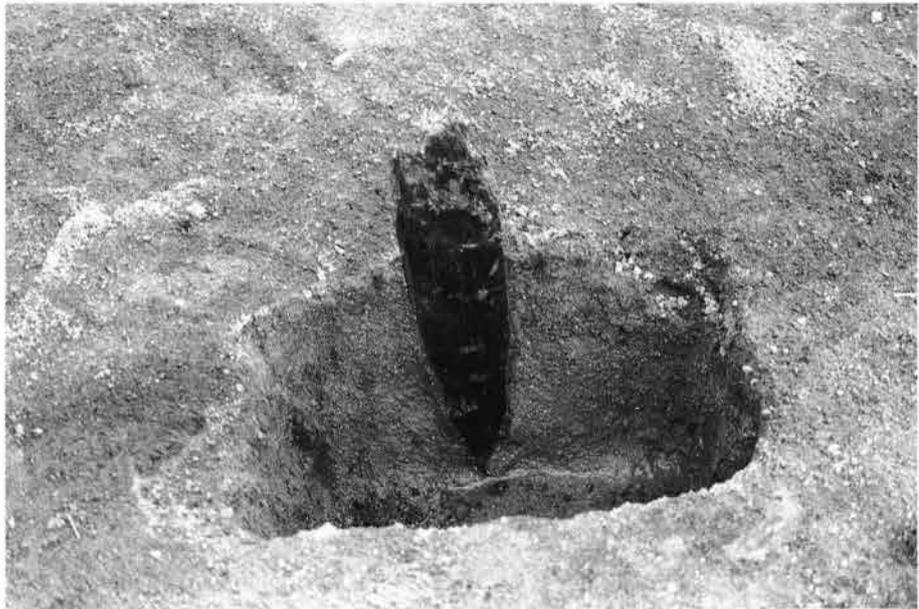


(2)S K33近景 (西から)

(1)SK31近景 (北東から)



(2)板杭検出状況 (東から)



(3)柱検出状況 (東から)



図版第12 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡



(1) C地点全景 (西から)



(2) 8トレンチ拡張部検出遺構全景 (南東から)

(1) 5 トレンチ北西壁断面  
(南東から)

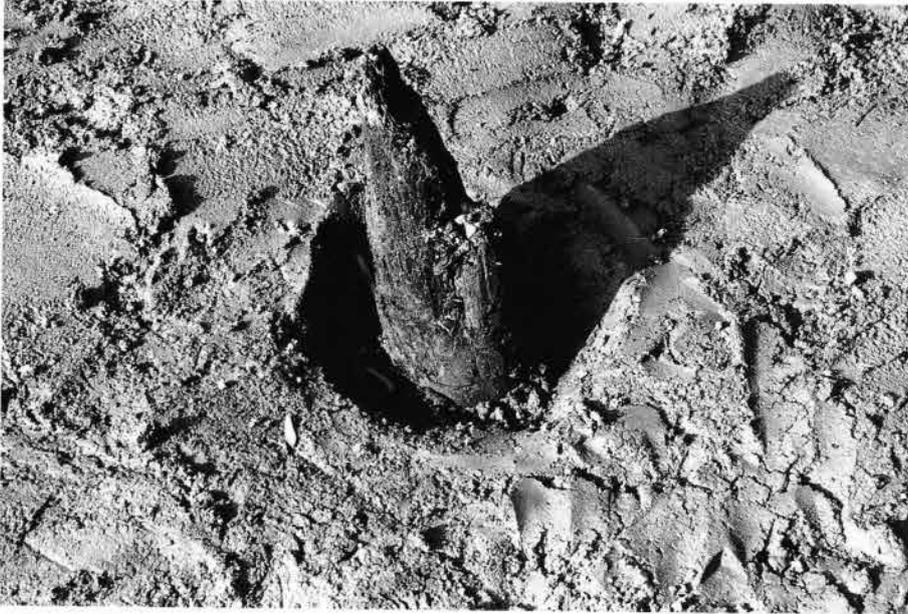


(2) 8 トレンチ拡張部下層遺構  
断面 (南東から)



(3) 6 トレンチ南東壁断面  
(北西から)





(1)柱検出状況（南西から）



(2)柱掘形断面（南西から）



(3)柱掘形断面（南西から）



(1)今福古墳群遠景（北西から）



(2)今福11号墳近景（北東から）



(1)今福古墳群近景（東から）



(2)今福11号墳近景（南西から）



(1) 試掘状況 (東から)



(2) 試掘状況 (西から)



96



90



95



97



104



99



103



112



116

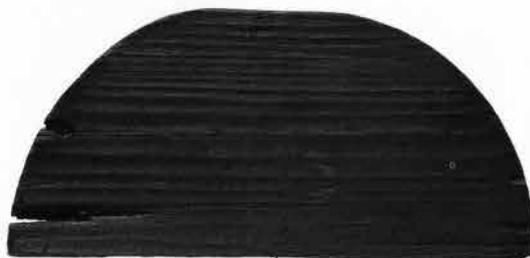
117

120

121



122



124



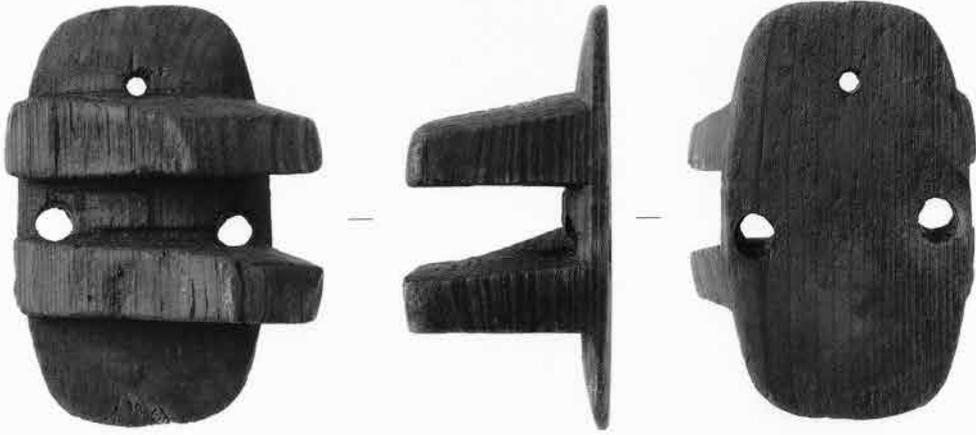
125



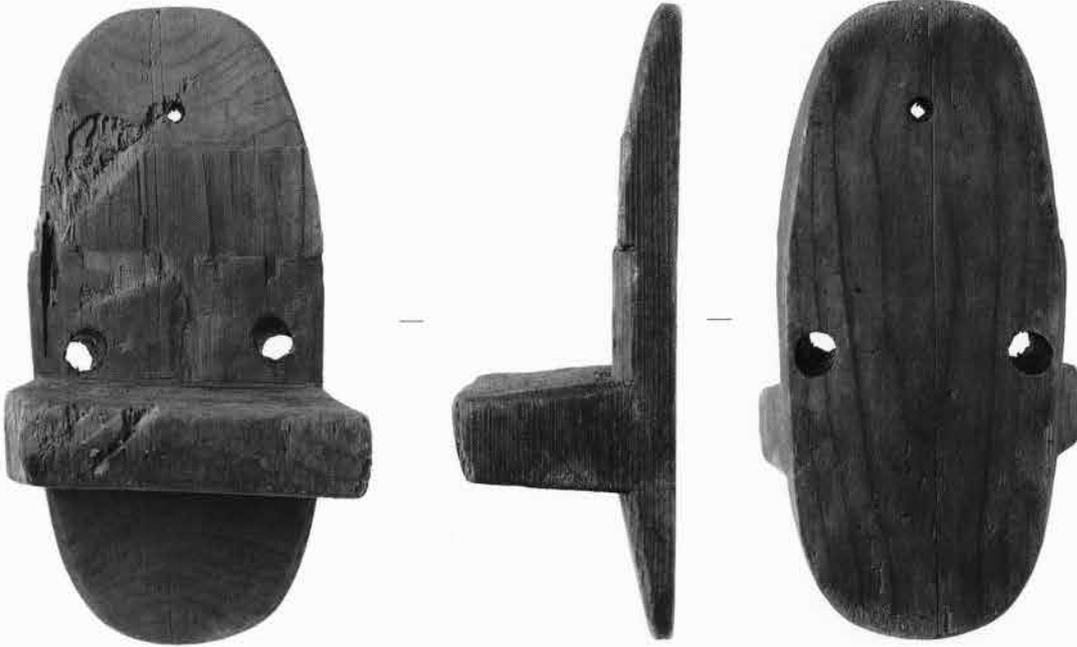
113



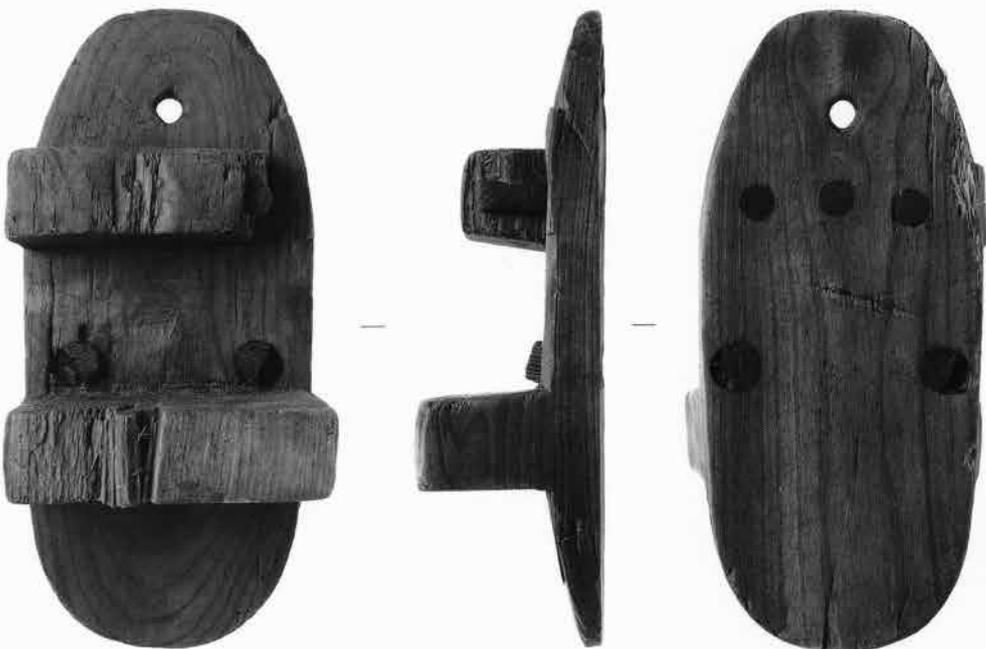
123



126



128



127



18



76



42



36



39



24



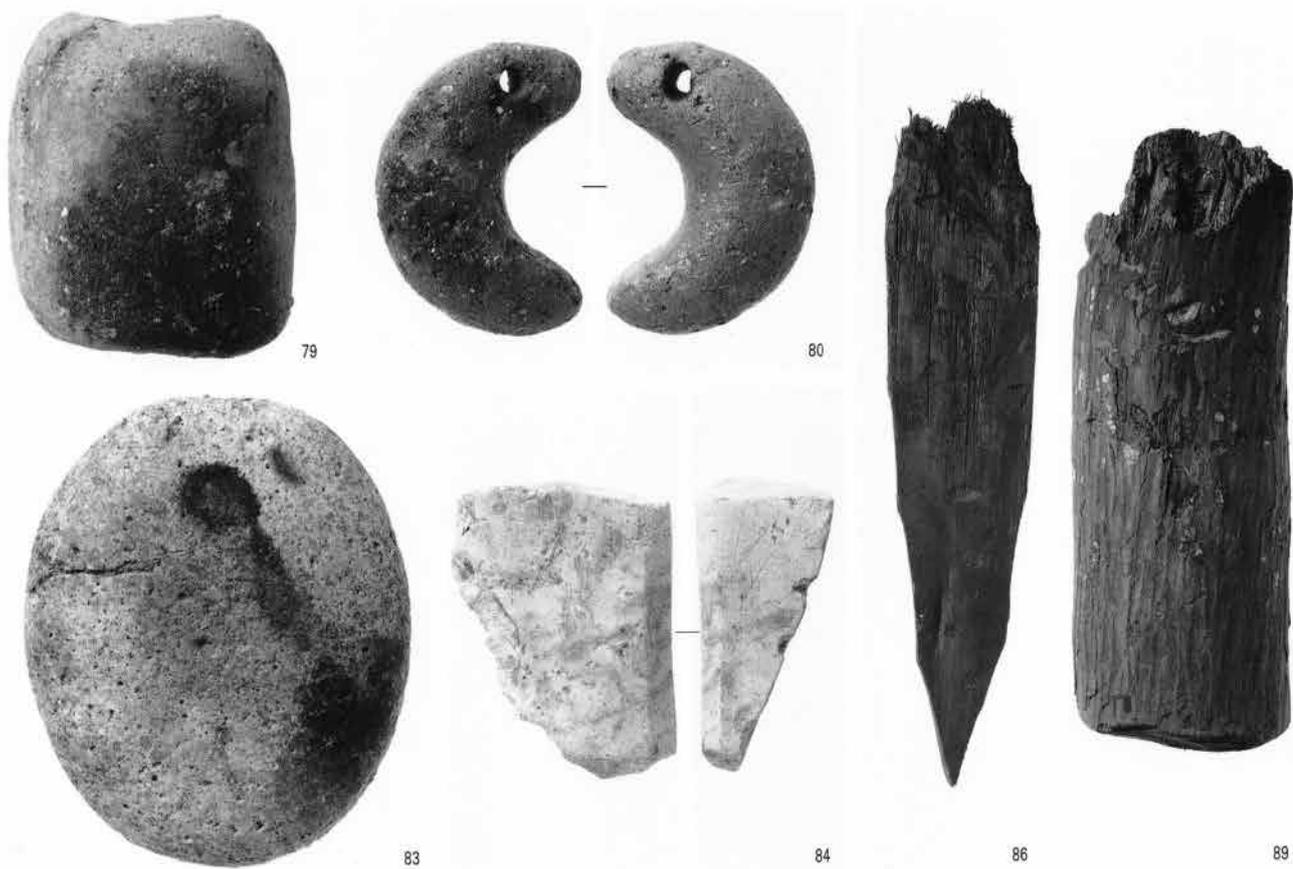
73



9



1



(1) 桑原口遺跡 出土遺物(4)



(2) 今福古墳群 出土遺物(1)

図版第22 鳥取豊岡宮津自動車道関係遺跡



(1)第1 トレンチSH01  
(北から)



(2)第2 トレンチSH02  
(東から)



(3)第3 トレンチ (南から)





(1)第4トレンチSH06  
(東から)



(2)SH06 (北東から)



(3)第5トレンチ (南から)

(1)第6トレンチ (東から)



(2)第7トレンチ (北東から)



(3)第7トレンチ S B07柱穴  
(南東から)





(1)第8トレンチ (東から)



(2)第9トレンチ S D08  
(南東から)



(3)第10トレンチ掘削状況  
(東から)

(1)第11トレンチ調査状況  
(北西から)



(2)第12トレンチ S H05  
(北東から)



(3)S H05検出状況 (北東から)





(1)第13トレンチ  
(南西から)



(2)第13トレンチ S X(H)03  
(東から)



(3)S X(H)03遺物出土状況  
(北西から)

図版第29 余部遺跡第5次

(1)余部遺跡遠景（北西から）



(2)調査地遠景（南東から）



(3)第8トレンチ調査前近景  
（南東から）

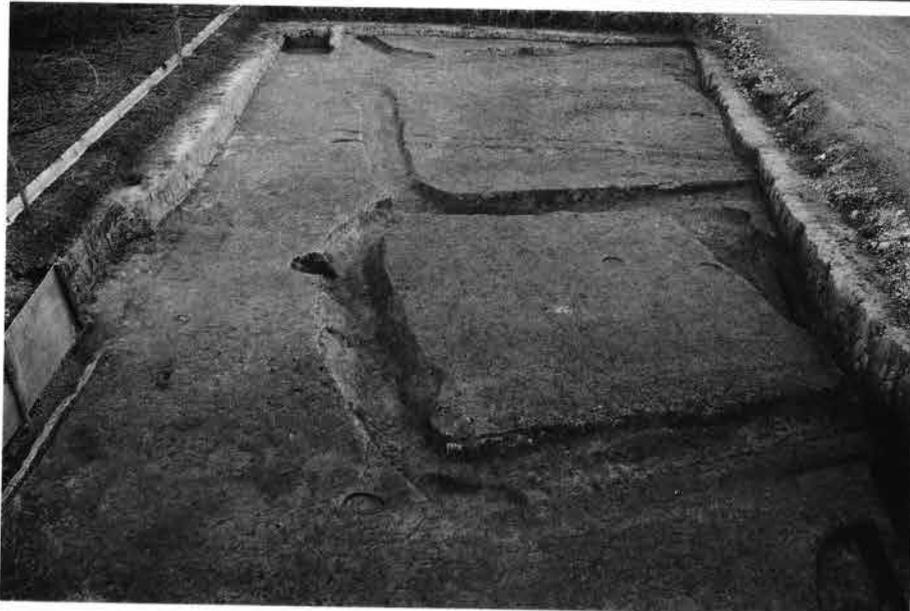




(1)第8トレンチ西側全景  
(東から)



(2)溝513・514完掘状況  
(南東から)



(3)方形周溝墓506～508完掘状況  
(西から)

(1)調査地西側炉壁状遺物  
出土状況（西から）

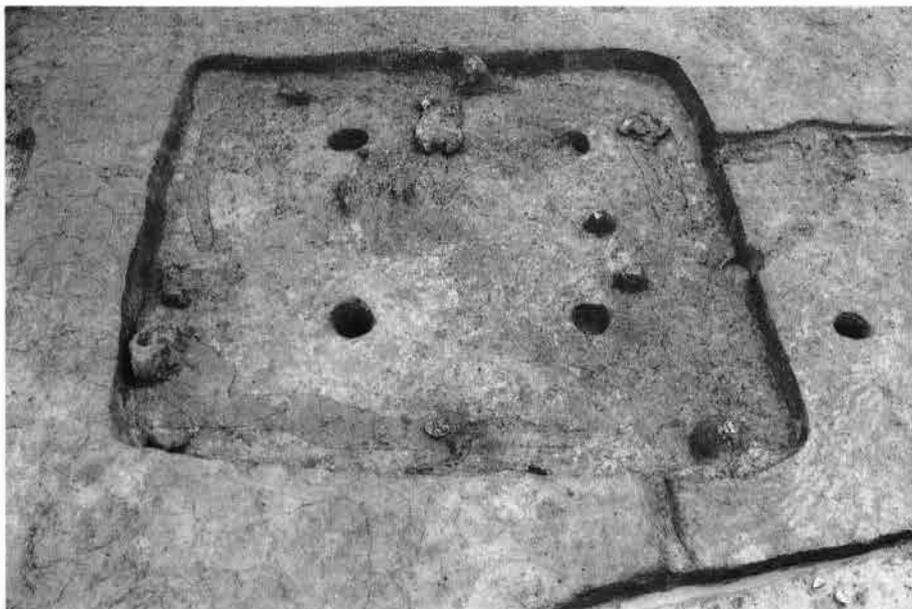


(2)炉壁状遺物中央部分  
出土状況（西から）



(3)竪穴式住居跡512検出状況  
（南から）





(1) 竪穴式住居跡502検出状況  
(南から)

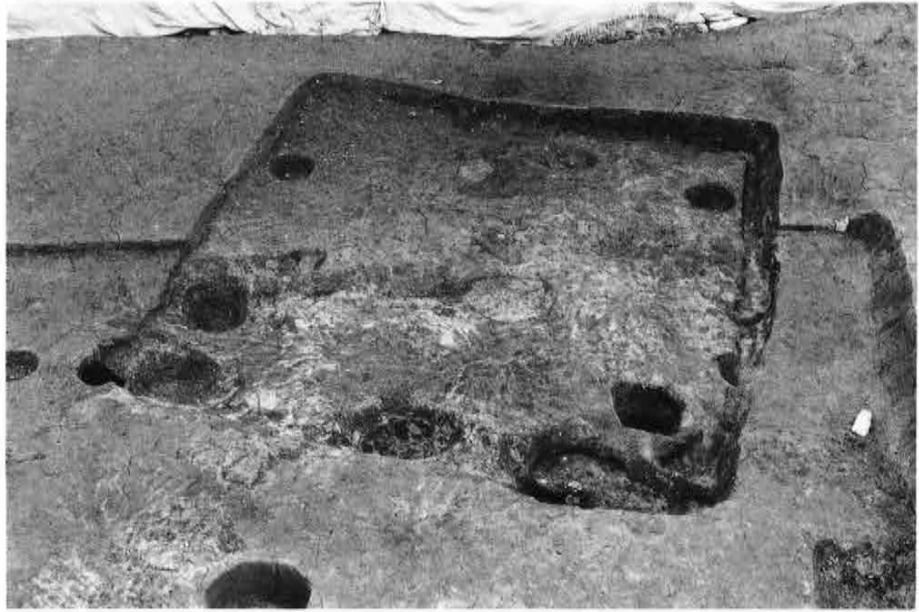


(2) 竪穴式住居跡502  
遺物 8 出土状況 (西から)

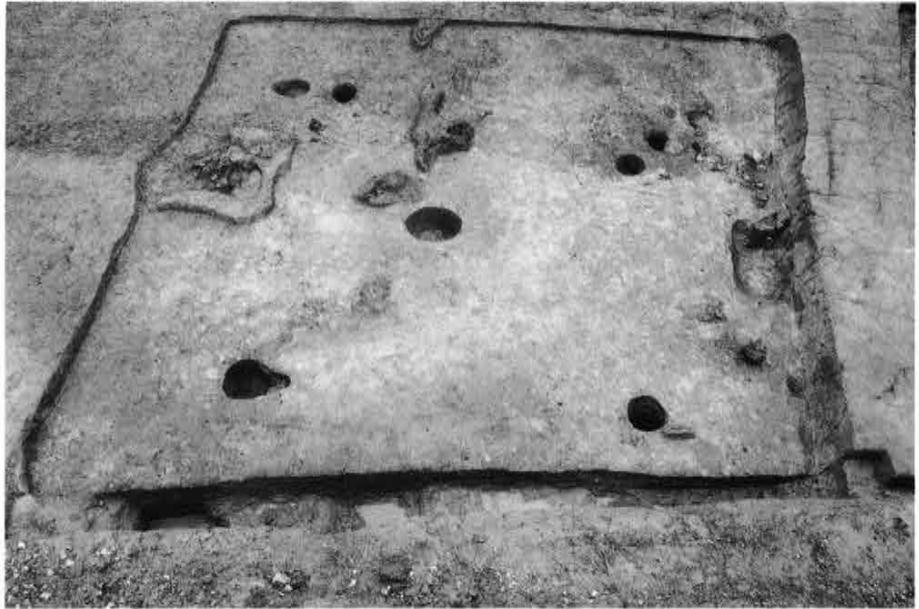


(3) 竪穴式住居跡502  
貼り床土層断面

(1) 竪穴式住居跡504  
検出状況（南から）



(2) 竪穴式住居跡503  
検出状況（南から）



(3) トレンチ南壁  
西側低地土層断面（北から）





(1)第8トレンチ全景



(2)第1～7トレンチ調査前  
近景（北西から）



(3)第1トレンチ拡張前全景

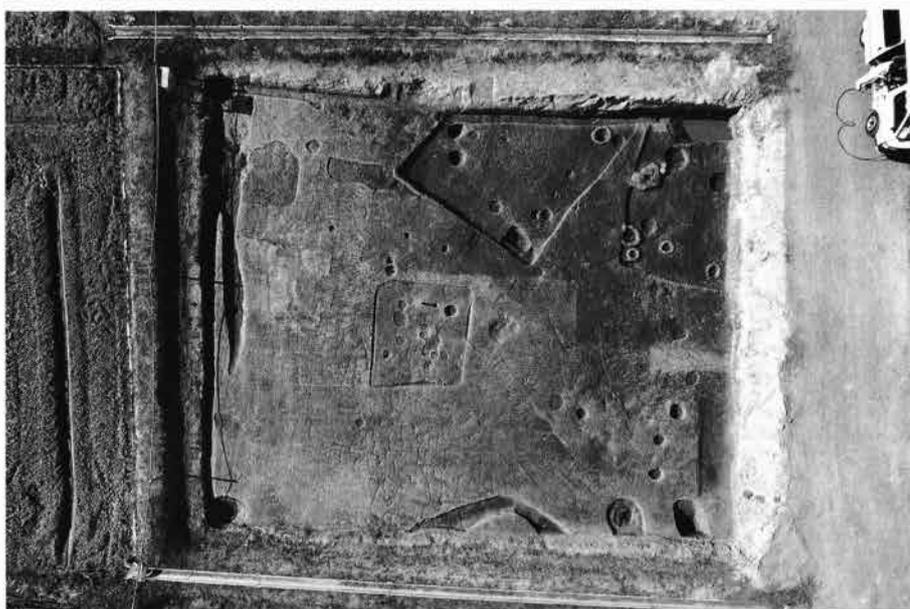
(1)第2トレンチ拡張前全景



(2)第3トレンチ全景

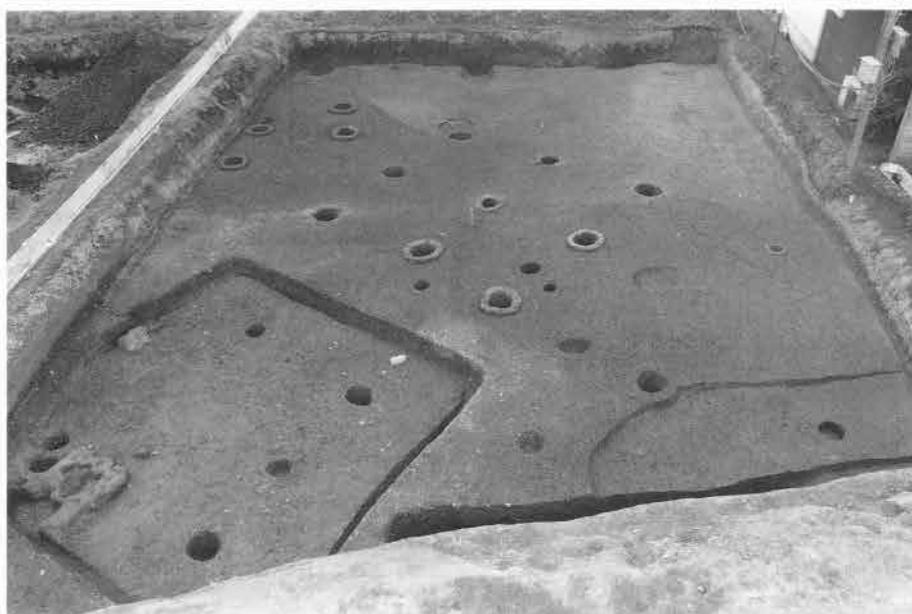


(3)第4トレンチ全景





(1)第5トレンチ全景



(2)第6トレンチ全景 (北から)



(3)第1トレンチ東側拡張区溝  
125完掘状況 (南から)



(1)第2トレンチ堅穴式住居跡  
216検出状況（西から）



(2)第2トレンチ堅穴式住居跡  
216東側床面（西から）



(3)第2トレンチ堅穴式住居跡  
216遺物出土状況（南から）



(1)第1トレンチ方形周溝墓  
102遺物出土状況(西から)



(2)第1トレンチ主体部105  
検出状況(西から)



(3)第1トレンチ主体部105  
遺物出土状況(南から)

(1)第6トレンチ 竪穴式住居跡  
601検出状況 (南西から)



(2)第1トレンチ 掘立柱建物跡  
114検出状況 (南西から)



(3)第1～5トレンチ全景  
(南西から)





7



8



6



4



9



15



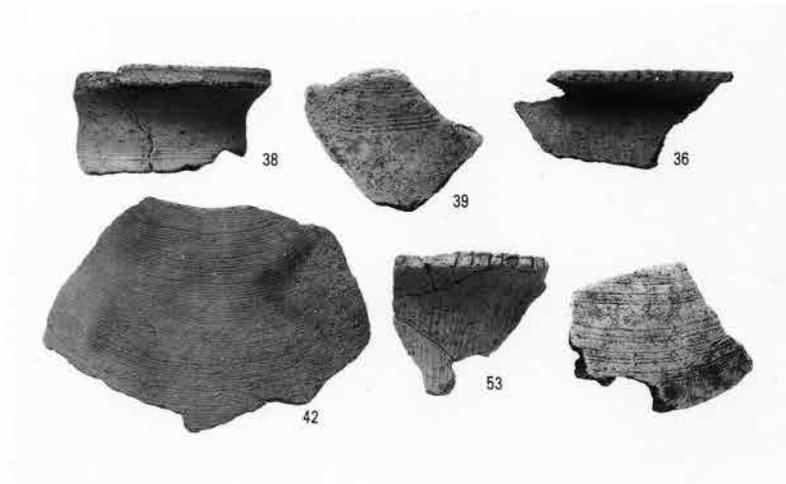
(表面) 27



(側面) 27

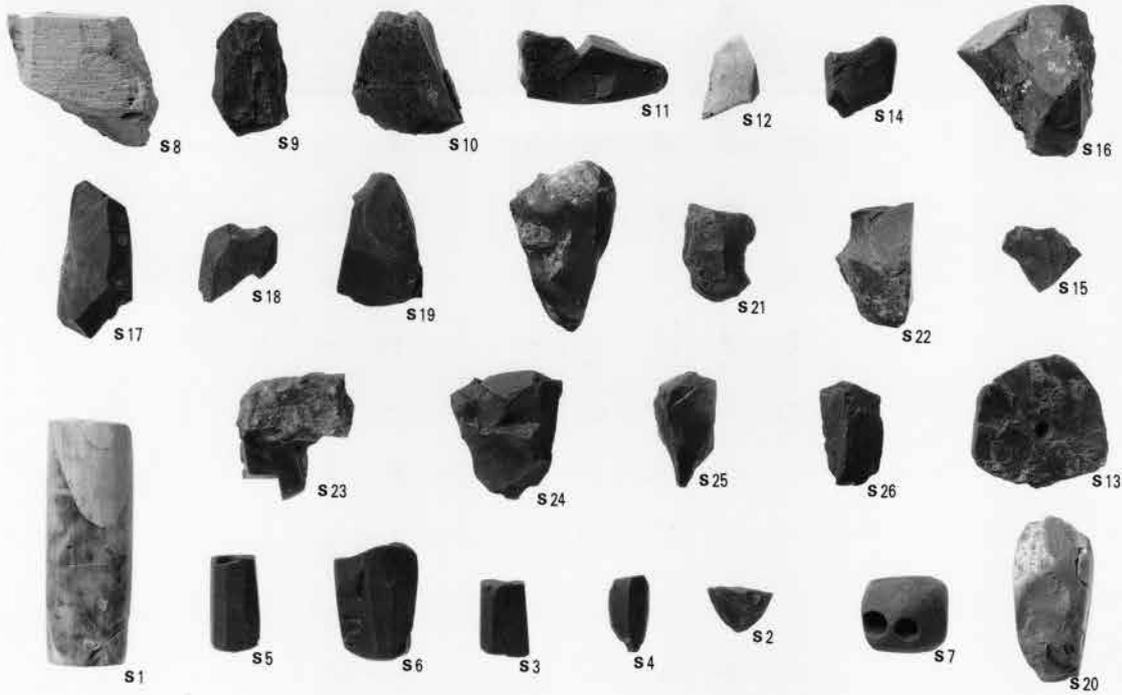


(背面) 27

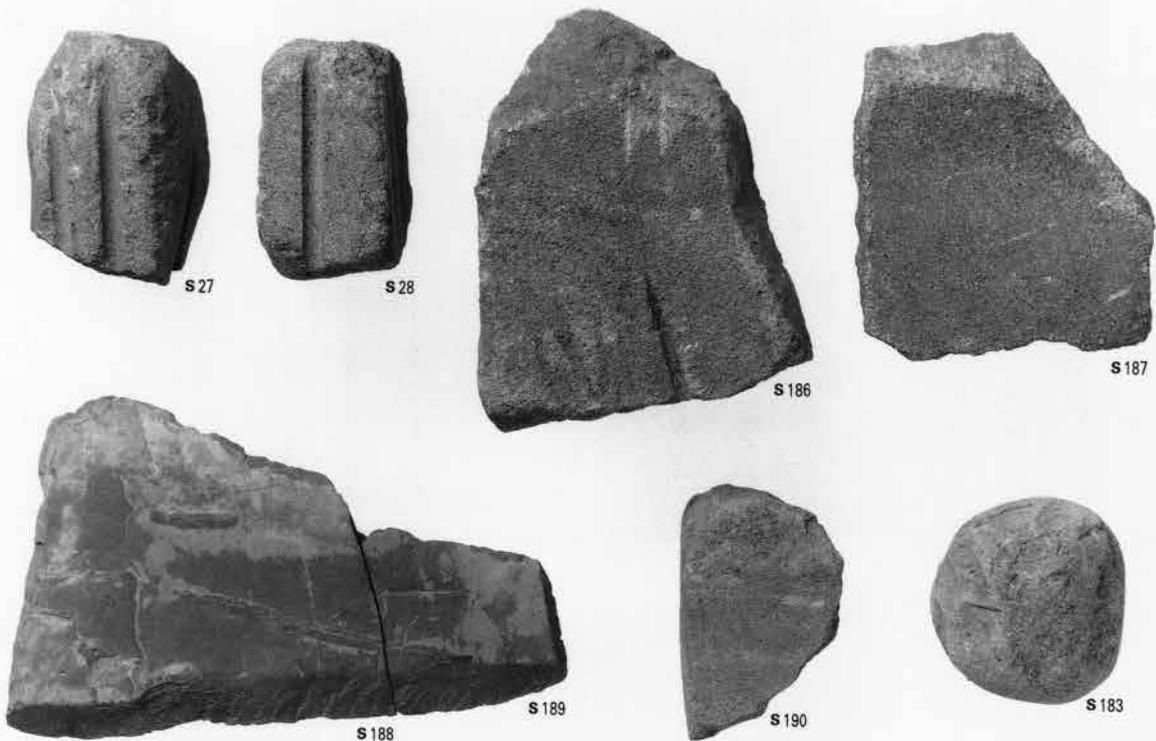








(1)出土遺物(5) 碧玉・緑色凝灰岩剥片・玉未製品 (実大)



(2)出土遺物(6) 砥石・叩き石

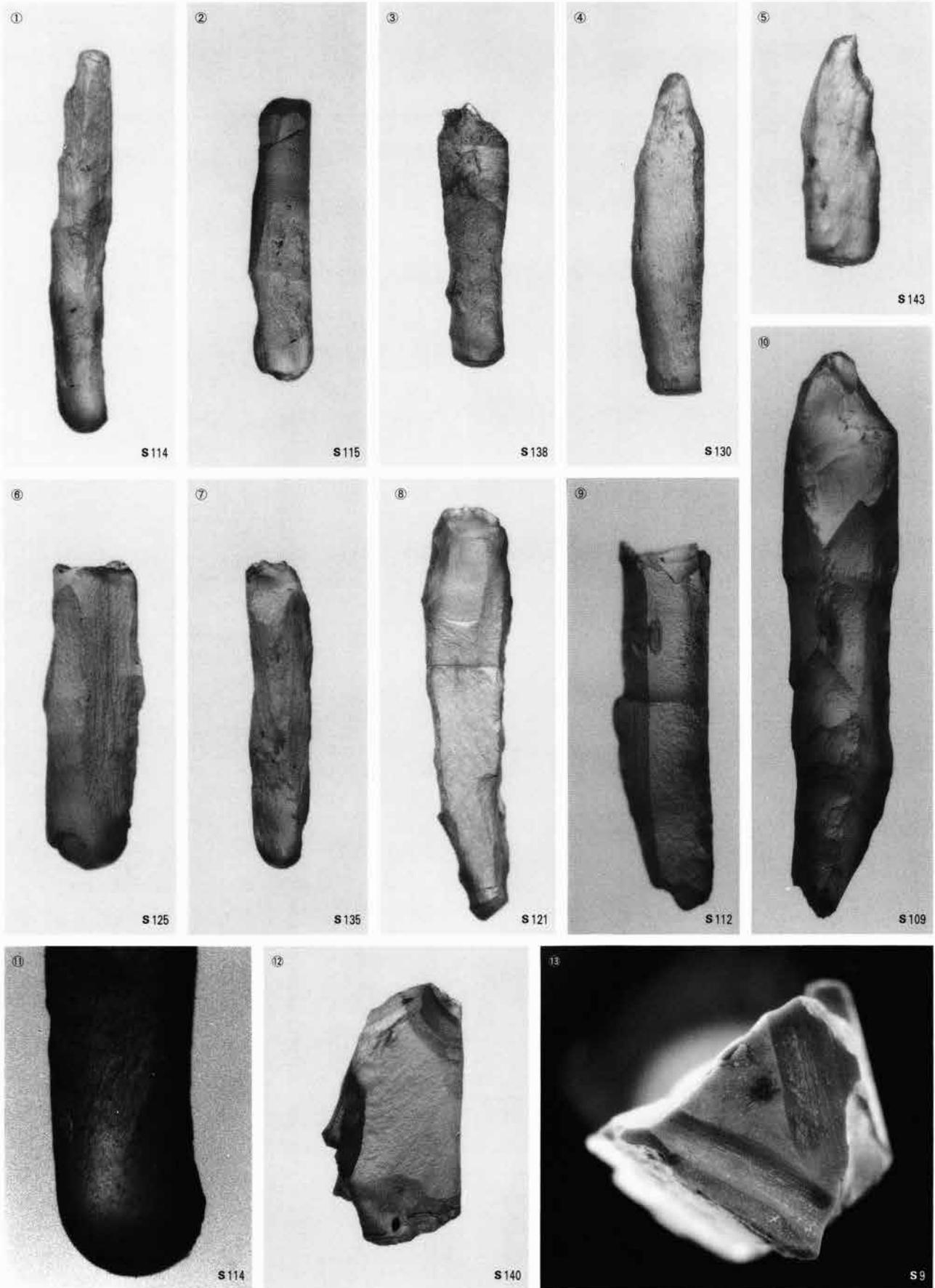
図版第45 余部遺跡第5次



(1)出土遺物(7) 玉髓製剥片・石針 (1.5倍)

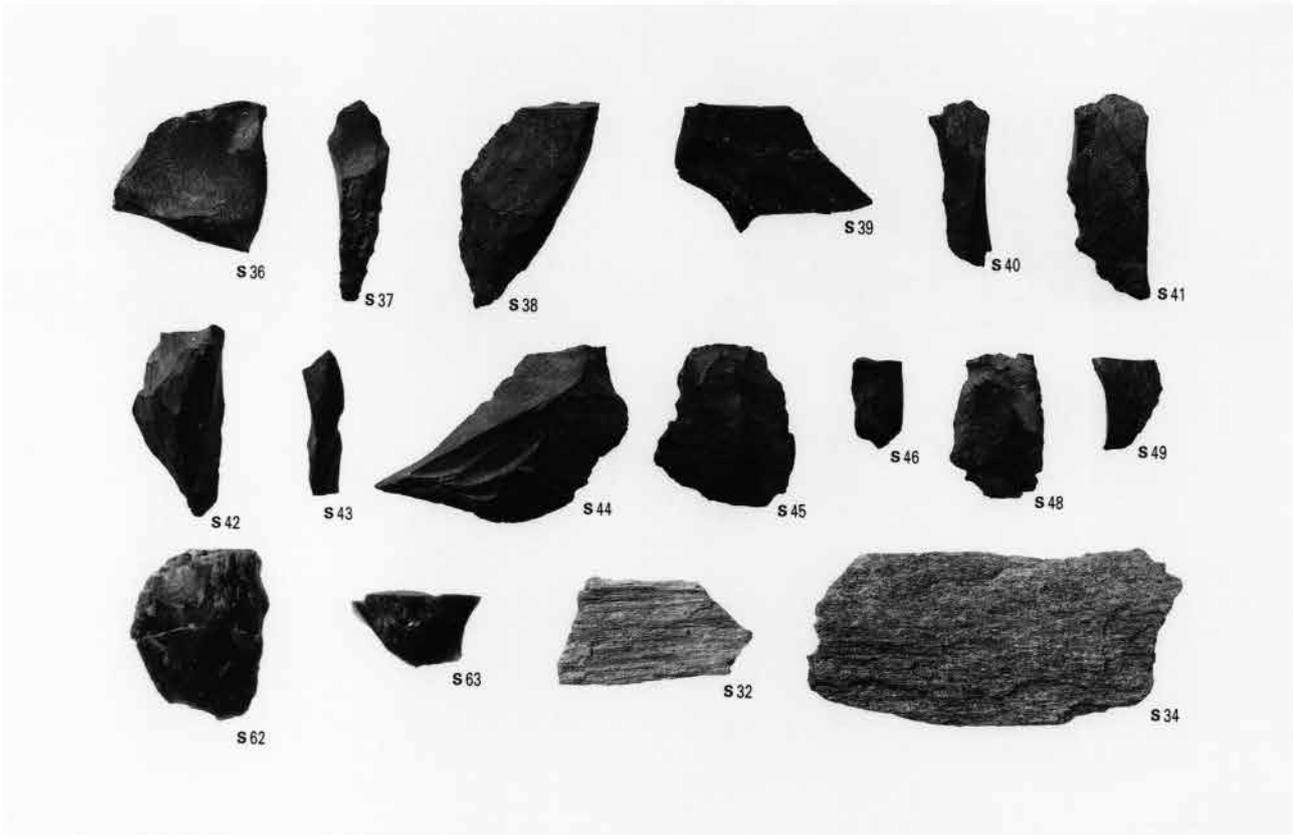


(2)出土遺物(8) 使用痕のある玉髓製石針 (1.5倍)

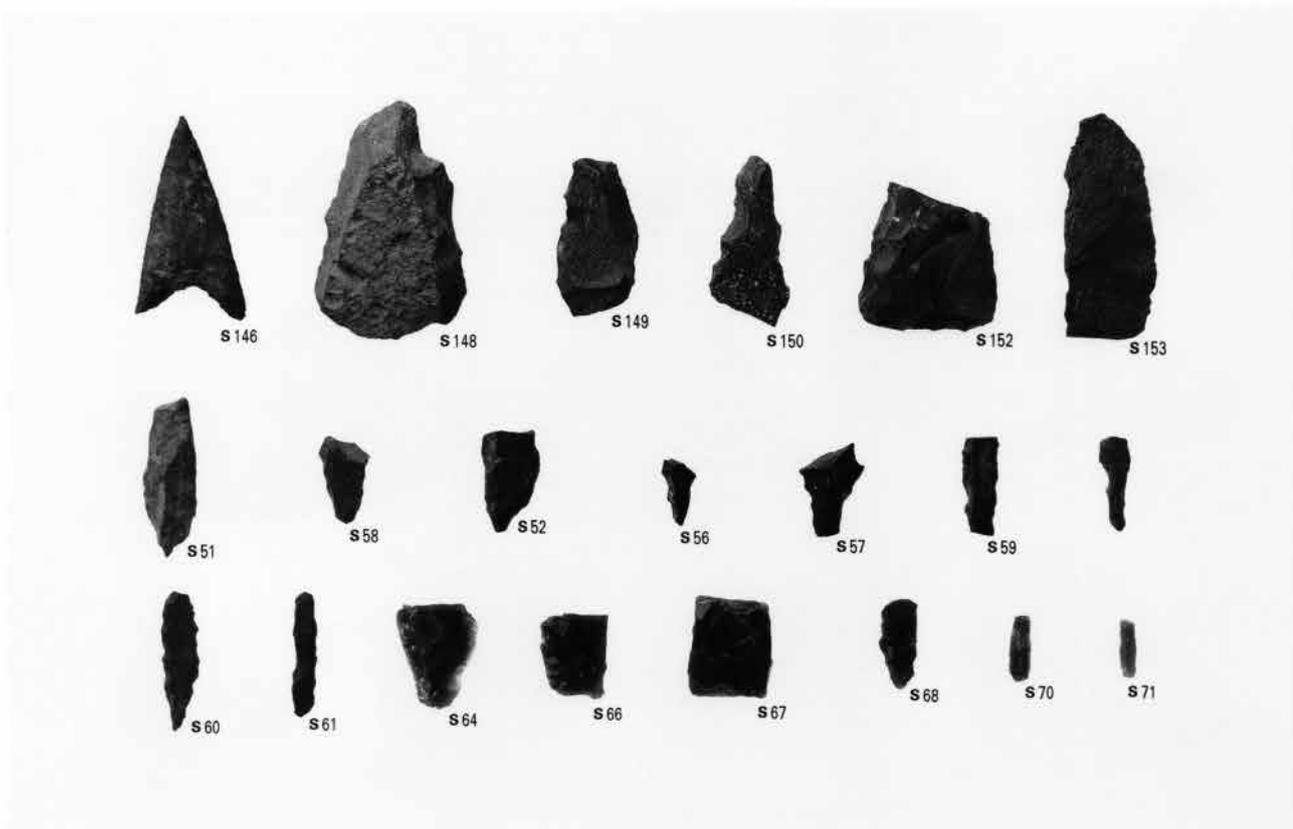


出土遺物(9) 顕微鏡写真

- ①・②両端に使用痕のある石針、③～⑧下端に使用痕のある石針、⑩調整剥離のある石針、⑪使用痕拡大、  
⑫施溝痕のある石針未製品、⑬施溝痕のある玉材(碧玉)



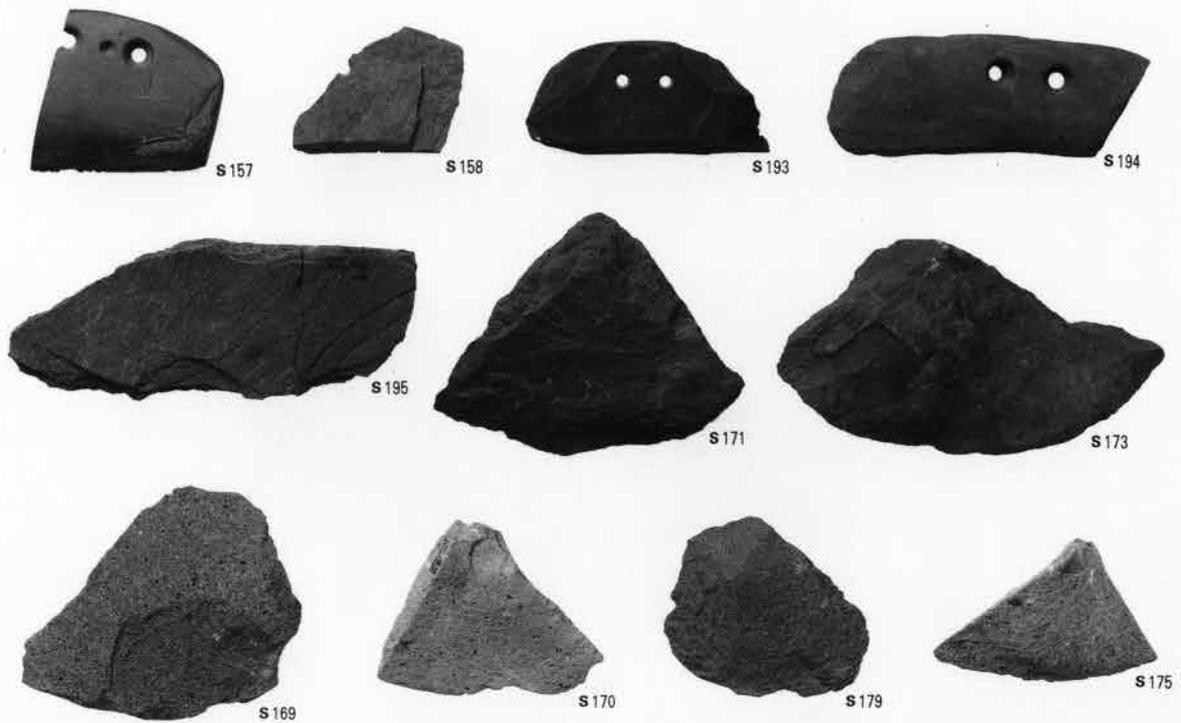
(1)出土遺物(10) サスカイト・チャート製剥片・紅麻変岩製石鋸



(2)出土遺物(11) サスカイト・チャート製石器類



(1)出土遺物(12) 石斧



(2)出土遺物(13) 石包丁・刃器

図版第49 木津川河床遺跡



(1)調査地調査前全景 (南東から)



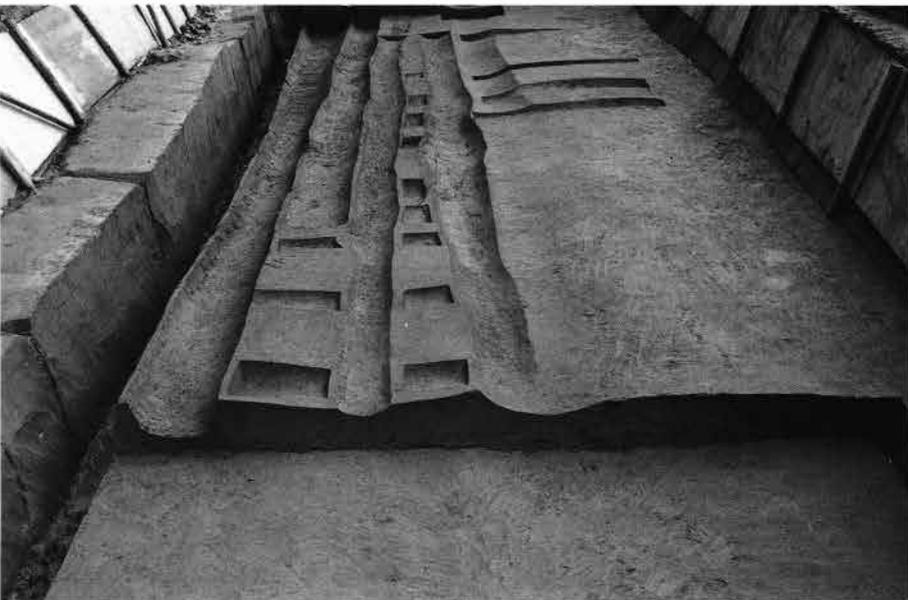
(2)調査地調査後全景 (西から)



(1)第1遺構面  
トレンチ部西半部（西から）



(2)第1遺構面  
トレンチ部東半部（東から）

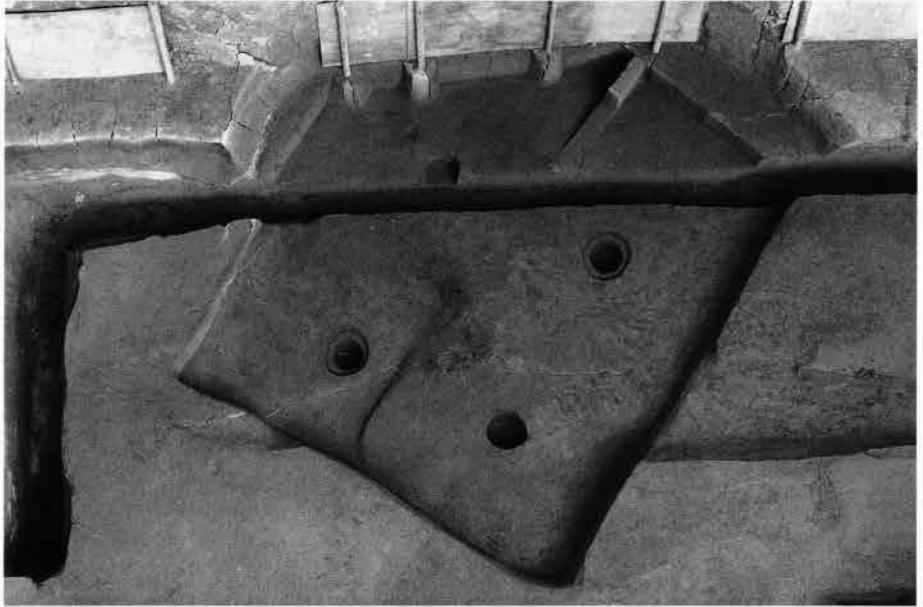


(3)第2遺構面  
トレンチ部東半部（東から）

(1)第3遺構面調査区西半部  
(西から)



(2)第3遺構面  
SH01全景 (南から)



(3)第3遺構面  
SH02全景 (北から)





(2) 拡張区東壁断面曲隆および噴砂 (南西から)



(4) 拡張区東壁断面噴砂 (西から)



(1) トレンチ部東壁断面噴砂 (西から)



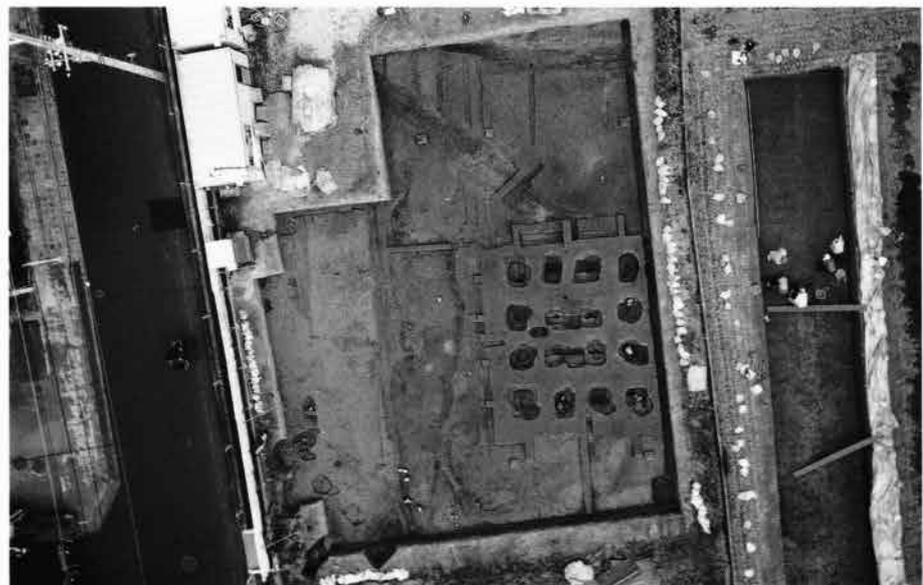
(3) 拡張区東壁断面曲隆 (南西から)



(1)調査地全景 (右が北)



(2)第1トレンチ全景 (上が北)



(3)第2トレンチ全景 (上が北)



(1)第1トレンチ溝  
S D62003 (西から)



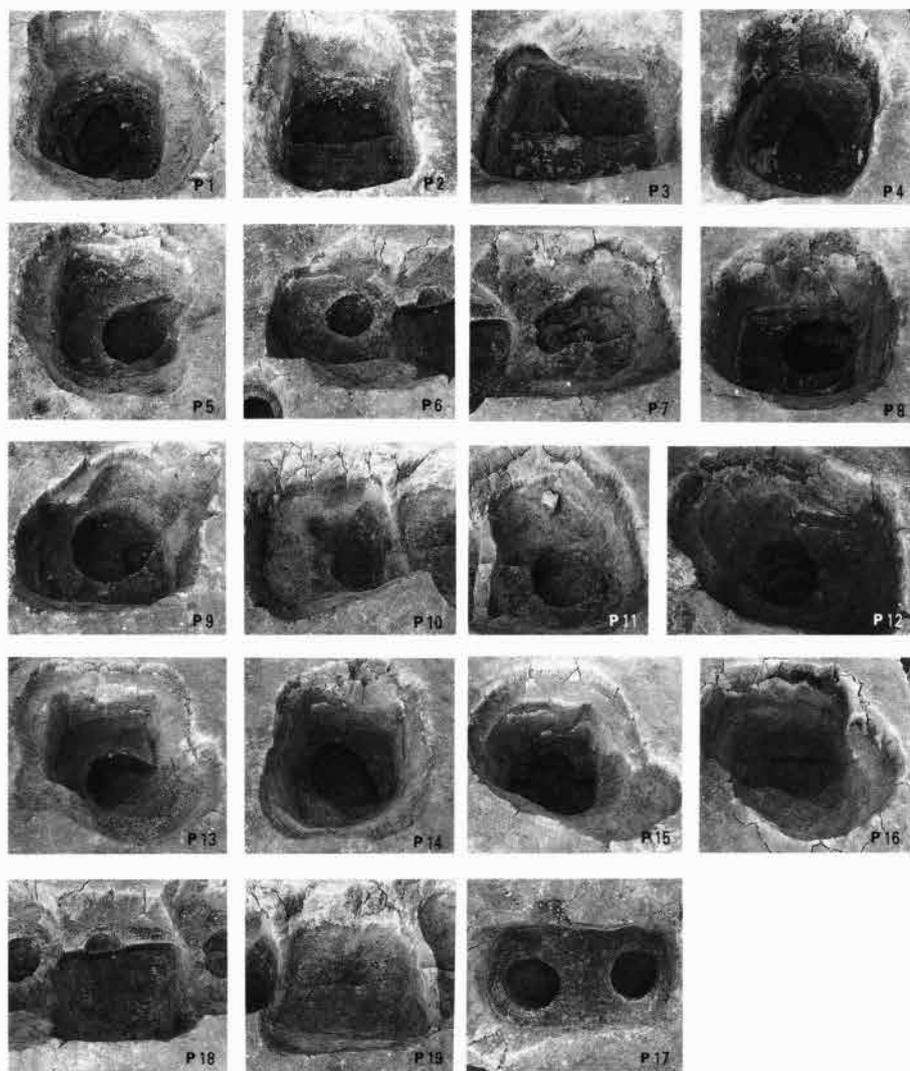
(2)第1トレンチ溝  
S D62010・62011 (西から)



(3)第1トレンチ溝  
S D62010断面 (西から)



(1)第2トレンチ総柱建物跡  
S B 62002検出状況(北から)



(2)第2トレンチ総柱建物跡  
S B 62002柱穴(上が北)



(1)第2トレンチ雨落ち溝  
S D62013検出状況（北から）



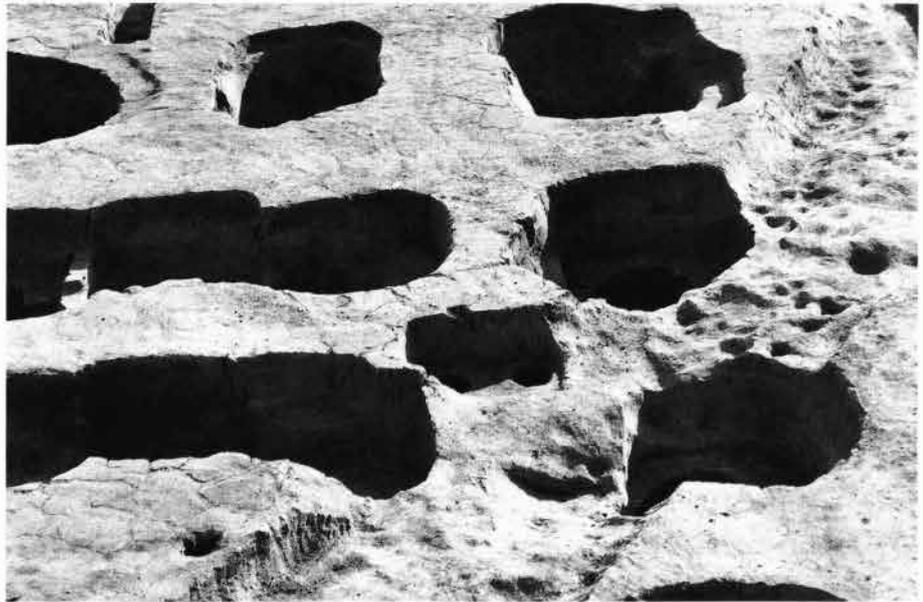
(2)第2トレンチ雨落ち溝  
S D62014検出状況（西から）



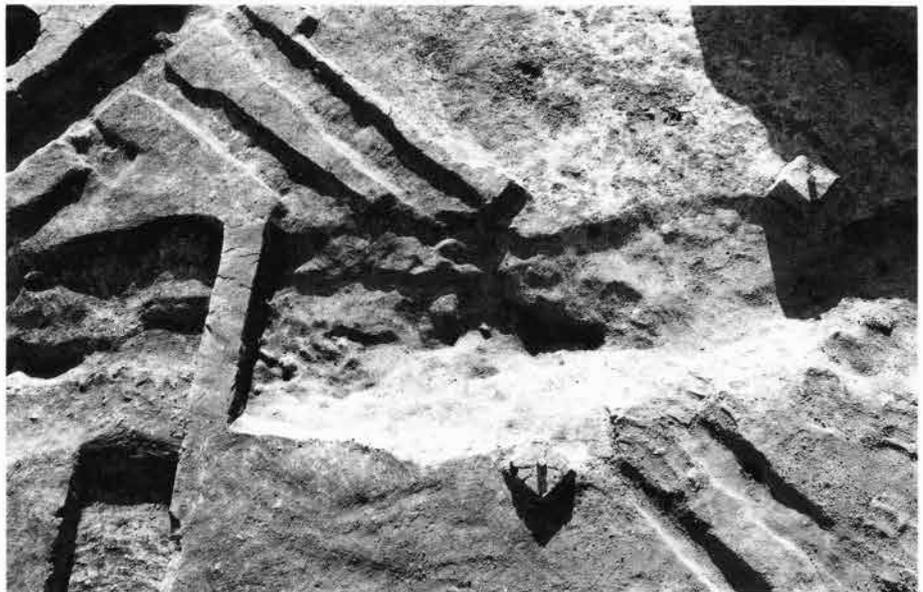
(3)第2トレンチ拡張区雨落ち溝  
S D62046（西から）



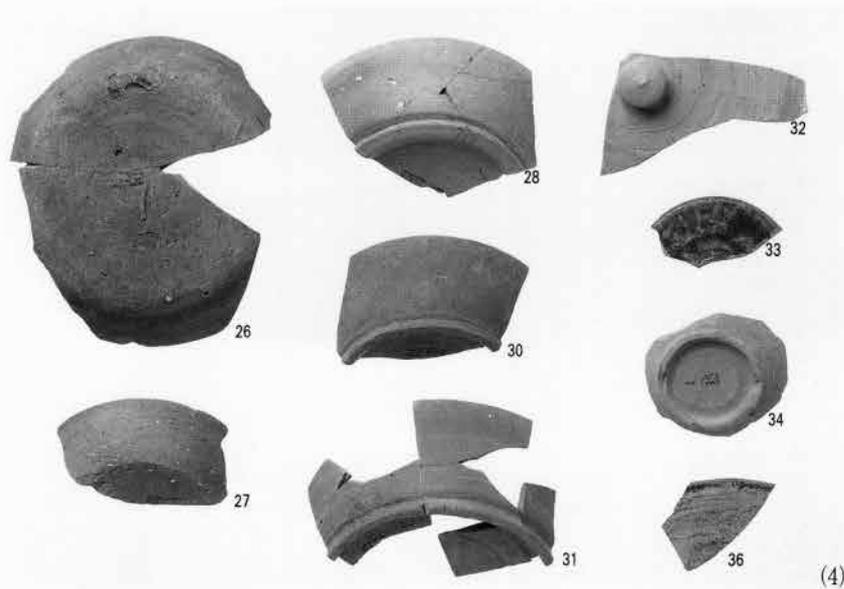
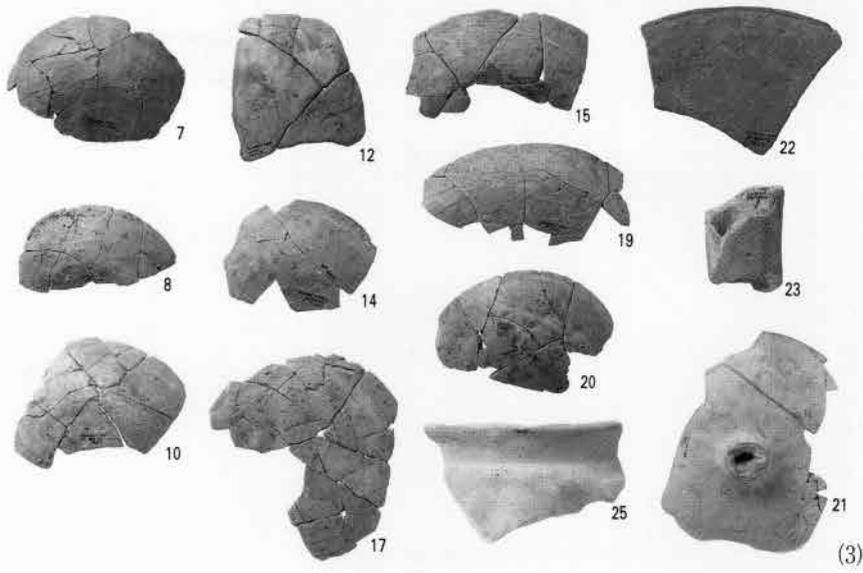
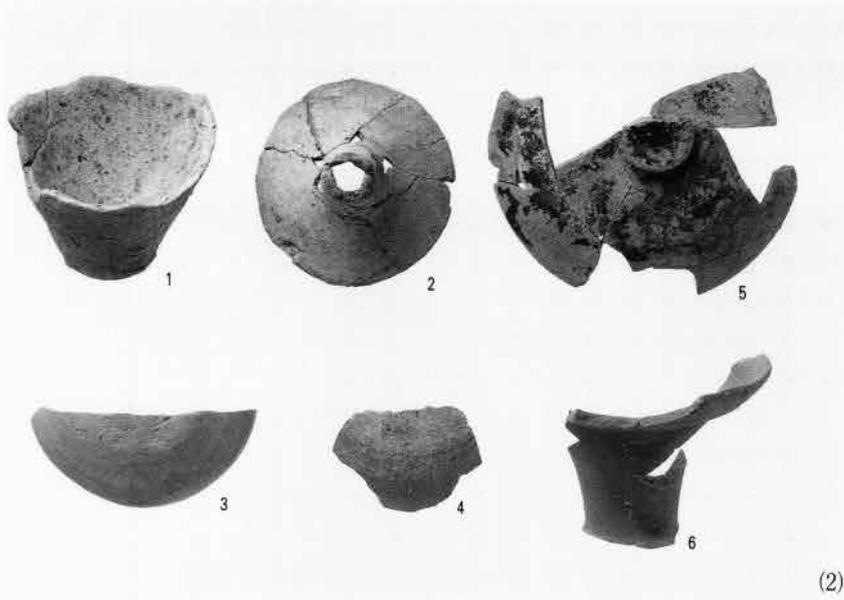
(1)第2トレンチ溝  
S D62001 (西から)



(2)第2トレンチ溝  
S D62020 (北から)



(3)第2トレンチ溝  
S D62030 (上が南西)



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第88冊							
編著者名	増田孝彦・岡崎研一・戸原和人・野々口陽子・森下 衛							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Phone 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1999 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とおりに じょうあと 通り谷城跡	なかぐんみねやま ちょうあかさかや た・とおりに 中郡峰山町赤坂矢 田・通り谷	481	9	35° 38' 41"	135° 3' 35"	19980714 ～ 19980916	600	道路建設
とっとり とおかみやづ じょうしゃどう かんけい いせき 鳥取豊岡宮津 自動車道関係 遺跡							580	道路建設
くわはらぐち いせき 桑原口遺跡	みやづしきたくわは らぐち 宮津市喜多桑原口	205	31	35° 30' 52"	135° 11' 35"	19980511 ～ 19980702	100	
くわはらぐち いせきCちく 桑原口遺跡C 地区	みやづしきたくわは らぐち 宮津市北桑原口	205	31			19980714 ～ 19981202	50	
いまふくこふ ぐん 今福古墳群	みやづしいまふくか じたに 宮津市今福梶谷	205	32	35° 30' 35"	135° 11' 42"	19980601 ～ 19980730	430	
いまばやし いせきだい2じ 今林遺跡第 2次	ふないぐんそのべ ちょううちばやし ちょういまばやし 船井郡園部町内林 町今林	401		35° 7' 8"	135° 28' 49"	19980818 ～ 19981015	300	道路建設
あまるべい いせきだい5じ 余部遺跡第 5次	かめおかしあまるべ ちょうおおつか 亀岡市余部町大塚	206	62	35° 1' 9"	135° 33' 57"	19980904 ～ 19981127	750	道路建設
きづがわか しょういせき 木津川河床 遺跡	やわたしやわた 八幡市八幡	210	4	35° 53' 11"	135° 42' 40"	19981117 ～ 19990114	350	下水道施設 建設

ながおかきょうあとうきょうだい620じ 長岡京跡右京第620次	ながおかきょうしながおか2ちようめ233ばんの3 長岡京市長岡2丁目233番の3	209	91	34° 55' 31"	135° 44' 38"	19981022 ～ 19990122	420	住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
通り谷城跡	古墳・山城跡	古墳 中世		墓塚 焼土坑		土師器・須恵器 鉄釘		
桑原口遺跡	集落	弥生～古墳		竪穴住居・土坑・ピット		土器・玉類・石器		
桑原口遺跡 C地区	集落	中世		ピット群		土師器・木製品		
今福古墳群	古墳状隆起	近世				鍛冶関連遺物		
今林遺跡 第2次	集落	弥生		竪穴住居・土坑・ピット		弥生土器・石器		
余部遺跡 第5次	集落	弥生 古墳		竪穴住居・方形周溝墓 古墳・竪穴住居		弥生土器・玉類 土器・鉄製品		
木津川河床 遺跡	集落	古墳 中世		素堀溝群 竪穴住居		土師皿・施釉陶器 土師器		噴砂
長岡京跡右京第620次	都城	奈良		掘立柱建物・雨落ち溝		土器・瓦		

## 京都府遺跡調査概報 第88冊

平成11年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入  
Phone (075)441-3155 (代)